

広島女学院大学大学院修士論文

藤河家利昭先生

日
源氏物語の香に
山

平成十二年 度

広島女学院大学大学院日本言語文化専攻

田中まき子

【目次】

序章

第一節 『源氏物語』の薫物と香りを中心とした

今日までの研究の概覧

附表 源氏物語に登場する香

一頁
一三頁

第二節 本稿の扱う問題点の総覧

二頁

第一章 『源氏物語』の宮家の歴史と薫物

第一節 末摘花巻「えびの香」について

一 末摘花の「えびの香」が反映するもの

二五頁
二五頁

二 「えびの香」が引き立たせるもの

末摘花の美点と欠点

三七頁

第二節 明石の上の侍従と袈衣香について

一 明石一族の伝える文化

その伝承経路について

四三頁
四三頁

二 明石の上の侍従

その質と格について

五〇頁

三 明石の上の「えひかう」と侍従

その複合の妙が反映する明石の上の性質

五六頁

第三節 朝顔前斎院の梅花について

一 朝顔前斎院の梅花とその装飾

↳ 白梅か紅梅か

二 朝顔前斎院が白梅の香に託す思い

↳ 控えめな自信と勇氣

六五頁
六六頁

七五頁

第二章 『源氏物語』の薫物と浄土

第一節 賢木巻、藤壺中宮の黒方と「極楽」

一 御簾の内外に薫り合う薫香と「極楽」の現出

↳ 史実と先行作品に見る黒方と比較して

八五頁
八五頁
八九頁

二 藤壺中宮の黒方

↳ 史実と先行作品に見る黒方と比較して

一〇四頁
一〇四頁
一〇九頁

第二節 初音巻、紫の上の薫物と「仏の御国」

一 初音巻、南東の町の描写と『法華経』序品の一節との関係

一一五頁
一一五頁
一二二頁

↳ 『源氏物語』の浄土登場の契機としての薫物

一二二頁

第三章 鈴虫巻、女三宮の持仏開眼供養と薫物

第一節 曼陀羅前の供養のあり方について

↳ 「唐の百歩の衣香」を中心に

一三三頁

第二節 阿弥陀仏前の供養のあり方

↳ 「荷葉の方を合わせた名香」を中心に

一四八頁

結び 薫り合う薫香、その構成と効果

一六二頁

終章

第一節 本稿諸章の要点の概覧

一七三頁

第二節 『源氏物語』の香とは

一八四頁

【付録】

一 参考文献目録
二 四庫全書所収『陳氏香譜』複写

序章

第一節 『源氏物語』の薫物と香りを主軸とした今日までの研究の概覽

『源氏物語』に登場する、花など自然の造形物が発する天然の香りを除いた、所謂人工的に生成された薫物や香り（本節末に貼付する表にて集成）について、その何たるかの詳細な説明は、『源氏釈』以降の同物語語注釈書により試みられてきたが、多くの場合『河海抄』、『花鳥余情』が記す各薫物の調合法や概念、「追風」「空薫物」等の薫物に関する専門用語の意味するところの概説、及び史実に於いて各薫物にゆかりの人物、事績に関する記録とがもつぱら為されたところであつた。その確認は以降各章にその機会を譲ることとするが、そうした資料の豊富さは、後世の我々が当時の薫物文化について理解を志すにあつて、十二分な力を施し与えるものであると理解している。しかしながら、物語の場面や人物に、各々の薫香がどのようにに関わりを持つているのかについての具体的な概説、または類推が記されることは少なく、薫物や香りが、作中人物の内面世界や物語の展開にどのような働きを及ぼしているかについては、時を経て文化、価値観の共有が難しくなるにつれ、特に筆者の如き初心の読者にとり、解読し難いものとなつていくように思われる。さて、近代に入り、こうした古註以来の説に加え、『薫集類抄』等の薫物指南書が伝える薫物の専門的な概説、及び『源氏物語』前後の物語作品や記録に見える薫物のあり方を総括して紹介し、『源氏物語』周辺の文化の一端である薫物、香りのあり方の更なる具体的

な理解に尽力されたのは、池田龜鑑氏編纂の『源氏物語事典』であつた。これ以降、またはこの動きと時を同じくするように、『源氏物語』の薫物や香りを中心的な論題とし、それらが物語にいかなる影響を及ぼし、また作中人物にどのような関わりを持つものであるかが、様々な観点から詳細に考察され始めるのである。

石田穰二氏は、一九七一年出版の『源氏物語論集』所収「くのえ香―明石の上のこと―」に於いて、物語に占める明石の上の身分のいかなるものを明確化すべく、本物語に於いて「百歩」の形容が附される三種の薫衣香を題材に、朱雀院の準扨の問題と絡めて考察を加えられている。氏は「問題は二つある。一つは、くのえ香は、常陸宮と、朱雀院ないしは朱雀院からの伝承といふかかはりに於てしか、物語に現れない、といふ点である」(二七三頁)、「問題の第二は、明石の上にかかはる。(中略)明石の上の、今日の言葉でいへば教養、技芸にあたる、箏の琴と薫物の方とについて、これだけやんごとなき伝承を物語る用意を、推測すべきであらうと思ふ」(二七三、四頁)という二つの問題点を提起され、その答えとして、前者には「(薫衣香は)皇室関係の特殊な伝承と作者は考へてゐたのではないか。(中略)当時世間にざらにあるといったものでない事は確かであらう」(二七三頁)、そして後者に対しては「明石の上の教養、技芸のなみなみでない事を、これらの伝承を語ることによつて、具体的に示さうとしたのである。(中略)(明石の上は)家柄も争はれないのである。それはまた、明石の上の人柄とあひまつて、彼女が光源氏の妻室の一人として六条の院の人たるに、また東宮の女御の生母たるにふさはしい資格を示すものでもあつた」(二七三、四頁)という結論を導き出すことで、明石の上を受領階級の娘としてのみ捉えんとする、戦後の論壇の風潮に対し一石を投じられた。それまでの人物論、

準拠論のあり方に、薫物に関する考察の導入という方向性をうち立てられた、『源氏物語』の薫物、香りの研究に於いて、非常に意義深い論であったと考えられる。

さて、石田氏の「くのエ香―明石の上のこと―」から十年の時を隔てた一九八一年出版の『講座 源氏物語の世界』第六集では、三田村雅子、加納重文両氏により、梅枝巻薫物比べに登場した薫香に関する論が揃って発表される。三田村氏による「梅花の美」は、「生前の紫の上はともかく、回想の紫の上は紅梅の人として造形される」(六頁)という主張のもと、六条院における「紅梅の偏重」を指摘し、この紅梅が「紫の上のイメージと結びつくことにより、紅梅は華やかさと品格を兼ね備えた最高の花として繰り返したりあげられる」(一〇頁)という事実の現れとして、「春の季節にふさわしい梅花香において、彼女は賞賛を獲得する」(一一頁)、梅枝巻薫物比べにおいて彼女が調合した梅花香の勝利を位置づけ、「咲きこぼれる紅梅の精粹を抽出したような梅花香の香と、紅色の鮮やかさがともに紫の上の資質を象徴し思い起こさせるもの」(一三頁)との類推から、「色も香も兼具した稀有の紅梅は、薫香において引けをとらなかつた紫の上のイメージを負う花」(一三頁)であるとの観測を導き、結果紅梅は後の物語の展開に「既に喪われてしまったものへの愛惜の思いにその位置を占める花」(一五頁)として、「回想の襞々を(中略)限」(一五頁)どるものとなる、との結論に至られた。この論旨に於いて、特に『源氏物語』の薫物、香りを考える上で重要な点は、紫の上の梅花香が六条院の紅梅を体現したものの、その紅梅を象徴する彼女自身を薫物の上で表すものである、ということをし、初めて詳細に論述された点にある。紫の上という作中人物のあり方や、物語の展開に於いて、梅花という薫物がいかなる位置を占めているかを明確化された点で意義深い。

また、三田村氏と同じく『講座 源氏物語の世界』第六集に所収される加納重文氏「薫物と手本」では、個々の薫物に関する考察ではなく、梅枝巻薫物比べ全体の意義の何たるかが、同巻で薫物比べの後に行われた仮名手本の収集と品評の持つ意義とあわせて考察されている。氏は「あらゆる面で最高にすぐれた源氏世界を代表する若き姫君に、貴族の最高の風雅をととのえ、源氏世界の文化的完成と、それを分担する六条院の人物関係の理想的な構造を、閉幕にあたつて提示する意図があつてのものかと思われる」（一八頁）との結論を冒頭で提示し、それについての論証を、他の本文や史実と絡めることで試みられている。当時の貴族社会に於いて、こうした結婚を前にした薫物の準備というものが、「またなき愛娘の入内準備として（中略）「ことわりの営みなめれ」と評させるものがある」（一九頁）との指摘は印象的である。

また、一九八七年出版の尾崎左永子氏『源氏の薫り』は、『源氏物語』の薫物や薫香を主題として成る氏の論稿の集大成として、またそうした主題にもとづく論集としては、『源氏物語』研究史上初の試みであることが意義深く感ぜられるが、その内容は『源氏物語事典』による古註以来の資料の総覧と集成が中心であり、またそれらと絡めた本文に対する考察も、近現代の注釈書による解釈の域を越えるものではなかったように見受けられる。さて、以上諸氏による薫物に関する論をはじめ、近現代の諸氏による人物論、物語構成論的指摘を再考し、かつそこから発展的な論の展開を試みたのが、平成四年九月の『國語と國文學』誌上で発表された、瀬戸宏太氏「源氏物語の薫香―末摘花と紫の上をめぐつて―」であった。同論稿に於ける瀬戸氏の功績の一つは、次の観点を立証した点にあると考えられる。

香りにより作中人物の個性が語られる時、それは単なる描写の次元を超えて、物語世界に彼らを有機的に位置付けていく方法となつてみるとみられる。

(二二頁)

この考えを実証すべく、瀬戸氏はまず蓬生巻の末摘花の「袖の香」を題材に、それまで成されてきた人物論や末摘花に関係する他の香り、袈衣香や薫衣香とも関連づけた論述を試み、「衣特有の香りこそ末摘花に特徴的な香りであつた」(二二頁)とし、またさきの石田穰二氏の説を受け、明石の上のみならず末摘花に関しても、「薫衣香は、そんな家の記憶をよびますがごとく位置している」(二二頁)との類推を提示した。また藤井貞和氏の云う、父宮の霊が光源氏と末摘花の再会を凶つてゐるとの説を受け、「その構図の上に、末摘花の放つ芳香もあると考えたい」(二二頁)とし、次のように結論付けている。彼女の「袖の香」に、父宮の霊のはたらきかけが、単に末摘花巻と蓬生巻とで共通しているというばかりでなく、むしろその威力の強化によつて末摘花の変貌にまで大きく関与しているのだと、読みとれてくる。

(二二頁)

同稿が次に扱つたのは、梅枝巻薫物比べで調合された種々の薫物であつた。氏は「梅枝巻は、河添房江氏によれば、藤裏葉の大団円に向けて六条院の聖性を強化する巻であるといわれる。(中略)それでは、その聖性の現出において、女君たちは六条院世界の中でどのように遇されるに到つたのか。彼女たちに振り分けられた薫香は、一人一人の物語における位置付けを考える手掛りとなるのではないか」(二三頁)との問題点を提起され、各々の女性が調合した薫物についての考察を加えられている。まず冬の御方、明石の上が、四

季のうち冬の香りと目されるところの黒方ではなく、薰衣香を調合した点に関し、「黒方は単に冬の香であるというだけでなく、多くの秘方があることから窺われるように格が高く、贈物などに使われることも多かったらしい。(中略)ここで黒方がはじめから明石君の意識にのぼったと見られないのは、単に技量の問題ではなく、彼女がそうした格にふさわしい女君と認められていないことを反映しているのではあるまいか」(二四頁)、また、「ただ意表をつく趣向であるという以前に、けっしてはなやかな陽のあたることのない明石君にとって、かろうじて自らの存在を主張しうる方途であつたといえようか。(中略)薰衣香は四季にとらわれない香りである。そのことが彼女の選択において切実な拠り所であつただけに、そうした生き方の結果として、四季の町である六条院を一手に引き継ぐに到つた姿とは、遠く響きあつていよう」(二四頁)との結論により、従来の、「季節節によつて匂いがきまつているので、そこで圧倒されてしまうのもつまらないと思ひになつて」(日本古典文学全集、梅枝巻、四〇一頁の現代語訳より)などの読み方に幅を持たせることの必要性を提起されたように思う。また、続く紫の上の梅花香に関する考察に於いては、明石の上と同じく彼女も黒方を調合し、しかし朝顔前斎院の調合した黒方に対する評価のほうが勝つたことの要因を、「彼女が六条世界にとつて賓客であるから」(二六頁)とし、また梅花香が評価されたことに関しては、「彼女が、源氏のあわせなかつた梅花を以て賞されることが中には、源氏の好一对であるにはとどまらない、固有の人生を生きる女君であることが見据えられている」(二六頁)との評を加えている。いずれにしても、梅枝巻の本文解釈と人物論、構造論に対し、薰物を中心とした考察による幅の拡大につとめられた論であつたように思う。

さて、さきに確認した「梅花の美」を著された三田村雅子氏は、一九九六年発行の同氏論集『源氏物語 感覚の論理』に於いて、「梅花の美」改め「梅花の美―回想の香―」をはじめとする二種の論により、『源氏物語』の薫物、薫香の総体的考察を試みられている。第二の論「方法としての〈香〉―移り香の宇治十帖へ―」は二篇に分かれ、第一篇は「匂いの「風景」―源氏物語正篇の香―」、第二篇は「移り香の宇治十帖」と題し、前者では光源氏を主人公とする物語に於いて登場する薫香を、後者では薫と匂宮を主人公とする所謂宇治十帖で語られる香りについて、「香は音楽とともに、見かけよりも一段深い所で、その人物の本質を露呈する記号となっている」(一八二頁)との観点の論証に勤められている。さて、前者ではまず若紫巻での僧都の僧坊に於ける空薫物と光源氏の追風(衣裳の匂い)との複合を題材に、薫香の「対立を対立として認めることなく、気分的・情緒的に重ね合わせ、受けとめてしまう調和の幻想こそ、源氏物語正篇が追求しようとしたものだった」(一八四頁)との結論を、次に初音巻で紫の上が住む六条院南東の町に現出した薫香世界と、同じく明石上の西北の町で見られたそれとの比較から、「六条院とは、「人格」を空間化し、簾の内外に吹き通う追風によって、外なる自然界も、内なる女君の心情世界も、優雅な共鳴に統合していこうという世界なのである」(一八七頁)という、六条院の香に見られる特徴を指摘されている。また、さきに加納重文氏も指摘されたところであったが、梅枝巻の薫物比べの性質として、「明石姫君は天皇をも圧倒する光源氏の権威と文化的なレベルの高さを表すための媒体として、六条院の総力を挙げた協力と協賛の中に入内を果たしている」(一八八頁)ことを確認し、続けて蜚巻では「玉鬘の場合も、香の付加が箔付け、魅力づけとして語られていた」(一八八頁)ことを、「背後に控える光源氏

の魅力が玉鬘本人を包んで、総体として求婚者螢宮を魅了してしまったことは明らかである（中略）玉鬘への懸想が、六条院文化全般への憧憬と羨望に分ち難く結びついているさまをこの螢の光と香の複合する場面は描いているのである」（一八九頁）との考察から導き出すことを試みられた。続いて鈴虫巻の女三の宮の宮の持仏開眼供養に於ける薫香に関しては、「前半の道具立てと華やかな香の描写が、この供養の勢威発揚的要素を語るとすれば、後半のささやかで小さな閑伽の具の周辺にかすかに薫きしめられた香は、光源氏の庇護下に置かれた、小柄で可憐な入道宮の面影を彷彿させるものであったろう。「ことごとし」「百歩の衣香」「白檀」の香の支配と、女三宮を思わせる「荷葉」の香のほのかな自己主張は、光源氏と、その庇護下で可憐にその存在を提示する入道宮という、光源氏の思い描く二人のあるべき「関係」を投影するものだった」（一九一頁）という、独特の解釈の提示がなされている。また氏は、同じく鈴虫巻で語られている女三の宮付きの女房達による光源氏の一方的な幻想がうち砕かれるこのような場面を描くことで、源氏物語は光源氏と女三宮のすれ違いの様相を明らかにするだけでなく、これまで理想的なものとして描かれてきた六条院の女たちそれぞれの生のありかたを問いなおすものとなっている（中略）源氏物語は、それまで一貫してとってきた「香Ⅱ人格」という方法をずらし、（中略）「それ自体が興味の対象になるという新しい質の問題が以後展開されることになる」（一九二、三頁）としている。また、夕霧巻の夕霧の香は、「香が人物を表すどころか、人物をねじ曲げ、ゆがんだ映像を与えてしまいかねない、危険で不安定でいかがわしい情報であることを」（一九三頁）物語っている、との結論に到り、宇治十帖の匂いに関する論に

筆を進める。氏は、「宇治十帖においては、二人の主人公共に、人も羨む芳香を漂わせながら、匂いと自己との結びつきに自信が持てないでいる存在として設定されているのである。匂いが生産する意味と、違和感を抱き続ける主体のずれ、歪み、きしみが、宇治の物語を織りあげる」(一九八頁)との観測を基に、「匂いの(中略)主体のずれ」(同)のいかなるかの確認を試みられている。また、總角巻における八宮一周忌以後の場面のあり方に、『白氏文集』『李夫人』の物語を準拠として重ね合わせることを提案され、このことから匂いが「亡くなった者を回想するばかりでなく、「過去」そのものを匂いを手がかりに取り戻していこうとする回想の香が多く描かれるのも宇治十帖の特徴である」(二〇九頁)との観測を、匂宮の「移り香」を題材に導き出された。以上の三田村氏の論は、史実や資料の詳細な探求に基づく全体を網羅した考察という方法ではなく、一部に対する独自性あふれる鑑賞の相対化によって導き出されるものであって、従来為されてきた本文解釈の幅に捕らわれない、広く感覚的な解釈の可能性をうち立てるための方向性として、薫香についての論述を採用されたものであったと言えよう。

対して右記の三田村氏の論から一年を隔てた一九九七年以降には、藤河家利昭氏による準拠論的研究の方向性が示されている。氏は史実や史上の人物との対照とそれらの導入により、本物語に於ける薫物の役割考察されているが、まず一九九七年発表の「八条の式部卿について」(『広島女学院大学国語国文学誌』同年一二月)に於いては、さきの瀬戸宏太氏が示した、「八条の式部卿」の調合法を伝承する事実が、紫の上の六条院における地位を強化するとの結論の一部に着目し、このことを瀬戸氏とは異なる方向性、即ち「本康親王(八条の式部卿)についてさらにその周辺や事績等を明らかに」(一頁、括弧内は筆

者記入)することによって論証し、かつ、この調合法に関する挿話が「物語に取り込まれた事情、紫の上が伝えた理由など」(一頁)について論述されている。氏は同稿の結論として、「古注が指摘するように、薫物の名人本康親王を紫の上の父兵部卿の宮に擬し、紫の上がその方を伝えることで、薫物合わせにおいてその本領を発揮し、源氏の妻に相応しい位置に立つ抛り所にしたと考えられる」(一四頁)として古注の説の正当性を立証し、前後するが瀬戸氏の云われた「紫上が「八条の式部卿の御方」を伝授されるのに、もっとも蓋然性の高い、家からの伝えという経路は、否定されているとおぼしい」(前出の瀬戸氏論稿、二七頁)とする観測に対し相反する態度を示されたが、同じく瀬戸氏の提示した「彼女の父親が式部卿宮であることを重ねる考え方もあるが、連想関係としてはともかく、物語世界においては、そのような方を伝えているにふさわしく特に香の名手である、という話も見えない」(二六頁)という、古注の示す準抛説に対する不審は敢えて不問と為されたか。さて、加えて藤河家氏の同論稿に於いて注目すべきは、薫物の方の伝授と音楽のそれとの関連性について、史実をもとにした考察により、次のように結論付けられた点でもあるだろう。

八条式部卿本康親王は仁明天皇の皇子たちの中で、文徳天皇と光孝天皇をおいて、兵部卿、式部卿の宮として枢要な位置にあった。(中略)宮中の行事、故実にも詳しくかつたと推察される。また歌も残し、七絃の琴も堪能であった。この琴については仁明天皇の養育によるところが大きいと考えられる。(中略)琴に限らず影響を受けたと考えられるが、殊に薫物については父天皇の意志を存分に体现し、大成させたのであろう。

(一四頁)

物語に記されないまでも、当時の風潮として当然背景に存在したはずの薫物伝授のあり方について、『源氏物語』を題材に類推を試みるにあたり、貴重な指摘であると言えようかと思う。さて、氏が続いて一九九九年に発表された「梅枝の巻の薫物合わせと仁明帝」(『広島女学院大学大学院言語文化論叢』同年三月)に於いては、「梅枝の巻の薫物合わせについて、そこに仁明帝の薫香への関わり及びその伝わり方がどのようにに映し出されているかを見ることによつて、『源氏物語』における仁明帝とその時代の持つ意味を考えてみたい」(一七〇頁)との観点のもとに論述が展開され、次の結論を導き出されている。

梅枝巻の薫物合わせにおいて、源氏が伝えた仁明帝御禁制の二つの方と、紫の上が伝えた本康親王の方とは古い時代の方である。それに対して、朱雀院のすぐれた薫衣香を写し、公忠朝臣が調合して奉った百歩の方は新しい時代の方である。また、仁明帝や本康親王は宮廷において薫物が盛んになっていく始発期の人物であり、朱雀院や公忠朝臣はその中興期の人物であると言えよう。そして、特に仁明帝の方は本康親王だけでなく、朱雀帝や公忠朝臣にも伝わった可能性がある。さらに主として血縁を介して後代にも伝えられていった。即ち、宮廷の薫物において全ての源は仁明帝にあり、またその影響もまことに大きいと考えられる。梅枝の巻の薫物合わせはこのような仁明帝から始まる宮廷の薫物の歴史を反映しているものと考えられる。そして、仁明帝及びその時代は、桐壺の帝と更衣の物語の準拠というだけでなく、薫物においても指標として位置付けられていると言うことができる。

(一五五頁)

また、氏は『花鳥余情』以降、石田穰二氏らによっても支持された、梅枝巻に於いて明石の上が調合した百歩の方の概説に見られる「前の朱雀院」を史上の宇多帝とする説に対し、『河海抄』が示したこれを史上の朱雀帝と考える説に従う姿勢を示した上で、その論証を試みられており、これもまた非常に興味深い点である。

以上確認してきたように、『源氏物語』の薫物、香りの研究は、ここ十年来その方向性が確立されつつある状態であり、多く為されてきたとは言えないまでも、その質に関して、物語に残される問題点の解明と明確化に非常に有用であることが証明されてきたことを鑑みれば、非常に意義深いものであつて、今日薫物を中心的論題に据えた研究が為される頻度の増した要因も、そうした意義深さが諸氏により次第に理解されてきていることを裏付けるものであると考えられよう。

附表 源氏物語に登場する香

巻名	使用／ 提供者	取得／ 被提供者	香の呼称、 様態	登場場面抜粋
空蟬	光源氏	光源氏	けはひ	かゝるけはひの、いとかうばしくうちにほふに、顔をもたげたるに、一重うちかけたる几帳の隙間に、暗けれど、うち身じろき寄るけひ、いとるし。(一一二頁)
夕顔	夕顔 僧都	光源氏	人香	かの薄衣は、小桂のいとつかしき人香に染めるを、身近くならして、見あたまへり。(一一七頁)
若紫	光源氏	光源氏	追風	ありつる扇御覧すれば、もてならしたる移香いと染み深うなつかしくて、(一二五頁)
末摘花	光源氏		名香 空薫物	げにいと心ことによしありて、同じ木草をも植ゑなしたまへり。月もなきころなれば、遣水に篝火ともし、燈籠などにも参りたり。南面いときよげにしつらひたまへり。そらだきもの、心にくゝかをり出で、名香の香など匂ひみちたるに、君の御追風いとことなれば、内の人くゝも心づかひすべかめり。(一九四頁)
花宴	末摘花		衣被香	そらだきもの、いと心にくゝかはり出で、名香の香などにほひ満ちたるに、君の追風いとことなれば、近う呼び寄せたてまつりたまへるに、かの御移り香の、いみじう艶に染みかへらせたおほいたり。(二二八頁)
葵	光源氏	光源氏	移り香	近う呼び寄せたてまつりたまへるに、かの御移り香の、いみじう艶に染みかへらせたまへれば、「をかしの御匂ひや。御衣はいと萎えて」と、(二二八頁)
賢木	藤壺	紫の上	空薫物	君は、人の御ほどをおぼせば、ざれくつがへる今やうのよしはみよりは、こよなう奥ゆかしうとおぼさるゝに、いたうそゝのかされて、ゐざり寄りたまへるけはひ、忍びやかに、えびの香いとなつかしう薫りいでゝ、おほどかなるを、さればよとおぼす。(二六〇、一頁)
須磨	光源氏	六条御息所	芥子の香	陸奥国紙の厚肥えたるに、匂ひばかりは深うしめたまへり。(二七六頁)
明石	光源氏	明石の上	匂ひ	心にくゝ奥まりたるけはひはたちおくれ、今めかしきことを好みたるわたりにて、(六一頁)
	源氏	六条御息所	名香	御衣なども、たゞ芥子の香にしみ返りたるあやしさに、御ゆする参り、御衣着かへなどしたまひて、こゝろみたまへど、なほ同じやうにのみあれば、(八八頁)
	源氏	名香	黒方	「これ忍びて参らせたまへ」とて、香壺の篋を一つさし入れたら、「たしかに御枕上に参らすべき祝ひのものにはべる。あなかしこ、あだにな」(一一八頁)
	源氏	名香	名香	風はげしう吹きふゞきて、御簾のうちの匂ひ、いとものふかき黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。大将の御匂ひさへかをりあひ、めでたく、極楽思ひやらるゝ夜のさまなり。(一二三頁)
	源氏	名香	名香	ほの見たてまつり給へる月影の御容貌、なほとまれる匂ひなど、若き人々は身にしてみてもてならしたまひし御衣の匂ひなどにつけても、今はと世になからむ人のやうにのみおぼしたれば、かつはゆゝしうて、(一二八頁)
	源氏	名香	名香	御身に馴れたるどもをつかはす。げに今一重しのばれたまふべきことを添ふる形見な

登場場面抜粋

蓬生	繪合	薄雲	少女	初音	胡蝶	蛩	常夏	野分					
末摘花	朱雀院	光源氏	内大臣	紫の上	明石上	光源氏	近江の君	秋好中宮					
侍従	秋好中宮					玉鬘							
薫衣香	香	薫衣香	移り香	香	匂ひ	侍従 えび香	追風 かを	追風					
めり。えならぬ御衣に匂ひの移りたるを、いかゞ人の心にもしめざらむ。(三〇二頁)	わが御髪のおちたりけるをとりあつめて、かづらにし給へるが、九尺よばかりにて、いとよなるを、をかしげなる箱に入れて、昔のくのをかうのいとかうばしき一壺具して賜ふ。大武の北の方のたてまつり置きし御衣どもをも、心ゆかずおぼしきゆかりに見入れたまはざりけるを、この人々の、香の御唐櫃に入れたりけるが、いとなつかしき香したるをたてまつりければ、いかがはせむに、着かへたまひて、かの煤けたる御几帳引き寄せておはす。(七六、七頁)	その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の篋、打乱の篋、香壺の篋ども、世のつねならず、くさぐさの御薫物ども、薫衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ごとにとのへさせたまへり。(九三頁)	わたりたまふとて、常よりことにうちけさうじたまひて、桜の御直衣に、えならぬ御衣ひき重ねて、たきしめ装束きたまひて、まかり申したまふさま、限なき夕日に、いとゞしくきよらに見えたまふを、女君たゞならず、見たてまつり送りたまふ。(一六〇頁)	うちしめりたる御匂ひのとまりたるさへ、うとましくおぼさる。人々、御格子など参りて、「この御茵の移り香、言ひ知らぬものかな。いかでかく取り集め、柳の枝に咲かせたる御ありさまならむ。ゆゑしう」と聞こえあへり。(一八三、四頁)	さゝめき言の人々は、「いとかうばしき香のうちそよめき出でるは、冠者の君のおはしつるとこそ思ひつれ。あな、むくつけや。しりう言やほの間こしめしつらむ。わづらはしき御心を」と、わびあへり。(二三八頁)	春の御殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひて、生ける仏の御国とおほゆ。(一一頁)	暮れ方になるほどに、明石の御方にわたりたまふ。近き渡殿の戸押しあくるより、御簾のうちの追風、なまめかしく吹き匂はして、ものよりことに気高くおぼさる。正身は見えず。いづらと見まはしたまふに、硯のあたりにぎはしく、草子ども取り散らしけるを取りつつ見たまふ。唐の綺のこゝろしき縁さしたる茵に、をかしげなる琴うち置き、わざとめきよしある火桶に、侍従をくゆらかして、物ごとにしめたるに、薫衣香の香のまがへる、いと艶なり。(一六、七頁)	童べども、御階のもとに寄りて、花どもたてまつる。行香の人々、取りつぎて、閑伽に加へさせたまふ。(三八頁)	唐の縹の紙の、いとなつかしう、しみ深う匂へるを、いと細く小さく結びたるあり。(四二頁)	妻戸の間に御褥参らせて、御几帳ばかりを隔てて、近きほどなり。いといたう心して、そらだきもの心にくきほどに匂はして、つくろひおはするさま。(六一、二頁)	うちよりほのめく追風も、いとゞしき御匂ひのたち添ひたれば、いと深くかをり満ちて、かねておぼしよりものをかしき御匂ひの、心とゞめたまひけり。(六二頁)	いとあまえたるたきもの、香を、かへすがへすたきしめたまへり。(一一一頁)	吹き来る追風は、紫苑ごとく、に匂ふ空も、香のかをりも、触ればひたまへる御けはひにやと、いと思ひやりめでたく、(一三三頁)

夢浮橋	蜻蛉		浮舟	
	薫	手習	薫	手習
		浮舟		
	香	香	香	香
雨すこしうちそゝくに、風はいと冷やかに吹き入りて、言ひ知らず薫り来れば、かうなりけりと、誰もく心ときめきしぬべき御けはひをかしければ、(三三五頁) いと細やかなによくと装束きて、香のかうばしきことも劣らず。(二八頁) 闇はあやなし、とおぼゆるにほひありさまにて、「衣かたしき今宵もや」とうち誦したまへるも、はかなきことを口すさびにのたまへるも、あやしくあはれるけしき添へる人さまにて、いともの深げなり。(四九、五〇頁) 道の程に濡れ給へる香の、所狭う匂ふも、もてわづらひぬべけれど、かの人の御けはひに似せてなむ、もてまぎらはしける。(五二頁) 御けしきなまめかしくあはれに、夜深き露にしめりたる御香のかうばしきなど、たとへむかたなし。泣くくぞ歸り来たる。(九二、三頁)	いと若くうつくしげなる女の、白き綾の衣一かさね、紅の袴ぞ着たる。香はいみじう香ばしくて、あてなるけはひ限りなし。(一八〇頁) 関のつま近き紅梅の色も香も変らぬを、「春や昔の」と、異花よりもこれに心寄せのあるは、飽かざりし匂ひのしみにけるにや。後夜に閑伽たてまつらせたまふ。下郎の尼のすこし若きがある、召し出でて花折らすれば、かことがましく散るに、いと匂ひ来れば、袖触れし人こそ見えね花の香の それかとにほふ春のあけぼの(二四四頁)			

第二節 本稿の扱う問題点の総覧

『源氏物語』の薫香、香りには、前節において確認してきたように、今日までに為されてきた諸氏による研究の質の高さに対し、その量は相対的に少数である為、未だ論の主題として、深い検討の為されていない薫物、香りは多く残されている。その為、物語全体を通してそれらの持つ意義、役割というものの何たるかについて考察を加えてゆくにあたり、多く困難の予想されるのが、『源氏物語』の薫物と香りに関する研究の現状である。

以降本稿では、こうした現状にあつて、しかしながら『源氏物語』の薫物、香りの相対的な考察を志すべく、まずはその第一歩として、古注以来の注釈書により重視され説明されることの少なく、かつ近現代の研究に於いても主題的に取り扱われることがなかったものであるが、物語の鑑賞を左右すると考えられる薫物や香り、並びに諸註、諸氏による優れた研究が残され、しかしながらその議論に結論を未だみることのない、もしくは異なる角度からの解釈の可能性が残されていると感ぜられる幾つかの薫物や香りについて、考察と類推を試みてゆきたいと考え、具体的には次の論題を取り扱ってゆくものである。

第一章は、「宮家の歴史と薫物」と題し、物語の貴族社会に属し、または家系の源をそこに置く三人の女性が調合した薫物が、彼女らについて何を物語るものであるのかを探索して行く。まず第一節「末摘花の裋衣香について」では、古注以来、近現代の研究によつても、使用法や源流など、史実に於ける具体的な姿の不確かな裋衣香が、末摘花という女性と、その家系である常陸宮家の何を物語るものなのか、そしてこの香りが物語の展開に占める

役割とは何か、これらの問題点について、第二節で扱う明石の上の袈衣香に関する考察結果を絡めつつ、諸氏の指摘を再考しながら考察を加えてゆく。次に第二節「明石の上の侍従と袈衣香について」では、特に初音巻で登場している明石の上の侍従と袈衣香に着目し、明石の上がそれらの香りを用いることの意味や、彼女によるそれらの享受が物語の展開に及ぼす影響や効果について考えて行く。また第三章「朝顔前斎院の梅花について」では、梅枝巻薫物比べで朝顔前斎院が調合し、しかしながら紫の上の梅花に評価を譲った梅花香について、物語には具体的に示されないこの薫香の特徴や性格の類推につとめ、紫の上の梅花との比較などにより、この梅花香が物語る前斎院の思いや人物像について、類推を加えてゆく。

第二章「『源氏物語』の薫物と浄土世界」では、物語世界で「極楽」、「仏の御国」と絶賛される、薫香を内包する空間に焦点をあて、『源氏物語』が目指した浄土世界実現の方向性と、薫物、香りととの関係について考察を試みる。第一節「賢木巻、藤壺中宮の黒方と「極楽」」では、藤壺中宮が存在する御簾の内側から漂う彼女の黒方が、その内外で名香並びに光源氏の衣裳の匂いと薫り合うことで、なぜ「極楽」という形容が附されるに到ったのかについて、黒方という薫物の仏教的な一面の明確化を中心に論じて行く。第二節「初音巻、紫の上の薫物と「仏の御国」」では、『法華経』序品の一節を場面に重ね、また『宇津保物語』に於ける「仏の御国」登場の方向性と対照することにより、『源氏物語』の浄土世界と人物、薫物との関係がいかなるものであるのかについて論述したい。

最後に、第三章「『源氏物語』の仏教行事と薫物」では、鈴虫巻で女三宮のために光源氏が執り行う持仏開眼供養に於ける名香としての薫物に焦点をあて、さきに確認した三田村氏の説

とは異なつた角度からの考察により、本物語に於ける薫物の仏教的役割の解説に心がけ、薫物や花の香、仏教的な装飾品の数々が、女三の宮の持仏とともに、いかなる効果を彼女の為の持仏開眼供養に於いて演出すべく配されているのかについて、論述を行つてゆきたい。

(28)

第一章 『源氏物語』の宮家の歴史と薫物

第一章では、物語の貴族社会に属し、または家系の源をそこに置く三人の女性が調合した薫物が、彼女らについて何を物語るものであるのかを探求して行く。

第一節 末摘花巻「えびの香」について

第一節では、古注以来、近現代の研究によっても、使用法や源流など、史実に於ける具體的な姿の不確かな袈衣香が、末摘花という女性と、その家系である常陸宮家の何を物語るものなのか、そしてこの香りが物語の展開に占める役割とは何か、これらの問題点について、第二節で扱う明石の上の袈衣香に関する考察結果を絡めつつ、諸氏の指摘を再考しながら考察を加えてゆきたい。

一 末摘花の「えびのか香」が反映するもの ― その性格と享受のあり方 ―

「えびの香」は、末摘花巻で光源氏と末摘花が初めて対面を果たす場面に於いて、左記の如く登場する香りである。

君は、人の御ほどをおぼせば、ざれくつがへる今やうのよしばみよりは、こよなう奥ゆかしうとおぼさるゝに、いたうそゝのかかれて、ゐざり寄りたまへるけはひ、忍び

やかに、えびの香いとなつかしう薫りいでゝ、おほどかなるを、さればよとおぼす。
 (新潮日本古典文学集成『源氏物語』末摘花巻、二六〇、一頁、以下テキストは同じもの)
 末摘花の「御ほど」から考えて、斬新なだけの当世風を気取った人に比べれば、彼女はこの上なく古風で奥ゆかしい女性にちがいない、と光源氏は考える。そこに彼女は、側に控える命婦などの執拗なすすめを受け、襖障子を一枚隔てて彼の方へと少しずつるぎり寄つて来る。その忍びやかな気配とともに、心惹く風情で漂つてきた「えひの香」が、末摘花の雰囲気全体をおっとりとしたものに演出する。源氏はそれらを感じ取り、「さればよ」、思つた通りだ、姫君のこれまでの対応に不満を抱くこともあつたが、しかし目の前の彼女は自分の当初からの予想や期待になつた女性であるに違いない、との確信に至るのである。さて、これまでに光源氏が見聞してきた末摘花に関する情報、「人の御ほど」とは、次のようなものであつた。

故常陸の親王の、末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御女、心細くて残りゐたるを、ものゝついでに語りきこえければ、

(末摘花巻、二四六頁)

かいひそめ、人疎うもてなしたまへば、さべき宵など、物越しにてぞ、かたらひはべる。琴をぞなつかしき語らひ人と思へる

(末摘花巻、二四七頁)

「聞き知る人こそあなれ。百敷に行き交ふ人の聞くばかりやは」とて、召し寄するも、あいなう、いかゞ聞き給はむと、胸つぶる。ほのかに掻き鳴らしたまふ。をかしう聞こゆ。何ばかり深き手ならねど、ものの音がらの筋ことなるものなれば、聞きにくゝ

もおぼされず。いといたう荒れわたりて、さびしき所に、さばかりの人の、古めかしう、ところせく、かしづきすゑたりけむ名残なく、いかに思ほし残す事なからむ、かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどももありけれ、

(末摘花卷二四八、九頁)

月やうく、出でて、荒れたる籬のほどうとましく、うちながめたまふに、琴そゝのかされて、ほのかに搔き鳴らしたまふほど、けしうはあらず。すこしけ近う今めきたる氣をつけばやとぞ、みだれたる心には、心もとなく思ひゐたる。

(末摘花卷、二五六頁)

光源氏が末摘花を、以上本文に見るような、高貴な宮家に生まれ育つも現在は零落して心細く控えめに住み渡り、そうした生活の中で、まるで昔物語に出てくる美しい姫君のように琴を心の慰めに親しむような、この上なく古風で奥ゆかしい女性であると確信した要因は、彼女のゐざり寄る忍びやかな気配、及び心惹く風情で漂ってきた「えびの香」が演出した、末摘花のおっとりとした雰囲気であつた。行動の忍びやかさが彼女をおっとりとした女性として印象づけ、そこから連想される彼女の古風さや奥ゆかしさが、やんごとなき血筋と教養、文化を伝える姫君としてふさわしく思われるのであらう。と、なると、そのやんごとなき遺産の一端である「えびの香」自体にも、常陸宮家の姫君にふさわしい古風さ、奥ゆかしさといった性質が具わっていることが想像される。光源氏にとつて「いとなつかしう」感ぜられ、また「今様」よりも「奥ゆかしう」思われる「えびの香」とは、いかなる香として『源氏物語』に於いて理解され、どのようなかたちで末摘花により享受されていたのであらうか。以下この問題点に対し考察を加えてゆきたいと思う。

冒頭で確認した末摘花巻の一場面において、「えびの香」の特徴として我々が気づくのは、この香が末摘花のいざりよる「けはひ」、つまり彼女の動きに合わせて発散している点であろう。このことから、「えびの香」が末摘花の身体、もしくは身体に装着する衣料、装飾品に移っており、それゆえに彼女の動きに伴って香り出ているとの理解が可能になる。また、常陸宮家の現在の窮状にもかかわらず、源氏をもって「さればよ」と納得させることが出来るあたり、「えびの香」はおそらくは現在よりも経済的に豊かであったはずの父宮存命中、またはそれ以前に同宮家に渡って末摘花の代に至った、宮家ゆかりの尊く高価、かつ末摘花巻現在で既に稀有な香として存在していたのではないだろうか。古注に尋ねると、次のような註を確認することができる。

衣被香 又衰衣香 衰コロモニツム 東宮切^{セツイン}讃

香字抄云採栴檀樹業皮泰被師為香故云業皮又衰香俗云衣比削王家方に衰衣香ありこれをえひの香といふ一云薰衣香の一名一云すへて薰物の名也

(『花鳥余情』巻四、五七頁)

本巻の「えびの香」は、『河海抄』では「衣被香」、「衰衣香」と呼ばれる香として、又『花鳥余情』は薰衣香として説くが、いずれにしても衣類に関係する香として理解されていることが分かる。さて、右記の『花鳥余情』註に見える「削王家方」は、我が国で平安末期に寂連により著されたとされる所謂薰物指南書『薰集類抄』が伝える「邠王家」の衰衣香の方を指すか。

裒衣香或註薰衣香。

邠王家

零陵七兩

沈二兩

丁字二兩

蘇合二兩

占唐二兩

藿香三兩

鬱金一兩

麝香二兩

右八種。各別搗為散和合。但蘇合占唐以手按碎和之。

(群書類従本『薰集類抄』上、六九一頁)

群書類従本『薰集類抄』下卷には、『花鳥余情』と同じ字を用いた「劔王家」の薰物に関する記述として、次の二点が確認できる。

和合時節

(中略)

劔王家。以蜜合占唐香。微微火煎。

(六九四頁)

春香

劔王家

裒衣香方六種。各別搗為散和合。唯蘇合簷唐以手按碎和亦好。

案之。雖梅花黑方可准知歟。

(六九六頁)

この「劔王家」もしくは「邠王家」が一体どのような人物、もしくは家系を指すものであるのだろうか。この問題を明確化するにあたり、筆者が手にしている唯一の直接の手掛

かりは、関西大学岩崎文庫蔵の『薰集類抄』に残される次の記述である。

𡗗音寶王家 以蜜合占唐香 微微火煎

(関西大学岩崎文庫蔵 藤原定長筆 『薰集類抄』下より)

「𡗗王家」の右側に記されている「音寶」、「𡗗」の字の「ひん」という読みを示したものである。さて、左側の「一國」であるが、この附記によれば「𡗗」の字と「國」の字とを連ねた語の存在が示されていることになる。「𡗗國」と聞いて思い起こされるのは、まず『山海經』などに記される極西の国の名である。

【𡗗國】ヒンコク 西方極遠の國。(爾雅、釋地) 西至於𡗗國。(郭璞、山海經圖贊下、海外東經、豎亥) 東盡太遠、西窮𡗗國。

(『大漢和辞典』卷一一、二一五頁)

また、この「𡗗國」との直接的な関係は未詳であるが、周の王の祖先が立てた国の名も、その土地の名称にちなみ「𡗗」とされ、この国の名にちなんだ姓を持つ氏族もあるという。

【𡗗】ヒン 一 国の名。周の祖先の公劉の立てた國。陝西省枸邑縣の西。(中略) 四 姓。

(通志、氏族略、以國為氏) 𡗗氏、(中略) 姓苑云、周太王居𡗗、因氏為。

(『大漢和辞典』卷一一、二一五頁)

これだけの資料をもって、岩崎文庫本『薰集類抄』の云わんとするところが、「𡗗王家」が「𡗗國」、または周の祖先にゆかりの家系であって、ここに掲載された裋衣香はその家系から出た香である、と結論付けんとするのはいささか勇み足であるが、裋衣香という香の歴史の深さと格の高さが我が国における薰物文化の歴史と格を超えるものである可能性

は示唆されているように思われる。

さて、初音巻に現れる「裋衣香の香」については、さきに述べたように第二節に於いて詳しく考察してゆくところであるが、『河海抄』と『花鳥余情』は、この「裋衣香の香」について、左記の註を残している。

裋衣香方、零陵香七分、沈香二分、丁字二両、蘇合二両、簪唐二両、藿香三両、鬱金一両、麝香半分。右六種各別搗為散和合。唯蘇合簪唐以手揉碎和且好。(中略)又古老の尼君の秘事とて申は衣被香は麝香半分沈香三分二、白檀三分一、いづれも最上品を取合て少しなませんじなる甘づらにて合云々。

(『河海抄』より)

衣被香とかけるは衣裳をにほはす心なり。裋衣香とかくは衣につく心なり。或抄云むかし人のこあま君のをしへ侍りし、衣被香とは麝香半分沈香二分白檀三分一以上いづれもさいじやうをえらびてまぜしなり。あまづらにてあはするなり。

(『花鳥余情』より)

「古老の尼君」「むかし人のこあま君」の伝えたところによると、「衣被香」と書く場合は衣裳に香を移し匂わせ、「裋衣香」と書く場合はその薫物自体を衣裳に付随させるということか。「衣被香」の材料は何れも「最上品」「さいじやう」のものを用いるべきである、というのであるから、古註に尋ねる限り、少なくともこの「尼君」の時代周辺では、「衣被香」に対して「最上品」との認識がなされていたことが理解できるし、また両古註ともにこれを「甘(あま)づら」なる蜜状の粘着物質を用いて「合」、「あはする」ものであると説いている。おそらくは所謂練香状に加工されるものであると言うのであろうが、

こうした「えひのか」の質や様態について、『陳氏香譜』を参考にした場合はどうに捉えることができるのか。卷三の「裋衣香」に関する以下記述を参考に考えてみたい。

裋衣香

丁香別研 鬱金各十両 零陵香六両 藿香 白芷
各四両 蘇合香 甘松 杜蘅各三両 麝香少許
右為末盛袋佩之

裋衣香

零陵香一斤 丁香 蘇合香各半斤 甘松三両
鬱金 龍腦各二両 麝香半両

右並須精好者若一味惡即損許香同搗如麻豆以
夾絹袋貯之

(『陳氏香譜』より)

『陳氏香譜』には調合材の種類と量の異なる二種の「裋衣香」が右記の如く記載されている。各々調合材種の後に附けられた詞書きは、第一の「裋衣香」の場合「右の材料を粉末にして袋に盛り入れ、その袋を帯びる」といった内容の使用法が、第二の「裋衣香」には「右の材料はすべてできばえの良いものとすべきである。もし一つでも味わいの悪い物を用いれば、香が損なわれてしまう。これもさきの裋衣香と同じく麻豆の如くに搗いたものを、絹製の袋のなかに入れて用いるべし」との附記が為されている。特に第二の裋衣香に付随の説明は、「古老の尼君」の「最上品」を用いるべきとの伝えに合致する内容となっている。また、本物語よりも古い時代に成立している『宇津保物語』蔵開上巻に於ける「裋

衣」と呼ばれる香材の加工、用法に關しての記述として次に紹介する本文には、『陳氏香譜』が伝える「裋衣香」享受のあり方に類する点が認められる。

女御麝香ども多く具し集めさせ給ひて、裋衣、丁字、鐵臼に入れて搗かせ給フ。練絹を綿入れて、袋に縫はせ給ひつゝ、一袋づゝ入れて、間ごとに御簾に添へて懸けさせ給ひて、

(『宇津保物語』藏開上卷より)

日本古典文学大系の註によれば、『宇津保物語』に於ける「裋衣」は香材の一つとして理解されているようであるが、その「裋衣」とその他香木を搗いて絹製の袋に入れて用いるというあたりは、『陳氏香譜』が説く「裋衣香」享受のあり方に類するものであると言えるよう。『陳氏香譜』は宗代の作であり、それ以前に著された、同じく宗の洪弼(弼字駒父)以下十一人の香譜を一冊に大成した書であるから、少なくとも宗代周辺の時代にあつて、「裋衣香」は高品質な材質を用いるべき最上級品たるべき香として認識されていたことが理解できる。『陳氏香譜』は我が国で鎌倉期に著された『香字抄』などが参考になっているふしもあり、さきの『宇津保物語』に於ける「裋衣」という香材の享受のあり方から考えても、「裋衣香」に対する宋代周辺までの理解が我が国に於いても伝えられ、なぞられていたと考えることができよう。高級かつ希少な香材をとり集め、それらを粉末にした後袋詰めにするという「えびの香」享受のあり方は、特に前半部は本物語に於ける「えびの香」享受のあり方とも附合する。さきに確認した、「邠國」、「邠王家」との繋がりの可能性を併せて考えても、当時の我が国薫物文化に於いて群を抜いて高級、希少、古風かつ宮家ゆかりの豪華で優雅なものと目される香を身近にすることは、光源氏に襖障子の向こう

に居る末摘花を常陸宮家の姫君として相応しく感じさせているのである。

さて、末摘花の「えびの香」に備わるこうした特徴が、同じ名称の香である、初音巻の明石の上の「裛衣香」にも同様に確認することの出来ることは、次節に於いて詳しく論述してゆくところであるが、その結果を鑑みると、本物語の裛衣香に相対的に見られる特徴として捉えることができるのである。まずは左記に初音巻の同場面を確認しておく。

御簾のうちの追風、なまめかしく吹き匂はして、ものよりことに気高くおぼさる。(中略) わざとめきよしある火桶に、侍従をくゆらかして、物ごとにしめたるに、裛衣香の香のまがへる、いと艶なり。

(初音巻、一七頁)

明石の上がやんごとなき際の貴人が玩ぶ調合方を知り伝える家系に生まれた女性であることは、次節で確認する石田穰二氏の論に明白であろうかと思われるが、加えて、薫物の方の伝承が、音楽といった芸能の伝承と平行して行われた史実に於ける先例の存在については、藤河家利昭氏の「八条の式部卿について」(広島女学院大学『国語国文学誌』、一九九七年)に詳しい。八条の式部卿こと本康親王が、仁明天皇から「琴に限らず影響を受けたと考えられるが、殊に薫物については父天皇の意志を存分に体现し、大成させたのである。」との氏の説を参考とすれば、「延喜」の帝と称されるところの天皇から直接筆の琴の伝受を授かった明石一族のある人物との間で、薫物の方の伝受も成された可能性が出てくる。また、彼女の母尼君は中務宮の孫であって、「えびの香」を伝える常陸宮家の末摘花と同様、彼女もまた宮家にゆかりの血筋の人である。同様に、明石の上が生を受けた明石一族が琴や薫物といった文化を伝承していると考えられるのは、彼女の家系が皇室や

大臣家をその源流とする、高貴なものであるからこそなのである。

また、本巻に於ける末摘花による「えびの香」享受のあり方としてこのほかに特徴的なのは、この場面に他の薫香との複合や引き立て合いを見ないこと、末摘花の衣裳から漂い来る「えびの香」以外に、襖障子の内側にある彼女の生活空間から、空薫物のような装飾としての薫物享受の痕跡を確認できないことである。例えば次節で詳しく述べてゆくところの、同じ「衣被香」又は「裛衣香」として諸註に理解される初音巻の明石の上の「裛衣香」の場合、侍従の香と薫り合わされることにより、彼女独自の薫香世界が生成されている。明石の上は、芸能、芸術、工芸一般に関して無類の才能を発揮するひとである。末摘花の「えびの香」と同じ種類の香とされる「裛衣香の香」を用いてはいるが、加えて侍従の香も混合させ、二種の香の複合により独自性あふれる薫香世界を実現している。才覚と好奇心に恵まれ、こढ़わりと創造性をもつて装飾、芸能を享受する明石の上の場合、薫物享受のあり方に於いても独自の方向性が示されているのである。対して末摘花による「えびの香」享受は、どのようにしておこなわれているのか。その答えは次に確認する本文に明るい。

よろしき御衣たてまつりかへ、つくろひきこゆれば、正身は、何の心げさうもなくておはす。

(末摘花巻、二六〇頁)

右記の本文によれば、「えびの香」を添わせた衣裳は女房が用意し、彼女に着用させたものであつて、末摘花自身の意志やこढ़わりは何ら示されていないのである。いやしくも宮家の姫君であるのだから、手取り足取り当たり前、という常陸宮家における生活習慣を反

映したものであると考えてみても、一人前の大人の女性としては、少々子供じみた、身だしなみに対する無頓着な一面をかいま見ることのできる記述であるとの印象も受ける。こうした末摘花の薫香享受に対する興味関心の薄さ、こだわりの少なさは、ここよりも時を経た蓬生巻でも同様に示されている。

大武の北の方のたてまつり置きし御衣どもをも、心ゆかずおぼされしゆかりに、見入れたまはざりけるを、この人々の、香の御唐櫃に入れたりけるが、いとなつかしき香したるをたてまつりければ、いかがはせむに、着かへたまひて、かの煤けたる御几帳引き寄せておはす。

(蓬生巻、七六、七頁)

彼女が香りによる自らの装飾に対し、主導的、積極的に働きかけない人であることは、右記両本文に明らかであろう。さきにも触れた芸能面に関する彼女の態度を思い起こせば、末摘花は貴い文化を伝える人ではあるが、例えば琴の手に関しては当世風の艶めかしさのようなものに欠けると評されているところには、彼女が故宮の教え伝えた奏法のありのままを守り奏でる人であって、自らの個性や独自性を奏法に加味しようとする、当世風の文化に関する知識や、それを玩ぶだけのセンスに恵まれた、またはそうした物事を好む女性ではないことが認識できる。同様に、「えびの香」に立ち返って考えてみた場合も、彼女はただ、故常陸宮の遺産である古風かつ希少な香、「えびの香」を唐櫃の中に大切にしまひ込み、その香の享受としてはそこに同じくしまいこんだ衣裳に香を移すのみで、独自の工夫により新規な、又は薫香が単独ではなし得ない優れた香りの創造に勤めることで、心を慰めんとするような女性ではないのである。こうした彼女の「えびの香」享受に対する

姿勢は、末摘花自身の当世風の文化に対する関心、知識の欠如を反映したものではないだろうか。だからこそ翻って、「ざれくつがへるいまやうのよしばかりはこよなうおくゆかし」という印象を、光源氏に促すことができたのかもしれない。独自性が派手さ、華やかさという印象に帰結してしまえば、左記に示した本文に於ける右大臣家の女性達のように、奥ゆかしさに欠け、いまめかしいだけだ、と評されてしまうこともある。花宴巻に次のような場面がある。

そらだきもの、いとけぶたうくゆりて、衣の音なひ、いとはなやかにふるまひなして、心にくゝ奥まりたるけはひはたちおくれ、今めかしきことを好みたるわたりにて、

(花宴巻、六一頁)

故常陸宮の時代の同宮家隆盛の時代の遺産である末摘花の「えびの香」は、『源氏物語』当時稀有で古風な香りではあるが、当世風のセンスには欠ける、非積極的な享受のあり方が示されている。だからこそ、派手さを好まない女性の身に親しむ、控えめで奥ゆかしくも古風な香のあり方として、その香を聞き、その香り出る有様を身近にする光源氏に理解されているのである。

二 「えびの香」が引き立たせるものゝ末摘花の美点と欠点ゝ

「えびの香」は、その背景とする歴史の深さ、由縁の貴さ故に、その香を伝え持つ末摘花自身の血筋の貴さと性質の古風さのいかばかりかを思いやらせ、故宮在世の華やかさを回想させるつまとなり、結果末摘花を主とする常陸宮家の現在の零落振りを際だたせるこ

とになるといふ、いわば彼女の美点と欠点とを彷彿とさせる力のある香りである。雅な文化を伝え、遊ぶ零落貴族、こうした存在は『源氏物語』が語る時代の世の中に於いて、さほど珍しいものでもなかったようである。東屋巻で結婚相手を浮舟から彼女の妹に乗り換えた少将という人物は、その理由の一部として、次のような発言を残している。

品あてに艶ならん女を願はば、やすく得つべし。されど、さびしう、事うち合はぬ、みやび好める人の果てくは、物きよくもなく、人にも人ともおぼえたらぬを見れば、すこし人にそしらるとも、なだらかにて、世の中を過ぐさむことを願ふなり。

(東屋巻、二七六頁)

家柄良く、雅やかな女性なら、手に入れるのはたやすいこと、という。少将が言うように、高貴かつ風雅ながらも零落して見る影もない生活に甘んじる女性というのは、この当時多く存在していたのであろう。末摘花はまぎれもなくその一人として末摘花巻に登場している。彼女は故父宮伝来の琴の手に心を慰め、また琴は、そうした心をうち明けるだけの勇氣も友も持たない彼女には、そうした自らの胸の内を外界に向かつて表現するための術となっていたのか。この琴と同じく故父宮の遺産である「えびの香」もまた、彼女に故宮存命中の華やかさ、心強さを思い起こさせ、しばしの慰めとなっていたのかもしれない。が、それは少将のような第三者から見れば、高貴で雅な文化であればあるほど、現在の暮らしぶりの零落した有様を際だたせている。光源氏の心に宿った「さればよ」との評言は、この香が末摘花の高貴さ、奥ゆかしさを裏付ける一方で、それまで彼が心に描いた末摘花像である、昔物語に出てくるような、高貴な身の上で風雅を愛しながらも不如意な生活を送る美しい姫君、彼女こそその人なのだ、との確信を促しているとも言える。「えびの香」

は、落ちぶれ果てた宮家の古風な女性の身の上に相応しく匂い立つ香として、本物語に登場しているのである。そのことは、奇しくも初音巻でこの更衣香を享受したのが明石の上であることにも附合していた。彼女は社会的身分の低さ故に、実の娘を養育することもかなわない。しかしその一族の源流をたどってみれば、さきにも触れたように、父明石の入道は大臣家の出身、母尼君は中務宮の孫娘であつて、「更衣香」は、一族が栄華を極めた頃の名残を示し残す香なのである。未摘花の「えびの香」もまた、常陸宮家の過去の栄華を反映するが故に、その香を聞く光源氏にその美点を思い起こさせるつまとなり、それ故現在の零落振りという欠点を引き立たせてしまっている。未摘花の「えびの香」は、未摘花という女性の美点を反映するが故に、現在の欠点を引き立てる香りなのである。

* 筆者が関西大学図書館の御厚意で果たしたマイクロスコップ利用による閲覧の際に書き写したノートをもとに引用した。複写は現在依頼の為の手續きを行つてゐる最中である。

♫ 『陳氏香譜』は宋代の作である：

臣等謹案香譜四卷宋陳敬撰經字子中河南人

(『陳氏香譜』提要より)

♫ 宋の洪芻(芻字駒父)以下十一人の香譜を一冊に大成した書であるから：

是書凡集沈立洪芻以下十一家之香彙為一書

(右記同提要より)

(沈立とは) 宋、歷陽の人。字は立之。進士。

(洪芻とは) 宋洪芻撰芻字駒父南昌人

(『大漢和辞典』より)

*『陳氏香譜』は我が国で鎌倉期に著された『香字抄』などが参考になっているふしがある。『香字抄』『香要集』は「陳氏」と記す書物から次の如く引用している。

鬱金香。

(中略)

本草云。

(中略)

陳氏云。其香十二葉為百草之芙。

(『香字抄』より)

鬱金香

(中略)

陳氏云其香十二葉為―百草之英。

(中略)

陳氏云為百草之英

(天理圖書館善本叢書和書之部第三十一卷『香要抄 葉種抄』十三、十五頁) こうした引用とほぼ同じものが、四庫全書所収の『陳氏香譜』においては「魏畧(略)云」として次の如く記載している。

鬱金香

魏畧云（中略）甚香十二葉為百草之英

（『陳氏香譜』より）

此の引用とさきのそれとを対照してみた場合、『香字抄』の言う「陳氏」が『陳氏香譜』であり、同書が『陳氏香譜』の『魏略』からの抜粋部を直接、もしくは間接的に転用したであろう事、そしてそれを『香要抄』等後の書が引き継いでいった事の可能性は存在する。なお『香要抄』が『香字抄』を参考としているとの考察は、天理圖書館善本叢書所収『香要抄 藥種抄』「解題」において、森鹿三氏によって次のようになされている。

『香要抄』に収める香の数は前述の如く四十九種だが、『香字抄』の方も四十何種を収め、相互に出入りがあるけれども、それほど隔たりはない。その内容から見ても『香要抄』が『香字抄』を参考に行っているように思われる。

（十頁）

第二節 明石の上の侍従と衰衣香について

『源氏物語』には、「侍従」という薫物の名称が二度ほど登場している。第一に初音巻、明石の上の住居に於いて、第二に梅枝巻、光源氏によつて調合されたものが、螢兵部卿宮により讃えられている。また、名称が記載されていないにしても、同じく梅枝巻で紫の上が調合した「八条の式部卿の御方」の一方が侍従であることは通念である。「えび」「衰衣香」と称され、衰衣香（衣被香とも）と表記されるところの香は、末摘花巻、及び初音巻において、それぞれ末摘花、明石の上により用いられている。本節は、特に初音巻で登場している明石の上の侍従と衰衣香に着目し、その性質や物語に及ぼす影響について確認、類推を加えてゆくものである。

一 明石一族の伝える文化 ―その伝承経路について―

本物語で衰衣香が登場するのは、初音巻の次の場面に於いてである。

暮れ方になるほどに、明石の御方にわたりたまふ。近き渡殿の戸押しあくるより、御簾のうちの追風、なまめかしく吹き匂はして、ものよりことに気高くおぼさる。正身は見えず。いづらと見まはしたまふに、硯のあたりにぎはしく、草子ども取り散らしけるを取りつつ見たまふ。唐の綺のことくしき縁さしたる茵に、をかしげなる琴

うち置き、わざとめきよしある火桶に、侍従をくゆらかして、物ごとにしめたるに、
 袈衣香の香のまがへる、いと艶なり。

(初音巻、一六、七頁)

元旦の初子の日、紫の上や明石の姫君などのもとへ初春の訪問をして過ぎた後、暮れ方
 になつてようやく光源氏は明石の上のいる戌亥いぬいの町へとやつて来る。そこへの渡殿の戸を
 押し開けると、空気の移動が発生したからであらう、御簾の内で焚き匂わされる薫香を乗
 せた風が彼の方に吹き匂つて来る。光源氏は、その優艶な有様を格別に気高いものに思わ
 れる、というのである。ここではまだその薫香そのものが何者であるのかについては明ら
 かにされず、また、そのことよりも、それが漂い匂う有様の何たるかについて、特に筆が
 及ばされている。御簾の内の追風が吹き匂うのは、例えば同じ初音巻で、ここより先に光
 源氏が訪問している紫の上の住居の御前に於いても見られた現象である。

春の御殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひて、生ける仏
 の御国とおぼゆ。

(初音巻、一一頁)

本稿に於ける右記の場面に関する詳しい考察は後に譲るところであるが、紫の上の住居に
 於ける「御簾の内の匂ひ」、所謂御簾の内の追風は、御前の梅の香と混ざり合い、「生け
 る仏の御国」と称されるほどに、尊く気高く、そこに在る人々を、まるで極楽に居るよう
 な晴ればれとした、安らかな気分になせる薫香世界を現出しているのであらう。また、初
 音巻より時を遡る賢木巻に於いては、藤壺中宮の御簾の内から漂い来る匂いが、次のよう
 にその外側を視点とする語り手、ひいては光源氏に観測されている。

御簾のうちの匂ひ、いともの深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。大将の御匂ひさへかほりあひ、めでたく、極楽思ひやらるゝ夜のさまなり。

(賢木卷、一七三頁)

ここに関しても詳しい考察は第二節に譲るところであるが、藤壺中宮というこの上なく高貴で優れた女性が控える御簾の内側に深く染む黒方の匂いが、その外側に漂う名香や光源氏の衣裳の匂いと互いに引き立てあつて薫る、極楽を思わせる薫香世界が御簾の内外に存在している。この二例から見ただけでも、薫香を乗せた追風の発現は、優雅優艶かつ気高い印象を、その有様を体感するものに対し与える現象であると言えよう。渡殿の戸を押して開けて漂い来た明石の上の御簾の内の追風もまた、その例に漏れず気高い印象を与えているのであるが、「なまめかしく」吹き匂わせていると言うのは、さきに紹介した紫の上と藤壺中宮の場合には見られなかった評価である。なまめかしさ、所謂女性的な艶っぽさというものは、本物語では朧月夜内侍に印象的な特徴であろう。この特徴について、島津久基氏は、次のような評言を残されている。

此の「なまめかし」と「艶」との両者を併せたやうな感じの複雑な媚態を持つ女性として、朧月夜と六条御息所とがある。そして前者は「なまめかしさ」に於て勝り、後者は「艶」に於て勝つてゐると言へる。(中略)「なまめかし」は後世的な卑俗感の付随している媚態ではないが、それは若いみづくしさと、柔らかな女性的な感じとの綜合であり、結局性的魅力を意味する語であることがやはり認められねばならないと思ふ。

(「なまめかし(附なまめく)」『国文学ノート』所収 八八、九〇頁)

この「女性的な（中略）性的魅力を意味する語」としての「なまめく」「なまめかし」という語の理解に対し、梅野きみ子氏は『源氏物語』に於ける「なまめく」「なまめかし」について、次のような対照的な定義付けを試みられている。

「えん」と「なまめく」「なまめかし」との相違は、前者が、人物・事物および自然現象の風流な感覚的美をあらわすと同時に、人の心情「えんなる心」即ち風流な情趣をも対象となり得る感情語としても用いられており、「色めく」「このまし」とも併用し得る「えん」の方にこそ、好色性が認められる。（中略）「なまめく」「なまめかし」は、みずみずしくしかも洗練されて優雅な気品が漂う美しさを、基調にする感覚語として用いられている。

（「六条御息所と朧月夜の君―その「えん」と「なまめく」「なまめかし」を中心に―」『源

氏物語の探求』第八輯 二九七頁）

梅野氏は、「なまめく」「なまめかし」という語は島津氏の言う「性的魅力」、「媚態」を表現する語ではなく、人間の風流かつ気品高い優美さを表現するものであるとの定義付けを試みられている。しかし、梅野氏は同時に「朧月夜は、人並み以上の「なまめく」美によつて、源氏の愛情を獲得し、（三二二頁）」との理解も同論文にて残されており、この「なまめく」「なまめかし」という特徴が男性である光源氏を彼女との性的関係へ導くものであることは、少なからず認められているようである。となると「なまめく」「なまめかし」という語が意味するところとしては、島津、梅野両氏の論に共通するところの、若々しさのなかに気品も兼ね備え、それらによつて男性をも惹きつける女性的魅力、との理解が可能となろうか。そう考えると、初音巻で漂い出てきた明石の上の住居から来る追風

の「なまめかし」というものは、みずみずしく、しかも高貴な印象で、かつ男性を惹きつけるような艶っぽい魅力をも感じさせる趣向だ、として光源氏に理解されていると考えることが出来るように思う。

さて、追風に誘われるようにして明石の上の住居に足を踏み入れる光源氏が目にしたのは、追風の気高さ、優雅さに違わぬ内装の有様である。「唐の東京錦」というのは唐から輸入された、もしくは唐文化に於ける装飾の意匠を我が国で再現したものである。その希少さやハイカラさが推し量られる。唐にちなんだ所では、六条院の明石の上の部屋の庭に「唐竹」の植え込まれていることが、乙女巻にて次のように語られている。

にしの町は、北おもて築きわけて、御蔵町なり。隔ての垣に、唐竹植ゑて、松の木しげく、雪をもてあそばん便によせたり。

(日本古典文学全集『源氏物語』乙女巻)

こうした唐風の趣向を彼女の周辺に数えることができるのは、そうした趣向を彼女自身が好み、また彼女ににっかわしいと光源氏が感ずることによるのである。玉鬘巻で彼が明石の上にと志した正月用の晴着の有様にも、やはり「唐めいたる」、唐風の意匠を確認することができるのである。

梅の折枝、蝶、鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に、濃きがつやゝかなる重ねて、明石の御方に、思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ。

(玉鬘巻、三二七頁)

「唐の東京錦」の、「ことくしき」、大仰な印象の端加工のなされたものを、明石の上は室内の装飾的敷物として用いているのである。そこにはおそらく外観を言ったのである

う、「をかしげな」、優れて素晴らしい琴が「うち」置かれ、また「わざとめきよしある」、明石の上のこだわりが特に置かれた観のある、由緒ある火桶も配し、そこに侍従という薫物を入れ、空薫物として室内に焚き漂わせ、辺りの物品に匂いを染ませている。室内全体に漂い染むこの侍従の香に、衣被香の香が混ざり匂っているのが、語り手、ひいては光源氏にとり、はなはだ艶に感ぜられる、というのである。なにがしかの由縁を見る者に思わせる工芸品を調えるのは、明石の上の得意とする所であり、好む所であると言えよう。藤裏葉巻に見える次の本文からも、彼女がそうした由あるものを心を配って選ばんとする人であることが理解できようかと思われる。

挿頭の台は沈の華足、黄金の島銀の枝にゐたる心ばへなど、淑景舎の御あづかりにて、明石の御方のせさせたまへる、ゆゑ深く心ことなり。

(藤裏葉巻より)

さて、このように「ことくしき」「をかしげなる」と評される、唐にゆかりの上質で希少な物品を、「うちおき」、非常にぎつくばらんな印象を与える形で室内に配しているあたり、所謂「中の品」の出でありながら、「やんごとなき人に、いたう劣るまじう」と明石巻で評された女性、明石の上の室内として描かれるに似つかわしい有様であると言える。特に琴に関しては、本物語では常陸宮家の末摘花、光源氏や女三の宮など、皇統の貴人によつて演奏されることが中心のこの楽器が、明石の上の室内にもさりげない形で置かれていたのである。末摘花がそうであるように、彼女もまたこの琴を、日々の心の慰めにつま弾く人なのであろうか。松風巻の次の一文は、そのことを示唆するものであると言える。

なく、もの思ひ続けられて、捨てし家居も恋しう、つれづれなれば、かの御かたみの琴を掻き鳴らす。をりのいみじう忍びがたければ、人離れたるかたにうちとけてすこし弾くに、松風はしたなく響きあひたり。

(松風巻一二九頁)

琴は彼女が備える才覚、教養の高さの、末摘花の如き皇統の貴人に匹敵するものであることを物語る装置であると見てしかるべきであらうし、彼女自身の問題だけでなく、物語にも度々示されてきた父明石入道の家系の皇室との文化的な繋がりが、また母尼君の中務宮の孫という皇統との血縁上の繋がりとともに、無関係とは言えないかも知れない。明石の上の薫物と皇統のそれとの関連性については、梅枝巻で彼女が調合した、物語、及び実在の朱雀院にゆかりがあるとされる絵合巻の「百歩の薰衣香」を題材に、石田穰二氏が次の御考察を示されている。

明石の上の、今日の言葉でいへば教養、技芸にあたる、箏の琴と薫物の方とについて、これだけのやんごとなき伝承を物語る作者の用意を、推測すべきであらうと思ふ。明石の上の教養、技芸のなみなみでない事を、これらの伝承を語る事によつて、具体的に示そうとしたのである。父入道は前播磨守に過ぎないが、その先は大臣であり、母北の方もまた中務宮の孫であるといふ。家柄も争はれないのである。それはまた、明石の上の人柄とあひまつて、彼女が光源氏の妻室の一人として六条の院の人たるに、また東宮の女御の生母たるにふさはしい資格を示すものでもあつた。

(石田穰二氏「くのエ香―明石の上のこと―」二七三、四頁)

石田氏は、延喜の帝から伝える箏の奏法に加え、梅枝巻の「百歩の方」とされるものもま

た、明石一族が入道の父大臣、または母尼君の祖父中務宮の時代周辺で、實在の「前の朱雀院」と呼ばれる帝から伝承した、「なみなみでない」皇室ゆかりの教養、技芸であるという理解なさっている。この「前の朱雀院」が實在の宇多帝か朱雀帝かで議論の分かれるところにあることは、以前にも確認したところであったが、明石の上がやんごとなき際の貴人が遊ぶ調合方を知り伝える家系に生まれた女性であることは、氏の論に明白であろうかと思われる。加えて、薫物の方の伝承が、音楽といった芸能の伝承と平行して行われた史実に於ける先例の存在については、藤河家利昭氏の「八条の式部卿について」に詳しい。八条の式部卿こと本康親王が、仁明天皇から「琴に限らず影響を受けたと考えられるが、殊に薫物については父天皇の意志を存分に体现し、大成させたのであろう。」との氏の説を参考とすれば、「延喜」の帝と称されるところの天皇から直接箏の琴の伝受を授かった明石一族のある人物との間で、薫物の方の伝受も成された可能性が出てくる。明石の上が生を受けた明石一族が琴や薫物といった文化を伝承していると考えられるのは、彼女の家系が皇室や大臣家をその源流とする、高貴なものであるからこそなのである。

二 明石の上の侍従 ―その質と格について―

さて、本巻で侍従が焚き漂わされる火桶の、「わざとめきよしある」という意匠や趣味、質の高さに対する形容のありかたは、この火桶が中の品の女性として誕生した明石の上の身の上にとり過分な意匠の施されたものであり、しかしながらその本質としての趣味の良さ、ゆかりの尊さは認めざるを得ないという、語り手や光源氏の内面を示唆しているので

あろうと考えられよう。この火桶から薫物を焚き漂わせるという趣向であるが、これ以前に語られている室内装飾の贅沢さ、華やかさと一空間に共存させられていることを鑑みれば、そうした有様に添えて遜色ない、尊くも豪華な薫物享受のかたちであるかと観測するところができるかもしれない。『源氏物語』に於いて、薫物を焚く際に所謂火取香炉の用いられていることは二カ所見られ、また特に何を用いて薫香を享受しているのか語られていないところは、この火取香炉のように一般的な方向性によるのであるとも推察されるところであるが、このように火桶が用いられているのは、本物語では初音巻のこの場面に於いてのみである。また、火桶を用いた薫物享受は本物語と同時代の日記、随筆、物語作品等に於いて見ることでできない方向性であるのだが、これより時代を遡って成立した『宇津保物語』の以下の抜粋部に於いては、火桶が暖房器具としての本来の用途に加え、火取同様、薫物享受に用いられていることを確認することができる。

かくて、暫しあれば、御桶火参る。ぢむのひをけ・しろがねのほとぎ、ぢんをひばしにして、くろぼうをつるのかたにて、しろかねのはしなどして、みかど・きさきの御まへにまいる。

(菊の宴より)

宮の御まへには、御ひをけすへて、ひおこして、たきものどもくべてたきにほはし、御ぐしあぶりのごひあつまりてつかうまつる。

(蔵開中より)

右記の火桶は、前者の場合帝とその後の御前に奉る際、ただ炭を入れ火をおこしたのでは物足りないとの思いから調えた、火桶としての実用性も兼備する造り物の材料として、薫

物と火桶を組み合わせて用いたと考えることができるが、造り物としての性質を備えるだけに、広く下々の日常で行われていた享受のありかたとは考えにくい。対して後者の場合は、濡れた髪を加熱して乾かし、かつ薫物の匂いも染ませるといふ二つの目的を同時に行うものであるが、こうした髪すましの為の使用が貴人の日常生活に普及していた可能性を指摘できようかと思う。いずれにしても、火桶を薫物を焚くのに用いるというのは、貴人の為の豪華で贅沢な行為であり、また一方で彼らの贅沢な日常生活の一部として存在していたことが、ここに確認できようかと思う。明石の上が初音巻で見せた侍従享受のあり方は、いにしえの物語に於ける貴人の周辺で行われていたそれと通じるものであって、また、本物語で火桶をこのように用いた例は、この他には確認することができない。それだけに、尊く古風、かつ豪華な行いであるとの印象を、光源氏に与えたに違いないのである。さて、そうした形で享受される侍従という薫物は、明石の上の他に光源氏と紫の上によっても調合されている。梅枝巻に次のような場面が見られる。

大臣は、寝殿に離れおはしまして、承和の御いましめの二つの方を、いかでか御耳には伝へたまひけむ、心にしめて合はせたまふ。上は、東の中の放出に、御しつらひとに深うしなさせたまひて、八条の式部卿の御方を伝へて、かたみにいどみ合はせたまふほど、いみじう秘したまへば、「匂ひの深さ浅さも勝負の定めあるべし」と、大臣のたまふ。(中略)侍従は、大臣の御、すぐれてなまめかしうなつかしき香なりと定めたまふ。

(梅枝巻二五四、八頁)
「承和の御いましめの二つの方」及び「八条の式部卿の御方」が両者ともに黒方、並びに

右記抜粹部に見た侍従の調合法を指すものであることは、『河海抄』、『花鳥余情』による注釈以降、諸氏により支持されてきたところである。まずは左記に両古注の见解を確認してみたい。

合香秘方烏方

(中略)

拾遺方

沈大四両 丁字大二両 甲香大一両 甘松一両 熟鬱金小一両一説入麝香一説用黄鬱

金 占唐一分

蜜和研搗三千杵炮甲香以和蜜塗此令黒黄不得過黒此兩種方不伝男耳是承和仰事也延喜六年二月三日故典侍滋野直子朝臣献方也

(『河海抄』卷十二、四四〇、一頁)

本康親王一品式部卿 号八条宮 仁明天皇第七子 母從四位下紀種子延喜元年薨高名薫物合也

黒方

(中略)

又侍従

沈四両 丁字二両 甲一両 麝二分 薫陸二分 甘松二分 件二方故八条宮方云々

(『河海抄』卷十二、四四一頁)

八条式部卿本康親王は仁明天皇の第五子母は從四位上滋野温子參議貞主女也 源氏の君のあはせ給ほうとむらさきのうへのほうとともにしう黒方也 いつれも承和の御いましめの方なれはかはるへきやうあるへからす たゝしみなもとはおなし説なれと

ものちのちにちとつゝその人の意巧によりて加減する事あるによりて次第にかはる事のある物也（以下略）

（『花鳥余情』卷一八、二一四頁）

『河海抄』の記す仁明帝の「鳥方」と「拾遺方」を総称した「承和の御いましめの二つの方」、本康親王の「黒方」と「侍従」を総称した「八条の式部卿の御方」を、『花鳥余情』は仁明帝から本康親王に伝えられるという相関関係を持つ調合法であるとしている。光源氏が何らかの方法により知り、紫の上が正統に伝えて調合した、とされる侍従の方が、これら帝と親王にゆかりの高貴で特別な調合法の一つであることは文面にあからさまに記されているのであるから、作者がその高貴な方としての一面を強調せんとしていることは明白である。また、薫物比べに出展されたこれら侍従の中で、判者である螢兵部卿宮は、光源氏の調合した物を、「すぐれてなまめかしうなつかしき香なり」と評し、最も優れた侍従の香として判定している。六条院の薫物比べに於いて最上の侍従に対し、卓越して優艶、かつ心引かれる香である、とするこの評言には、単に光源氏の侍従の素晴らしさを讃歎するのみならず、侍従という薫物の香はこうあるべきなのだ、という理想が示されていると解することができよう。侍従は深い歴史の中で伝えられてきた調合法であつて、皇室にゆかりの調合方も存在し、かつ光源氏の方は薫物文化に於いて始原的存在の仁明天皇にゆかりの方であり、その薫香の質は、侍従という薫物の香として理想的に優れたものとして描かれているのである。

立ち返つて、初音巻での明石の上の侍従は、梅枝巻の侍従に対し、その香の質、薫物としての格といった性質は、どのようなものと考えられるであろうか。彼女の侍従には、ま

ず光源氏や紫の上の場合に強調して附されていた出所のなにがしかが記されていない。この履歴の未詳を即、なぜならば彼女の侍従のゆかりが光源氏や紫の上のそれに比べて貧しいものだからである、と結論付けるのははなはだ貧相な発想の展開である。さきに紹介した石田氏の論にも見えたように、明石の上は薫物に關しても皇統の文化の伝承を受けた可能性のある人である。その彼女が正月初子の日、その年初めて主である光源氏を自室に迎え入れるのである。やんごとない際の人に劣るまじき趣味人として、女として、彼女の知り得た中であつておきの薫香を焚きしめないでおれないはずはなからう。梅枝巻で彼女が調査した百歩の方には、光源氏や紫の上の調合法に對してそうであつたように、皇室のゆかりを示す概説が次のように為されている。

冬の御方にも、時くによれる匂ひの定まれるに消たれむもあいなしとおぼして、薫衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠朝臣の、ことに選びつかうまつれりし百歩の方など思ひ得て、世に似ずなまめかしさを取り集めたる心おきてすぐれたりと、いづれをも無徳ならず定めたまふを、

(梅枝巻、二五九頁)

「朱雀院」ゆかりの調合法を知る人のおきの方。その推し量られる尊いゆかりを、作者はここでは梅枝巻とは違う方法で作中に示そうとしているのではなからうか。即ち、ある薫物にゆかりの帝なら帝その人の御名を明示するのではなく、それが匂う空間に於ける裝飾の有様、その薫香の焚き漂わせ方、及び混合すべく同一空間に放つ香によつてである。さきに確認したとおり、明石の上の部屋の内装には唐風の印象が施されている。また、火桶を用いた薫物享受は本物語から見ていにしえの貴人達によつて為されたが、明

石の上はその尊くも古風、かつ豪華な方法を自ら実践し、侍従享受を試みているのである。明石の上の侍従が、こうした唐風の意匠が鏤められた室内環境のもと、高貴で豪華な方法で享受されるに相応しい格、質を誇るものであろうことは想像に難くない。

三 明石の上の「えひかう」と侍従——その複合の妙が反映する明石の上の性質——

さて、そうしてそこらに染み匂わされた侍従の香には衣被香の香が入り交じり、「いと艶なり」と評される非常に優美、優艶な薫香世界が生成されている。衣被香は、ここより他には未摘花巻にその登場を見るのみの香である。

君は、人の御ほどをおぼせば、されくつがへる今ようのよしばみよりは、こよなう奥ゆかしうとおぼさるゝに、いたうそゝのかされて、ゐざり寄りたまへるけはひ、忍びやかに、えびの香いとなつかしう薫りいでて、おほどかなるを、さればよとおぼす。

(未摘花巻、二六〇、一頁)

さきの考察では、この未摘花の衣被香は、火や熱を用いて匂いを発散する類のものではなく、香木などの材料を細かく搗いて袋等に入れた物を身に携帯し、享受されるところのものであることが確認できた。また、未摘花を主とする零落した常陸宮家の過去の栄華の名残を残す文化としても理解できる香でもあった。この衣被香と同じく未摘花巻で示された常陸宮家の過去の遺産が、彼の姫宮が伝える琴の奏法である。

琴をぞなつかしき語らひ人と思へる。(中略)ほのかに掻き鳴らし給ふ、をかしう聞こゆ。何ばかり深き手ならねど、ものゝ音がらの筋ことなるものなれば、聞きにくゝ

もおぼされず。

(末摘花巻、二四七、八頁)

常陸宮の死後、まるで時が止まったかのように文化物品を守り伝えるといった印象の末摘花の姿勢からは、琴や衣被香といったものが彼女の代で得られた文化ではなく、また所謂今様と呼ばれる当代の流行の在り方にのつとつて享受されているとも考えられない、故宮存命中に同宮家にもたらされたものであることが理解できよう。事実、琴はその奏法を伝える者の少なくなっていることが、光源氏の口から語られている。し、また衣被香は、古風な生活を営む彼の姫君に備わって相応しい匂いとして光源氏に理解されていたのだから、本物語当時の文化に於いてもてはやされる他の種々の薫物とは、歴史の古さと希少さに関し、一線を画していたと考えてしかるべきである。琴と衣被香は、常陸宮や父桐壺帝存命中の、光源氏にとっては古き良き時代の文化の一端として、末摘花巻で理解されているのである。

さて、初音巻の明石の上の住居内に於いては、奇しくも右記の常陸宮家で見られたものと同じ、古き良き時代の文化の一端が揃って確認される。即ち琴と哀衣香である。さきに琴と哀衣香が故常陸宮の時代、もしくはそれ以前に同宮家にもたらされた文化の一端であることを再度確認したが、明石の上にとつても、まず琴の奏法は祖父大臣の時代に延喜の帝から彼女の一族にもたらされたものであるし、哀衣香は、それ自体が本物語現在よりも遡る時代に常陸宮のような皇族により享受された香であることを鑑みれば、明石の上よりも前の時代に生き、なおかつ皇統との文化的、血縁的繋がりを持つ程の栄華を誇った一族

の者が獲得し、また伝えていた調合法に基づくと考えてしかるべきである。明石の上が、常陸宮家の末摘花と同じ香を伝えるのは、彼女の家系が大臣家、中務宮家をその源流にするからこそのであろう。父明石入道が祖とする大臣家が伝承経路となつていると仮定してみよう。薫物の方の伝承が、音楽といった芸能の伝承と平行して行われた史実に於ける先例の存在については、藤河家利昭氏の「八条の式部卿について」に詳しい。八条の式部卿こと本康親王が、仁明天皇から「琴に限らず影響を受けたと考えられるが、殊に薫物については父天皇の意志を存分に体现し、大成させたのであらう。」との氏の説を参考とすれば、「延喜」の帝と称されるところの天皇から直接筆の琴の伝受を授かつた明石一族のある人物との間で、袞衣香の方の伝受も成された可能性が出てくる。また、常陸宮家の例を参考にすれば、その源流は何れとも知れないまでも、唐風を色濃く伝えるかたちで宮家という共通項が存在する母尼君の祖、中務宮家に伝わった可能性も無視できない。何れにしても、明石の上の袞衣香は、琴の奏法ともども、その源流と経路を常陸宮家の末摘花が伝える「えびの香」の場合に匹敵する高貴なところとしているのである。

さて、明石の上の住居内では、以上確認してきたような自家に伝わる侍従と袞衣香の香とが混合され、世にも優艶な薫香世界が生成し、そこに光源氏が迎え入れられる。彼女が伝承者としてこの二方を知り尽くす立場にあつた可能性を鑑みれば、それらが混合されていかなる効果を生み出すことができるかも、おそらくは知り抜いていたはずである。と、なると、この優艶な薫香世界の生成は、自然発生的に、無自覚に生じたと考えるよりは、明石の上によつて計算しつくされた試みであると考えてしかるべきであらう。侍従は火桶

を用いて焚き漂わせられたのであるから、その薫香の伝播する域は広く、また室内の「物事」、物品にも染み匂つてゐることを鑑みれば、空薫物として室内全体に広げられ、また力強く染み匂わされてゐる印象が強い。また、裔衣香の香は匂い袋のようなものを身邊に携帯し、身体の動きに併せて衣裳から発散される匂いであるから、その拡散地域は火桶によるような広いものではなく、またその香が染み匂う力強さも、火や熱を用いたものよりも比較的弱い物であろう事が想像されるが、ここにもそのように、室内の主体の匂いとしての侍従の香に、裔衣香の香が「まがへる」、恐らくは裔衣香の香を衣裳に匂わす明石の上の行動範囲を中心に、室内の一部に紛れ混合するといった、侍従の添え物としての印象を受ける。しかしながらその影響力が決して小さいものでないことは、裔衣香の香が混合することにより、「いとゑんなり」、非常に優艶な薫香世界が実現したという文面からも明らかではないか。裔衣香は、光源氏を迎え入れるに相応しい薫香世界現出の成否を左右する香なのである。

また、この「いとゑんなり」という語句が、明石の上の成した心配りの成果に対する形容であることを鑑みれば、それが、彼女自身の、薫物を用いて優れた環境を生成することのできる才能のあり方に対する評言であると捉えることもできよう。彼女の薫物に対する形容としては、さきに確認した梅枝巻の「百歩の方」に対するそれを思い起こしても、「世に似ずなまめかしさをとりあつめたる」とされており、さきの「いとゑんなり」とも、優艶さを指摘した点で共通した評言であるといえる。明石の上は、優艶な薫香の生成、及び複数の薫香の混合によるそうした優艶な薫香世界を現出せしめる才を備える人として、本物語のなかで理解されていると言えよう。また、そうした彼女の優艶さは、音楽の演奏に

際しても發揮されるところのようである。澤標巻に次のような一文がある。

あはれなりし夕の煙、言ひしことなど、まほならねどその夜の容貌ほの見し、琴の音のなまめきたりしも、すべて御心とまれるさまにのたまひ出づるにも、

(澤標巻、二三頁)

しかしながら、左記に抜粹する本文に見るが如く、彼女という人間と日常相對する際には、光源氏によつてそうした彼女の優艶さが感ぜられることは、以下抜粹する本文諸場面に於いて、松風巻(一三七頁)のほかには見られない。

女、はた、なかく、やむごとなき際の人よりもいたう思ひあがりて、ねたげにもてなしきこえたれば、心くらべにてぞ過ぎける。

(明石巻、二八五頁)

ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。何心もなく、うちとけてゐたりけるを、かうものおぼえぬに、いとわりなくて、(中略)人ざま、いとあてに、そびえて、心はづかしきけはひぞしたる。

(明石巻、二九一頁)

さやかにもまだ見たまはぬ容貌など、いとよしくしう氣高きさまして、めざましうもありけるかなと、見捨てがたく、くちをしうおぼさる。

(明石巻、二九七頁)

忍びやかに調べたるほどいと上衆めきたり。(中略)これはあくまで弾き澄まし、心にくゝねたき音ぞまされる。この御心にだに、はじめてあはれになつかしう、まだ耳なれたまはぬ手など、心やましきほどに弾きさしつゝ、飽かずおぼさるゝに、

こよなうねびまさりにける容貌けはひ、え思ほし捨つまじう

(明石巻、二九九頁)

なかく思ひ乱れて臥したれば、とみにも動かれず。あまり上衆めかしとおぼしたり。人々もかたはらいたがれば、しぶくにゐざり出でて、几帳にはた隠れたるかたはらめ、いみじうなまめいてよしあり。たをやぎたるけはひ、皇女たちといはむにも足りぬべし。

(松風巻、一三五頁)

さすがにみづからのもてなしは、かしこまりおきて、めやすき用意なるを、なほ、人よりは異なりとおぼす。

(松風巻、一三七頁)

うちとけなえばめる姿に、小桂ひきおとして、けぢめ見せたる、いといたし。

(初音巻、一八頁)

ものなどうち言ひたるけはひなど、むべこそはと、めざましう見たまふ。

(野分巻、一三六頁)

かくむつましかるべき御前にも、常にうちとけぬしましたまひて、わりなくものづつみしたるさまなり。

(藤裏葉巻、二九七頁)

さまようけはひ心にくゝもてつけて、なほこそ人にはまさりたれ、と見たまふにつけては、またかうざまにはあらでこそ、ゆゑよしをもゝてなしたまへりしかと、おぼし

(若葉上巻、一一一頁)

くらべらるゝに、

(幻卷、一三八頁)

明石の上が整える薫物の薫香、及びそれらを複數そろえることにより生成せしめる薫香世界のあり方は、彼女の琴の手に同じく、普段の彼女からは推し量られることのできない一面、即ち、女性としての艶っぽさをも含んだ優雅さ、優艶さという魅力を物語るものなのではないだろうか。末摘花が図らずも光源氏の心を捉え、彼に情事へと踏み切らせるつまの一つとなったのは、本巻で明石の上が用いたのと同じ「えびの香」であつた。また、彼女の薫物には、彼女が弾き伝えるゆかり尊い琴の手と同様の、高貴なものとしての印象も打ち出されている。高貴さとなまめかしさは侍従も同様であろう。特に後者の場合、梅枝巻で「すぐれて、なまめかしく」と評されている辺りからも、その優艶な性質が理解できようかと思われる。初音巻の明石の上の侍従と衣被香もまた、梅枝巻での彼女の「百歩の方」がそうであるように、ひとかたならぬ高貴な伝承に基づくものであつて、それゆえにこの上ない優雅さ、優艶さを醸し出すことができるのである。もちろんそこには明石の上自身の才覚や教養といった素養や努力も反映されているのだが。明石の上が伝える血筋や文化の高貴さや雅やかさ、また平素の彼女からは推し量られることの少ない、男を惹きつけるような艶っぽい一面をも、この二種の香りによつて、如実に著されているのである。

^{*} 御火とり召して、いよいよ焚きしめさせたてまつりたまふ。(中略) 小きき火取と
り寄せて、袖に引き入れてしめゐたまへり。

(真木柱巻より)

火取どもあまたして、けぶたきまであふぎ散らせば、さし寄りたまひて、「空に焚
くは、いづくの煙ぞと思ひわかれぬこそよけれ。富士の嶺よりもけにくゆり満ち出
でたるは、本意なきわざなり。」

(鈴虫巻より)

^{*} 藤河家利昭氏「梅枝の巻の薰物合わせと仁明帝」(『広島女学院大学大学院言語文化論叢』
一九九九年三月)に論有り

^{*} 琴なむなほわづらはしく、手触れにくきものはありける。(中略)うるさきままに、
いまはをさをさ伝ふる人なしとか。いとくちをしきことにこそあれ。

(若菜下巻より)

^{*} 右記注1参照

(64)

第三節 朝顔前斎院の梅花について

梅枝巻、薰物比べの場面には、二種の梅花が登場すると言われている。第一に朝顔前斎院により調査され、白瑠璃しろるりの壺に入れて六条院の光源氏のもとに届けられた薰物、そして第二には、紫の上が黒方、侍従に加え、合わせた梅花である。第二の梅花は本文に「梅花」の名が明記されているが、第一の場合はただそれが入れた容器の様や、ともに届けられた消息文の装飾を鑑み、本物語成立の後、諸氏により、この薰物が梅花であろうとの観測がなされ、今日に至っている。また、紫の上の梅花は兵部卿宮により評価され、その薫香のいかなるものかは本文に明るいことに対し、朝顔前斎院のそれに関しては、薰物比べの場に於いて各薰物の薫香の優劣が比較検討されるにあたり、実際に焚かれたことは想像されるものの、その薫香の実際は本文にて語られるところではない。本稿は、そうした朝顔前斎院の梅花がいかなる薰物であったのか、その知られざる薫香の特徴や性格についての類推を、梅枝巻に同じく登場する紫の上の梅花との比較を中心に行い、朝顔前斎院がこの薫香に託した思いや、その香が反映するこの前斎院の物語に於けるあり方について、類推を加えて行くものである。

一 朝顔前斎院の梅花とその裝飾 — 白梅か紅梅か —

梅枝巻、六条院に於ける光源氏主催の薰物比べに際し、他の人々のそれにさがけて彼のもとに届けられたのは、朝顔^{あさがのぜんさいいん}前斎院からの消息、及び彼女が調合した二種の薰物であった。

花をめですゝおはするほどに、前斎院よりとて、散り過ぎたる梅の枝につけたる御文持て参れり。(中略) 沈の筈に、瑠璃の坏二つすゑて、大きにまろがしつゝ入れ給へり。心葉、紺瑠璃には五葉の枝、白きには梅をゑりて、同じくひき結びたる糸のさも、なよびかになまめかしうぞしたまへる。(中略) 斎院の御黒方、さいへども、心にくゝしづかなる匂ひことなり。

(梅枝巻三五五、六、八頁)

朝顔前斎院が六条院に送ってきたのは、「散り過ぎたる」、散りかかつてわずかに花を枝に残す梅に付けた消息文、及び源氏の要請に応じた二種の薰香、一つは紺瑠璃の坏に松の枝の心葉を付け、あと一つは白瑠璃の坏に何らかの形で白梅を装えたものを容器として用い、沈木で作った箱に入れられたものである。さて、ここに見える白瑠璃の壺の裝飾の有様に関しては、数種の説が存在し、今日に至って未だその解決を見ることのない問題点とされているようである。以下、まずは諸説を確認の為抜粋し紹介する。

一、「ちんのはこるりのつきふたつすへておほきにまろかしつゝいれ給へり心葉こんるりには五葉の枝しろきにはむめをゑりておなしくひきむすひたるいとのおさまもなよひかに」…

文よりはしめて草木の枝に物を付るは皆其色につくる事也これも紺瑠璃器をは松の枝につけ白瑠璃器をは白梅の枝につけたる也梅をえりてとは白うすやうなとにて梅の花を雕或は同色の糸にて結たる造花歟云々

一説云梅の花のある比なれば造花に付へからず紅白の花の中に白梅を撰て「真本えりて」つけたる云々

或説云齋院の献せらるゝ薰物兩種と見えたり黒方をは紺瑠璃かはらけの土器に入て松に付梅花をは白瑠璃の（土）器に入て梅の枝につけられたる歟云々

（『河海抄』卷一二、四四一頁）

二、「心葉こんるりには五ようのえたしろきにはむめをえりておなしくひきむすひたるいとのさまも」…

西宮抄菊花宴御膳具心葉藤花閑組云々 今案心葉の松も梅も打枝のやうにかねてゑりたる物也

（『花鳥余情』卷一八、二一七頁）

三、「心ばこんるりには五えうの枝白きには梅をえりておなしく引むすひたるいとのさまもなよひかになまめかしうそし給へる」…

（河海抄、花鳥余情を引用した後）必 箱のなかにうち枝のやうにつくり糸にかけたる也

（『岷江入楚』卷三二、二五五頁）

四、「白きには梅を彫りて」…

白瑠璃。これには梅花香を入れてある。「選びて」とするよみかたもあるが従えまい。

現代語訳…「白い壺には梅を彫刻したもので、」

「同じく引き結びたる糸のさまも」…

現代語訳…「同じように引き結んである飾り糸の様子も」

(日本古典文学全集『源氏物語』三卷、三九七頁)

五、「こむ瑠璃^{マツ}のには、五葉の枝、しろきには、梅を彫^彫りて、」…

青磁の香壺(坏)には、五葉の松の枝を、白磁の香壺には、梅の花を彫刻して。「梅をゑりて云々」の「ゑりて」は彫刻したのである。「え(選)りて」ではない。

(日本古典文学大系『源氏物語』三卷、一六一頁)

六、「白きには梅をえりて」…

白瑠璃。これは白梅。梅花香を入れた。

現代語訳…「白い壺には白梅を彫^彫つて」

解説…「白瑠璃の壺には梅の花の心葉が裝飾につけられ」

(『源氏物語評釈』第六卷、三一五、六頁)

七、「白きには梅を選りて」…

白い瑠璃の坏には、白梅の心葉を選んで。こちらは梅花であろう。

「同じうひき結びたる糸のさまも」…

附記…「同じように心葉を結び付けてある糸の結び方も」

(新潮日本古典集成『源氏物語』四卷、二五五、六頁)

八、「白きには梅をえりて」..

白瑠璃の坏。梅花（薰物の名）を入れた。古来、「彫（ゑ）りて」、「選りて」両説あり。「彫りて」は、彫金の心葉をいう。

（新日本古典文学大系『源氏物語』三卷、一五四頁）

新日本古典文学大系による総括をはじめとし、朝顔前斎院から届けられた白瑠璃の坏に対する白梅の装飾には諸説見られる。まずさきの本文「選りて」の解釈が、『河海抄』以来「彫（ゑ）りて」、「選りて」の二説に分かれている。前者の場合「白き梅」は彫金された心葉、又は坏に対する彫刻として、後者の場合であれば生花、又は心葉と、解釈は更に分化される。このように複雑さを呈し未だ解決を見ることのない問題点なのであるが、諸註、この装飾に白梅が関わることに關しては、その言及が明確に為されていない『花鳥余情』や日本古典文学大系、日本古典文学全集を除き、認知しているようである。対して、『源氏物語絵巻』等、本物語の絵画化に於ける本場面の視覚的享受にその解釈を尋ねてみると、現存する彩色絵巻の殆どがこの装飾を紅梅の枝の挿されたものとして描いていることが分かる。以下に幾つかの所謂「源氏絵」に於ける「白き梅をゑりて」とされる装飾の有様を概述し確認する。

一、『源氏物語画帖』（住吉如慶筆）.. 白い壺に紅梅の枝を挿す

二、『源氏物語色紙貼付屏風』（伝土佐光則筆）.. 黒い壺に紅梅の枝を挿す

三、『源氏物語図屏風』（江戸時代前期）.. 白い壺。消息文に満開の紅梅の枝を添える

四、『源氏物語画帖』（土佐光則筆）.. 白い壺に紅梅を挿す

（以上『源氏物語・豪華「源氏絵」の世界』、『絵で読む古典シリーズ 源氏物語』、『特

別展 源氏物語の世界・王朝文化への憧憬・『参考による』

このように、源氏絵の世界に於いては、さきの諸註の場合と異なり、本場面に於ける「梅」は紅梅として描かれているものを数えることができる。しかしながら、絵画という方向性で本文享受が行われる際、梅の花の色は必ずしも本文の記述に従うものではないことは、本物語の他の場面を題材とした絵によっても明らかである。例えば、さきにも登場した土佐光則筆『源氏物語画帖』の場合、物語本文に紅梅であることが明記されている早蕨巻の中の君の部屋の御前に咲く梅の花が白梅として描かれており、また住吉具慶（一六三〇〜一七〇五）筆『源氏物語絵巻』早蕨巻の絵は、匂宮の御前に咲く梅の花を、諸註による紅梅との指摘に対し白梅として彩る。このような物語本文及び本文に於ける事実との間の相違を鑑みると、源氏絵に於ける梅の花の色に関しての享受のあり方を本文解釈の参考とすることには躊躇せざるを得ない。

さて、問題の白瑠璃であるが、中に入れられた薰物に関しては、「梅花」という名のそれであろうとの推察が今日に至るまで諸氏により成されてきたことは、さきに確認した諸註の指摘にも明らかである。本稿に於いても梅花との諸説に従うかたちを取るとして、さきの白瑠璃の坏の装飾を思い起こせば、梅花は梅花でもこちらは特に「白梅」の香としての印象を強調して示していると考えることができるかもしれない。この問題点について考察を加えて行くにあたり、白梅が、『源氏物語』に於いて、またその成立当時の人々により、いかなる理解と享受の為された花であるかという点に関して確認しておく必要がある。本物語に於いて白梅が登場すると目されているのは、さきにも紹介した梅枝巻、

及び紅梅巻に於いてである。梅枝巻で朝顔前斎院の贈ってきた薫物を入れた坏の裝飾に白梅が取り入れられていると考えられることはさきに確認した通りであるが、ここでもう一カ所、白梅如何を類推する対象として着目してみたいのは、朝顔前斎院から薫物と併せて届けられた消息文の付けられた「散りすぎたる梅の枝」である。本文には以下の如く登場している。

前斎院よりとて、散り過ぎたる梅の枝につけたる御文持て参れり。(中略)

花の香は散りにし枝にとまらねど、

うつらむ袖にあさくしまめや

ほのかなるを御覧じつけて、宮はことぐしう誦じたまふ。

(梅枝巻、二五五、六頁)

殆ど花の散ってしまった梅の枝には、朝顔前斎院の自称する女盛りを過ぎた現在の有様が、控えめな謙遜として投影されているのであろう。対して歌の後半では、自分は十分なことには出来なかったが、出来る限り精一杯のことはした、という控えめな自負の気持ちが見え込められているのかもしれない。そうした思いを歌に書き付けた文字のうつすらとした有様は、それを目にした兵部卿宮をして「ことぐしう誦じたまふ」、ことさらに口に出して朗詠せしめる。それほどまでに彼の宮の心を惹きつける程、彼女の歌は、控えめな中にもなやかな書きぶり、艶な詠みぶりであると解することが出来よう。さて、朝顔前斎院が散りすぎた梅の枝を送り届けてきた頃、その届け先である六条院の光源氏の御前では、次のような情景が展開せられていた。

きさらぎの十日、雨すこし降りて、御前近き紅梅盛りに、色も香も似るものなきほど

に、兵部卿の宮わたりたまへり。

(梅枝巻、二五五頁)

右記に於ける六条院の梅、紅梅の花は、今を盛りに咲き誇っている。対してさきの朝顔前齋院の消息文が付けられていた梅の花は、もはや花もあとわずかを残すばかりである。双方の梅の間にこの相違が生じた理由を類推するにあたり、単に前齋院の創作意欲によって片づけてしまう前に、紅梅と白梅の開花時期について左記に確認してみたい。

八朔紅梅ハ八朔ノ比ヨリ開ク、(中略)畿内ノ寒紅梅ハ西土ニテ浅香山ト云、九月ヨリヒラクハ重ナリ、但九月ニ開クハ狂花ナルベシ、(中略)凡^{おおよそ}他ノ紅梅ハ白梅ニヨクレテサク、此二種ハ白梅ニ先ダチヒラク

(『故事類苑』大和本草十二 花木より)

梅ハ正月ニ花ヲ開クヲ常トス、冬月花ヲ開クモノハ早ザキナリ、漢名早梅梅譜八朔梅冬至梅モ、皆早梅ニシテ多ハ紅色ナリ

(『故事類苑』重修本草綱目啓蒙二十一 五果より)

右記の二種の抜粹部には、一般に白梅は紅梅よりも早咲きであることが各々述べられている。「早梅」「八朔梅」と呼ばれる早咲きの紅梅二種に関しては、前者は唐代に成立したことが知られる『梅譜』^二に掲載されるなどその確認を本物語の成立よりも先とするものの、珍品として理解すべきであろう。対して白梅が紅梅よりその開花を一般に早くするものであるとの一節に関しては、同じ国に自生する植物としての梅の性質の一つとして理解し、遡って本物語成立前後の梅の性質に当てはめて考えることも可能ではなからうか。つまり、ここで筆者が申し述べたいのは、六条院の紅梅が盛りであるのに、朝顔前齋院から

送られて来た梅の花が散り欠けていることの理由が、朝顔前斎院が六条院にも咲く紅梅よりも一般に開花が早く、従つて花の散ることも先としていると考えられる白梅を消息文を付けるのに用い、彼の前斎院が、この白梅の散りかけた有様を、自らが歌の中に詠まんとするところを視覚的、嗅覚的に体现しようとした為であるとは考えられないだろうか、ということである。こう考えることは、さきに確認したその枝に付けられた消息文の薄い書きぶり、及び梅花と思しき薫物を入れた坏への装飾に白梅が採用されたとする諸氏の見解に添えて違和感の感ぜられるものではないと言ふこともできるかもしれない。

また、前斎院の梅の花の白梅如何を論じて行くにあたり、桃園宮に関する註として諸註に引用される、『拾遺和歌集』に於ける紀貫之による次の歌、及びそこに付けられた詞書の存在は暗示的である。まずここに抜粋し紹介する。

もゝそのにすみ侍ける前斎院の御屏風に
貴之集不載之 白妙の妹か衣にむめの花色をもかをもわきそかねつる
 つらゆき

右記によれば、「もゝその」、近年では高橋康夫氏により大宮東に桃園宮が存在したことが明らかにされたが、ここに住むという「前斎院」の「御屏風」に添えて、紀貫之が右記の歌を詠んだ、というのである。所謂屏風歌であれば、さる貴人の依頼により、屏風に描かれた絵に合わせた歌を紀貫之が詠み、そこに書き込んで「前斎院」なる人物の鑑賞に供したと考えることができる。この詞書も含め、史上に幾人か確認出来る「桃園宮」の「前斎院」という存在が、本物語の朝顔前斎院という人物像に投影されている可能性については、河海抄以来の諸註、諸氏による示唆、考察のなされてきたところであり、ごく最近で

は袴田光康氏による詳細な御研究が「『朝顔』巻における「桃園の宮」の再検討―醍醐皇子女の「桃園宮」を通して―」（『国語国文』七七六号、平成十一年四月発行）にて紹介されている。さて、右記の歌の内容であるが、屏風には白妙の衣を身に纏う女性、そしてその側に梅の花が描かれていたのであろう、貫之はそれに似合った歌を、まさしく我が心を絵の中に没入し詠み込んでいたのである。こうした屏風歌作成の方向性に関しては、玉上琢彌氏が「屏風絵と歌と物語と」（『源氏物語評釈 別巻一 源氏物語研究』所収）で示された次の御観測に明らかかと考え、ここに抜粋し紹介する。

わたくしが特に注意したいことは、（中略）歌人は、屏風絵中に描かれている人物の心になって、作歌するということである。屏風絵を見ている者としてよむのではない。

歌人は仮に画中の人となり、画中の景色を眺めながら作歌するのである。

「妹」は女房であろうか、彼女の白い衣裳に梅の花が交わって、その色も香も、花のものが衣裳の袖のものか区別がつかない、と貫之は詠むのである。この「うめの花」が白梅であることは明らかである。

さて、本物語の朝顔前斎院が、叔母の女五宮とともに桃園宮にて生活を営んでいることは、梅枝巻以前に朝顔巻で語られるところである。

長月になりて、桃園の宮にわたりたまひぬるを聞きて、女五の宮のそこにおはすれば、

（朝顔巻、一八九頁）

朝顔前斎院が、梅枝巻の薫物比べに於いて白梅を装飾し、白梅の香に似せて調合したと思しき薫物を送ってきていることは、さきの貫之歌及びそれに対する詞書と、その構成要素を同じくするものであることは明らかである。即ち、貫之歌では桃園に住む前斎院と白梅

とが、屏風絵、屏風歌を通じ関係を持つてゐる事に対し、本物語に於いては、桃園宮に住む朝顔前斎院によつて、白梅を装飾し意識した梅花香が調合せられているのである。現時点で作者紫式部がこの前斎院の屏風、もしくは『拾遺和歌集』の鑑賞により朝顔前斎院と白梅との関係を着想するに至つたとの推論に至らんとすることは、非常に乱暴な行いであると言わざるを得まい。しかしながら、梅枝巻で朝顔前斎院から薫物と併せて送られてきた消息文の付けられた「散りすぎたる梅の枝」、わずかに枝に残つた梅の花の色が、白であると考えられる可能性は、紅梅とする可能性に対し比較的高いと結論付ける一材料に成りうると考えることはできよう。

二 朝顔前斎院が白梅の香白梅の香に託す思い ― 控えめな自信と勇氣 ―

梅花香と同じく送られたもう一方の薫物、後に登場する黒方であろうとの諸説に従うが、これが入れられた容器の装飾に心葉として用いられている松の枝が、消息文を付けるにあつて選択されなかつたことを鑑みると、朝顔前斎院は、松よりも白梅を、松と縁のある黒方よりも白梅を印象づける梅花香を、より意識し、強調して出品していると考えることが出来る。それでは彼女がこうした白梅の装飾により強調せんとしたところは、具体的にはどのようなものだったのであろうか。紅梅巻に次のような場面が見られる。

枝のさま、花房、色も香も世の常ならず。「園ににはへる紅の、色に取られて、香なむ、白き梅には劣れるといふめるを、いとかしこくとり並べても咲きけるかな」とて、

御心とゞめ給ふ花なれば、かひありてもてはやしたまふ。

(紅梅卷、一九一頁)

紅梅大納言から送られた紅梅の花の枝は、その色、香ともに世に有り難く優れたものであった。これを前にした匂宮は、紅梅は色を持たない白梅よりも香の劣るものだと言われるが、この大納言の贈つてきた紅梅は、なんとも巧いこと色も香も取り並べて咲いたことよ、と言つてその素晴らしさに感嘆する。ここでの匂宮の言が、次の古歌になぞらえて成されたものであることは、諸註の指摘にも明らかであるところである。

紅に色をばかへて梅の花香ぞことことに匂はざりける

(『後撰集』春上、凡河内躬恒)

こうした白梅の香の紅梅のそれに対する優位性を示唆する記述は、何もこうした歌や物語の世界にのみ留まるわけではない。筆者はまず、宋の薰物指南書『陳氏香譜』の梅、及び紅白梅に関する姿勢について、次のようにまとめてみた。

『陳氏香譜』に見る「梅」の語を名称に含む香方、うち紅白梅をその材料に含む香方・「梅」の語を名称に含む香方

壽養公主梅花香、李王帳中梅花香、梅花香（五種）、梅英香、梅蘂香又名一枝香、韓魏公濃梅香又名返魂梅、嵩州副官李元老笑梅香、笑梅香（四種）、肖梅香、勝梅香、鄙梅香、梅林香、浹梅香、黃亞夫野梅香、江梅香（二種）、蠟梅香、梅蕊香、御愛梅花衣香、梅花衣香、梅萼衣香、濃梅衣香、薰衣梅花香、梅真香

(以上三十一種)

・ 上記中、「白梅」を材料に含む方

壽養公主梅花香（白梅一百枚）、梅花香（五番目の方、白梅末二錢）、梅英香（白梅末三錢）、笑梅香（二番目の方、白梅肉各一両）、御愛梅花衣香（白梅霜坏碎羅淨紵）、梅真香（白梅末各半量）

（以上六種）

・ 同じく、「紅梅」を材料に含む方

無し

・ 「梅」を名称に持たないもので「白梅」を材料に含む香方

笑蘭香（白梅肉各一両）、藍成叔知府韻勝香（白梅肉焙乾紵）、蓮蕊衣香（白梅肉各一分）、薰衣笑蘭香（白梅肉）

（以上四種）

『陳氏香譜』に於いて、「梅」にちなんだ薰物は三十一種掲載され、うち「白梅」を材料に含むのは六種、対して「紅梅」は香材として扱われていないことが分かる。また「白梅」は、「梅」にちなんだ薰物以外でも四種に香材として用いられている。しかしながら「白梅」は、当時の宋に於いては所謂梅干しの意としても理解されていたと思しき語であり、右記本文の「白梅肉」といった表現を鑑みるに、これが梅干しとしての「白梅」の果肉部分をさすものである可能性はある。しかしながら、「肉」の語の付けられた「白梅」を差し引いても、紅梅との差は大きく開いている。白梅が香材として用いられ、紅梅が全くその用途に於いて顧みられたところではなかったことを示す同書の記述は、白梅が紅梅よりも香の優れたものである、という認知が宋に於いて成されていたことを示唆するものである。

ると言えよう。

また、時代は下るが、『大和本草』等の我が国に於いて編集された医薬関係書に於いては、次の如き記述を見ることが出来る。

(梅は) 日本ニモ其品数不少、白キ単葉ノ香アルヲ第一ノ好品トス、

(故事類苑『大和本草』十二 花木 抜粹部より)

数ある種類の中で、単葉の白梅で香があるものを最も優れた梅の花とする、というのである。白に対する嗜好の強さもあるのかもしれない。また時代も『源氏物語』当時からは数百年を経た江戸時代の編纂であるが、紅梅を含む他の種類よりも香の優れた白梅が我が国に実在したことを示唆する一資料であるとは言えよう。勾宮の言う、白梅の香の紅梅のそれに対し優れるという性質が、凡河内躬恒による古歌を響かせただけの、机上の空論というわけではなく、梅という植物の性質に於いて相対的な特徴の一つである、との認知が『源氏物語』成立当時の人々の間で為されていた可能性は存在するのである。と、なると、梅枝巻に於いて朝顔前斎院の梅花香が白梅の印象を含有するものであると考えた場合、その香は一般の紅梅のそれよりも高く優れて匂い立つ白梅のそれを目指して調合せられ、六条院に届けられたと理解することが出来るかもしれない。しかしながら、六条院の紅梅もまた、紅梅巻にてそうであつたように、紅梅でありながら香もこの上なく優れたものとして、次の如く描かれている。

きさらぎの十日、雨すこし降りて、御前近き紅梅盛りに、色も香も似るものなきほどに、兵部卿の宮わたりたまへり。

右記を含有する本物語の紅梅に關して、三田村雅子氏は「梅花の美」に於いて、紫の上の梅花香との關係について次のように考察されている。

咲きこぼれる紅梅の精粹を抽出したような梅花香の香と、紅色の鮮やかさがともに紫の上の資質を象徴し思い起こさせるものとなるのである。一般には、紅梅は色こそ鮮やかであつても、薫りにかけては白梅に見劣りすると言われていた（中略）が、薫りにおいてもひけをとらない色も香も兼具した稀有の紅梅は、薫香においてひけをとらなかつた紫の上のイメージを負う花となる。

（前出同稿より）

氏は右記に於いて、紫の上の梅花香は本物語に於ける紅梅の、稀有に優れた香を體現したものである、と指摘する。紅梅の香が白梅のそれに対し、一般に劣るものであるとの事実に対する認知が当時成されていた可能性の存在することは、さきに本稿に於いても確認したところであるが、薫物比べに於いて出品せられた紫の上の梅花に対する筆者の形容、及び兵部卿宮により同薫香へ成された次の評言には、氏が指摘される紅梅の香と紫の上の梅花香の薫香との縁、特に六条院に今この時咲き匂う紅梅との相性の良さを読みとることが出来る。

対の上の御は、三種あるなかに、梅花はなやかに今めかしう、すこしはやき心しらひを添へて、めづらしき薫り加はれり。「このごろの風にたぐへむには、さらにこれにまさる匂ひあらじ」とめでたまふ。

（梅枝巻、二五八頁）

六条院の御前を背景に行われる薫物比べに於いて、そこに吹く風は「このごろの風」、どの宿にも相対的に訪れる春風としてのみ考えるよりは、特にここ六条院の御前に於いては、三田村氏の言を拝借すれば「稀有に」優れる紅梅の香を乗せて吹く春風である、と理解するべきかもしれない。そうした「稀有に」優れた紅梅の香を背景に行われた薫物比べにおいて、そこに吹く風にたぐえて最も相応しいと感ぜられたのが、紫の上の梅花香であったのである。自然の、然し紅梅にしては珍しく優れて匂う六条院の紅梅の香と、紫の上の梅花香の相性の良さは、翻って紫の上自身が目指した薫香が、六条院の御前の紅梅の香であったとの解釈をも可能とするかもしれない。

薫物比べが行われた春という季節の到来により実現した紅梅の開花、及び六条院の紅梅が一般のそれよりも優れて匂い立つものであるとの創作的事実という恩恵に最も浴すことができたのは、紫の上の梅花香であったと言えよう。彼女の梅花香の華やかさは、六条院に盛りの紅梅の華やかさに添えて違和感を感じさせないもの、六条院の紅梅の香との相性の良さが人工的に実現せられた薫香であったために、兵部卿宮の心を動かしたのである。こうした自然界の紅梅の香と人工的な梅花香の薫香との相性の良さを、偶然実現されたものであると考えるよりは、薫物製作が創作活動であることを鑑みれば、創作に於いて為されてしかるべき工夫として数え、彼女により意図的に行われ、狙われていた結果であったと考えるほうが、たとえば巻冒頭で彼女が見せた源氏に対する競争心に矛盾しない。今回の薫物比べのための薫物調合に於いて、紫の上は巻冒頭から無欲で天真爛漫な人間ではなく、俗な言い方をすれば、計画的な知能犯として描かれているのである。薫物比べがここ

六条院にて行われることは、光源氏が主催していることから暗黙の了解として紫の上の計算に入れられていたはずである。薫物比べ開催の頃には、時節を得た紅梅が盛りに花開くはずである。その香を乗せた春風を背景にして最も相性の良い薫香とは何であろうか。この問題に対する彼女の答えが的を射たものであったことは、さきの兵部卿宮の評言にも明らかであろう。紫の上は、自身の調合した梅花香が、春の六条院の御前に薫って最も相応しく、ひいては春という時節に吹く風にたぐえて最も相応しいとまで評価されることを願い、それが実現せられるという成功を、彼女自身の才覚を主体的に発揮することにより、収めることができたのである。

そうなると、朝顔前斎院の梅花香は、六条院の御前の紅梅、及び仲春という季節感を背景とするに、紫の上の梅花香ほど相応しくなかった為、兵部卿宮の心を掴むことができず、先を譲ってしまった、と考えることもできる。彼の前斎院が装飾に用いた梅の花は、六条院に華やかに咲くそれと大きく印象を異にするものである。さきに確認したように、前斎院が装えた梅の花が白梅と考えられることに対し、六条院の梅は紅梅の花を咲かせている。また、前斎院が消息文を付けて送ってきた梅の枝が、紅梅よりも開花を早くする白梅のそれであったことを、創作的表現の一端として利用した結果、盛りを過ぎた彼女自身を思わせる、わずかに花を残す有様であることに対し、六条院の紅梅は、今まさに盛りに咲き匂うばかりである。朝顔前斎院から送られてきた盛りを過ぎた白梅の枝は、彼女の梅花香がいかに高く焚き匂うことができようとも、その印象に晩春の趣を添えてしまい、六条院における仲春の紅梅の香とは相まみえない印象を、その香を聞く者に与えたはずである。ま

た、彼女の薫物が白梅の香を想定したものであったことも、視覚的に御前の紅梅にひけをとり、ひいては紫の上の梅花香に視覚的な印象に於いて一步先を譲る結果となったはずである。光源氏の周辺で紅梅が「偏重」されている、と述べられたのは三田村雅子氏であった。こうした紅梅優位の六条院にあつて、朝顔前齋院が白梅を意識した梅花香を送つてくることは、彼の前齋院が無意識に、自身の嗜好のみを背景として為した試みの結果と考へるよりは、紫の上がそうであつたと考えられるように、彼女もまた、六条院の紅梅「偏重」と、そうした白梅には不利な状況を充分理解した上で、紅梅に対し果敢にも挑んだ結果と考へるべきではなからうか。「散りかけの白梅の香は、女としての春を過ぎた私の色香に同じく、衰えたことであります。しかし白梅の香を体現させた私の梅花香は、明石姫君のお袖に高く深く染むことでしよう」——彼女からの消息をこのように解すことが許されれば、そこには彼女の並々ならぬ自信と勇氣が感ぜられる。それは、紅梅に対し香の優れるとされる白梅を施した装飾に対する自信であり、同じく白梅の香を目指した薫香自体に対する自信、そしてこれらによつて導き出された紅梅に相對せんとする勇氣であつたのだらう。事実、彼女による装飾は兵部卿宮をして感嘆せしめるし、またその薫香に關しては、紅梅を凌ぐと言われる白梅の香を想定しているとすれば、紅梅に対し相對的に優位であらうことは、誰の嗅覺にも明らかであつたはずである。しかしながら、ここ六条院に於いてはそうした白梅優位の原則が成り立たない、「稀有な」紅梅が存在したのである。そうしてこの「稀有な」紅梅の香を人工的に体現し、またその開花状況をも思わせる華やかな薫物が、紫の上によつて調合せられた梅花香であつた。ここに朝顔前齋院の誤算がある。しかしながら、紫の上の梅花は、紅梅偏重という特異な性質を備えた六条院にあつてこそ、

評価されることができた、単独で評価されることのできない、相対的に非常にもろい立場の薫香で在るともいえよう。そのことは、少女巻の次の本文からも読み取ることができる。

大臣、「この紅梅の御消息、いとねたげなめり。春の花ざかりに、この御いらへは聞こえたまへ。このこと紅葉を言ひくたさむは、龍田姫の思はむこともあるを、さしゝぞきて、花の蔭に立ち隠れてこそ、強きことは出で来め」

(少女巻、二七八頁)

紫の上という人物の主張は、春という季節に支えられてこそ、秋好中宮のそれに相対し、勝るだけ力をもつことが出来る、というのである。梅枝巻の薫物比べで最も春の恩恵に浴したのは彼女の梅花香であつた。紫の上の魅力というものは、春という季節に最も花開くのであり、逆に言えば、春以外の季節にもその魅力を十分發揮するだけの、普遍的、相対的な力に欠けるのである。対して前斎院の梅花は、六条院に於いてこそ紫の上にひけをとるに甘んじたが、それ自体の性質として、六条院の外部である一般社会に於いては、確固たる格と質を備えた優れた薫香としての評価を受けうるものであると言えよう。朝顔前斎院の梅花は、紫の上のそれがかいま見せる脆さ、はかなさとは対照的に、前斎院自身の確かな社会性を反映するかの如き確固たる格と質を誇る薫香なのである。

『四庫全書』所収

高橋康夫『京都中世都市史研究』(思文閣、昭和五八年)第一章「平安京北辺の地域

的發展」

ふ* 紅梅

嶺之梅小於江左居人採之雜以豆蔻花（以下註略）廣志作豆蓀字枸櫞子朱槿之類（以下の註略）和鹽曝之梅為槿花所染其色可愛今嶺北呼為紅梅是也（以下略）

（四庫全書 史部三四七 地理部 『北戸錄』卷三より）
白梅ハムメボシ、紫蘇ノ葉或ハ牽牛花ヲ入レ、色ヲ赤クスルコトアリ、是ヲ紅梅北戸ト云

（『重修本草綱目啓蒙』二十一 五果より）

ふ* 『講座 源氏物語の世界』第六集（有斐閣、昭和一九八一年）所収、後に「梅花の美——回想の香——」と解題、同氏著『源氏物語 感覚の論理』（有精堂、一九九六年）に所収
ふ* 前出「梅花の美」抜粋部に見える

第二章 『源氏物語』の薫物と浄土

第二章『源氏物語』の薫物と浄土世界」では、物語世界で「極楽」、「仏の御国」と絶賛される、薫香を内包する空間に焦点をあて、『源氏物語』が目指した浄土世界実現の方向性と、薫物、香りととの関係について考察を試みたい。

第一節 賢木卷、藤壺中宮の黒方と「極楽」

第二章第一節では、藤壺中宮が存在する御簾の内側から漂う彼女の黒方が、その内外で名香並びに光源氏の衣裳の匂いと薫り合うことで、なぜ「極楽」という形容が附されるに到ったのかについて、黒方という薫物の仏教的な一面の明確化を中心に論じて行く。

一 御簾の内外に薫り合う薫香と「極楽」の現出

十二月十餘日、藤壺中宮は故院の供養もあわせ御八講を執り行う。その為に中宮による指揮のもと調えられた室内装飾の尊さは、左記の如く語られている。

十二月の十餘日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々に供養ぜさせたまふ御経よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、帙簀の飾りも、世になきさまにとゝのへさせたまへり。さらぬことのきよらだに、世の常ならずおはしませば、ましてことわりなり。仏の御飾り、花机のおほひなどまで、まことの極楽思ひやらる。

御八講の裝飾の有様は、仏教美術の粹を「世になきさまに」「世の常ならず」集め極めた、語り手たる同席者をして、寒氣厳しい氣候のなかにあつても「極樂思ひやる」との感を抱かせる素晴らしきであつたと記されているが、この御八講に於いて、世にありがたき物は、こうした裝飾品に留まらない事が、右記に続く本文にて物語られている。

今日の講師は、心ことに選らせたまへれば、薪こるほどよりうちはじめ、おなじう、いふ言の葉も、いみじう尊し。親王たちも、さまぐの棒持さゝげてめぐりたまふに、大將殿の御用意など、なほ似るものなし。常に、同じ事のやうなれど、見たてまつるたびごとに、めづらしからむをば、いかゞはせん。

(賢木卷、一七一頁)

中宮が本御八講の講師にと当代の優れた僧侶を選び招致したことで、同じ經典の文句も彼らにかかるとその尊さは格別なものとなつて参加者の耳や心に届けられる。夫である故帝の為の御八講を、その一周忌にあたる時期に第一の妻である中宮が執り行うことは、後に本稿でも採り上げてゆくところであるが、史実に多く先例を見ることができ、ここ賢木卷での藤壺中宮による御八講の儀式としての正式さ、正統さというものが推し量られる。こうした本御八講の描写に於いては、これら裝飾品から講師に到るまでの、それら自体に對する讚歎は、同時にこれらを厳選し選出することが出来た藤壺中宮に對する讚歎でもあるとも言えよう。また、参加者たる光源氏の常にも勝る姿形の素晴らしさ、有り難さも、語り手らの目にはこの極樂の如き御八講の裝飾や講師の尊さ、素晴らしさに對し、同列な存在として語られているのである。正式な宮中行事の一である本御八講に於いては、こうした藤壺中宮の才覚、仏教的事象及び光源氏の美しさ、尊さが一同に会す、この世の極樂

浄土の有様が語られている、と見ることもできるかもしれない。

さて、本巻に於いては、このほかにもう一カ所、この世にあたかも極楽浄土が現出したかの如き有様が語られる場面がある。

風はげしう吹きふゞきて、御簾のうちの匂ひ、いとものかき黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。大将の御匂ひさへかをりあひ、めでたく、極楽思ひやらるゝ夜のさまなり。

(賢木巻、一七三頁)

藤壺中宮が出家を果たした御八講の果ての夜の夜、御簾をはさんで対面を果たす中宮と光源氏の座す屋の外では十二月の寒風が激しくふぶいている。こうした寒々とした氣候のなかにあつて、屋内に吹き込む隙間風の冷たさも格別のものであるはずなのだが、その風が御簾の内外に香る各々の薫香を共存に導き、互いに引き立て合わせることに、世にありがたい薫香世界を実現したのが、語り手は風の冷たさを忘れ、ただそこにある薫香に酔い、極楽浄土の有様に例えるほどの賛嘆を加えるのみである。

さて、この「極楽」の構成要素となつた三種の薫香の発生源は、各々どこであると考えられるであろうか。まず第一に語られる薫香は黒方の香である。さきに紹介した本文には、「風はげしう吹きふゞきて、御簾のうちの匂ひ、いともの深き黒方にしみて」との記述が見られる。風が激しく吹くことと、御簾のうちの匂ひの何たるかが連続して語られていることは、この風と薫香との何らかの因果関係を示しているとは言えないだろうか。即ち、風が吹くことにより黒方の香が、少なくとも語り手の嗅覚に迄到達せしめられた、風が元来御簾の内部で染み匂わされて、そこを中心が存在していた黒方の香を、語り手の所まで

運んできた、との解釈が可能となるのである。そうすると、この語り手は風が吹く以前には黒方の香を聞くことのなかった場所、即ち御簾の外部に存在していることになる。となると光源氏はどこからこの黒方の香を聞いているのであろうか。その直接的な解説は、以下の本文に見えるものに留められている。

親王など出でたまひぬるのちにぞ、御前に参りたまへる。

(賢木巻、一七二頁)

「御前」とは、具体的にはどのような位置を指すのであろうか。この問題点に対しては、さきの本文の直前に見える一節により、その解決を見ることができると考え、左記に抜粋し紹介する。

御簾のうちのけはひ、そこらにつどひさぶらふ人の衣の音なひ、しめやかにふるまひなして、うち身じろきつゝ、悲しげさのなぐさめがたげに漏り聞こゆるけしき、ことばりにいみじと聞きたまふ。

(賢木巻、一七三頁)

藤壺中宮の周辺に仕える女房達の身じろぎに従う衣ずれの音、また慰めがたい程に悲しげなさめきといった彼女らの様子は、「御簾のうちのけはひ」、御簾の内側の様子として、光源氏の耳に伝えられている。この記述により、彼の控える「御前」とは、具体的には藤壺中宮はじめその周辺の女房達とは御簾を隔てたその外部であることを理解することができよう。第三に登場する「大将の御匂ひ」は、その発信源を光源氏の所在たる御簾の外部に置いていることとなるのである。

それでは、第二に登場する名香の煙の発生源は何処であると考えられるか。『細流抄』

は次の如く注記している。

みやうかうのけふりこれはみすのうちにみやうかうをたき給にはあらず法事のあるか
たみすの外の事也

名香は、「法事」、仏具や法具であらうか、これらの所在たる御簾の外にて焚かれている
と言うのである。この『細流抄』見解に加え、ここで再度確認しておきたいのは、語り手
が御簾の外部にあるという先の観測、及び同じく語り手が、さきの抜粋部に於いて「名香
の煙もほのかなり」との観察を行っている点である。「ほのか」と称される程におぼろげ
な立ち方をする名香の煙である。御簾の内側に控える人々を視覚的に捉えることができな
いその外部に視点を置いている語り手にとり、内側に名香の煙が立っているか否かを語る
ことが可能であるとは考えにくい。となるとこの名香の煙の所在、及びその発生源が、語
り手や光源氏が視点とし、所在とするところの御簾の外部であると考ええることは、さきの
『細流抄』による注記とあわせ、本文に矛盾しない観測であると言うことができよう。

以上、三種の薫物、薫香の所在に対し、各々確認と類推を加えてみた。黒方は藤壺中宮
の座す御簾の内側、名香の煙は御簾の外部、及び光源氏の匂いと称される薫香は彼の控え
る御簾の外部をその発生源とし、しかしながら折からの風に煽られることで御簾の隔てを
越え、少なくとも語り手の視点たる御簾の外部に於いては共存を実現しているのである。

二 藤壺中宮の黒方 ― 史実と先行作品に見る黒方と比較して ―

それでは、各々の薫香がいかなるものであるのか、その実体についての考察へ移ること
としたい。まず第一に語られるのは黒方の香についてであるが、『原中最秘抄』は賢木巻

の黒方について、次の如く註を加えている。

簾中のそらたき也

(『岷江入楚』卷一〇、六六〇頁記載の同書註抜粹部)

『源氏物語事典』は、この「そらたき」、所謂空薫物について、次のように説明している。

部屋にそれとなくにおわせるための薫きもの。(中略) 当時はたしなみとして、また来客にそなえて、部屋のしつらえの一つとして行われていた。

(上巻、二九〇頁)

空薫物を、ある空間に薫香を充填されることを目的として焚かれる薫物であると解せば、その香は自然その空間を支配する人物の趣味、嗜好や意志というものを反映していたことは大いに考えられる。藤壺中宮は、桐壺帝の後宮に於いて並ぶ者なき寵愛を、彼の帝から受けた女性であった。その階級的身分の高さにも遜色なく、それにより弘徽殿女御ら他の女性達が、桐壺更衣の時のように彼女をおとしめいじめ倒すような行動にでることは決してなかったのである。また、その外見の美しさは、世の人をして「かゝやく日の宮」と呼ばせるほど他に類を見ないものとして描かれているし、ただ美しいだけでなく、その身の貴さも相まって、光源氏をして「け高うはづかしげなるさま」と思わせる程の、こちらが恥ずかしくなるような気高さの具わる女性である。その才覚を顧みても、絵合巻では絵画に対する興味関心や造詣の深さが示され、その書の腕前については、梅枝巻で「弱きところありて、にほひぞすくなし」、弱々しい所があり、匂やかさや余韻のようなものは少ないものの、「いとけしき深うなまめきたる筋はあり」、深みのある艶めいた書きぶりであったと評されるなど、教養広く芸術的才能も豊かな女性であることが分かる。こうした

彼女自身の階級的な身分の高さ、またその外見の美しさや素養、才覚の他に類を見ないことが、ここ賢木巻における、空薫物としての黒方の香の登場、そうしてその薫る有様に反映されている。黒方という薫物自体が持つ、他の薫物のそれに対しての質、品格のいかに高く優れたものであるかについては、今日までに為されてきた以下の如き見解に於いても明らかである。

侍従梅花をかしうかをりたれど、たきものともおぼえず。少しなりともくろほうをもちゐるべきなり。

(群書類従本『薫集類抄』上、六八九頁)

ここで、黒方という香の性格を考えてみる必要があるだろう。すなわち、黒方は単に冬の香であるというだけでなく、多くの秘方があることから窺われるように格が高く、贈物などに使われることも多かったらしい。

(瀬戸宏太氏「源氏物語の薫香―末摘花と紫の上をめぐる―」『國語と國文學』九二年九月、二四頁)
また、『河海抄』、『花鳥余情』は本物語梅枝巻に於いて登場する「承和の御いましめの二つの方」及び「八条式部卿の御方」といった仁明天皇ゆかりとされる秘方が黒方のそれを含有するものであると伝えている。

合香秘方云鳥方(中略)

拾遺方

(「承和の御いましめの二つの方」にあたる本文の註、『河海抄』卷一二、四四〇頁)

本康親王一品式部卿

号八条宮 仁明天皇第七皇子 母從四位下紀種子名虎女延喜元年薨高名薫物合也

黒方(中略)

又侍従

(『河海抄』卷一二、四四一頁)
源氏の君のあはせ給ふほうと紫のうへのほうとともに侍従黒方なりいづれも承和の御
いましめの方なればかはるへきやうあるへからす

(『花鳥余情』卷一八、二一四頁)

藤河家利昭氏は、「梅枝の巻の薰物合わせと仁明帝」において、薰物の調合者としての仁
明天皇の位置について、『原中最秘抄』の記述をもとに以下の考察を加えられている。

『原中最秘抄』によれば、仁明帝は薰物合わせの高名な人物の筆頭に上げられている。

(中略) 仁明帝は、薰物合わせにおいて高名であるとともに、その始原的存在と考え
られていたのであろう。

(『広島女学院大学大学院言語文化論叢』一九九九年三月、一六一頁)

黒方がこうした「高名」かつ「始原的」な薰物の調合者である仁明天皇によつて秘方とし
て伝えられるところに含まれることを鑑みれば、史実に於いて黒方は、その薰物としての
格はもちろん、薰香の質に於いても、他の多くの薰物と一線を画すものとして理解されて
いることは明らかである。このことは、同じく梅枝巻で朝顔前斎院という高貴な女性が薰
物比べに際して黒方を調合し、ただ調合しただけでなくそこに集まった黒方のうちで最も
優れたものとして評価されているという、本物語に於ける設定とも矛盾しない。もちろん、
薰物の香の深さ浅さが聞き比べられるのであるから、薰香の質自体が問題であつたには違
いない。前斎院の黒方は、「さいへども、心にくゝしづやかなる匂ひことなり」(梅枝巻、
二五八頁)と評されている。そうした奥ゆかしさ、しつとりとした感じこそが、黒方とい

う薫香の調合に際して追求されるべき質であつたのかもしれない。さきに確認した賢木巻での藤壺中宮の黒方に対しても、「いとものふかき」、格別にしつとりと奥ゆかしい香であると言られていた。両者とも高貴な宮家の姫君として生まれ、一方は天皇に最も愛される后となり、また一方は前斎院という神々しい立場にあつた人として、彼女らに奥ゆかしさやしつとりとした落ち着きが備わっていることは、本物語にもしばしば示唆されている。藤壺中宮の場合、例えば次に抜粋し紹介する、花宴巻に於ける藤壺中宮評に於いては、彼女の奥ゆかしさが光源氏によつて語られている。

まづかのわたりのありさまの、こよなう奥まりたるはやと、ありがたう思ひくらべられたまふ。

(花宴巻、五五頁)

光源氏は、弘徽殿での右大臣家の娘、後にこれが朧月夜と呼ばれるところの六の君であることを知るのだが、彼女に対し執着を抱きつつ、しかしながら彼女への恋の成就の容易さに、逆に藤壺中宮がいかに奥ゆかしく、近づくことの難しい立場にあるかを改めて思い知らされるのである。こうした源氏を容易に近づけない彼の中宮の奥ゆかしさもまた、黒方の香に対する印象としての「いとものふかき」、格別に奥ゆかしい、という評価に対応すべく響かされ、その薫香としての品格や趣味の高さと相まって、甘さや媚びのない、凜とした印象を与える香として評価されているのではなからうか。このことは、同じく花宴巻に於いて語られる、右大臣家の女房達の薫香や所作に対する一節を、逆説的に参考とすることによつても理解できるところかと考え、まず左記に抜粋する。

袖口など、踏歌のをりおぼえて、ことさらめきもていでたるを、ふさはしからずと、

まづ藤壺わたりおぼし出でらる。「なやましきに、いといたう強ひられて、わびにてはべり。かしこけれど、この御前にこそは、陰にも隠させたまはめ」と、妻戸の御簾を引き着たまへば、「あな、わづらはし。よからぬ人こそ、やむごとなきゆかりはかこちはべるなれ」と言ふけしきを見たまふに、重くしうはあらねど、おしなべての若人どもにはあらず、あてにをかしきけはひしるし。そらだきもの、いとけぶたうくゆりて、衣の音なひ、いとはなやかにふるまひなして、心にくゝ奥まりたるけはひはたちをくれ、今めかしきことを好みたるわたりにて、やむごとなき御方く物みたまふとて、この戸口はしめたまへるなるべし。

(花宴卷、六〇、一頁)

踏歌などの折、宮廷の女性が御簾の棲から袖口を出すといういわば高貴な風俗をまねぶ右大臣家の女性達の不相応な振る舞いに対して少々幻滅を覚えることにより、光源氏は再び藤壺中宮とその周辺の有様に思いを馳せているのである。さきの「こよなう奥まりたる」という印象をここにも採用すれば、藤壺中宮やその周辺の女性達は、右記の如きハレの日の風俗を局での日常にまで持ち込むような事はしない、奥ゆかしい女性達として思い返されているのであり、右大臣家の女房達は、奥ゆかしさと対照的な、派手で自己主張の激しい印象を、源氏に対し与えているのである。また、そこにいる女性の一人に対しては、「重くしうはあらねど」という印象が語られているが、これもさきの藤壺方に対照的な存在の一人に対する評価であることから、源氏が藤壺中宮とその周辺を、「重くしうい女性達であるとして考えていることを読みとることができる。さて、こうした藤壺中宮方の奥ゆかしさ、重々しさは、さきの黒方の香に対し附けられた「いとものふかき」という

評価を「非常に奥ゆかしい」と解した場合、同じ性質であると言うことができよう。藤壺中宮には、黒方の香同様に、奥ゆかしさ、重々しさという一面が見られるのである。

朝顔前斎院の場合も、藤壺中宮に同じく奥ゆかしく、また隙の無い重々しい女性としての一面を持つことが、次に確認する本文に示されていると言えよう。

朝顔の姫君は、いかで人に似じと深うおぼせば、はかなきさまなりし御返りなどもおさく／＼なし。さりとて、人憎く、はしたなくはもてなしたまはぬ御けしきを、君も、なほことなりとおぼしわたる。

(葵巻、六七頁)

姫君は、年ごろ聞こえわたりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、なのめならむにてだにあり、ましてかうしもいかでと、御心とまりけり。いと近くて見えむまではとおぼしよらず。若き人々は、聞きにくきまでめできこえあへり。

(葵巻、七三頁)

世づかぬ御ありさまは、年月に添へても、もの深くのみ引き入りたまひて、え聞こえたまはぬを、見たてまつりなやめり。

(朝顔巻、一九四頁)

今はまして、誰も思ひなかるべき御齡、おぼえにて、はかなき木草につけたる御返りなどのをり過ぐさぬも、軽々しくやとりなさるらむなど、人のもの言ひを憚りたまひつゝ、うちとけたまふべき御けしきもなければ、

(朝顔巻、一九七頁)

藤壺中宮と朝顔前斎院の内面的な特徴には、共に奥ゆかしさ、重々しい隙の無さを確認す

ることができる。この二人の女性は、朝顔巻で光源氏によって次のように評価されている。

（藤壺中宮は）いふかひあり、おもふさまに、はかなきことわざをもしなしたまひしはや。世にまたさばかりのたぐひありなむや。やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたるところの、並びなくものしたまひしを、（中略）前斎院の御心ばへは、またさまことにぞ見ゆる。さうぐしきに、何とはなくとも聞こえあはせ、われも心づかひせらるべきあたり、たゞこの一所や、世に残りたまへらむ

（朝顔巻、二一〇頁）

光源氏は、朝顔前斎院は藤壺中宮とはまた違った特徴を備えた女性だ、としながらも、自分にとっては藤壺中宮亡きあと唯一の、緊張感をもって接すべき女性と評している。藤壺中宮と朝顔前斎院は、光源氏を威圧し、気安く近づけない女性であるという点で共通し、二人がともに同じ黒方という高貴な薫物に携わっている。更に彼女らに共通の内面的な特徴は、黒方という香が本来目指すべきところである、奥ゆかしく凜とした印象とも附合するのである。本物語では仁明天皇、本康親王という史上の人物の導入により黒方という薫香の格のいかに高いものであるかが語られる一方で、藤壺中宮、朝顔前斎院という、本物語上で光源氏が最も敬愛する二人の高貴な女性に携わることによってもまた、その薫香の貴さが示唆され、また本物語に於いて特徴的なのは、その薫香が奥ゆかしく、またしずやかに香り立つものであることが明記されている点であろう。黒方は高貴な人にこそ相応しく、また逆にそれに携わる人物の高貴さを暗示させる格の高い薫物であり、かつその薫香は、奥ゆかしくしずやかなものとして評価され、翻ってその薫香に携わる人物、藤壺中宮と朝顔前斎院の奥ゆかしさ、しずやかさといった性質を物語っているのである。黒方は、

藤壺中宮や前齋院のように高貴かつ奥ゆかしい人物によつて調査され、また用いられて相応しい、という相対的特徴を示す薫物なのである。

さて、賢木巻で黒方が焚かれたのは、出家者たる藤壺中宮の御簾の中に於いてであつた。黒方が、高貴かつ奥ゆかしい一面を持つ藤壺中宮の周辺に焚かれて相応しい薫香であるとの前節での結論を、より彼女に独自の特徴に結び付けて考えることはできるのであるうか。つまりここで問題としたいのは、尼としての藤壺中宮と黒方との関係、黒方と仏教との関係如何である。この問題点について考察を加えるべく、まずは『源氏物語』よりのその成立を先とする『宇津保物語』に於ける黒方享受のあり方を確認したい。左記は『宇津保物語』に於ける黒方登場の場面を抜粋し紹介するものである。

かくて、銀の薫櫛に、白かねの籠作りおほひて、沈を搗き篩ひて、灰に入れて下の思ひに据えて、黒方をまろがして、それに
ひとりのみ思ふ心のくるしきに

けぶりもしるくみえずやあるらん

雲となる物ぞかし

と書きて「兵衛の君、御許に」とてあれば、

(藤原の君巻、一七二頁)

種松が北方、君達三所に、幣調^{ぬき}じて奉れり。銀の透箱四つ、黒方のすみ一透箱、かねの沙^{いさご}子に、銀、黄金を幣にシたる、一透箱、箱の上に歌一、やがて結目に結ヒつけさせたり。

(吹上上巻、三四九頁)

御前を磨き、飾れる事限りなし。笹まさの縦木には紫檀、横木には沈、結び緒にはだむの組して結ひて、黄金の沙敷きて、黒方を土にしたり。銀をして菊を飾れり。うつろへる花などの上下中二紺青、緑青ノ玉を、花の露に置かせり。

(吹上下巻、三六六、七頁)

かくて、暫しあれば、御桶火参る。沈の火桶、銀のほとぎ、沈を火箸にして、黒方を鶴の形にて、銀の箸などして、帝、後の御前に参る。

(菊の宴巻、四四頁)

春宮に候ひ給フ中納言の妹の御もとよりも物一斗ばかり入ル金の甕二に、一には蜜、一には甘葛入れて、黄ばみたる色紙覆ひて荷ひて、二尺ばかりの銀の鯉二、生きたるやうに造りなしたル、紅葉の造り枝に付けたり。紺瑠璃の大きな餌袋三に、銀の錢一餌袋に、黒方をひ乾のやうにしなして、一餌袋、沈を小鳥のやうに造りなして、一餌袋、鳥の毛を剥ぎ集めて、青き薄様一襲づゝ覆ひて結ゆヒたり。

(蔵開上巻、二九六、七頁)

春宮は銀金ノ結び物どもヲ毀こたせ給ひて、外なる竹原にして、下には銀の細キヲ結び餌袋のやうにして、黒方を土にて、沈たけのこの筍たけのこまもなく植エさせ給ひて、節ごとに水銀の露据エさせ給ひて、藤壺に奉らせ給ふ。

(國讓上巻、九三頁)

以上『宇津保物語』に於いてみられる黒方の特徴とはどのようなものであると言えるだろうか。まず個別には、藤原の君巻で黒方は沈を原料の一つとした練香としてであろう、雲の有様を印象づける香炉に入れられて、実忠からあて宮へ届けられる。吹上上巻では君達

の旅中安全を祈願する為の供物として種松の北方が調えたもの一つとして、黒方、ここでは香木を指したものであるうか、その炭が含まれている。吹上下巻では吹上宮に於いて執り行われる宴について語られ、その装飾の有り難い有様が、ここに於いては語られているのである。種松が院の御前を飾らんとして調えた高価で貴重な木材や内装品の中で、黒方は贅沢にも土に見立てられるべく御前に敷かれている。薫物としての黒方の色が、土を思わせる色合いなのであろう。その為に実現した試みであると言える。菊の宴巻では嵯峨院とその後の方に整えられた、鶴をかたどった細工物の原料となつて登場せられている。吹上巻の如く黒方と呼ばれる香木を彫つたものであるとも考えられようが、黒方という名で記された香木は、香について記した様々の書に於いて確認することはできないため、練香としての可能性も否定できない。蔵開上巻は、十月廿日犬宮出産後の九夜の産養の祝宴において、后宮よりあて宮へ届けられた祝いの品々の有様である。黒方は、「ひ乾のやうにしなして」とあり、これもまた右記と同様香木、練香両方の可能性が考えられよう。最後に国譲上巻についてであるが、これは二月下旬、春宮から藤壺に宛てられた消息に添えられた細工物の有様を記したものである。黒方を土に見立てるところは、さきの吹上下巻と同様である。

さて、以上確認してきた本文に明らかであつたように、『宇津保物語』に見える黒方は、六例中一例のみが薫物であることを直接的に示された形で贈答に用いられ、残りの五例は贈答用の細工品や内装用の装飾品の材料として使用されている。黒方がこうした形で土や灰の代替として用いられていること、及びその黒方という名を考慮すれば、この香木、又は薫物自体が黒灰色を帯びていたであろうことが理解できる。『宇津保物語』という作品

中に於いては、黒方を語るとき、その色という視覚的要素がその用途を大きく左右していたのである。

賢木巻、ひいては本物語の黒方という薫物の色合いが黒灰色であるか否かに対する類推は、以下の本物語諸註の記述を通し可能かと考え、まずここに紹介する。

いま黒方といふ字一にてくろきすかたをあらはせる也

(『花鳥余情』卷一八、二一六頁)

(梅枝巻「こんるりには」に対し) 黒方に縁ある色也

(『弄花抄』梅か枝、一五〇頁)

右記両説に於いては、『空津保物語』同様、本物語の黒方に対しても、その外観が黒みを帯びたものであるという認識がなされている。その上でさきに『空津保物語』に関して確認した黒方享受のあり方の一傾向、つまり黒方の外観、名前が持つ「黒」の印象が、この薫物を享受する際の方向性を左右するという一傾向を鑑み、黒方という薫物が出家した藤壺中宮の住まいに於いて焚かれる由縁について考えてみた場合、次のような仮説が浮かんでくる。則ち、黒方は、藤壺中宮の印象として、その格や気品等彼女の相対的な特徴の他、恐らくは彼女が現在身に纏う衣裳の鈍色をも反映することのできる為に、出家した藤壺中宮ふさわしい薫香であるからこそ、ここ賢木巻に現されたのではないだろうか。だとすれば、藤壺中宮の黒方と朝顔前斎院のそれとでは、高貴で奥ゆかしい薫物であるとの共通点を示しながらも、仏教的な性格を示すか否かという違いが見られることになる。賢木巻の本場面は、故桐壺帝の為に藤壺中宮が執り行った御八講の、果ての夜の夜の様子を描いたものであり、また、藤壺中宮が出家を果たした直後の様子が展開されるものでもある。場

面全体が世俗からかけ離れた仏教的に莊嚴かつ重々しい、そして悲しい雰囲氣を呈しているなかに、黒方という薫香が焚かれる。それはその薫物が彼の中宮自身のように高貴さで奥ゆかしい人物にぴったりした印象の香を放つという相対的特徴からだけでなく、その薫物が「黒」という色によって仏教と縁をもつ、ここ賢木巻での藤壺中宮の周辺に於ける仏教的空間に相応しい薫香として理解できるからこそなのである。

三 藤壺中宮の名香

さて、黒方に続き登場するのは名香である。仏の供養を目的として焚かれる名香は、既
に供養の場へとその役割を変えた、出家者としての藤壺中宮の住まいに焚き煙らされて相
応しいものであると言える。名香が仏を供養することを目的に、仏前にて焚き匂わされて
いることは本作に於いても多く見られ、仏教行事に於ける供養を目的とした享受の有様は
鈴虫巻に、仏教行事外での供養を目的に焚かれる例としては若紫巻、及び総角巻にて次の
ように記述されている。

げにいと心ことによしありて、同じ本草をも植ゑなしたまへり。月もなきころなれば、
遣水に篝火ともし、燈籠などにも参りたり。南面いときよげにしつらひたまへり。そ
らだきもの、心にくゝかをり出で、名香の香などに匂ひみちたるに、君の御追風いと
ことなれば、内の人くゝも心づかひすべかめり。

(若紫巻、一九四頁)

夏ごろ、蓮の花の盛りに、入道の姫君の御持仏どもあらはしたまへる、供養ぜさせた
まふ。(中略)名香には、唐の百歩の衣^マ香を焚きたまへり。(中略)闍伽の具は、例

のきはやかに小さくて、青き、白き、紫の蓮をととのへて、荷葉の方を合はせたる名香、蜜を隠しほろけて、焚き匂はしたる、ひとつかをりに匂ひ合ひて、いとなつかし。

(鈴虫巻、三四五、六頁)

御かたはらなる短き几帳を、仏の御方にさし隔てゝ、かりそめに添ひ臥したまへり。名香のいと香ばしく匂ひて、櫛のいとはなやかに薫れるけはひも、人よりはけに仏をも思きこえたまへる御心にて、わづらはしく、墨染の今さらに、をりふし心焦られしたるやうに、あはくしく、思ひそめしに違ふべければ、かゝる忌なからむほどに、この御心にも、さりともすこしたわみたまひなむ、など、せめてのどかに思ひなしたまふ。

(総角巻、二三頁)

右記三例に於ける名香の描写がその薫香に対し為されていることに対し、賢木巻の名香に關して語られるのがその煙の有様であることは特徴的である。「名香のけむりも」との一節が、詠嘆の気持ちを含むものであると理解するならば、もちろん名香の香もその場に薫つたはずであるが、語り手にとっては、そのことよりも煙の有様のほうがより印象的であり、強調すべきところであつたと考えることができよう。また、さきの語句をそれ以前に登場せられてゐる黒方との同格の意を示すものであると解せば、黒方の印象とこの名香のそれとが同種のものであることを、我々読者に示唆せんとする意図を読みとることも可能となる。すなわち、黒方の香の「ものふかさ」、趣深さ、品格の高さ、重厚さといった印象は、名香の煙の「ほのか」さに対しても、その煙を目にした語り手はじめ光源氏ら

そこに座す人々によつて感ぜられたところ、ということになるのである。また、名香を仏事にゆかりの空薫物として解した場合、空薫物のあらまほしき様式としては、鈴虫巻で光源氏自ら次の如く語っている。

火取どもあまたして、けぶたきまであふぎ散らせば、さし寄りたまひて、「空に焚くは、いづくの煙ぞと思ひわかれぬこそよけれ。富士の峰よりもけに、くゆり満ち出でたるは、本意なきわざなり

(鈴虫巻、三四七頁)

右記抜粋部を参考にすれば、名香の煙の「ほのか」な様は、光源氏が空薫物の煙に対して抱くところの理想的な姿に違わぬことは明らかであり、彼が黒方の香にたいするのと同じく好意的な印象を、賢木巻の名香に対し抱いていると考えることは許されようかと思われる。

生活態度が派手で重々しいところが無く、自己主張も強い右大臣方の女房達は、その空薫物の焚き匂わせ方もまた同様の印象を与えるものであった。対して藤壺方は、中宮はじめ女房たちに至るまで、その立ち居振る舞いは奥ゆかしく、心映えや氣質のようなものは媚びへつらいもせず重々しい感じの、源氏にとっては容易に近づき難く、軽々しく扱えない女性達として理解されている。このことは、さきの右大臣方がそうであつたように、そこで焚き匂わされる薫物の薫香、及びその焚かれかたにも同様に見ることのできる性質であつた。すなわち、藤壺中宮や周辺の女房達が座し控える御簾の中から風に煽られ匂つてきた黒方の香は、それ自体彼の中宮に相応しい格調と評価を与えられたものであり、軽々しく扱えない高貴な薫香として、その香を聞く者を威圧したはずである。この香は奥ゆか

しく御簾の中から漂い来て、源氏や語り手の嗅覚を控えめに刺激するのであって、決して甘ったるく彼に媚びへつらうが如く匂い来るのではない。その凜とした上品な香りは、むしろ彼を威圧し寄せ付けない、藤壺中宮自身を思わせるような、近づき難さを印象づけるものなのである。また以上考察に於いては、同じく藤壺中宮の座す部屋の内には漂う名香の煙についても確認してきた。薫物がある空間に焚き匂わせる際、その煙はどこから漂い出ているのか分からない程度にささやかに立ち上げられるのが良いのだ、と言う光源氏の美意識に適合する「ほのか」な煙の様は、さきの黒方に並ぶ趣、品格の高さや重厚さを呈す、控えめで奥ゆかしい煙の立ち上がり方であると理解することができ、ここでもまた、その有様に藤壺中宮の面影を見ることができた。藤壺中宮方で焚かれた二種の薫香は、彼の中宮自身の特性、及びその周辺に醸し出される印象を、いわば嗅覚的に投影していると考えることができる存在なのである。

四 光源氏の衣装の匂い

さて、名香に続き本場面に登場してくる薫香は、「大将の御匂ひ」、光源氏の「匂ひ」とされるものである。御簾の内に焚きしめられ、風に舞い散らされた黒方の香と、御簾の外部の恐らくは仏前に、供養の意味を込めほの立ち煙る名香、更に光源氏の匂いも加わり、屋内に実現せられた薫香の三重奏とも言うべき薫香世界の様は、さながら極楽浄土を思わせる程に優れて素晴らしく、世に有り難いものとして、語り手に理解されているのである。さて、この光源氏の匂いが場面に及ぼす働き云々について考察を加えてゆく前に、この「御匂ひ」の概念について少し確認してみる必要がある。ここ賢木巻での「大将の御匂ひ」は、

古注に於いては特に問題視や注記の為されたところではないようであるが、近現代に成された諸注釈書に於いては以下の如き注記が施されているので、ここに抜粋し紹介しておきたい。

大将（源氏）のお召物にたきしめた薫香まで。

（新日本古典文学大系）

お召し物の

（新潮日本古典集成）

諸注釈書に於いては、この「大将の御匂ひ」を、源氏の衣装に薫きしめられた薫香であるとして理解することが通説とされているようである。通俗的な言い方をすれば、この上なく美しく高貴な初恋の女性のもとを訪問しているのである。しかもそこでは故父帝の供養という、重要かつ公的な行事が行われている。この訪問に先駆けての、光源氏の身支度がいかに力の込められたものであったかは、本稿冒頭で紹介した御八講の場面に於ける以下の如き光源氏の有様の描写からも読みとる事ができよう。

大将殿の御用意など、猶、似るものなし。

こうした訪問のための身支度に、衣裳へ薫香を焚きしめる作業も含まれていることは、ここに今更確認申し上げるまでもないことかもしれないが、真木柱巻では、玉鬘のもとを訪れんとする髭黒大将の為、彼の衣裳に薫香を焚きしめる北の方の姿が、また若菜上巻に於いては、女三宮のもとへ向かわんとする光源氏のために、その衣裳に薫香を焚きしめる紫の上の姿が次のように描かれている。

御火取召して、いよく焚きしめさせたてまつりたまふ。（中略）小さき火取り取り

寄せて、袖に引き入れてしめゐたまへり。

(真木柱巻、二一七頁)

御衣どもなど、いよくたきしめさせたまふものから、うちながめてものしたまふけしき、いみじくらうたげにをかし。

(若菜上巻、五五頁)

さて、このように力のこもった身支度を施してやって来た光源氏の身から漂う薫香である。これを「体臭」などと翻訳してしまうよりは、やはり近現代の諸注の指摘に従い、光源氏の衣裳に焚きしめられた薫香、として解することの方が、物語の強調せんとするところにより従う形をとることが出来ようか、と思われる。

それでは、本場面で光源氏の衣裳に焚きしめられ匂う薫香が為している働きとは、一体どのようなものであると考えられるであろうか。この問題点について考察を加えてゆくにあたり、前に別件で引用したところではあるが、若紫巻に於ける源氏の僧坊来訪場面を、本場面と比較検討すべく、まずは左記に再度抜粋してみたい。

げにいと心ことによしありて、同じ木草をも植ゑなし給へり。月もなきころなれば、遣水に篝火ともし、燈籠などにも参りたり。南面いときよげにしつらひたまへり。そらだきもの、心にくゝかをり出で、名香の香など匂ひみちたるに、君の御追風いとなれば、内の人くも心づかひすべかめり。

(若紫巻、一九四頁)

右記に於ける薫香世界の構成は、ここ賢木巻のそれと非常に類似した物であることがまずその特徴として見受けられよう。まず空薫物、次いで名香、最後に光源氏の身から匂い来

る「追風」が登場し、僧坊の一空間に共存していることが語られている。賢木巻の藤壺中宮住居内に於いては黒方、名香、光源氏の匂いの順で登場せられていたが、第一にあげた黒方が空薫物と考えられていることをここに再度確認すると、若紫、賢木巻両場面の薫香世界を構成する薫香の種類、数及びその登場順が一致することを確認することが出来る。しかしながら、こうした共通性を帯びながらも、両者がその空間内に控える人物達に与える心理的影響、効果は異なっている。まず若紫巻に於いては、こうした薫香の重層に際し、特に「君の追風」、風に乗って漂い来る光源氏の衣裳に染めた薫香によつてであろう、傍に控える人々に、普段と異なる緊張感を抱かせている。それではこの僧坊の日常とは一体どのような物であるのか。このことを確認してゆくにあたり、まずは右記の抜粋部に加えて以下の本文をここに引用し紹介する。

すこし立ち出でつゝ見たしたまへば、高き所にて、こゝかしこ、僧房どもあらはに見おろさるゝ、たゞこのつゞらをりの下に、同じ小柴なれど、うるはしうしわたして、きよげなる屋、廊など續けて、木立いとよしあるは、「何人の住むにか」と問ひたまへば、御供なる人、「これなむなにがし僧都の、この二年籠りはべるかたにはべるなる」「心はづかしき人住むなる所にこそはあなれ。あやしうもあまりやつしけるかな。聞きもこそすれ」などのたまふ。きよげなる童女などあまた出で来て、閑伽たてまつり、花折りなどするもあらはに見ゆ。「かしこに女こそありけれ。僧都は、よもさやうにはすゑたまはじを、いかなる人ならむ」と、口ぐ言ふ。下りてのぞくもあり。をかしげなる女子ども、若き人、童女なむ見ゆる、と言ふ。

若紫の大叔父にあたるこの場面に描かれた僧坊の主たる僧都は、光源氏をして気の置けない人物であると感じさせる程に、高貴な印象を相対する人々に与える人物であり、また世俗を捨てた僧侶にしては、少々艶な暮らしぶりを見せる人物としても描かれているようである。しかしながら、光源氏のように高貴で雅に満ちた風俗を心おきなく享受し、経済的にも豊かな人物が身につける薫香が漂えば、やはりここで云う「いとことなれば」、普段僧坊で聞かれる薫香とは、その格も質も異なつた、優れて素晴らしいものであるとして傍に控える人物達に聞かれることは妥当であると言えよう。

また、右記場面からすこし下つたところでは、紫の上の父、兵部卿宮をして、光源氏の薫香に対し、其れとは知らず讃歎が加えられている。

近う呼び寄せたてまつりたまへるに、かの御移り香の、いみじう艶に染みかへりたまへれば、「をかしの御匂ひや、御衣はいと萎えて」と、心苦しげにおぼいたり。

(若紫卷、二二八頁)

この兵部卿宮は、薫物の名手とされる實在の八条式部卿をモデルとする人物とも考えられているが、そうした人物にして、光源氏が衣裳にしめた薫香を褒め称えている辺り、この匂いのいかに優れたものであるかが推し量られるところであろう。このことは、本物語に於いて他の場面に登場せられた光源氏の匂いに対する以下の如き記述からも、明らかなどころであると言えよう。

ほの見たてまつり給へる月影の御容貌、なほとまれる匂ひなど、若き人々は身にしめて、あやまちもしつべく、めできこゆ。

(賢木卷、一三三頁)

なよゝかにをかしきほどに、えならず匂ひてわたりたまふを見出だしたまふも、いたゞにはあらずかし。

(若菜上巻、五六頁)

藤壺中宮方で焚かれる黒方と名香が、その格、質、様式に至るまで、まさしく最上の薫物であると評することができるよう、そこに共存し薫り合う光源氏の衣裳の匂いもまた、極上のものであると理解することができるのである。

五 薫り合う極上の薫香、その結果としての「極楽」の発現

さて、以上確認してきた藤壺中宮の黒方、及び名香、並びに光源氏の衣装の匂いという、三種の極上の薫香が集結し、互いにその薫香を引き立て合うことで、語り手をいかに感激させ、その有様を絶賛せしめたか、それは次の一文により、本文に明示されている。

極楽思ひやらるゝ世のさまなり。

この世の出来事でありながら、そこにはまさに、この世に有り難い極楽浄土を聞き手に思わせる程に優れて素晴らしい薫香世界が展開せられているのである。また、このことは本稿冒頭で確認したところの、御簾の内外に於ける嗅覚的極楽浄土生成以前の、御八講に於ける極楽浄土の発現に、作品の構成上対応したものであると考えられよう。最上の物が集まって実現した、極楽にも見紛うばかりの素晴らしくも有り難い御八講の、その果ての極乐的雰囲気や曳航する空間のなかで、偶然にも極上の薫香が集結し、またその一方は出家者たる藤壺中宮に相応しい、仏教的な印象を呈ずることも可能な黒方という薫香であったことに依るであろうか、そうした薫香同士が互いの素晴らしさを引き立て合うことで、

再び極樂浄土が藤壺中宮の住居内に於いて発現したのである。

さきに確認した若紫巻に於いては、薫香世界を構成する薫物の種類、及び僧都の僧坊という、供養の場を背景とする点がここ賢木巻の藤壺中宮住居での薫香世界の場合と類似していた。しかしその複合、共存から派生した印象は大きく異なつたのである。前者は源氏の匂いの素晴らしさが僧都の空薫物や名香により引き立てられる形となり、結果、周辺に控える人々をしてその芳しい匂いに心惹かれながらも、同時にその匂いの主に対しての緊張感を増幅させる結果となつた。しかしながら賢木巻に於いては、元來藤壺中宮が光源氏に相對するに遜色ない人物であるどころか、彼を威圧する程の女性であつた事が起因するのである。藤壺中宮の座す御簾の内側で焚かれた黒方や名香は、さきの若紫巻でのように光源氏の匂いに威圧されることはなかつた。ここ御簾の内外に於ける三種の薫香のうち、特にその匂いのあり方に筆が及ぼされている黒方と光源氏の衣裳の匂いの二種の薫香は、一空間に共存し、薫り合い、また互いを引き立て合うに堪える、いずれも遜色無く極上の香を放つ物だったのである。ここ賢木巻における藤壺中宮の黒方は、格、質ともに極上の香を放ち、また仏教的色彩をも帯びたものとして、藤壺中宮という女性の印象を作中に嗅覚的に投影し、果ては名香や光源氏の匂いと薫り合い、極樂浄土を思わせる薫香世界を生成せしめる、一構成要素として、ここに登場せられているのである。

二* 九世紀半ばに執り行われた御八講を例に挙げた場合、その詳細な分析は佐藤道子氏

「法華御八講——成立のことなど——」（『文学』一九八九年五七号、三五〇五二頁）にて為されている。ここでは同氏が同論文にてまとめられた表の一部を引用させて頂き、皇太后による御八講のいかに頻繁であつたかを確認したい。

表 III

西暦	天皇	期日	法華經講説事例
八四七	仁明	承和一一四 七一—一五	峨帝国忌。清涼殿にて一箇日
八四八		〃 一五 七一—一五	右に同じ
八五〇	文徳	嘉祥三 二—二三	実敏等座主任命。清涼伝にて三箇日
〃		嘉祥三	
八五一		仁寿一 三—一〇	明帝追善。良房東都第にて一箇日
〃		〃	
八五四		〃 四 四月	
〃		〃 四 一一月	
八五六		斉衡三 三—二一	
〃		〃 七月	
〃		〃 九月	
八五八		天安二—三	
八五九	清和	貞観一 八—二一	文徳帝周忌。皇太后（順子）雙丘寺にて五箇日
〃		貞観一	
〃		〃 二 四月	
〃		〃 五月 七—二	
八六〇		〃 一〇—二八 閏	
〃		〃 〇—二	
八六一		〃 三 六月	淳和帝追善。淳和太后（正子）院裏にて五（六）箇日
〃		〃 〃	文徳帝追善力。皇太后（順子）東五条宮にて五箇日
八六二		〃 〃	文徳帝追善。太皇太后（順子）五条宮にて四箇日
八六三		〃 四・五	

八六三	八六四	八六六	〃	八七七	八七九	八八一
陽成						
〃	〃	〃	〃	〃	元慶	〃
四・五	一〇月	一―一四	八	九	一―二五	三
五	一―一四				三―二四	五
					二八	五
					一―二六	五
桓武・仁明陵に告文を捧げる。「八講」の表記 仁明帝追善。清和上皇、清和殿にて五箇日 右に同じ 清和帝周忌。皇太后（明子）染殿宮にて五か日						

(四八、九頁より)

※ 『原中最秘抄』には、八条の式部卿を含めた薫物の名手に関し、次の如き記述が見られる。

薫物合高名人数

仁明帝（詞書は略）朱雀院 白河院 八条式部卿 同孫子左大将保忠 四条大納言公任 右大弁宰相公忠 内蔵頭兼房朝臣 大江千里 故皇后宮九条右大臣女 典侍滋野直子朝臣 藏人所小舍人大和常生 寛教大僧都

また、『源氏物語評釈』は次の如く同式部卿について概説する。

仁明天皇の皇子、本康親王。薫物の名手といわれた人。仁明天皇は香で有名な方であり、その調合法がお子様の中で本康親王に受け継がれた。

更に、藤河家利昭氏の「八条の式部卿について」（広島女学院大学『国語国文学誌』第27号）に於いては、次の如き考察結果が残されている。

（八条の式部卿は）殊に薫物については父天皇の意志を存分に体现し、大成させたの

であろう。

ふ 『花鳥余情』 に「八条式部卿は紫上の父式部卿宮になすらへていへり」とある。

第二節 初音巻、紫の上の薫物と「仏の御国」

第二節では、『法華經』序品の一節を場面を重ね、また『宇津保物語』に於ける「仏の御国」登場の方向性と対照することにより、『源氏物語』の浄土世界と人物、薫物との関係がいかなるものであるのかについて論述してゆく。

一 初音巻、南東の町の描写と

『法華經』序品の一節との関係

時節も改まり元旦を迎えた六条院の、そこから見る空は初春にふさわしく晴れ渡っている。垣根の内にある雪は、そうした春めいた日射しを受けて溶けだし、その隙間からのぞく草は若やかに色づき、木の芽も霞がかっている。そうした自然の情景を目前にしていると、おのづから邸内にさぶらう人々の心も春めいて、のんびりとしているように感じられてくる——初音巻、巻頭では、こうした元旦にふさわしい陽気を受けた六条院の垣根の内の、そこに居住する人の心までものだやかにさせる情景を描くことから物語が始まっている。

年立ちかへる朝の空のけしき、名残なく曇らぬうらゝかげさには、数ならぬ垣根のうちだに、雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に、木の芽もうち

けぶり、おのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。まして、いとゞ、玉を敷ける御前は、庭よりはじめ見所多く、磨きましたまへる御方々のありさま、まねびたてむも言の葉たるまじくなむ。

(初音巻、一一頁)

こうした垣根の内の自然環境の様は、まして光源氏の住居の御前は格別なものであるし、庭の造形から室内の装飾品等に至るまで見所は多い。そしてまた、年の改まった事を意識してか、ひととき磨き上げられた紫の上ら六条院の女性達の住居の有様のすばらしさは、筆舌に尽くしがたいものである、という。上記場面を読了したところで、多くの読者は源氏の御前に対しては勿論であろうが、そうした筆舌にも余る六条院の女性達の住居の初春の様が、どのようなすばらしいものであろうかとの想像に、心を遊ばせることであろう。作者はそうした読者の心を一層物語の世界に引き込まんとするが如く、彼女らの住居の克明な描写へと筆を進めてゆくのである。

まず第一に語られるのは紫の上の御前の様子である。少女巻の、源氏三十五歳の八月に六条院が落成した際の記述に拠れば、紫の上の住居は六条院の東南に用意され、また「春の御方」たる彼女の住まいにふさわしく、その御前にはあらゆる種類の春の花の木が植えられた。ことに加え、秋の草木も植え交えるという工夫もなされていた。ために、落成直後の秋にもそれなりの見所はあったはずであろうが、作者が九月の記述として少女巻で筆を及ぼしたのは、盛りを得た梅壺中宮の御前のすばらしさ、そしてそうした季節を身方につけたのであろう、彼女の才覚や魅力のいかに優れていたかについてであつた。

大臣、「この紅葉の御消息、いとねたげなめり。春の花ざかりに、この御いらへは聞

こえたまへ。このころ紅葉を言ひくたさむは、竜田姫の思はんこともあるを、さしゝぞきて、花の陰に立ち隠れてこそ、強きことは出で来め」と聞こえたまふも、いと若やかに尽きせぬ御ありさまの見どころ多かるに、いとゞ思やうなる御住まひにて、聞こえ通はしたまふ。

(初音巻、二七八頁)

ここで紫の上の東南の住居の秋の風情は語られることはなかった。し、秋を染め上げる竜田姫の如き、梅壺中宮から紫の上に贈られた秋を賞賛する消息文に対し、春の花の支えを持たない紫の上は、その返答を春まで見送るという結果を見たのである。初音巻は、少女巻での六条院落成以来、竜田姫たる梅壺女御に盛りの先陣を譲るに甘んじた、いわば春を染め上げる女神、佐保姫とも例えることができる紫の上の、その御前が初めて最も華やぎ、また彼女自身の才覚が発揮できる時節、春を迎えて始まっている。外界と比較し格別春めいた庭内には、その恵まれた天候から梅が開花し、その香を乗せた初春の暖かい風が、御簾のうちの薫香に吹きまがう。紫の上の東南の住居は、春の日射しと暖かい風及び開花する梅を内包する御前と、そうした御前から梅の香を乗せた春風が吹き込んで、薫香の薫かれた御簾の内とが一体となり、視覚的にも嗅覚的にもまさしく「生ける仏の御国」、この世の極樂を思わせる様を呈している、というのである。

春の御殿の御前、とりわきて、梅の香も、御簾のうちの匂ひに吹きまがひて、生ける仏の御国とおぼゆ。

(初音巻、一一頁)

庭の紅梅の香と御簾の内の薫香との香の混合が、右記の如き恵まれた天候とそれによる梅

の開花という自然現象の発現を必要条件としていること、及び御簾の内の薫香が「匂い」としてのみの、特別な創意工夫を感じさせない淡泊な記述に留まっていることを鑑みると、この「御簾の内の匂い」が「梅の香」に対し主体の香であるとの印象は薄く、したがって右記場面では自然現象の産物たる「梅の香」が紫の上の御前に漂う香の主体として描かれている事が考えられる。その場合、ここに見る香の混合の実現は、春めいた気候の到来による梅の開花という自然現象の発現を根底の素材とし、それが恐らくは紫の上によって薫かれた御簾の内の薫香によって、「生ける仏の御国」にふさわしい香としての彩りに染め上げられたと読むことができようかと思われる。後に梅枝巻・薫物競べで紫の上の春に適した薫香を創造する優れた才覚の存在が明示される。ことを鑑みれば、その前段階である初音巻においても紫の上はすでにそうした才を備えており、彼女の薫物調合に際しての創意工夫や自然環境や暦の変化をつぶさに捉える感性を働かせたのかもしれない。紫の上は、梅の香や季節の気候という自然環境を尊重し、それに即した人工の香である薫物を組あわせたことで、「生ける仏の御国」と称することのできる邸内環境の発現を実現することができたのであろう。そうした観測をより明確なものとして提示してゆくために、続く本文の助けを借りるべく読み進めてみることにしたい。

さて、右記の如き香の混合により実現された「生ける仏の御国」、この世に現出した仏国土の如き邸内環境にあつて、作者の視線はその御前から御簾の内へと移り、その場の女主人、紫の上や、そこに仕える女房達へとそそがれてゆく。紫の上その人は、今や源氏の最愛の妻としての不動の地位を六条院において確立しているのであろう、おだやかに元旦の日を過ごしている。

さすがにうちとけて、やすらかに住みなしたまへり。さぶらふ人々も、若やかにすぐれたるを、姫君の御かたに選らせたまひて、すこし大人びたる限り、なか／＼よくしく、装束ありさまよりはじめて、めやすくもてつけて、こゝかしこに群れるつゝ、齒固めの祝ひして、餅鏡をさへ取り寄せて、千歳の蔭にしるき年のうちの祝ひごとくもして、そぼれあへるに、

(初音卷、一一、二頁)

彼女が若く利発な女房達を、彼女の養女であり源氏の長女・明石の姫君に選びとらせ、少々年かさのある女房達のみ身近に残したことに、屋内にはなかなかの落ち着きある雰囲気が醸し出され、自然と正月の装いも、すべて大人のしつとりとした感じの良様にあらえられている。しかしそんな大人の女性たる彼女らも、紫の上の住居に於いて、あちらこちらに集まって、この日ばかりは少々はめをはずしてはしゃぎつつ、正月の祝い事の時を過ごしている。さて、右記場面に至るまでの初音巻構成を大まかに確認してみると、まず本巻冒頭に置いて外界よりも春めいた日射しをうける六条院のまばゆい初春の有様、そうした様子を目前にして春めく人々の存在、及び克明ではないにしろ光源氏の住まいのすばらしいことが伝えられ、続いて紫の上の邸宅の春めいた気候を受け開花した梅の香と御簾の内の薫香との混在、そうしてそこに仕える女性達の、心浮かれるさまが記述されている。

さて、「生ける仏の御国」、この世に現出した浄土と言つて、作者が具体的に心に描いたものは何であつたのだろうか。『源氏物語』成立周辺の時代にあつて、天台浄土教がいかに貴族階級に思想的影響力を及ぼしたかについては、三角洋一氏の詳細な御研究（『源

氏物語と天台浄土教」が近年紹介されたところでもあった。この所謂台密系思想が中心的教義としていたのが『法華経』であったことは、ここに改めて言うまでもなく広く知られるところであろう。しかしそれならば、「生ける仏の御国」と評されるこの場面構成のおもかげとして、『法華経』をとらえることができないだろうか。以下その正否について、左記に引用する『法華経』一節と本場面との対比を中心に、若干の考察を試みてみたい。

文殊師利 導師何故 文殊師利よ、導師は何が故に

眉間白毫 大光普照 眉間の白毫より 大光を普く

照かしたもうや。

雨曼陀羅 曼珠沙華 曼陀羅 曼珠沙華を雨らし

梅檀香風 悦可衆心 梅檀の香風は衆の心を悦可す。

(岩波文庫本『法華経』)

右記抜粋部をさきの五点の初音巻冒頭部の特徴と対比して見た場合、次のような共通点の存在が指摘できようかと思う。まず、右記抜粋部二行目釈尊が眉間の白毫から普く照らした「大光」と本物語本文の「なごりなく曇らぬうらゝかげさ」がともに空から光、日射しという「光線」が、各場において存在することを示すものであること、次にそうした光線を受ける場において『法華経』においては三行目で「曼陀羅華、曼珠沙華」という仏国の華が雨らされることに対し初音巻には「梅」の花が開花していること、またそうした華とともに『法華経』においては四行目で「梅檀の香風」という香木の香りを乗せた風が、対して初音巻にはおそらくは香材を調合した人工の香である薫物をたきしめた「御簾の内の匂い」が存在すること、そして最後に『法華経』では同じく四行目で「梅檀の香風」に「悦

可」する「衆の心」が描かれるのに対し、初音巻には六条院の春のすばらしい様を目にしたのであろう同邸内にさぶらううちに「のびらかにぞ見ゆる」「人の心」、及び「年のうちの祝ひごとくもして、そぼれあへる」東南の住居にさぶらう女房達の姿が描かれる、という構成内容の近似、類似、並びにそうした近似、類似事項が『法華経』一節と同様の記述順序で後出作品である『源氏物語』に見ることの出来ることは、同巻中の今場面が『法華経』右記一節をおもかげとして内包することの可能性を指摘することの許される場面と考えてしかるべきであろう。さきに筆者は、紫の上は、梅の香や季節の気候という自然環境を尊重し、それに即した人工の香である薫物と自らの才を組み合わせんとしたこと、「生ける仏の御国」と称すことのできる邸内環境の発現をを実現することができたのではないか、との観測を残したが、右記の如き『法華経』一節との関連の可能性を考慮に入れた場合もまた、同様の結論を提示することができようかと考える。すなわち、『法華経』一節をおもかげに残す初音巻冒頭場面の紫の上の東南の住居は、「生ける仏の御国」という形容によつてもまた、その初春の情景と、その情景を内包する邸内の荘厳さ、すばらしさというものが、御仏の幸いとも言える春めいた自然環境の到来によつてはじめて可能となった、尊く、この世に有り難いものであることを、『法華経』を下敷きとすることにより示唆しているのではなからうか。

本巻冒頭は、光源氏や紫の上が六条院で初めて迎える新年、初春の様子を物語る場面であつて、特に春の御方、紫の上にとつては、六条院で彼女自身の魅力を最大限に発揮することの許され、また可能な時節を迎えたことになる。そこに「仏の御国」と称される世界が発現するのである。彼女が住む南東の対は、光源氏が彼女の為に春の住居として造営し

た場所であつた。

南の東は、山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもて遊びをわざとは植ゑで、秋の前栽をば、むらくにほのかにまぜたり。

(少女巻、二七四頁)

この六条院の春の町で初めての春を、紫の上が迎えるのである。「仏の御国」の発現は、南東の対の造営の妙と、紫の上がその場で發揮した魅力が最上かつ無比の素晴らしさであることを、物語っているのである。さきに参照した乙女巻本文で、秋を迎えた秋好中宮の御前と彼女の才覚が、その時の六条院に於いて最上のものとして際だっていたことが語られたが、仏国、極楽とまでの賞賛は見られなかった。春という季節は、紫の上が南東の対を、秋に見た西南の町、秋好中宮の住居の有様よりも美しく引き立てることの出来る季節なのである。春を遊ぶ才を備えた紫の上がしつらえたのであろう御簾の内の、おそらくは春という季節にある梅花にふさわしい、またそれと違和感無く混合することのできる薫香という人工的な条件が右記の如き有り難い晴天の到来による梅の開花という、一種神仏の幸いを受けたかの如き自然現象の発現によって、紫式部ら平安の世に生きた人々が『法華經』に見た「仏の御国」が実現されることで、紫の上が住む六条院の南東の対の春の有様の如何に素晴らしいものであるかが、存分に物語られているのである。

二 『源氏物語』の浄土登場の契機としての薫物

— 『宇津保物語』と比較して —

『源氏物語』にその成立を先行する『宇津保物語』に於いても、「仏の御国」という語は以下の如く登場している。

この琴八を一つつ調べて、七日七夜弾くに、琴の響き仏の御国まで聞ゆる時に、仏文殊に宣わく、

(俊蔭卷、四四頁)

さらば我等が思ふ所有る人なれば住み給ふなりけり。天の掟ありて、天の下に琴弾きて族立つべき人になむありける。我その昔いささかなる犯し有りて、ここより西、仏の御国よりは東なる所に下りて、七年ありて、そこに我子七人留まりにき。其の人は、極楽浄土の樂に琴を弾き合せて遊ぶ人になむありける。

(俊蔭卷、四六頁)

『宇津保物語』に於いて、「仏の御国」という語の登場は以上の二カ所を数えるに留まるところであるが、どちらも俊蔭の琴の音が契機となつて物語に登場していることが分かる。この「仏の御国」がいかなる教義を反映したものであるかについては、中村忠行氏による次の御考察に明るいところであり、またその説は今現在も諸氏により支持されているようである。

俊蔭の志向した「仏の御国」が、靈山浄土を指すものであるという点であろう。これは、明らかに、『法華経』を正衣とする天台思想を、反映する物でなければならぬ。

(中村忠行氏「『宇津保物語』の作者の仏教思想―俊蔭漂流譚を中心として―」六四頁)

この部分の特色は、何よりも宗教的色彩が際立つて濃密である点に求められよう。(中

略）説話的側面においては仏本生譚の影響を明瞭に蒙るものであり、教義的には法華一乗の思想を中心とする台密系統のものであることが指摘されている。

（丸山キヨコ氏「うつほ物語における仏教的要素」、『宇津保物語論集』四一七頁）
『宇津保物語』に於ける「仏の御国」という語は、『法華經』を含む台密系の教義を背景とするものであるという。また、さきにも確認したところであるが、この所謂台密的な「仏の御国」は、俊蔭により琴が演奏されることによつてしか物語られることは無い。『宇津保物語』の琴と「仏の御国」、所謂浄土との関係がいかなるものかについては、近年では丸山キヨコ氏によつて次のように明確化されている。

いま当面の問題たる琴についてみても、それが単なる音楽、楽器という以上に、極めて緊密に仏教的なものと結びついていることは、河野多麻氏も注意されたとおりである。（中略）天人の支持に従つて俊蔭は琴の秘曲を承け伝えることになるが、この琴曲の源は、極楽浄土の樂なのである。

（丸山キヨコ氏「うつほ物語における仏教的要素」、『宇津保物語論集』四一八頁）
俊蔭の琴曲は元来浄土世界を源とするものである、という。『宇津保物語』では、その浄土の琴曲が俊蔭によつて演奏されることにより、「仏の御国」という台密的浄土が物語に浮上してくるのである。また、同じく浄土世界を表す語として、「極楽浄土」、「浄土」というものも、『宇津保物語』本文に登場している。

右大将を見て「これは藤英ぞかし。いきながら人の身変る物なりけり。この世にも浄土は有りけり」

「極樂浄土」に關しては、右記俊蔭卷の第二例に於いてのみであり、これも「仏の御国」と同じく琴の音を契機として語られていることが分かる。對して国譲下卷に於ける「浄土」の語は、日本古典文学大系の註によれば、「貧乏書生で名の通つた藤英の素晴らしい出世振に驚嘆した表現」として用いられており、琴の演奏とは關係の無いものとなっている。しかしながら、以上『宇津保物語』に於ける浄土を表す語の登場は、四例中三例が、俊蔭による琴の演奏を契機としてしているのである。

前節で考察してきた『源氏物語』初音卷に於ける「仏の御国」と呼ばれる薫香世界は、『法華經』の一節を下敷きとした浄土的空間である可能性が指摘できるものであった。『源氏物語』初音卷に於ける「仏の御国」もまた、『宇津保物語』の「仏の御国」がそうであると考えられているように、天台思想的な浄土を想定するものである可能性が存在した。對して『宇津保物語』の場合、琴の演奏が浄土たる「仏の御国」の名を物語に引き出す契機として登場しているのであるが、『源氏物語』初音卷の場合は薫香が、「仏の御国」を物語上に現出する要素となつてゐる。このことから、即ち『宇津保物語』に於いては琴による音楽が仏教的なものと結びついてゐたことに対し、『源氏物語』初音卷に於いては、音楽ではなく薫物が、仏教的なものと結び付いて描かれてゐると考えることはできないであらうか。『源氏物語』に於いて浄土を思わせる空間として描かれてゐるのは、さきに採り上げた初音卷の御前の薫香世界、本章第一節で考察した賢木卷での藤壺中宮周辺の薫香世界、加えて次に確認する、賢木卷に於ける藤壺中宮主催の故桐壺帝追善の爲の御八講、並びに蓬生卷に於ける光源氏主催の同御八講での計四例を数えることができる。

十二月十余日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々に供養ぜさせたまふ御

經よりははじめ、玉の軸、羅の表紙、帙簀の飾りも、世になきさまにとゝのへさせたまへり。さらぬことのきよらだに、世の常ならずおはしませば、ましてことわりなし。仏の御飾り、花机のおほひなどまで、まことの極樂思ひやらる。

(賢木卷、一七〇頁)

しかく。権大納言殿の御八講に参りてはべりつるなり。いとかしこう、生ける浄土の飾りに劣らず、いかめしうおもしろきことゝもの限りをなむしたまひつる。

(蓬生卷、六六頁)

初音卷の紫の上の御前、及び賢木卷の藤壺中宮の御簾の周辺に於ける浄土世界のような空間は、薫香をその要素として現出したものであったが、右記二例の場合は、前者は藤壺中宮によって、後者は光源氏によって執り行われた、故桐壺帝供養の爲の御八講に於いて、各々この上なく素晴らしい装飾が施され、「極樂」、「浄土」と評されている。『源氏物語』に於いて有る空間が浄土世界と評されるのは、薫物、或いは仏教的装飾によるのであって、しかも薫物による場合でも、前節に於いて確認したように、賢木卷の藤壺中宮の御簾の周辺に於いては、そこでの薫香世界の構成要素となった黒方と名香の仏教的な性格が、その空間を「極樂」と評させる要因となった可能性が確認できた。『源氏物語』では、初音卷の「仏の御国」を除く全ての場合、仏教的なものとの結びつきが見られるものにより最上の美を実現することによって、浄土が物語に現出しているのである。対して初音卷の「仏の御国」の場合、薫物が元来仏教をその成立の源に置くとは言えども、本文にこの追風の仏教的性格のいかなるかが明示されているわけではなく、またこの場面も初春の六条院の有様が描かれているものであって、御八講の如き仏教行事の有様とは無縁のものである。

しかしながら、この場面は『法華経』の一節を下敷きにするもので、六条院の初春のいかに素晴らしくも有り難いものであるかを描こうとするものであつて、紫の上の居る御簾の内から来る追風は、さきの『法華経』の一節に於いて梅檀の香風と対照的な立場にある。浄土の如き六条院の春にあつて、この追風は、梅檀の香風にも等しい存在なのであり、この初音巻での浄土もまた、さきの傾向に違わず、仏教的なものとの結びつきにより生成されているのである。

『源氏物語』よりもその成立を先とする『宇津保物語』に於いて、浄土世界を物語に引き出した中心的な物事は俊蔭の琴の音であり、浄土を源とする琴曲の演奏であつた。『宇津保物語』の浄土は、主に琴の仏教的なものとの結びつきにより、物語に登場しているのである。対してその後出作品である『源氏物語』に於いては、琴ではなく、薫物と仏教行事に於ける内装が、浄土に例えられる程に優れて素晴らしい空間が物語に現出する要素となつた。そしてその浄土を現出せしめた薫物と内装には、双方に仏教的なものとの結びつきを確認することができるのである。『源氏物語』の作者紫式部は、先行作品である『宇津保物語』とは異なつた方向性を用いることにより、「仏の御国」、「極楽」、「浄土」の名で呼ばれる浄土の現出を、彼女が創り出す物語世界に於いて実現している。薫物は、仏教行事に於ける内装と同様の仏教的性質を持ち、また示すことのできるものとして、『源氏物語』に登場しているのである。

＊その御前にはあらゆる種類の春の花の木が植えられた：

南の東は、山高く、春の花の木、数を尽くして植え、池のさまおもしろくすぐれて、

(少女巻、二七四頁)

＊秋の草木の植込みも交えるという工夫もなされていた：

御前近き前栽、五えう、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅^{つづじ}などやうの春のもてあそびをわざとは植へで、秋の前栽をばむらくほのかにまぜたり。

(少女巻、二七四頁)

＊紫の上の東南の住居の秋の風情は語られることはなかった：

なが月になれば、紅葉むらく色づきて、宮の御前にも言はずおもしろし。風うち吹たる夕暮れに、御箱の蓋に、いろいろの花紅葉をこきまぜて、こなたにたてまつらせ給へり。大きやかなるはらはの、濃き^{あこめ}袂、しおんの織物重ねて、赤朽葉の羅^{うすもの}の汗衫^{かざみ}い^いたう馴れて、廊、渡殿の反橋を渡りてまいる。うるはしき儀式なれど、童のをかしきをなん、えおぼし捨てざりける。さる所にさぶらひ馴れたれば、もてなしありさま外^{ほか}のには似ず、好ましうをかし。御消息には、

心から春まつそのはわがやどの紅葉を風につてにだに見よ

若き人々、御使もてはやすさまどもをかし。御返は、この御箱の蓋に苔敷き、巖などの心ばへして、五えうの枝に、

風に散る紅葉はかろし春の色を岩根の松にかけてこそ見め

この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬつくりごとどもなりけり。とりあへず

思ひ寄り給つるゆへくしさを、おかしく御覧ず。御前なる人くもめであへり。おとゞ、「この紅葉の御消息、いとねたげなめり。春の花盛りに、この御いらへは聞こへ給へ。このこと紅葉を言ひくたさむは、竜田姫の思はんこともあるを、さし退きて、花の陰に立ち隠れてこそ強き言は出で来め」と聞こえ給も、いと若やかに尽きせぬ御ありさまの見どころ多かるに、いとゞ思やうなる御住まひにて、聞こえ通はし給。

(少女卷、二七六、八頁)

⁷⁵⁷たつた姫のおもはむ所：

花中宮をたつた姫に思ひなすらへたる也 聞同

(『岷江入楚』乙女卷より)

^{*}さほびめ：

サオビメ【佐保姫（棹姫）名春をつかさどる女神。『袖中抄』に「佐保山の神より事おこりて、さほ山の霞を詠歌等によせて春を染むる神と云ふか」と説明している。「さほびめのかすみの衣」または「さほびめの衣」と和歌などに詠まれた。季語、春。「さほびめの糸そめかくる青柳をふきなみだりそ春の山かぜ」（詞花・春）「佐保姫の霞の衣たちかさね」（菟玖波・一）「所は佐保の山辺なれば、もし佐保姫さおびめとや申すべき」（謡・佐保山）「霞の衣のすそぬれけり／佐保姫の春たちながらしとをして」（犬筑波）「初春：佐保姫」（毛吹・二）「さほ姫やふかいの面いかならむ」（眩野・二）

(『角川古語大辞典』第二卷より)
 ○春の初めの歌枕、霞たなびく吉野山、鶯、佐保姫翁草、花を見すてて帰る雁。一三(註中略)○佐保姫―『天徳内裏歌合』平兼盛「佐保姫の糸そめかくる青柳をふきな乱りそ春の山風」(『詞花集』にも)、『古今和歌六帖』第五「さほ姫の織りかけさらすうすはたの霞たちきる春の野べかな」など。奈良の東、佐保山の女神で、春を織りなす女神。西、龍田山の女神龍田姫の秋を織りなすのに対する。(以下略)

さほひめ (前略)「頼政集、上ノ十一」「けふぞみるさぎさか山の白つゝじいかでさほひめ染のこしけん」
 (『梁塵秘抄評解』より)

さほ^オひめ (佐保姫) 春を司る女神。此名は奈良京の時より起り、京の東に佐保山あるに因ると云ふ。古来此女神をば春を染むる神とし、霞又花を其服飾になぞらへて佐保姫の衣といふ、岷江入楚に「春は佐保山の神より事起りて佐保山の霞の色によせて春を染る神といひ云々」とあり。(以下略)

364
 たつた姫

河物を染なす事歟七夕は裁縫心歟
 河後みるからに秋にもなるかたつた姫紅葉そむやと山のてるらむ

(『日本百科大辞典』第二卷より)

案之春は佐保山の神より事おこりてさほ山の霞の色によせて春をそむる神といひ秋は竜田山の神より事おこりて紅葉を詠する故に秋をそむる神と云也又共に神の名なり 但春の竜田姫の哥万葉にあり桜哥にわかゆきて七日は過し竜田姫ゆめこの花を風にちらすな秋のさほ姫は不見歟

(『岷江入楚』帚木卷註より)

*の春を染め上げる女神、佐保姫とも例えることができる紫の上：「春の御方」として魅力、才能を発揮する紫の上の姿は、以下本文に顕著かと思われ、ここに抜粋し紹介する。

①中宮の御前に、秋の花を植ゑさせ給へること、常の年よりも見所多く、色種を尽くして、よしある黒木赤木の籬を結ひまぜつゝ、同じき花の枝ざし、姿、朝夕露の光も世の常ならず、玉かとかゝやきて作りわたせる野辺の色を見るに、はた、春の山も忘られて、涼しうおもしろく、心もあくがるゝやうなり。春秋のあらそひに、昔より秋に心寄する人は数まさりけるを、名たゝる春の御前の花園に心寄せし人く、また引きかへしうつろふけしき、世のありさまに似たり。

(野分巻、一二三頁)

②御屏風も、風のいたく吹きければ、押し畳み寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものにまぎるべくもあらず、け高きよらに、さとにほふこゝちして、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見るこゝちす。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。

(野分卷、一二四、五頁)

③対の上の御は、三種あるなかに、梅花、はなやかに今めかしう、すこしはやき心しらひを添へて、めづらしき薫り加はれり。「このころの風にたぐへむには、さらにこれにまさる匂ひあらじ」とめでたまふ。

(梅枝卷、二五八頁)

④紫の上は、葡萄染にやあらむ、色濃き小桂、薄蘇枋の細長に、御髪のためれるほど、こちたくゆるゝかに、大きさなどよきほどに、様体あらまほしく、あたりにほひ満ちたるこゝちして、花といはゞ桜にたとへても、なほものよりすぐれたるけはひことにものしたまふ。

(若菜下卷、一七六頁)

* 梅枝卷・薫物競べで紫の上の春に適した薫香を創造する優れた才覚の存在が明示される
： 右記注六の梅枝卷抜粋部参照

第三章 鈴虫巻、女三の宮の持仏開眼供養と薫物

第三章では、鈴虫巻で女三宮のために光源氏が執り行ふ持仏開眼供養に於ける名香としての薫物に焦点をあて、さきに確認した三田村氏の説とは異なつた角度からの考察により、薫物や花の香、仏教的な装飾品の数々が、女三の宮の持仏とともに、いかなる効果を彼女の爲の持仏開眼供養に於いて演出すべく配されているのかについて論述を行い、『源氏物語』に於ける仏教行事の一つである持仏開眼供養で薫物が見せる働きや効果の解説につとめてゆく。

第一節 曼陀羅前の供養のあり方について

―「唐の百歩の衣香」を中心に―

柏木が此の世を去り、女三の宮が俗世を捨てて一年を経た夏の物語は、彼女の持仏開眼供養を描くことではじめられている。

夏ごろ、蓮の花の盛りに、入道の姫君の御持仏どもあらはし給へる、供養せさせ給。このたびは大殿の君の御心ざしにて、御念誦堂の具どもこまかにとゝのへたまへるを、やがてしつらはせたまふ。幡のさまなどなつかしう、心ことなる唐の錦を選らひ縫はせ給へり、紫の上ぞいそぎせさせ給ひける。花机の覆などのをかしき目染めもなつかしう、きよらなるにほひ、染めつけられたる心ばへ、目馴れぬさまなり。

(鈴虫巻、三四五頁)

夏を迎え、蓮の花も今を盛りと池に咲く六条院に於いては、出家以降、女三の宮の住む南の住居は彼女が仏道に励むべく「御念誦堂」へと様変わりされていた。その出家から一年を経た本巻現在、彼女の持仏を供養するにふさわしい細やかな仕事のなされた仏具などが、源氏の心遣いにより手配され、堂内にしつらえられてゆく。幡など装飾品の仕立ては心惹かれるまでのすばらしい出来映えであり、素材には特別優れた唐の錦を選び縫わせた物である。こうした堂内を装飾するための縫製品の準備は、源氏が紫の上に急いでさせたものであったのだが、その仕上げはいずれもぬかり無く、滅多に見られない優れた有様にあつらえられている。さて、肝心の持仏の位置と装飾であるが、これらもまた、源氏によつて吟味され、紫の上の協力により整えられたのであろうか、次のような記述が続く本文になされている。

夜の御帳の帷を四面ながら上げて、後のかたに法華の曼陀羅かけたてまつりて、銀の花瓶に高くことくしき花の色をととのへてたてまつれり。名香に唐の百歩の衣香を焚きたまへり。阿弥陀仏、脇侍の菩薩、おのく白檀して作りたてまつりたる、こまかにうつくしげなり。閼伽の具は、例のきはやかに小さくて、青き、白き、紫の蓮をととのへて、荷葉の方を合はせたる名香、蜜を隠しほろけて、焚き匂はしたる、ひとつかをりに匂ひ合ひて、いとなつかし。

(鈴虫巻、三四五、六頁)

女三の宮の寝所である御帳台の帷子四方を上げ、そのうしろの方^{あた}にまず法華の曼陀羅が掛けられている。この曼陀羅への供えとして、まずは銀の花瓶に、おそらくはさきの蓮の花を茎高く仰々しく切り、色あいを整え挿し奉り、そうしてそこに供える名香には、唐の方

を合わせた百歩の「衣香」を焚いている。ただしこの「衣香」に関しては、次のような解釈を採用することが妥当かと考える。

この例は、青表紙本の多くや河内本は「百ふのえかう」とあり、本文上にはなほ問題はある。しかし「百ふのえかう」では解しがたく、今のところは、「百歩のくのえ香」の本文を認めておくよりほか、なさそうである。

（石田穰二氏「くのえ香―明石の上のこと―」『源氏物語論集』二七一頁）
さて、この唐の百歩の薰衣香が供えられる曼陀羅に同じく、御帳台後方には女三の宮の持仏としてこの日供養される阿弥陀仏、及びその脇侍の観音、勢至両菩薩の、小さくて細工もこまかに愛らしげな像を奉るし、ここの閼伽の具もまた、かわいらしい仏像に添えるにふさわしくとりわけ小さい蓮の花の、青、白、紫色のものが揃えられ閼伽皿に浮かべられているのであろう。そうした仏前の名香には、閼伽の蓮華を意識してだか荷葉の方が合わせられているのだが、蜜を控えることで粉末に仕上げて焚き匂わせている、その匂いと堂内に漂う他の香が、大層心惹かれるさまに匂い合っているのである。供えられているのは花や名香にとどまらず、曼陀羅、仏像に各々ゆかりの経典も、特に趣向をこらして完成され、御前に奉られていることも、以下の記述に明らかである。

経は、六道の衆生のために六部書かせたまひて、みづからの御持経は、院ぞ御手づから書かせたまひける、これをだにこの世の結縁にて、かたみに導きかはしたまふべき心を願文に作らせたまへり。さては阿弥陀経、唐の紙はもろくて、朝夕の御手ならしにもいかゞとて、紙屋の人を召して、ことに仰せ言賜ひて、心ことにきよらに漉かせたまへるに、この春のころほひより、御心とゞめていそぎ書かせたまへるかひありて、

端を見たまふ人々、目もかゝやきまどひたまふ。野かけたる金の筋よりも、墨つきの上にかゝやくさまなども、いとなむめづらかなりける。軸、表紙、笥のさまなど、いへばさらなりかし。これはことに沈の花足の机にすゑて、仏の御同じ帳台の上に飾らせたまへり。

(鈴虫巻、三四六頁)

このように、巻冒頭の場面に見える法華の曼陀羅と阿弥陀仏等女三の宮の持仏には、各々経も供養に添えられたのであろうか、おそらくは法華経であらうとの通説に従えば、前者に対応していると思しき經典が六道の衆生の為に六部書かれ、一方宮の持仏たる阿弥陀仏にも対応してか、彼女の持経である阿弥陀経が、唐の紙のそろさを懸念したこともあり、源氏自ら指示して趣向を凝らした紙を用い、彼の手によってその年の春から書かれたのであった。そうしてこれも紫の上の才覚による内装同様、その金を配した装飾も、人々の目にもまばゆく心惑わすばかりの美しさに仕上がっており、同じ帳台の上の、阿弥陀仏等仏像前に置かれた沈の花足の机の上に飾られているのである。

法華の曼陀羅と阿弥陀三尊が奉られる御帳台の内は、礼拝すべき対象の坐すこの堂の中心的空間として、女三の宮の御念誦堂に位置している。この空間に関する記述がなされる本巻冒頭部は、「高くことくしき花」を挿した銀の花瓶と「唐の百歩の薰衣香」を焚いた名香を供えた法華の曼陀羅前の様子を語ることで始められる。曼陀羅は、おそらくは源氏の采配によってであらう、御帳台後方に掲げられ、同じく宮の持仏たる阿弥陀三尊も後方に設置される。阿弥陀三尊とその供養の有様に関しては後々詳しくみてゆくこととし

て、まず曼陀羅前の供養の有様について確認と考察を行つてゆきたい。

さて曼陀羅は、「法華の」など附される形容さえ異なれ、我が国では空海以来の仏教儀式の一つである「灌頂」に欠かせない仏具でもあり、女三の宮の御念誦堂にも必要条件として奉られているのであらうことは考えられる。僧俗と仏の間の縁を結ぶ「灌頂」の初步的段階を占める儀礼である「結縁灌頂」においては、仏との縁を結ばんとして曼陀羅に華が投げられる。そうした儀式がこの念誦堂で行われたか否かについては本巻及び物語に語られるところではないが、以下本文は作者が女三の宮の念誦堂における曼陀羅存在の意義の一つに「結縁」を認識していたことを、我々読者に印象づける。

経は、六道の衆生のために六部書かせたまひて、みづからの御持経は、院ぞ御手づから書かせたまひける、これをだにこの世の結縁にて、かたみに導きかはしたまふべき心を、願文に作らせたまへり。

(鈴虫巻、三四六頁)

この「経」は、法華経であらうというのが今日までの定説とされている。「法華の曼陀羅」に対応して書かれた経なのであらう。阿弥陀仏に対応すると思しき阿弥陀経がこの直後の本文に現れていることも、そうした考え方の根拠の一つとして捉えられているのではなからうか。さて、右記本文中に現れた「結縁」は、『原語秘訣』の言葉を拝借すれば、源氏と女三の宮の間の「今生の契」とでも言われるべきものである。つまりここにおいては、「結縁灌頂」にも用いられて然るべき、「結縁」に關係の深い曼陀羅の一種である「法華の曼陀羅」の前に「法華経」を奉ることで、世俗を捨てた尼僧の女三の宮との「結縁」が、源氏によつて希求されているのである。

さて、その曼陀羅に對し供えられた花についてであるが、この花が蓮のそれであるとの解釈は諸注釈書に共通のものである。それが作り物であるとの指摘を行ったのは『一葉抄』であつたが、現在に至つてはそうした問題点を特記する注釈書もない。作り花ではなく本物の蓮華であるとの読み方が一般的になされているようである。「とゝのへ」られた蓮華の色は古注に特に概説されていないのであるが、現在の注釈書に於いては次の如く注されている。

(「高くことぐしき、花の色をとゝのへてたてまつり」の注として)

(前略) 蓮の花の、紅白の色をよく揃えて御供え申し。

また『本草綱目』に尋ねると、蓮の花の色は次の三色とされている。
(『日本古典文学大系』より、括弧内は筆者記入)

花有紅白粉紅三色

(『本草綱目』より)

『日本古典文学大系』は紅白二色の蓮の花が揃えられた、と述べているが、『本草綱目』は蓮の色として紅、白、粉紅(筆者記…白濁の紅、もしくは桃色歟)の三色をあげている。明代迄の中国大陸の生植物を主要な対象とした書ではあるが、同国が我が国同様東アジア地域に属することを考慮すれば、本作に於ける自然植物の具体的な姿に類推を加えてゆくうえで参考とすることも可能であろう。ここ鈴虫巻の花瓶に挿した蓮の色は、紅白の二色、もしくは紅、白、粉紅(白濁の紅、もしくは桃色歟)の三色であり、それら各々の色おのおのの本数が揃えられ、曼陀羅前にたてまつられたと読むことは出来ようかと思われる。さて、『本草綱目』はハスの花、特に白蓮の香について、次のように記している。

時珍曰く、(中略)その花の白きものは香しく、紅きものは艶であり、(中略)弘景曰く、花は神仙家の材料となる。香に入れて尤も妙である。

李時珍はハスの花の中で白蓮は香ばしく、紅い蓮はその外観が艶である、というのである。弘景はハスの花が香材として使用されていることを指摘し、その花の香り高さを我々に伝えている。花弁というわけではないが、ハスの花の蕊しゅいを香材として用いた例は、『陳氏香譜』に次のように見られる。

佩熏諸香(中略)

蓮蕊衣香

蓮華蕊一錢乾研 零陵香半兩 甘松四錢 藿香 壇香丁香各三錢 茴香 白梅肉各一分

龍腦少許

右為末入龍腦研勻薄紙貼紗囊貯之

(四庫全書所收『陳氏香譜』より)
また、我が国の『薰集類抄』にも、山田尼が「はちすの花のか」なる香材を、薰物調合に用いたことが記録されている。

山田尼

はちすの花のかとぞいふなる一劑を、みづにわかちてあはする。

(群書類従本『薰集類抄』上、六五八頁)

これらの記述は、平安時代当時も蓮、特に白蓮の花の香り高さが人々によって認知されていたであろうことを我々に伝えていると言えよう。鈴虫巻の曼陀羅前においても勿論、供養の為に捧げられた白、紅などの蓮の花は、物語の場面の中で直接語られないまでも、さ

ぞや高く香っていたことであろうと推し量られる。

次にその曼陀羅に對し供えられた名香についてであるが、おそらくはこれらも仏具と同じく源氏による選択と調合であろうか、帳台の奥の方に設置されている法華の曼陀羅に對し、「唐の百部の薰衣香」が名香として供えられている。この源氏の選択の意図について考えを進めて行くにあたつて、まずは鈴虫巻までに「百歩」という形容を附された香りの所有者、提供者であつた物語の朱雀院とその孫薰の女三の宮との關係に着目し、「百歩」の香との關係等についての考察を試みたい。『花鳥余情』は次のように「百歩」の名を持つ香りについて考えていくうえでの問題点を提起している。

百歩の方といふはおほよそ香氣遠く聞ゆるをもて百歩香とはいふべし、一かたにさだむべからざる心なり

唐ゆかりの方を用いて調合された鈴虫巻の「唐の百歩の薰衣香」は、単に一薰衣香の固有名詞であるのか、それとも単に百歩といわれる程の遠くまで香氣の届く香であるということとを言い表した形容詞「百歩」を附されたとある唐の薰衣香であるのかという問題がある。いわゆる薰物の指南書である我が国の『薰集類抄』、及び我が国薰物文化の祖とも言ふべき現在の中国で宋代に書かれたとされる『陳氏香譜』などは、「百歩」の形容を持つ香を薰衣香とは別種のものとして分類している。「百歩」の名を持つ香としては、現段階では前者の「承和百歩香」、及び後者の「洪駒父百歩香」の二例を確認することが出来るが、薰衣香の種類にそうした語を含む名称は見られない。

承和百歩香此方出^レ 自二四条大納言家一。大江千

古所^レ上耳。

甲香八兩 蘇合一斤 占唐一斤

白檀八兩 零陵八兩 霍香四兩 甘松花四兩

乳頭香五兩 白膠二兩二分 麝香四兩

鬱金二兩二分已上小。

甲香一分 蘇合二分 占唐二分 白檀二分

零陵一分 霍香三朱 甘松三朱 乳頭四朱半

白膠二朱 麝香三朱

鬱金二朱半已上爲^レ試四分之一所分出也。

右十一種。搗篩。蜜和^レ之。於^ニ甕器中^一盛埋。經^ニ三七日^一取燒。百步之外聞^レ香。

(群書類從本『薰集類抄』上、六九一頁)

洪駒父百步香又名萬斛^{こく}香

沈香一兩半 棧香 檀香以蜜酒湯少許別炒極乾 製甲香各半兩別末 零陵葉同研篩羅過 龍

腦 麝香各三分

右和勻熟蜜和劑窰^こ麝如常法

(『陳氏香譜』より)

薰衣香に分類される香りの方に「百歩」の形容をその固有名詞中に持つものは、記録の上では存在していないのであるから、後に見てゆく諸注釈書の指摘のように、「百歩」が薰衣香の固有名詞の一部として本作で用いられたとする考え方を支援し得る材料とは言えない。

い。本作においては、鈴虫巻の「唐の百歩の薰衣香」以外に「百歩」と形容される香が三度登場し、うち二度は史上及び物語の「朱雀院」が所有する、または贈り主である薰衣香であったことが絵合、梅枝両巻に、またうち一例は朱雀院の孫で女三の宮の息子である薫の鉢の香に対する形容となっている。

その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の篋、打乱の篋、香壺の篋ども、世のつねならず、くさぐさの御薰物ども、薰衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ことにととのへさせたまへり。

(絵合巻、九三頁)

薰衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠朝臣の、ことに選びつかうまつれりし百歩の方など思ひ得て、世に似ずなまめかしさを取り集めたる心おきてすぐれたりと、いづれをも無徳ならず定めたまふを、「心ぎたなき判者なめり」と聞こえたまふ。

(梅枝巻、二五九頁)

香のかうばしさぞ、この世の匂ひならずあやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩のほかにも薫りぬべきことしける。

(匂宮巻、一七〇頁)

これら三例に関して、まずは第一例の絵合巻での場合、固有名詞の一部ではなく遠くまで香る薰衣香の形容として捉え、また、その薰衣香の贈り主であり、その方を有する人物は物語の朱雀院である。『源氏物語事典』は次の如く、絵合巻の「百歩」について概説する。

かおりの遠くまで匂う形容。(中略)前斎院の入内に際して、朱雀院の贈り物。百歩香のこととする説もあるが、薰衣香の形容と見るべきである。

(『源氏物語事典』上巻、四三三頁)

第二に梅枝巻での場合、「前の朱雀院」は宇多帝、または史上の朱雀院(承平の帝)であり、その方をうつしたのは物語の朱雀院、または史上の朱雀院であるとの説が存在し、現在の注釈書では前者は宇多帝、後者は物語の朱雀院であると考えられているようであるが、対して近年、藤河家利昭氏の「梅枝の巻の薰物合わせと仁明帝」においては次のような解釈が提示されている。

諸註、百歩の方は薰衣香の調合法の一つと見ている。これは元が前朱雀院の薰衣香にあり、公忠のはそれから出た一つの変容である百歩の方ということであろう。「うつさせたまひて」と最上敬語を用いたのは、入り組んだ文脈の中で明石の御方と区別するためと考えられる。紫の上の伝えた八条の式部卿の方が仁明帝の方を受け継いでいるのと同様に、公忠朝臣の方は前朱雀院のを写し、独自の方になっているのである。そして、八条の式部卿の方が古い時代の方であるのに対して、公忠朝臣の方は新しい時代の方として上げられたのである。

(一六二頁)

「前の朱雀院」は、承平の帝ともいわれる史上の朱雀院であり、院の所有していた「薰衣香の方」を写して「百歩」と呼ばれるにふさわしく変容させ、改めて院に奉ったのが公忠朝臣であるとし、物語の朱雀院と梅枝巻での百歩の方との関係を否定し、また同場面における「薰衣香の方」と「百歩の方」の微妙な違いについても言及が為されている。

さて、以上大別すると三種の説が、薰衣香の所有者とそれを写した人物、及びその方の呼称に関し、左記の如く存在することとなる。

①「前の朱雀院」は宇多上皇、写したのは物語の朱雀院であり、公忠朝臣がどなたかに奉った。「薰衣香の方」は「百歩の方」である。

②「前の朱雀院」は史上の朱雀院（承平の帝）、写したのは物語の朱雀院であり、公忠朝臣がどなたかに奉った。「薰衣香の方」は「百歩の方」である。

③「前の朱雀院」は史上の朱雀院（承平の帝）、写したのは公忠朝臣で、公忠は写した薰衣香を百歩の離れた所まで匂う薰衣香に変容させて史上の朱雀院に奉った。

様々な論点を内包する問題点であるが、以上三種のいずれの解釈においても、「朱雀院」と呼ばれる人物が「百歩」と形容された薰衣香を、何らかの形で手にしていたことは認知されているようである。

また、ここでの「百歩」はさきの『花鳥余情』の問題点にあったように、遠く匂う薰香の形容に留まり、固有名詞の一部にまで発展させることは出来ないとの見方が一説として存在しているのであるが、それに対する通説として、『源氏物語事典』は以下の如き考え方を紹介している。

薰きものの調合法の一。百歩香のあわせ方とするのが通説。（中略）「からのひやくぶのくのかう」という用例もあり、「ひやくぶのはう」あるいは「ひやくぶのほか」という場合、つねに「くのかう」に関連して用いられているから、あるいは「くのかう」の一方として解する方がよいかもしれない。

右記観測は、「百歩」云々の形容が本作に於いて常に薰衣香に関連して用いられているとの確認を根拠に梅枝巻の「百歩方」を薰衣香の一方として結論付けているようであるが、しかしながら残る匂宮巻の第三例は薰の躰に自然と備わる非人為的な香に対してなされた形容であるため、『源氏物語事典』が「つねに」として結論付けんとするところの論旨を少々疑ってみる必要が出てくる。薰の香と薰衣香の一名とされる「躰身香」とを関連づけて考えようとする向きもあるようであるが、基本的には同書も次のように述べるに留まっている。

薰の身体の妙香にいう。

また、匂宮巻における薰の香に関する記述をもう少し読み進めてみると、次のような記述がなされていることが分かる。

さまざまに、われ人に勝まさらむと、つくろひ用意すべかめるを、かくかたはなるまで、うち忍び立ち寄らむものゝ隈も、しるきほのめきの隠れあるまじきに、うるさがりて、をさく、取りもつけたまはねど、

(匂宮巻、一七〇頁)

右記本文によれば、薰は薰香全般の用意を厭^{いと}い、そうした香をめつたに身に着けようとしてない人物として描かれているのであるから、やはり薰が発する香は「躰身香」と呼ばれるような薰衣香によるものと考えることには疑問を抱かざるを得ない。そうして考えると、薰の香に対して附された「百歩」の形容は、特定の香をさした固有名詞を持つ薰衣香の存在を示唆するものであるというよりは、物語の主人公にふさわしく、身につけた覚えもないのに身に備わる香氣の遠く薰るなにがしかの妙香に対して附された一形容詞であるとの

見解にのみ従うのが自然である。薫のこうした不思議な香の由縁や正体云々に関する詳しい考察はまた別の機会に譲るとして、ここでは「百歩」の形容が、本作に於いてはなにも薫衣香ばかりに常に附されているわけではなく、むしろ次のような特徴を有す香に特に附されてきたことを確認しておきたい。

① 香気の遠く香るさま、もしくはそうした香気の遠くに香る香への形容、あるいはそうした香の名称の一部。薫衣香の固有名詞の一部であるとの限定はできない。

② 「朱雀院」の名を持つ史上、又は物語の人物と、後者の子である女三の宮及び同じく孫の薫に関係のある香への形容。

右記の二点の特徴は、前者の場合、薫衣香の名称の一部であると限定できない点で、薫物の書が示す分類に合致している。後者は鈴虫巻の唐の百歩の薫衣香を實際合わせたのが源氏であると考えた場合、女三の宮が直接関係する香であるとは言えないが、ここでの持仏開眼供養がひとえに女三の宮の為に行われたこと、またのちに阿弥陀三尊の考察で述べてゆくところであるが、そこでの仏具に女三の宮自身の有様や性質が投影されている可能性を考えあわせると、この「唐の百歩の薫衣香」も、源氏が女三の宮自身の特質を意識して名香を厳選した結果、それが「百歩」と形容して苦しくないほど香気の遠く匂う唐の薫衣香に落ち着いたことは考えられる。序章で既に確認したところであったが、三田村雅子氏がここ曼陀羅前の印象を、六条院に於ける女三宮に対しての光源氏の位置の投影とされることと異なる見解となるが、物語の朱雀院の娘として、奇しくも父のものと同じ形容を自然と附される薫衣香が、おそらくは源氏によって意図的に選択されたのであろうか。そう考えると、この唐の「百歩」の薫衣香は、女三の宮自身の性質や背景に直接関係の深い香

である、もしくは女三の宮の為の儀式に供えられた名香であったために、物語の朱雀院との血縁関係から、史上及び物語の「朱雀院」の薫衣香の方への形容を引き継がせるかたちで「百歩」の形容が附されたとみてしかるべきであろう。詳しい考察は後に譲るとして、ここではそうした可能性を提示するに留めたい。

さて、以上考察で見てきたように、「唐の百部の薫衣香」は、物語に於いても現実世界に於いても当時の内外薫物文化にあつて重要な存在としてみなされるべき、朱雀院ゆかりの香と同じ形容「百歩」を附された香であり、またその方が当時の社会において希少な存在であつたと考えられる唐の方に従つて合わせられたことをも考慮に入れた場合、曼陀羅前に供えられたこの名香は、同じく曼陀羅前に手向けられる銀の瓶の花同様に「ことくし」「い、「朱雀院」の名を持つ人物のゆかりの威厳を聞く者に与え得るものであつたと言えようし、あるいは源氏自身のはからいで、高貴な尼宮にふさわしい「ことくしき」花及び「唐の百部の薫衣香」を組み合わせ曼陀羅前に設置したと考えることもできるのではなからうか。一揃えの法具であるからこそ、源氏はそうした朱雀院の姫宮にふさわしい「ことくしき」ものとしての調和の実現を、ここ曼陀羅前に於いて目指したのである。そう考えてみると、大仰なのは花や名香のみならず、ここに見る「法華の曼陀羅」もまた、そうした供えにふさわしい、仏教美術としての莊嚴さを見る者に感じさせるといふ意味の「ことくしき」ものであつたのかもしれないが、曼陀羅自身への印象等に関しては詳しく述べられておらず、これ以上の想像は難しい。

第二節 阿弥陀仏前の供養のあり方

―「荷葉の方を合わせた名香」を中心に―

さて、ここ御帳台には法華の曼陀羅のほか、女三の宮の持仏と思しき阿弥陀仏とその脇侍の菩薩達もまた、源氏によって奉られ、こちらにおいてもさきに確認してきた曼陀羅の場合と同様、名香と花が仏前に供えられているのであるが、さきの曼陀羅前の仰々しく重厚な印象とは少々異なる趣向が、阿弥陀三尊の姿形やその御前の供物のあり方を通して見る者に訴えられているかのような印象を受ける。女三の宮の持仏であろう阿弥陀仏は、姿は小さくかわいらしいのが特徴で、細工は細くなされている。素材は当時希少な輸入品であつた白檀を使用しており、これは脇侍の観音、勢至両菩薩にも同じくみられる特徴であろうかと推測してしかるべきである。こうした持仏の有様は、それらを監修したと思しき光源氏の、いかなる思いを反映したものであろうか。平安期の壇像の建立の実際については、鈴木喜博氏が次のように概説されている。

従来、（中略）壇像の特色について、次の四点を抜き出して壇像の概念が規定されてきた。

- （1）檀木を用いた一本造
- （2）素木を原則として着彩されない
- （3）一般に小像である
- （4）細密な彫法を示す

このような壇像の特色は平安時代に素直に受け入れられ、日本製の壇像が造られるこ

とになった。

(鈴木喜博氏「檀像の概念と栢木の意義」、日本美術全集第5巻『密教寺院と仏像』一七〇、一頁)
 梅檀の木を用いた仏像建立は、輸入品であり香材としても用いられていたという梅檀の木の希少さから、それを用いた仏像は自然と小形のものに、またその材木としての木目細やかさと強度の高さから、細かく精密な細工が可能である為、結果壇像は比較的小型で細工の細かいものとして建立されることが多かったようである。こうした史実に於ける檀像建立のありかたは、『栄華物語』の本文に云う、「白檀の御仏三尺ばかりにて、いとうつくしうおはす。」との檀像の姿にも反映されているところであらうし、勿論、本物語の女三宮の持仏の有様にも矛盾しない。

さて、この白檀製の阿弥陀三尊像について、三田村雅子氏の論稿に次のような説が見られる。

白檀製の本尊・脇侍も、かぐわしい異国の匂いを放っていたに違いない。(中略)それら(荷葉、唐の百歩の薰衣香、白檀像)の香が融合し、重なり合って(「ひとつかをりに匂ひあひて」)、「なつかし」い香を奏でているのである。

(「方法としての〈香〉」『源氏物語 感覚の論理』一九〇、一頁)
 ここに登場する白檀製の阿弥陀三尊像が二種の薰香と匂い合っている、とする考え方を示されたのは、後にも確認するところであるが、三田村氏が初めてのことかと考える。氏のこの意見の妥当性について考察を加えるにあたり、浄土三部經の一つである『無量寿經』には、ダルマーカーラ(法藏菩薩)の発する香に関しての、次のような記述は有用かもしれない。

常以四事、供養恭敬、一切諸仏。如是功德、不可稱説。口氣香潔、如優盞羅華。身諸毛孔、出栴檀香。

〔和訳…かれはこのような善をなしとげた。すなわち、無量・無数・不可思議・無比・不可量・無限量・不可説な、百千億・百万劫の間、求道者の行いを実行するとき、口からは天の（香りを）をも超えて匂わしい栴檀の香りが薫り出た。すべての毛孔からは青蓮華の香りが薫った。〕

（岩波文庫本『浄土三部経』上巻より）

ここで菩薩の身から香り出た香は、栴檀と青蓮華のそれとなつてゐる。青蓮華の香りに関しては後に述べてゆくとして、栴檀は香木のことである。から、仏像が栴檀の木で建立されることが好まれたことと関連している印象がある。則ち、栴檀の香を発する仏の像を建立するにあたってふさわしい木材として、その香のまさしく源である栴檀の木が好まれたことは、仏像建立の歴史上自然な流れであると言えよう。『本草綱目』の檀香についての概説に、次の如き一節がある。

皮實而色黄者為黄檀皮潔而色白者白檀皮腐而色紫者為紫檀其木並堅重清香而白檀尤良

（四庫全書所収『本草綱目』より）

黄、白、紫の檀木の材質は、何れも堅く重く香りはさわやかであり、白檀は三種の色の檀木の内ですうした性質が尤も優れている、という。後半の「其木」の記述に火を用いて云々との概説が含まれないことから、檀木そのものの香りが火を用いずとも少なからず発せられる、ということをも示唆するとすれば、ここ鈴虫巻の檀像の如く建立からまだ年月も浅く、かつ最上の檀木たる白檀を用いて製作された阿弥陀三尊は、さきの『無量寿経』

に於ける法藏菩薩の香を、三尊に近く坐す者に思わせるかの如き匂^かわしきであつたことは想像に難くない。しかしながら、物語本文に、白檀像が薰^かつたという類の記述は確認できないので、その香が物語世界に於いても匂いを放っているように描かれているかは疑問である。

また、仏像がある人物、特にその仏の所有者や供養の対象者の姿形になぞらえて製作されることもあつたようである。嵯峨天后橘嘉智子出家の際に建立された観音像の、壇木製ではないにしろ、端正で優しげな顔のつくり、像の裾に届く程の長く、かつ美しい髪の毛、女性的とも言える豊満な体軀、そしてその丈の六尺という高さは、見る者に嘉智子の面影を思い描かせてきたようである。だが、こうした像の姿は、その監修者、おそらくは嵯峨天皇の、ひとえに俗世を捨てた後の成仏を願う気持ち^{こころ}が仏像の姿に映し出した結果であると言えるかもしれない。さて、こうした史実における像の製作とその所有者との関係とをあわせて考えてみると、源氏は当時の壇像建立のあり方に則ると同時に、女三の宮の精進と行く末の成仏とを願いから、持仏の所有者である彼^かの宮の姿を仏像に写させたのであつて、言ってみれば個人的感傷もまた、彼女の仏像製作の方向性を左右したものと考えられよう。この女三宮の姿を彷彿とさせる白檀製の阿弥陀仏像には、そうした源氏の豊富な知識と、夫としての女三宮に対する思いやりが体现されているのである。

さて、ここ阿弥陀三尊前に供えられた名香と花についてであるが、さきに紹介した抜粋部によれば、阿弥陀三尊への供養として、まずは閼伽皿にたたえた水の上にはきわだつて小さな青、白、紫の三色の「蓮」が浮かべられており、同じく供養の為の名香には、荷葉の方という蓮の香によそえた薰物の方が、蜜を控えほろほろとした、おそらくは抹香^{まか}の状

態で仕上げられ、薰き匂わされる。ここに見える三色の「蓮」の花に関する諸注釈書の見解は、次のようになされている。

阿弥陀経に青黄赤白の蓮あり是はつくりはなとみえたり弄是は華を作てあかざらに入てをく也今もある事也人二可尋

(『岷江入楚』卷三八、六五二頁)

瓶にさしたるつくり花にや云々又まことの蓮華にてあるへき歟

(『一葉抄』より)

是は花を作てあかさらに入てをく也今もある事也人に尋たり

(『弄花抄』より)

經に出て来る青蓮華は、尼羅鉢羅華(中略)いわゆるひつじぐさ、睡蓮の青色のものという。白蓮華は(中略)はす。紫の蓮華はわからない。例文は仏前に供える造花のこと。

(『源氏物語事典』上巻、四〇五頁)

以上古注釈書の説に於いて、この「蓮」は造花であるとの考えが中心であり、『一葉抄』のみが「まことの蓮華にてあるへき歟」との見解を残す他は、以後『源氏物語事典』に至っては真理として確立されている観もある。また『源氏物語事典』においては、仏典において青蓮華が睡蓮として指摘されていることを紹介し、しかしながら白蓮華はハスであり、紫のものは分らないとの記述がなされている。また、『岷江入楚』の確認にも見えるように、仏典中の蓮華の種類に「むらさき」と呼ばれるものが特記されていないことは、ここにある「蓮」が以上三色の蓮華の造花である、との考えを通説的に扱う上での一根拠と

なされてきたのかもしれない。

しかしながら、これら「蓮」が造花であると仮定した場合も、そのことを明らかにする形容に欠き、かつ曼陀羅前には生きた蓮の花が供えられていると考えられていることも合わせて考えてみた場合、これを「造花」であるとした基本的な根拠はもはや記録に不詳の「むらさき」の蓮華の存在だけとなってしまう、しかもその蓮華すら、その大きさは、自然界のハスの花が平均して20 cmから30 cmとされていることに対し、本巻の「蓮」には、一般的に考えて大型の花であるハスの花として考えるにはおよそ不釣り合いと言わざるを得ない「きはやかにちいさくて」との形容が附されていることから、これら三色の「蓮」がハスの花であり、その作り物であるとの解釈は、筆者にとっては不審であると言わざるを得ないのである。

とは言うものの、一方で『源氏物語事典』が紹介する、経に出てくる青蓮華が睡蓮であるとする説に関しては、『無量寿経』のサンスクリット原典における以下の如き一節を参考にした場合、必ずしも絶対的な指摘であるとは考えにくい。

天優盃羅華、盃曇摩華、拘物頭華、分陀利華、雜色光茂、弥覆水上。(和訳…「その水面は」天の青蓮華や、紅蓮華や、黄蓮華や、白蓮華や、睡蓮などの花に覆われ、(以下略))

(岩波文庫本『無量寿経』より)

右記經典一節の和訳を参考にして考えてみた場合、サンスクリット原典においては青、紅、黄、白の蓮華と睡蓮というものが、全く別個の種のものであるとして扱われている、つまり、青蓮華もハスの花として扱われているようである。また、実際の自然界に於いても、ハス、

スイレンとともに青い花が存在しているようである。

花は（中略）淡紅色または白色、まれに青色、

（『日本の野生植物』より）

右記は現代行われた観察の結果であるとはいえ、経典にも自然界にも、青いハスとスイレンが存在することが確認できる資料である。そうなる問題は、ここ鈴虫巻の三色の「はちす」がハスカスイレンか、ということになる。この「きはやにちいさ」き「はちす」とは一体いかなるものであるのか。筆者はこれら三色の花が、蓮華よりも一回り以上小柄な「睡蓮」ではないかと考える。

『源氏物語』に於いて「紫」の形容を附される代表的な存在の一つに「紫の上」がいる。彼女は藤壺の面差しと血筋を引き継ぐことから「若紫」として本作に登場する女性であるが、藤壺の「藤」の印象が「紫」という言葉になって紫の上に引き継がれたと考えれば、本作に於ける「紫」の視覚的印象を尋ねるために、藤の花の如き紫の色は、一つの基準と成る存在であると言えるかもしれない。さて、本稿では鈴虫巻の「青き、白き、紫の蓮」がハスではなくスイレンの花である可能性の正否を確認すべく考察を加えてゆくのであるが、特に「紫の蓮」をハスであると考えてゆくにあたり、当時の自然社会に於いて、実際に藤花の系色から外れず、「紫」という形容を附されてしかるべき色をしたスイレンが存在したと言えるのか否かを確認する必要がある。『本草綱目拾遺』のスイレンの花の色に関する説明は、以下の如くである。

花に五色がある。

(『国譯本草綱目』所収『本草綱目拾遺』より)
 この五色を五行説や仏教に言う「五色(ごしき)」と解し、青、黄、赤、白、黒の五種であると考えた場合、「青き白き(中略)蓮」、青と白の二色は含有され矛盾は無い。しかしここに見る「黒」という色をスイレンの花の色として理解することには少々抵抗が残る。「五色」を、ここにおいてはスイレンの花の色として適当と思われる色として解釈することは可能であろうか。『小學紺珠』は「五色」という語に関して次のように概説を加えている。

五色

青東木甲 赤南火丙 白西金庚 黒北水壬 黄中央土 戊 文字色有五色

緑 碧 紅 紫 駟^ろ 月令五方之正色也以木克土則青黄合而成緑以金克木則白青合而成碧以火克金

則赤白合成紅以水克火則黒赤合而成紫以土克水則黄黒合而成駟^ろ此五方之間色也

紺 紅 縹 紫 流黄 環斎要略間色有五

黄曰金 白曰銀 赤曰銅 青曰鉛 黒曰鐵 漢食貨志五色之金注

(右記ふりがなは筆者記入)
 また、同書は「五河」の項において、『司馬相如賦』に見える「五色之河」を注して次の如く記載する。

五河

紫 碧 絳 青 黄 司馬相如賦大人賦越五河注五色之河仙經説

(以上四庫全書所収『小學紺珠』より)
 つまり、「五色」は青、黄、赤、白、黒をその基本概念としつつ、色の所有物によつてま

たその色の形容や概念を間色にまで広げ、例えば青は紺、碧など、黒は紫として柔軟に捉えられ、また置き換えられてきたのである。こうして考えれば、『国譯本草綱目』から推察した「黒」いスイレンが、実際には「紫」のそれを指して言ったものであったと理解することは可能であろう。ハスが「紫」と呼ばれる種類を記録に残していないことに対し、スイレンは、間接的ではあるが「紫」と考えてしかるべき色の種の存在が記録されているのである。となると本作の「きはやにちいさ」き「蓮」は青、白、紫であったのだから、実際の睡蓮の大きさや種類に含有され、矛盾はない。阿弥陀三尊前の「蓮」が、三色ともにスイレンの花である可能性は存在するのである。

さて、このスイレンかもしれない「蓮」が造花か否かとの問題点について考えてゆくにあたつて、まずはスイレンの存在を六条院の庭の池に確認することが必要となる。本巻の三色の「蓮」が生花であると仮定した場合、若紫巻で僧坊の関伽の具に奉る花がその庭で摘み取られていたこと（「清げなる童など、あまた出で来て、関伽たてまつり、花折りなどするも、あらはに見ゆ。」）を思い起こせば、この三色の「蓮」の出所としてここ六条院の庭の池を想定することに違和感はない。そうして考えると、さきの曼陀羅前の考察でみてきた銀の花瓶に挿されたハスの花もまた、同じく六条院の池から摘み取られた可能性はある。さきに『源氏物語事典』の抜粋部に見た青蓮華がスイレンであるとの一説は、ハスもスイレンも等しく「蓮」の名称で呼ばれていたこともある事実を我々に理解させ、結果鈴虫巻冒頭の咲き匂う「池の蓮」にスイレンが含まれていたことの可能性をも我々に印象づけることのできる材料となる。「紫」と呼ばれてしかるべきスイレンが記録上に存在した事実を考慮すれば、六条院の庭の池に咲き匂う「蓮」が、少なくともハスとスイレン

二種のスイレン科の花であつたとの想像は許されるのではなからうか。

また、『弄花抄』が主張するところの

是は花を作てあかさらに入てをく也今もある事也人に尋たり

という、作り花を閼伽皿に浮かべる儀礼の存在を論拠とする、ここの「蓮」が作り花であるとの指摘であるが、これもまたさきに紹介した、若紫巻で女たちが閼伽に奉る生花を庭で摘み取つていたとの記述を思い起こすことにより、本作に於いて閼伽に奉つてしかるべきものはなにも作り花ばかりではないことを理解できる。従つて、ここ阿弥陀三尊前の三色の「蓮」は、六条院の庭の池から摘み取られたスイレンの生花であるとの解釈が可能となるのである。

さて、こうした鈴虫巻の、恐らくはスイレンであろう「蓮」の色が青、白、紫であることは既に何度も確認してきた本文に明らかであるが、源氏は何か特別な意図をもつてこれらの色を選んだのであろうか。この問題点を考えるにあたり、多くの読者は阿弥陀三尊と紫の雲の関係について思いを巡らすことであらうかと思う。『方丈記』に次のような一説がある。

春ハ、藤浪ヲ見ル。紫雲ノゴトクシテ西方ニ匂フ。

(新日本古典文学大系『方丈記』二〇頁)

死や成仏の際、阿弥陀三尊が紫色の雲にのつて迎えに来るといふ「紫の雲の迎え」はひろく知られるところであり、こうした所謂阿弥陀仏の来迎信仰が、平安時代の人々にいかに盛んに受け入れられたものであつたかについては、石橋義秀氏「平安朝に於ける来迎信仰の展開」にも詳しいところであるが、その来迎する際に阿弥陀三尊が足下に置く紫の雲

が、ここ女三宮の念誦堂に於いては、閼伽皿の青、白そして紫のスイレンの花により表現されていると考えることはできないだろうか。閼伽皿はおそらくは三尊の足下あしもとに設置されていたのであろう、三尊が乗る雲の如き配置がなされている。また青、白、紫という配色は、紫そのものとして統一されていないにしても、紫と同じく青系統に属する色に白を添えて混在させた点から考えても、紫の雲としての印象を損なわない、または紫の雲から着想を得たものであると言うこともできるのではないか。例えば紫雲は紫の藤の花に例えられることが多かったようである。さきの『方丈記』抜粋部に対する注として、次の如く藤と紫雲の關係が概説されている。

藤の花は、しばしば西方極樂浄土来迎の紫雲に擬せられた。「西を待つ心に藤をかけてこそその紫の雲を想はめ」(山家集・中雜)。和歌の用語では、「藤」の花について「にほふ」と言う(能因歌枕)。

(新日本古典文学大系『方丈記』より)

鈴虫巻の阿弥陀三尊前に於いても、種類こそ異なれ紫の花を紫雲に擬せんとする試みが行われたと考えることはできないだろうか。本巻開眼供養は女三の宮が俗世を捨てて初めて大きな仏教儀式であり、俗世を捨てた彼女の望むべき所はひとえに成仏である。源氏はそうした彼女の望み、及び彼女の持仏が阿弥陀三尊であることを考慮にいれ、あたかも三尊が紫の雲に乗り、女三の宮を迎えにきたかのごとき印象をも読者に与えてしかるべき供養の装飾を「青き白き紫の蓮」を用いて行っているのであるとすれば、ここにもまた、源氏自身の宮の成仏を願う祈りの気持ちに投影されているのかもしれない。

そうした、あたかも来迎するが如き意匠の施された阿弥陀三尊前の名香についてである

が、おそらくはこれも前の唐の百歩の薰衣香の場合と同じく源氏によつて選択され、合わせられたものであると考えられよう。ここに於ける名香は、荷葉の方という、夏の花である蓮華の香に似せた夏向けの香として説かれる薰物の方を合わせたものとされている。こうした季節感には蓮花が夏に開花する花であることを考慮すれば自然な認識であるといえよう。以下、各書に於ける荷葉に關しての概説を抜粹して紹介する。

荷葉擬荷香也。夏月殊施芬芳。

(羣書類従本『薰集類抄』より)

荷葉は、なつのはちすのすずしき香にかよへり。

(羣書類従本『むくさのたね』より)

荷葉夏用之(中略)

荷葉。ハスノカニ
ヨソヘタリ。夏。

(羣書類従本『三條家薰物語』より)

荷葉。夏。

(羣書類従本『四辻家薰物書』より)

また、本作に於いては他に梅枝巻薰物競べに於いて花散里により合わせられた薰物「荷葉」として登場している。

夏の御方には、人人の、かう心々にいどみたまふるなかに、数々にも立ち出でずやと、煙をさへ思ひ消へたまへる御心にて、たゞ荷葉を一種合はせたまへり。さまざまはりしめやかなる香して、あはれになつかし。

(梅枝卷、二五八、九頁)
本作諸註による右記梅枝卷、花散里の荷葉の香、鈴虫卷の荷葉の方に關する概説は以下の如くである。

合香は四季にかたどる方あるなり。春は梅花方、紫上春の御方のすぐれたるとみえたり。仍て此比の風にたぐへんに、更にこれにまさる匂あらじとあり。夏は荷葉方、花散里御方合之。秋は菊花方又侍従、冬は落葉方又黒方。寛教大僧都説云、春之丁字、夏秋之沈、冬之薰陸、隨季三銖許可加歟。合香古方。

(『河海抄』卷一二、四四三頁)
梅花荷葉菊花落葉などは時にあひつつ人々も合給べきとて斟酌ある也。

(『細流抄』卷六、二五二頁)
夏の御方なれば荷葉をあはせ給へるそのよせあるにいたり

(『花鳥余情』卷一八、二一六頁)

(鈴虫卷「荷葉の方」に關して)
荷葉方、蓮花によそへての故に此方を合せらるる歟。蜜をとどめて抹香のごとくにかるる歟。ほほろけはほろほろとしたる也。

(『河海抄』卷一四、五〇七頁)

梅枝卷の荷葉に關しての詳しい考察は別の機会に試みるとして、『岷江入楚』が云うように、花散里が「夏の御方」として認知されていることを考えれば、彼女は自らの担う季節感を意識し、そうした自身の印象と薫物の季節感との調和を目指して夏の薫物である荷葉を春に行われた薫物競べのために合わせたと考へて不思議はない。また、名香が蜜を控え

て抹香のようにされていることの要因に關し、『源氏物語聞書』は次のような指摘を残している。

仏前なれば生類をいむ故也

(『源氏物語聞書』より)

さきに本稿ではここ念誦堂の花や蓮がともに生花であるとの結論の提示を試みたが、そうした考えは聞書の右記注釈に矛盾するものであるかもしれない。しかしながら、生花による供養がさきにも確認した若紫巻に於いても見られることを鑑みれば、抹香と生花による阿弥陀三尊への供養の在り方に不審はなからうかと思われる。

さて、ここ鈴虫巻において何故荷葉の方が名香として選択されたのか、この問題点について『河海抄』は右記に、阿弥陀三尊前に供えられた「蓮花によそへての故」との考察を残している。なるほど「蓮」と呼ばれるスイレンの生花の香と、人工の「蓮」の香である荷葉の香を混在させ、調和させんとしたのであるなら、初音巻で紫の上が行ったが如き自然の花と人工の花の香の調和を思えば本物語に於ける薫物使用の実践の姿に矛盾する行為であるとは言えない。しかしながらここ阿弥陀三尊前においては、加えてもう一つの効果を狙ってこうした試みが為されたと考えることが出来るのではないか。さきの壇像についての考察では、法藏菩薩の口からは匂わしい梅檀の香りが、すべての毛孔からは青蓮花の香が薫り出たという『無量寿經』の一節を紹介した。こうした話には種々あるらしく、四庫全書所収の『香乘』には次のような逸話が記載されている。

身鉢香（中略）

口氣蓮花香

潁州一異僧能知人宿命時歐陽永叔領郡事見一妓

口氣常作青蓮花香心頗異之舉以問僧僧曰此妓前

生為尼好轉妙法蓮華經三十年不廢以一念之差失

身至此後公命取經令妓讀一閱如流宛如素習樂善錄

(四庫全書所収『香乘』より)

ここに見える阿弥陀三尊は壇木のうち材質、香りとともに最も優れた白檀で作られており、建立から年月浅い三尊からはさぞやかぐわしい香りが発せられていたことであろうが、そのことは本文に明記されるところでないことは、さきにも述べた。おそらく鈴虫巻で強調されているのは梅檀の薫り云々ではなく、その材質の豪華さ、希少さであるのだろう。この梅檀製の三尊の前にスイレンが供えられ、また名香に蓮の香によそえた荷葉の方が合わせられ、薫き匂わされているのである。女三の宮の念誦堂に坐す阿弥陀三尊前に於いては、来迎する仏のかぐわしさを思わせるようなしつらえが、視覚的、嗅覚的に、物語世界の中で実現されているのである。

結び 薫り合う薫香、その構成と効果

「閑伽の具は」から始まる一文は、次のような形で締め括られている。

一つ薫りに匂ひあひていとなつかし。

ここにおいて、何が「一つ薫りに匂ひあ」うのかについては見解の分かれるところである。『源氏物語事典』は次のように概説する。

「ひとつかをりににほひあひて」は、普通、「荷葉が唐の百歩の薰衣香と一つになつて」と解するが、『岷江入楚』は「荷葉の方と池の蓮とかほりあひたるなり。」という。

また、新日本古典文学大系は次のように注している。

花の香りと一つになつて。

(『源氏物語事典』上巻、一〇四頁)

(新日本古典文学大系『源氏物語』四巻より)

ここに云う「花」が池の蓮か、銀の花瓶の花か、はたまた青、白、紫の蓮のことを指すのかは詳細に言及されていないのであるが、唐の百歩の薰衣香について言及していないことを考えれば直前の青、白、紫の蓮を指すか。また、以上の諸説に加え、三田村雅子氏が行っている次の解釈はさきにも紹介したところであつたが、再度ここに確認してみたい。

銀の花瓶の「高くことごとしき」造花の前に薰きしめられた名香は、百歩先まで匂いがあると伝えられた中国渡来の「百歩の衣香」である。さらに白檀製の本尊・脇侍も、かぐわしい異国の匂いを放っていたに違いない。これらの匂いが光源氏主催の持仏開眼供養の、「ことごとしき」、虚仮威しの側面を語るとすれば、続いて記述される關伽の具の前にしつらわれた蓮の造花は、「きはやかに小さ」い器に用意され、小柄な女三宮にふさわしい、可憐で、ささやかな洗練を見せている。そこに薰きしめられた名香も、「百歩の衣香」のような派手派手しい香でなく、荷葉の方を合わせた、地味で控えめで奥床しい(「蜜をかくしほほろげた」)香なのである。それらの香が融合し、重なりあつて(「ひとつかをりににほひあひて」)、「なつかし」い香を奏でている

のである。

(「方法としての〈香〉」『源氏物語 感覚の論理』一九〇、一頁)
 そうなると、現段階では以下の如き四種の説が存在することとなる。

① 荷葉が唐の百歩の薰衣香と一つに匂い合う。

② 荷葉が池の蓮と一つに薰り合う。

③ 荷葉が同じく阿弥陀三尊前に供えられた蓮と一つに匂い合う。

④ 荷葉、唐の百歩の薰衣香、白檀製の阿弥陀三尊像の香りが一つに匂い合う。

①の正当性を考えてみた場合、本文に表わされていないからといって、本場面に於いてこれまで確認してきた蓮の香り高さを無視して二種の薰物だけが混合し匂い合っていたと考えるのは、本作に於いて初音の巻でそうであったように、自然の花の香と薰物の香との混合を艶とする価値観に矛盾しているかのごとき印象を受ける。確かに同じ初音巻においては、明石の上により種類の異なる人工の香りの混合が試みられてはいるのだが、これは彼女の庭が紫の上の庭の紅梅に匹敵するほど上質で特徴的な春の花を欠いていたこと、及び彼女自身、紫の上のように自然と人工の薰物の調和を目指すという方法をあえて選択せず、人工の香同士を混合させるという創作的な行なを行なわんとしたことによると考えることもできるのであるから、ここ鈴虫巻に於いては、夏に咲き誇る蓮の花が池や花瓶、閑伽皿の上に存在するにもかかわらず、名香の香のみの混合が強調されているとは考えにくい。②は同じく初音巻で、屋内と庭の香が混在するという広い空間の中での香の混合が見られる本作の薰物使用の有様には矛盾しないが、池の蓮をのみ対象とし、同じ屋内に存在する唐の百歩の薰衣香や蓮の花の香を考慮しないことには不審を抱かざるを得ない。特に唐の

百歩の薰衣香は「百歩」、百歩の遠き先にも匂う程薰り高い香であると形容されているのであるから、これが荷葉と同じ空間にあつて何らかの効果を生み出さないと考えにくい。蓮の香にちなんだ薰物であることからあえて同種の香による混合と考えるのが適切と解したのであれば、屋内の蓮の香を混合の対象に入れないのはいかなるものであるのか。それでは③の場合はどうか。荷葉が同じ阿弥陀三尊前の花で、類似したと思しき香と混合し、匂い合ったとするのは、さきにも触れた初音巻の自然の紅梅と、おそらくは梅花香であるう薰物の香との混合と調和を考慮すれば不思議はない。ここで光源氏がこころみたことに、阿弥陀仏来迎の立体化が考えられることをおもいおこせば、この荷葉の香と生花である蓮の花は、先ず互いに薰り合つて違和感無く混ざり合つて聞かれる、つまり、一つ香りに匂い合う、とされて不足のない組み合わせなのではないだろうか。しかしながら同じ帳台に「百歩」と称されるかんばしい香が存在すること、またさきにも述べたように、本作では広い空間の中でも香の混合が実現していたことを思い起こせば、やはり荷葉の名香と蓮の花のみが、阿弥陀三尊前の小空間で混合し匂い合ったとするのは、本作の他の巻における薰物使用の実際から考えて閉鎖的であると言わざるを得まい。④の三田村氏による説に關しては、花瓶や闕伽皿の花を造花とされていること、及び白檀像が白檀の香を放っているとの解釈を為さっていることにより、筆者が考える念誦堂の有様とは相まみえないものであった。それでは何がここ念誦堂に於いて匂い合ったと考えるべきか。鈴虫巻に登場したハス、スイレンの生花と二種の薰香は、まず曼陀羅前と阿弥陀仏前に於いて個々に語られていた。第一に曼陀羅前のハスの花と唐の百歩の衣香、次に阿弥陀仏前のスイレンと荷葉香である。各々がいかにして調和し、また引き立て合つて薰ったかについては、本文に言

及されるところではなかったが、特に後者が阿弥陀仏来迎を立体的に表現しようとしたものであったならば、スイレンの香と荷葉香とは、阿弥陀仏と関係の深いものとしてここに用意されたと考えられ、となると曼陀羅前、阿弥陀仏前に於いては、個々に個別の薫香世界の生成が目指されていることになろう。しかし室内の有様を個別に語るところを終え、より広い視点から相対的にこの念誦堂の有様を捉えようとしたとき、語り手の前には、二種ずつ混合し、引き立て合つて薫つていた四種の自然、人工の香りが、一空間に混ざり合い一つとなつて実現した、素晴らしい薫香世界が現出していたのである。この一つになつて匂い立つ薫香は、女三の宮の念誦堂の内装と、そこに於ける行事がいかに莊嚴かつ有り難くも貴いものであるかを伝えるべく、女三宮の爲の持仏開眼供養に於いて、あたかも彼女が成仏したかのように、彼女に似た阿弥陀仏が、六条院の念誦堂に來迎しているかの如き有様を、かぐわしく演出しているのである。

二 空海以来の仏教儀式の一つである「灌頂」に欠かせない仏具……

（前略）仏教建築の空間を考える際に、最も大きな意味があるのは、「修法」と「灌頂」という新しい形式の儀式が請來されたことである。（中略）「灌頂」とは、僧俗と仏の間に仏縁を結ばせる儀式であつて、最も初歩的な「結縁灌頂」から密教の奥義を師匠から弟子に伝える「伝法灌頂」まで、いくつかの段階がある。結縁灌頂では、受者は目隠しされて道場の中に導かれ、壇の上に開かれた曼陀羅の上に華を投げ、そ

れが落ちたところに描かれた仏との仏縁が結ばれる。(後略)

(『日本美術全集第5巻 密教寺院と仏像 平安の建築・彫刻Ⅰ』藤井恵介「密教の空間」より)

*2 「結縁灌頂」:

投華三昧耶とうげさんまやともいう。広く在家の俗世人に仏縁を結ばせるために行われる密教の灌頂である。灌頂壇において、覆面して諸尊に向かって花を投げさせ、花の当たった尊像がその人に有縁のものであるとして、その尊号を唱えさせつつ、その間に灌頂を行う。

(中村元『仏教語大事典上巻』より)

*3 この「経」は、法華経であろうというのが今日までの定説とされている:

法華経か。女人成仏が説かれる。

(新日本古典文学大系、鈴虫巻、七一頁)

仏前に供える経。法華経であろう。

(新潮日本古典集成、鈴虫巻、三四六頁)

*4 阿弥陀仏に対応すると思しき阿弥陀経がこの直後の本文に現れている:

さては阿弥陀経、唐の紙はもろくて、朝夕の御手馴らしにもいかゞとて、

(鈴虫巻、三四六頁)

*5 『原語秘訣』の言葉を拝借すれば、源氏と女三の宮の間の「今生の契」:

必源と女三宮と今生の契はうすく成たるによりて也弄

(『岷江入楚』卅八、六五三頁)

*6

この花が蓮のそれであるとの解釈は諸注釈書に共通のものである：
蓮華なるへし

蓮の事也

(『弄花抄』『原語秘訣』『岷江入楚』より)

*7

それが作り物であるとの指摘を行ったのは『一葉抄』であつたが：
蓮の事也法事にハ造花をおほくハ用る也ことくしきなといふつくり花たるへきにや

(『一葉抄』より)

*8

現在に至つてはそうした問題点が特記される注釈書もなく、作り花ではなく本物の蓮華であるとの読み方が一般的になされているようである：

(『一葉抄』より)

丈の高い見事な蓮の花を色どりよく揃えてお供えになる

*9

檀像：


(新潮日本古典集成、鈴虫巻、三四五頁)

梅檀でつくつた像のこと

*10

梅檀は香木のことである：

(中村 元『佛教語大辞典』下巻、九四三頁)

【梅檀】せんだん  candana の音写。梅檀と書くこともある。香木の一種。白、赤、紫などの諸種があつて、それぞれ高熱・風腫などの病にきくという。芳香を発する。

(以下略)

(中村 元『佛教語大辞典』下巻、八三八頁)

*11 見る者に嘉智子の面影を思い描かせてきたようである：

『東宝寺』第四によれば、承和八年、実恵は嵯峨天皇に灌頂を授けている（道場は東寺灌頂院か）。その折、実恵の綴る長文の「奉為嵯峨太上太后灌頂文」に、（中略）「灌頂の法会を四階之宝殿に設けたもう観音菩薩なり、まさに御身に陶すべし」という。美貌の太皇太后とはいえ観音に陶する（そのまま変身する）とまでいう実恵の灌頂文は、はなはだ暗示的である。（中略）実恵にとつてはとりわけ御願堂の本尊にふさわしい美麗な観音の姿を造り出すことに努めたであろう。ちなみに、像の坐高「三尺余」が太皇太后の身長と伝える六尺二寸に相当するのは偶然であろうか、不思議とすべきか。

（紺野敏文「観心寺如意輪観音像の風景」、日本美術全集第5巻『密教寺院と仏像』一六二頁）

身長六尺二寸。眉目如画。举止甚都（中略）風容絶異。手過於膝。髪委於地。観音皆驚

（国史大系第三巻『日本文徳天皇実録』嘉祥三年（八五〇）五月五日、嵯峨天皇太皇太后橘嘉智子の為の薨伝より、一〇頁）

*12 抹香：

末香とも書く。沈香・梅檀などを粉末にしたもの。（以下略）

(中村 元『佛教語大辞典』下巻、一二八四頁)
 *13 「阿弥陀仏の来迎に対する信仰は、平安朝に於いて最も盛んに行われていた。当時の文学作品を見ても、例えば『更級日記』の結末に、

(筆者菅原孝標の女は)天喜三年十月十三日の夜の夢に、(自分の)ゐたる屋のつまの庭に、阿弥陀仏たち給へり。さだかには見え給はず、霧ひとへ隔たれるやうに、透きて見え給(ふ)を、せめて絶え間に見たてまつれば、蓮花の座の、土をあがりたる高さ三四尺、仏の御丈六尺ばかりにて、金色に光り輝き給(ひ)て、御手かたつかたをばひろげたるやうに、いま片つかたには、印をつくり給(ひ)たるを、異人の目には見つけ奉らず、我一人見たてまつるに、さすがにいみじく、け恐ろしければ、簾のもと近く寄りても、え見奉らねば、仏、

「さは、この度は歸りて、後に迎へに来む」とのたまふ声、わが耳一つに聞えて、人はえ聞きつけずと見るに、うち驚きたれば、十四日也。この夢許ぞ、後の頼みとしける。」

(日本古典文学大系本五三三頁)
 と、阿弥陀仏の来迎に対する信仰が記るされている。また『源氏物語』夕顔の巻に、尼になつてゐる大弐の乳母が、源氏に「惜しげなき身なれど、すて難く思ひつることは、たゞ、かく前にさぶらひ、御覧ぜらるゝ事の、変り侍りなむことを、口惜しく思ひ給へ、たゆたひしかど、忌むことのしるしに、よみがへりてなん、かく渡りおはしますを、見給へ侍りぬれば、今なん、阿弥陀仏の御光も、心清く待たれ侍るべき」(古典文学大系本(一一二五

頁」と申し上げた、とあるのも来迎信仰に基づいていると考えられる。『栄花物語』には弥陀の来迎に関する記事はかなり多く見られる。即ち、卷十八「たまのうてな」に、法成寺の阿弥陀堂の扉絵について、「九品蓮台の有様なり。或は年頃の念仏により、或は、最後の十念により、或は終の時の善知識にあひ、或は乗急の人、或は戒急の物、行の品々に従ひ（て）極樂の迎を得たり。これは聖衆来迎樂と見ゆ。弥陀如来雲に乗りて、光を放ちて行者のもとにおはします。観音・勢至蓮台を捧げて共に来り給。諸々の菩薩・聖衆、音声伎樂をして喜び迎へとり給。……」（古典文学大系本（下）八三―八四頁）と記されており、その後、阿弥陀堂の本尊は九体の阿弥陀如来であるが、一体毎にその左右に金色の観音・勢至菩薩が居並び、「又蓮の糸を村濃の組にして、九体の御手より通して、中台の御手に綴めて、この念誦の所に、東さまに引かせ給へり。常にこの糸に御心をかけさせ給て、御念仏の心ざし絶へさせ給べきにあらず。御臨終の時この糸をひかへさせ給て、極樂に往生させ給べきと見えたり。九体はこれ九品往生にあてゝ造らせ給へるなるべし。」（大系本（下）八七頁）とある。また、卷三十一「つるのはやし」に、藤原道長は臨終に阿弥陀如来の御手から引いた糸を握り、念仏を唱えて亡くなったが、道長の臨終に立ち会って指導をし、葬式の導師をした天台座主院源は疑いなき上品上生の往生と言ったとあるのは有名な話である。さらに、源信僧都によって『来迎讃』や『極樂六時讃』が作られたと言われているが、そこに来迎思想が濃く現れているということは言うまでもない。因みに、藤原俊成の家集『長秋詠藻』下巻に「故如院（美福門院）より極樂の六時の讃の絵にかかれたるを其の心どもの歌なき所どものなほ多かる詠み添へて奉れと仰せられしかば詠みて奉りし所々の歌」（校注国史体系¹⁰四九九頁）という十九首の（六時讃の）歌があるが、

その歌の詞書は『六時讃』の文である。その他、『梁塵秘抄』卷二法文歌に「弥陀の誓ひぞ頼もしき、十悪五逆の人なれど、一度御名を称ふれば、来迎引接疑はず」(古典文学大系本三四六・三八六頁)、「我等が心に隙も無く、弥陀の浄土を願ふかな、輪廻の罪こそ重くとも、最後に必ず迎へたまへ」(大系本三八六頁)とある。以上のような記事から来迎信仰は平安朝の文学作品の背景をなしていたと言えよう。」

(石橋義秀氏「平安朝に於ける来迎信仰の展開」二六一〜三頁)

終章

第一節 本稿諸章の要点の概覽

第一章第一節では、古注以来、近現代の研究によつても、使用法や源流など、史実に於ける具体的な姿の不確かな袈衣香が、末摘花という女性と、その家系である常陸宮家の何を物語るものなのか、そしてこの香りが物語の展開に占める役割とは何か、これらの問題点について、第二節で扱う明石の上の袈衣香に関する考察結果を絡めつつ、諸氏の指摘を再考しながら考察を加えた。故常陸宮の時代の遺産である末摘花の「えびの香」は、『源氏物語』当時稀有で古風な香りではあるが、当世風のセンスには欠ける、非積極的な享受のあり方が示されている。しかしながら、だからこそ派手さを好まない女性の身に親しむ、控えめで奥ゆかしくも古風な香のあり方として、その香を聞き、その香り出る有様を身近にする光源氏に理解されている。光源氏の心に宿った「さればよ」との評言は、この香が末摘花の高貴さ、奥ゆかしさを裏付ける一方で、それまで彼が心に描いた末摘花像である、昔物語に出てくるような、高貴な身の上で風雅を愛しながらも不如意な生活を送る美しい姫君、彼女こそその人なのだ、との確信を促しているとも言える。「えびの香」は、落ちぶれ果てた宮家の古風な女性の身の上に相応しく匂い立つ香として、本物語に登場しているのである。そのことは、奇しくも初音巻でこの「袈衣香」を享受したのが明石の上であることにも附合していた。彼女は社会的身分の低さ故に、実の娘を養育することもかなわ

ない。しかしその一族の源流をたどってみれば、さきにも触れたように、父明石の入道は大臣家の出身、母尼君は中務宮の孫娘であつて、「裒衣香」は、一族が榮華を極めた頃の名残を示し残す香なのである。末摘花の「えびの香」もまた、常陸宮家の過去の榮華を反映するが故に、その香を聞く光源氏にその美点を思い起こさせるつまとなり、また一方では現在の零落振りという欠点を引き立たせてしまっている。末摘花の「えびの香」は、末摘花という女性の美点を反映するが故に、現在の欠点を引き立てる香りなのである。

第二節では、特に初音巻で登場している明石の上の侍従と裒衣香に着目し、その性質や物語に及ぼす影響について確認、類推を加えた。『源氏物語』には、「侍従」という薫物の名称が二度ほど登場している。第一に初音巻、明石の上の住居に於いて、第二に梅枝巻、光源氏によつて調合されたものが、螢兵部卿宮により讃えられている。また、名称が記載されていないにしても、同じく梅枝巻で紫の上が調合した「八条の式部卿の御方」の一方が侍従であることは通念である。「えび」「裒衣香」と称され、裒衣香（衣被香とも）と表記されるところの香は、末摘花巻、及び初音巻において、それぞれ末摘花、明石の上により用いられている。明石の上が生を受けた明石一族が琴や薫物といった文化を伝承していると考えられるのは、彼女の家系が皇室や大臣家をその源流とする、高貴なものであるからこそなのである。また、明石の上の侍従が、唐風の意匠が鑲められた室内環境のもと、高貴で豪華な方法で享受されるに相応しい格、質を誇るものであることは想像に難くない。初音巻の明石の上の侍従と衣被香もまた、梅枝巻での彼女の「百歩の方」がそうであるように、ひとかたならぬ高貴な伝承に基づくもののなのであつて、それゆえにこの上ない優雅さ、優艶さを醸し出すことができるのである。もちろんそこには明石の上自身の

才覚や教養といった素養や努力も反映されているのだが。明石の上が伝える血筋や文化の高貴さや雅やかさ、また平素の彼女からは推し量られることの少ない、男を惹きつけるような艶っぽい一面をも、この二種の香りによって、如実に著されているのである。

第三節では、朝顔前斎院の梅花がいかなる薫物であったのか、その知られざる薫香の特徴や性格についての類推を、梅枝巻に同じく登場する紫の上の梅花との比較を中心に、朝顔前斎院がこの薫香に託した思いや、その香が反映するこの前斎院の物語に於けるあり方について考えてみた。梅枝巻、薫物比べの場面には、二種の梅花が登場すると言われている。第一に朝顔前斎院により調合され、白瑠璃しろるりの壺に入れて六条院の光源氏のもとに届けられた薫物、そして第二には、紫の上が黒方、侍従に加え、合わせた梅花である。第二の梅花は本文に「梅花」の名が明記されているが、第一の場合はただそれが入れられた容器の様や、ともに届けられた消息文の装飾を鑑み、本物語成立の後、諸氏により、この薫物が梅花であろうとの観測がなされ、今日に至っている。また、紫の上の梅花は兵部卿宮により評価され、その薫香のいかなるものは本文に明るいことに対し、朝顔前斎院のそれに関しては、薫物比べの場に於いて各薫物の薫香の優劣が比較検討されるにあたり、実際に焚かれたことは想像されるものの、その薫香の実際は本文にて語られるところではない。ここではまず、前斎院の梅の花が白梅のそれであることの裏付けとして、朝顔前斎院が六条院にも咲く紅梅よりも一般に開花が早く、従って花の散ることも先として、朝顔前斎院えられる白梅を消息文を付けるのに用い、彼の朝顔前斎院が、この白梅の散りかけた有様を、自らが歌の中に詠まんとするところを視覚的、嗅覚的に体现しようとした為ではないかとの推測を行ってみた。また、前斎院の梅の花の白梅如何を論じて行くにあたり、桃園宮に

関する註として諸註に引用される、『拾遺和歌集』に於ける紀貫之による次の歌、及びそこに付けられた詞書の存在にも改めて着目してみた。そこに於ける貫之歌では桃園に住む前斎院と白梅とが、屏風絵、屏風歌を通じ關係を持つてゐる事に対し、本物語に於いては、桃園宮に住む朝顔前斎院によつて、白梅を裝飾し意識した梅花香が調合せられてゐるのである。このことを参考とすれば、梅枝巻で朝顔前斎院から薫物と併せて送られてきた消息文の付けられた「散りすぎたる梅の枝」、わずかに枝に残つた梅の花の色が、白であると考えられる可能性は、紅梅とする可能性に対し比較的高いと結論付ける一材料に成りうると言えよう。彼女がこうした白梅の裝飾により強調せんとしたところを類推するに、紅梅優位の六条院にあつて、朝顔前斎院が白梅を意識した梅花香を送つてくることは、彼の前斎院が無意識に、自身の嗜好のみを背景として爲した試みの結果と考えるよりは、六条院の紅梅「偏重」と、そうした白梅には不利な状況を充分理解した上で、紅梅に対し果敢にも挑んだ結果と考えるべきではなからうか。「散りかけの白梅の香は、女としての春を過ぎた私の色香に同じく、衰えたことであります。しかし白梅の香を体現させた私の梅花香は、明石姫君のお袖に高く深く染むことでしよう」——彼女からの消息をこのように解すことが許されれば、そこには彼女の並々ならぬ自信と勇氣が感ぜられる。それは、紅梅に対し香の優れるとされる白梅を施した裝飾に対する自信であり、同じく白梅の香を目指した薫香自体に対する自信、そしてこれらによつて導き出された紅梅に相對せんとする勇氣であつたのだろう。しかしながら、梅枝巻の薫物比べで最も春の恩恵に浴したのは紫の上の梅花香であつた。紫の上の魅力は、春という季節に最も花開くのであり、逆に言えば、春以外の季節にもその魅力を十分發揮するだけの、普遍的、相對的な力に欠けるのである。

対して前斎院の梅花は、六条院に於いてこそ紫の上にひけをとるに甘んじたが、それ自体の性質として、六条院の外部である一般社会に於いては、確固たる格と質を備えた優れた薫香としての評価を受けうるものであると言えよう。朝顔前斎院の梅花は、紫の上のそれがかいま見せる脆さ、はかなさとは対照的に、前斎院自身の確かな社会性を反映するかの如き確固たる格と質を誇る薫香なのである。

第二章「『源氏物語』の薫物と浄土」では、物語世界で「極楽」、「仏の御国」と絶賛される、薫香を内包する空間に焦点をあて、『源氏物語』が目指した浄土実現の方向性と、薫物、香りととの関係について考察を試みた。第一節では、藤壺中宮が存在する御簾の内側から漂う彼女の黒方が、その内外で名香並びに光源氏の衣裳の匂いと薫り合うことで、なぜ「極楽」という形容が附されるに到ったのかについて、黒方という薫物の仏教的な一面の明確化を中心に論じてみた。黒方は、藤壺中宮の印象として、その格や気品等彼女の相対的な特徴の他、恐らくは彼女が現在身に纏う衣裳の鈍色をも反映することのできる為に、出家した藤壺中宮にふさわしい薫香であるからこそ、ここ賢木巻に現されたのではないだろうか。だとすれば、藤壺中宮の黒方と朝顔前斎院のそれとでは、高貴で奥ゆかしい薫物であるとの共通点を示しながらも、仏教的な性格を示すか否かという違いが見られることになる。賢木巻の本場面は、故桐壺帝の為に藤壺中宮が執り行つた御八講の、果ての日の夜の様子を描いたものであり、また、藤壺中宮が出家を果たした直後の様子が展開されるものでもある。場面全体が世俗からかけ離れた仏教的に荘厳かつ重々しい、そして悲しい雰囲気呈しているなかに、黒方という薫香が焚かれる。それはその薫物が彼の中宮自身

のように高貴で奥ゆかしい人物にぴったりの印象の香を放つという相対的特徴からだけでなく、その薫物が「黒」という色によって仏教と縁をもつ、ここ賢木巻での藤壺中宮の周辺に於ける仏教的空間に相応しい薫香として理解できるからこそなのである。併せて考察した藤壺中宮の座す部屋の内に漂う名香の煙と光源氏の衣裳の匂いについては、まず前者の、薫物がある空間に焚き匂わせる際、その煙はどこから漂い出ているのか分からない程度にささやかに立ち上げるのが良いのだ、と言う光源氏の美意識に適合する「ほのか」な煙の様は、さきの黒方に並ぶ趣、品格の高さや重厚さを呈す、控えめで奥ゆかしい煙の立ち上がり方であると理解することができ、ここでもまた、その有様に藤壺中宮の面影を見ることができた。藤壺中宮方で焚かれた二種の薫香は、彼の中宮自身の特性、及びその周辺に醸し出される印象を、いわば嗅覚的、視覚的に投影していると考えることができ存在なのである。また、後者の光源氏の衣裳の匂いについても、藤壺中宮方で焚かれる黒方と名香が、その格、質、様式に至るまで、まさしく最上の薫物であると評すことができるように、そこに共存し薫り合う光源氏の衣裳の匂いもまた、極上のものであると理解することができる。以上確認してきた藤壺中宮の黒方、及び名香、並びに光源氏の衣裳の匂いという、三種の極上の薫香が集結し、互いにその薫香を引き立て合うことで、物語にはこの世の出来事でありながら、この世に有り難い極楽を聞き手に思わせる程に優れて素晴らしい薫香世界が展開せられていた。また、このことは本稿冒頭で確認したところの、御簾の内外に於ける嗅覚的極楽浄土生成以前の、御八講に於ける極楽浄土の発現に、作品の構成上対応したものであると考えられよう。最上の物が集まって実現した、極楽にも見紛うばかりの素晴らしくも有り難い御八講の、その果ての極乐的雰囲気をも曳航する空間のな

かで、偶然にも極上の薫香が集結し、またその一方は出家者たる藤壺中宮に相応しい、仏教的な印象を呈すことも可能な黒方という薫香であつたことにも依るであろうか、そうした薫香同士が互いの素晴らしさを引き立て合うことで、再び極楽浄土が藤壺中宮の住居内に於いて発現したのである。若紫巻に於いては、薫香世界を構成する薫物の種類、及び僧都の僧坊という、供養の場を背景とする点がここ賢木巻の藤壺中宮住居での薫香世界の場合と類似していた。しかしその複合、共存から派生した印象は大きく異なつたのである。前者は源氏の匂いの素晴らしさが僧都の空薫物や名香により引き立てられる形となり、結果、周辺に控える人々をしてその芳しい匂いに心惹かれながらも、同時にその匂いの主に對しての緊張感を増幅させる結果となつた。しかしながら賢木巻に於いては、元來藤壺中宮が光源氏に相對するに遜色ない人物であるどころか、彼を威圧する程の女性であつた事が起因するのである。藤壺中宮の座す御簾の内側で焚かれた黒方や名香は、さきの若紫巻でのように光源氏の匂いに威圧されることはなかつた。ここ御簾の内外に於ける三種の薫香のうち、特にその匂いのあり方に筆が及ぼされている黒方と光源氏の衣裳の匂いの二種の薫香は、一空間に共存し、薫り合い、また互いを引き立て合うに堪える、いずれも遜色無く極上の香を放薫物だつた。ここ賢木巻における藤壺中宮の黒方は、格、質ともに極上の香を放ち、また仏教的色彩をも帯びたものとして、藤壺中宮という女性の印象作中に嗅覚的に投影し、果ては名香や光源氏の匂いと薫り合い、極楽浄土を思わせる薫香世界を生成せしめる、一構成要素として、ここに登場せられているのである。

第二節では、『法華經』序品の一節を場面に重ね、また『宇津保物語』に於ける「仏の御国」

登場の方向性と対照することにより、『源氏物語』の浄土と人物、薫物との関係がいかなるものであるのかについて論述した。ここにおける「仏の御国」の発現は、南東の対の造営の妙と、紫の上がその場で發揮した魅力が最上かつ無比の素晴らしさであることを、物語っているのである。さきに参照した乙女巻本文で、秋を迎えた秋好中宮の御前と彼女の才覚が、その時の六条院に於いて最上のものとして際だつていたことが語られたが、仏国、極楽とまでの賞賛は見られなかった。春という季節は、紫の上が南東の対を、秋に見た西南の町、秋好中宮の住居の有様よりも美しく引き立てることの出来る季節なのである。春を遊ぶ才を備えた紫の上がしつらえたのであろう御簾の内の、おそらくは春という季節にある梅花にふさわしい、またそれと違和感無く混合することのできる薫香という人工的な条件が右記の如き有り難い晴天の到来による梅の開花という、一種神仏の幸いを受けたかの如き自然現象の発現によって、紫式部ら平安の世に生きた人々が『法華経』に見た「仏の御国」が実現されることで、紫の上が住む六条院の南東の対の春の有様の如何に素晴らしいものであるかが、存分に物語られているのである。

また、『源氏物語』にその成立を先行する『宇津保物語』に於いても、「仏の御国」という語は登場しているが、『宇津保物語』に於いて、浄土を物語に引き出した中心的な物事は俊蔭の琴の音であり、浄土を源とする琴曲の演奏であつた。『宇津保物語』の浄土は、主に琴の仏教的なものとの結びつきにより、物語に登場しているのである。対してその後出作品である『源氏物語』に於いては、琴ではなく、薫物と仏教行事に於ける内装が、浄土に例えられる程に優れて素晴らしい空間が物語に現出する要素となつた。そしてその浄土を現出せしめた薫物と内装には、双方に仏教的なものとの結びつきを確認することがで

きるのである。『源氏物語』の作者紫式部は、先行作品である『宇津保物語』とは異なった方向性を用いることにより、「仏の御国」、「極楽」、「浄土」の名で呼ばれる浄土の現出を、彼女が創り出す物語世界に於いて実現している。薫物は、仏教行事に於ける内装と同様の仏教的性質を持ち、また示すことのできるものとして、『源氏物語』に登場しているのである。

第三章では、鈴虫巻で女三宮のために光源氏が執り行う持仏開眼供養に於ける名香としての薫物に焦点をあて、さきに確認した三田村氏の説とは異なった角度からの考察により、薫物や花の香、仏教的な装飾品の数々が、女三の宮の持仏とともに、いかなる効果を彼女の為の持仏開眼供養に於いて演出すべく配されているのかについて論述を行い、『源氏物語』に於ける仏教行事の一つである持仏開眼供養で薫物が見せる働きや効果の解説にとめたつもりである。まず法華の曼陀羅前に匂わされる「唐の百部の薫衣香」は、物語に於いても現実世界に於いても当時の内外薫物文化にあつて重要な存在としてみなされるべき、朱雀院ゆかりの香と同じ形容「百歩」を附された香であり、またその方が当時の社会において希少な存在であったと考えられる唐の方に従つて合わせられたことをも考慮に入れた場合、曼陀羅前に供えられたこの名香は、同じく曼陀羅前に手向けられる銀の瓶の花同様に「ことくし」い、「朱雀院」の名を持つ人物のゆかりの威厳を聞く者に与え得るものであったと言えようし、あるいは源氏自身のはからいで、高貴な尼宮にふさわしい「ことくしき」花及び「唐の百部の薫衣香」を組み合わせ曼陀羅前に設置したと考えることもできるのではなからうか。一揃えの法具であるからこそ、源氏はそうした朱雀院の姫宮に

ふさわしい「ことくしき」ものとしての調和の実現を、ここ曼陀羅前に於いて目指したのである。そう考えてみると、大仰なのは花や名香のみならず、ここに見る「法華の曼陀羅」もまた、そうした供えにふさわしい、仏教美術としての莊嚴さを見る者に感じさせるという意味の「ことくしき」ものであったのかもしれないが、曼陀羅自身への印象等に關しては詳しく述べられておらず、これ以上の想像は難しい。

第二節では、阿弥陀三尊前に具えられた荷葉の方を合わせた名香を中心に、そこにおける供養の有様について考察を加えてみた。持仏の有様からは、光源氏が『源氏物語』成立当時の壇像建立のあり方に則ると同時に、女三の宮の精進と行く末の成仏とを願いから、持仏の所有者である彼^かの宮の姿を仏像に写させたのであって、言ってみれば個人的感傷もまた、仏像製作の方向性を左右したと考えられ、この女三宮の姿を彷彿とさせる白檀製の阿弥陀仏像には、そうした源氏の豊富な知識と、夫としての女三宮に対する思いやりが体现されていると考えてみた。さて、ここ阿弥陀三尊前に供えられた名香と花についてであるが、筆者はこれら三色の花が、蓮華よりも一回り以上小柄な「睡蓮」ではないかとの推論例証につとめ、阿弥陀三尊前の「蓮」が、三色ともにスイレンの花である可能性の存在を示唆してみた。その上で、光源氏が出家した女三宮の願いである成仏、及び彼女の持仏が阿弥陀三尊であることを考慮にいれ、あたかも三尊が紫の雲に乗り、女三の宮を迎えにきたかのごとき印象をも読者に与えてしかるべき供養の装飾を「青き白き紫の蓮」を用いて行っているのではないかと論述した。梅檀製の三尊が高く薫ったか否かは本文に明記されるところではないにしても、スイレンが供えられ、また名香に蓮の香によそえた荷葉の方が合わせられ、薫き匂わされている女三の宮の念誦堂に坐す阿弥陀三尊前に於いては、

来迎する仏のかぐわしさを思わせるようなしつらえが、視覚的、嗅覚的に、物語世界の中で実現されているのである。

さて、第三章のむすびに於いては、以上考察をもとに、結果、何が念誦堂に於いて一つに匂い合っているのかについて考えてみた。鈴虫巻に登場したハス、スイレンの生花と二種の薫香は、まず曼陀羅前と阿弥陀仏前に於いて個々に語られていた。第一に曼陀羅前のハスの花と唐の百歩の衣香、次に阿弥陀仏前のスイレンと荷葉香である。各々がいかにして調和し、また引き立て合って薫ったかについては、本文に言及されるところではなかったが、特に後者が阿弥陀仏来迎を立体的に表現しようとしたものであつたならば、スイレンの香と荷葉香とは、阿弥陀仏と関係の深いものとしてここに用意されたと考えられ、となると曼陀羅前、阿弥陀仏前に於いては、個々に個別の薫香世界の生成が目指されていることになる。しかし室内の有様を個別に語ることを終え、より広い視点から相対的にこの念誦堂の有様を捉えようとしたとき、語り手の前には、二種ずつ混合し、引き立て合って薫っていた四種の自然、人工の香りが、一空間に混ざり合い一つとなつて実現した、素晴らしい薫香世界が現出していたのである。この一つになつて匂い立つ薫香は、女三の宮の念誦堂の内装と、そこに於ける行事がいかに荘厳かつ有り難くも貴いものであるかを伝えるべく、女三宮の為の持仏開眼供養に於いて、あたかも彼女が成仏したかのように、彼女に似た阿弥陀仏が、この六条院に來迎しているかの如き有様を、かぐわしく演出しているのである。

第二節 『源氏物語』の香とは

本稿では、『源氏物語』に登場する薫物やその薫香、香りについて考察を加えてゆくにあたり、序章で確認した先達の研究を再考し、かつその内容を敢えて検証し、またそこで扱われることのなかった場面や問題点についても論述を試みることににより、新たな角度からの考察を行ってきたつもりである。しかしながら、『源氏物語』の薫香、香りとは何か、という相対的な結論を提示せんとするには、おおよそ恥じ、躊躇すべき質と量の浅薄さに帰結し、今後の課題を多く残すところとなってしまうことは否定できず、しかしながららむしろその事実を肯定的に受けとめ、筆者が今後志す学習、研究活動に繋げて行きたいと考えているのであるが、その中から、敢えて一つの結論の提示を試みるとすれば、『源氏物語』という物語は、人工的に生成された薫香、香りを、それまでの社会において音楽が占めていた位置にとって変わらせた作品ではないか、という推測を、ここに提示させて頂きたいのである。

『源氏物語』成立周辺の記録類、とくに国史に於いて、薫物に関する事項を確認することの難しいことは、藤河家利昭氏が「八条の式部卿」に於いて集成し紹介された本康親王に関する事項を通覧しても推し量れるところであろう。薫物の名手として名を残す人物の記録であっても、そこに確認できる文化的事績は、音楽や和歌に関わるものが主となっているのである。その当時、薫物という文化が、そうした国史類に記される性質のものであると理解されていなかったことが、ここから推察されるのである。

第二章第二節で確認したところであったが、『源氏物語』にその成立を先行する『宇津保物語』に於いて、「仏の御国」はじめ浄土世界に關しての挿話が為されるのは、音楽を契機とすることが殆どであつて、音楽と仏教的なものとのがこの物語では關連づけられていることが理解できた。作者個人の音楽に対する思いを反映した構成と考えるよりは、当時の社会において、音楽が仏教的なもの結び付けて考えられるほど重要、かつ正式なものであつたことを推し量るべきであらうかと考えられるところであるが、この音楽が占めた位置に位相してきたのが、『源氏物語』の薫物、香りであつたように思われる。ここでは浄土世界が物語に言及される際、その契機となつてゐるものの殆どが薫物、香りなのである。『源氏物語』は、『宇津保物語』が音楽に対して考えていたように、薫物、香りに対し、仏教的なものと關係しうる、正式なものとしての認識をもつていた、もしくはそうした認識を持つものとして薫物、香りを描くことを試みたのではないだろうか。

音楽と薫物、香りの並立的な關係は、例えば第一章第一節、第二節で扱つた、末摘花と明石の上の薫物の役割からも想起しうるものであると言える。何れの場合も宮家の文化を伝えることの例証として、薫物と音楽が登場してゐるのである。国史に於いて公にその傳承が語られたのが音楽などの文化、芸道であつて、薫物は含まれておらず、このことから、『源氏物語』当時の国史編纂姿勢には、薫物の傳承を音楽のそれと同等には考えていなかったことが推察される。しかしながら、本物語はそうした姿勢に対するかの如く、高貴かつ希少な薫物、香りの傳承を、音楽のそれとともに本文に於いて匂わせることにより、それらを所有する人物の貴賤を示してゐるのである。

さきに筆者は、『源氏物語』という物語が、人工的に生成された薫香、香りをそれまで

の社会において音楽が占めていた位置にとって変わらせた作品ではないか、との推論を提示したが、これに説明を多少付加させて頂くと、『源氏物語』は薫物、香りをそれまで音楽が占めていた位置まで立ち上らせ、並立させ、また時にはその役割に取って代わるという位相までも実現している作品ではないだろうか、との推論に現時点で到達しているのだが、これはあくまでも一部に対する浅薄な考察結果を相対化しただけの推論であって、本物語に於ける薫物、香りの総合的な考察を終えて後の機会にこそ、その論証に立ち向かうべきなのである。本稿は、その為の第一歩であり、モティベーションとして、筆者の今後の歩みを支え、突き動かしてくれるものと確信している。

【参考文献目録】

一、参考文献、CD・ROM目録

1. 『「あはれ」と「もののあはれ」の研究、特に源氏物語における、』 山崎良幸 著、風間書房、一九八六年、一月
2. 『和泉式部日記總索引』 東節夫、塚原鉄雄、前田欣吾 編、武蔵野書院、一九七五年、一月
3. 『色好みの構造・王朝文化の深層、』 中村真一郎 著、岩波書店、一九八五年
4. 『宇津保物語』一（日本古典文学大系¹⁰） 河野多麻 校注、岩波書店、一九五九年、一月
5. 『宇津保物語』二（日本古典文学大系¹¹） 河野多麻 校注、岩波書店、一九六一年、五月
6. 『宇津保物語』三（日本古典文学大系¹²） 河野多麻 校注、岩波書店、一九六二年、一月
7. 『宇津保物語』本文と索引 索引編 宇津保物語研究会 編、笠間書院、一九七五年、一月
8. 『宇津保物語』本文と索引 本文編 宇津保物語研究会 編、笠間書院、一九七五年、一月
9. 『生まれかわった法隆寺宝物館』 東京国立博物館 編、東京国立博物館、一九九九年、七月
10. 『栄華物語』日本文学大系 第一卷 國民圖書株式会社 編、國民圖書株式会社、一九二五年、一月
11. 『栄花物語』一（新編日本古典文学全集³¹） 山中裕 他 校注・訳、小学館
12. 『栄花物語』二（新編日本古典文学全集³²） 山中裕 他 校注・訳、小学館、一九九七年、一月
13. 『栄花物語』三（新編日本古典文学全集³³） 山中裕 他 校注・訳、小学館、一九九八年、三月
14. 『絵で読む古典シリーズ 源氏物語』 苦悩に充ちた愛の遍歴 安西剛 編、学習研究社、一九九八年、五月
15. 『尾州家河内本 源氏物語』 1 秋山虔、池田利夫共編、武蔵野書院、一九七七年

16. 『尾州家河内本 源氏物語 2』 秋山虔、池田利夫共編、武蔵野書院、一九七七年
17. 『尾州家河内本 源氏物語 3』 秋山虔、池田利夫共編、武蔵野書院、一九七七年
18. 『尾州家河内本 源氏物語 4』 秋山虔、池田利夫共編、武蔵野書院、一九七八年
19. 『尾州家河内本 源氏物語 5』 秋山虔、池田利夫共編、武蔵野書院、一九七八年
20. 『改訂新版 かげろふ日記 総索引』 佐伯梅友、伊牟田經久 編、風間書房、一九八一年、三月
21. 『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』 古沢未知男 著、桜風社、一九七五年
22. 『完本 源氏物語新解 上』 金子元臣 著、明治書院、一九四九年
23. 『完本 源氏物語新解 中』 金子元臣 著、明治書院、一九四九年
24. 『完本 源氏物語新解 下』 金子元臣 著、明治書院、一九四九年
25. 『完訳 源氏物語』 中田武司 訳、専修大学出版局、一九八六年
26. 『百済と倭国』 金廷鶴 著、六興出版、一九八一年、五月
27. 『薫集類抄』 上 藤原定長 筆、関西大学岩崎文庫
28. 『薫集類抄』 下 藤原定長 筆、関西大学岩崎文庫
29. 『群書類従 正・続分類総目録 文献年表』 塙保己一 編、続群書類従完成会、一九八六年
30. 『群書類従』 1 経済雑誌社、一九七八年
31. 『群書類従』 3 経済雑誌社、一九七七年
32. 『群書類従』 4 経済雑誌社、一九七七年

()

- | | | | | | | |
|-----|---------------|-----------|--|---------|--------------|-------------|
| 33. | 『群書類従』 | 10 | | | | 經濟雜誌社、一九七七年 |
| 34. | 『群書類従』 | 11 | | | | 經濟雜誌社、一九七七年 |
| 35. | 『群書類従』 | 12 | | | | 經濟雜誌社、一九七七年 |
| 36. | 『群書類従』 | 16 | | | | 經濟雜誌社、一九七七年 |
| 37. | 『群書類従』 | 第一輯 | | 塙保己一 | 編纂、続群書類従完成会、 | 一九八七年 |
| 38. | 『群書類従』 | 第二輯 | | 塙保己一 | 編纂、続群書類従完成会、 | 一九八七年 |
| 39. | 『群書類従』 | 第三輯 | | 塙保己一 | 編纂、続群書類従完成会、 | 一九八七年 |
| 40. | 『群書類従』 | 第十輯 | | 塙保己一 | 編纂、続群書類従完成会、 | 一九八六年 |
| 41. | 『群書類従』 | 第十九輯 | | 塙保己一 | 編纂、続群書類従完成会、 | 一九八七年 |
| 42. | 『群書類従』 | 目録 | | | 続群書類従完成会、 | 一九二九年 |
| 43. | 『景印 文淵閣四庫全書』 | 子部一五〇、譜録類 | | | 台灣商務印書館 | |
| 44. | 『袈裟史』 | | | 井筒雅風 | 著、文化時報社、 | 一九六五年、二月 |
| 45. | 『研究講座源氏物語の視界』 | 1 | | 王朝物語研究会 | 編、新典社、 | 一九九四年、四月 |
| 46. | 『研究講座源氏物語の視界』 | 2 | | 王朝物語研究会 | 編、新典社、 | 一九九五年、五月 |
| 47. | 『源氏の女君』 | | | 清水好子 | 著、三一書房、 | 一九五九年 |
| 48. | 『源氏物語 源注餘滴』 | | | 石川雅望 | 著、 | 一九〇六年 |
| 49. | 『源氏物語』 | | | 池田亀鑑他 | 著、朝日新聞社、 | 一九五一年 |

50. 『源氏物語』 秋山虔 著、岩波書店、一九六八年
51. 『源氏物語』 秋山虔 著、河出書房、一九五六年
52. 『源氏物語』 その住まいの世界・』 池浩三 著、中央公論美術出版、一九八九年
53. 『源氏物語』 いろ・にほひ・おと・』 中井和子 著、和泉書院、一九九一年
54. 『源氏物語』 豪華「源氏絵」の世界・』 秋山虔等監修、学習研究社、一九八八年
55. 『源氏物語』 古典を読む』（同時代ライブラリー） 秋山虔等監修、学習研究社、一九八八年
56. 『源氏物語』 一（日本古典文学全集） 阿部秋生、秋山虔、今井源衛 校注・訳、小学館、一九九六年
57. 『源氏物語』 二（日本古典文学全集） 阿部秋生、秋山虔、今井源衛 校注・訳、小学館
58. 『源氏物語』 三（日本古典文学全集） 阿部秋生、秋山虔、今井源衛 校注・訳、小学館、一九七二年、一月
59. 『源氏物語』 四（日本古典文学全集） 阿部秋生、秋山虔、今井源衛 校注・訳、小学館、一九七四年、二月
60. 『源氏物語』 五（日本古典文学全集） 阿部秋生、秋山虔、今井源衛 校注・訳、小学館
61. 『源氏物語』 六（日本古典文学全集） 阿部秋生、秋山虔、今井源衛 校注・訳、小学館
62. 『源氏物語』 一（日本古典文学大系） 山岸徳平 校注、岩波書店、一九五八年、一月
63. 『源氏物語』 二（日本古典文学大系） 山岸徳平 校注、岩波書店、一九五九年、一月
64. 『源氏物語』 三（日本古典文学大系） 山岸徳平 校注、岩波書店、一九六一年、一月
65. 『源氏物語』 四（日本古典文学大系） 山岸徳平 校注、岩波書店
66. 『源氏物語』 五（日本古典文学大系） 山岸徳平 校注、岩波書店

67. 『源氏物語』 五 (日本古典文学大系 19)
山岸德平 校注、岩波書店
68. 『源氏物語』 一 (岩波文庫本)
山岸德平 校注、岩波書店、一九六五年、六月
69. 『源氏物語』 二 (岩波文庫本)
山岸德平 校注、岩波書店、一九六五年、一〇月
70. 『源氏物語』 三 (岩波文庫本)
山岸德平 校注、岩波書店、一九六五年、一二月
71. 『源氏物語』 四 (岩波文庫本)
山岸德平 校注、岩波書店、一九六六年、二月
72. 『源氏物語』 五 (岩波文庫本)
山岸德平 校注、岩波書店、一九六六年、四月
73. 『源氏物語』 六 (岩波文庫本)
山岸德平 校注、岩波書店、一九六七年、一月
74. 『源氏物語』 一 (新潮日本古典文学集成 一八)
清水好子 校注、新潮社、一九七六年、六月
75. 『源氏物語』 二 (新潮日本古典文学集成 一九)
清水好子 校注、新潮社、一九七七年、七月
76. 『源氏物語』 三 (新潮日本古典文学集成 二〇)
清水好子 校注、新潮社、一九七八年、五月
77. 『源氏物語』 四 (新潮日本古典文学集成 二一)
清水好子 校注、新潮社、一九七九年、二月
78. 『源氏物語』 五 (新潮日本古典文学集成 二二)
清水好子 校注、新潮社、一九八〇年、九月
79. 『源氏物語』 六 (新潮日本古典文学集成 二三)
清水好子 校注、新潮社、一九八二年、一〇月
80. 『源氏物語』 七 (新潮日本古典文学集成 二四)
清水好子 校注、新潮社、一九八三年、一月
81. 『源氏物語』 八 (新潮日本古典文学集成 二五)
清水好子 校注、新潮社、一九八五年、四月
82. 『源氏物語』 1 (新編日本古典文学全集 20)
「紫式部 著」、小学館、一九九六年、一月
83. 『源氏物語』 2 (新編日本古典文学全集 21)
「紫式部 著」、小学館、一九九六年、一月

84. 『源氏物語』 3 (新編日本古典文学全集) 〔紫式部 著〕、小学館、一九九六年、一月
85. 『源氏物語』 4 (新編日本古典文学全集) 〔紫式部 著〕、小学館、一九九六年、一月
86. 『源氏物語』 5 (新編日本古典文学全集) 〔紫式部 著〕、小学館、一九九七年、七月
87. 『源氏物語』 6 (新編日本古典文学全集) 〔紫式部 著〕、小学館、一九九八年、四月
88. 『源氏物語』 1 (新日本古典文学大系 19) 柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎 編、岩波書店、年、月
89. 『源氏物語』 2 (新日本古典文学大系 20) 柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎 編、岩波書店、一九九四年、一月
90. 『源氏物語』 3 (新日本古典文学大系 21) 柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎 編、岩波書店、一九九五年、三月
91. 『源氏物語』 4 (新日本古典文学大系 22) 柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎 編、岩波書店
92. 『源氏物語』 5 (新日本古典文学大系 23) 柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎 編、岩波書店
93. 『源氏物語』 6 (新日本古典文学大系 24) 柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎 編、岩波書店
94. 『源氏物語』 卷一 紫式部 著、講談社、一九九六年、一二月
95. 『源氏物語』 卷二 紫式部 著、講談社、一九九七年、二月
96. 『源氏物語』 卷三 紫式部 著、講談社、一九九七年、四月
97. 『源氏物語』 卷四 紫式部 著、講談社、一九九七年、五月
98. 『源氏物語』 卷五 紫式部 著、講談社、一九九七年、七月
99. 『源氏物語』 卷六 紫式部 著、講談社、一九九七年、九月
100. 『源氏物語』 卷七 紫式部 著、講談社、一九九七年、十月

101. 『源氏物語』 卷八 紫式部 著、講談社、一九九七年、一二月
102. 『源氏物語』 卷九 紫式部 著、講談社、一九九八年、二月
103. 『源氏物語』 卷十 紫式部 著、講談社、一九九八年、四月
104. 『源氏物語』 1 (日本古典文学研究論文集成 松井健児⁶⁾ 編、若草書房、一九八八年、一月
105. 『源氏物語』 (日本文学研究論文集成 松井健児^{6,7)} 編、若草書房、一九九九年、八月
106. 『源氏物語』 上卷 (現代語訳国文学全集 松井健児⁴⁾ 窪田空穂 著、非凡閣、一九三五年
107. 『源氏物語』 上 (国語国文学研究史大成 阿部秋生³⁾ 等 編著、三省堂、一九六〇年
108. 『源氏物語』 1・3 (国文学解釈と鑑賞 別冊) 至文堂、一九八二年
109. 『源氏物語』 卷一 谷崎潤一郎 訳、山田孝雄 校閲、中央公論社、一九三九年
110. 『源氏物語』 卷二 谷崎潤一郎 訳、山田孝雄 校閲、中央公論社、一九三九年
111. 『源氏物語』 卷三 谷崎潤一郎 訳、山田孝雄 校閲、中央公論社、一九三九年
112. 『源氏物語』 卷四 谷崎潤一郎 訳、山田孝雄 校閲、中央公論社、一九三九年
113. 『源氏物語』 卷五 谷崎潤一郎 訳、山田孝雄 校閲、中央公論社、一九五二年
114. 『源氏物語』 卷六 谷崎潤一郎 訳、山田孝雄 校閲、中央公論社、一九五三年
115. 『源氏物語』 卷七 谷崎潤一郎 訳、山田孝雄 校閲、中央公論社、一九三九年
116. 『源氏物語』 卷八 谷崎潤一郎 訳、山田孝雄 校閲、中央公論社、一九三九年
117. 『源氏物語』 卷九 谷崎潤一郎 訳、山田孝雄 校閲、中央公論社、一九三九年

118.	『源氏物語』	卷一〇	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九三九年
119.	『源氏物語』	卷一一	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九三九年
120.	『源氏物語』	卷一二	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九三九年
121.	『源氏物語』	卷一三	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九三九年
122.	『源氏物語』	卷一四	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九三九年
123.	『源氏物語』	卷一五	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九三九年
124.	『源氏物語』	卷一六	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九四〇年
125.	『源氏物語』	卷一七	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九四〇年
126.	『源氏物語』	卷一八	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九四〇年
127.	『源氏物語』	卷一九	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九四〇年
128.	『源氏物語』	卷二十	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九四〇年
129.	『源氏物語』	卷二一	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九四〇年
130.	『源氏物語』	卷二二	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九四〇年
131.	『源氏物語』	卷二三	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九四〇年
132.	『源氏物語』	卷二四	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九四一年
133.	『源氏物語』	卷二五	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九四一年
134.	『源氏物語』	卷二六	谷崎潤一郎	訳、	山田孝雄	校閲、	中央公論社、	一九四一年

- ()
135. 『源氏物語 1』 紫式部 著、島津久基 校、岩波書店、一九五六年
136. 『源氏物語 2』 紫式部 著、島津久基 校、岩波書店、一九五六年
137. 『源氏物語 3』 紫式部 著、島津久基 校、岩波書店、一九五六年
138. 『源氏物語 4』 紫式部 著、島津久基 校、岩波書店、一九五六年
139. 『源氏物語 5』 紫式部 著、島津久基 校、岩波書店、一九五六年
140. 『源氏物語 下』 (増補国語国文学研究史大成 4) 阿部秋生 等 編著、三省堂、一九七七年
141. 『源氏物語絵巻・写真文庫』 岩波雄二郎 編、岩波書店、一九五四年
142. 『源氏物語絵巻』 徳川義宣 監修、中国新聞社、一九九四年、七月
143. 『源氏物語繪巻詞書總索引』 (古典籍索引叢書 第4巻) 築島裕 監修、汲古書院、一九九四年、三月
144. 『源氏物語絵巻を読む…物語絵の視界』 久下裕利 著、笠間書院、一九九六年、九月
145. 『源氏物語外篇山路の露…本文と総索引』 (笠間索引叢刊 1) 山内洋一郎 編、笠間書院、一九九六年、一月
146. 『源氏物語感覚の論理』 三田村雅子 著、有精堂出版、一九九六年、三月
147. 『源氏物語聞書 第1巻』 野村精一、上野英子 共編、汲古書院、一九八九年
148. 『源氏物語聞書 第2巻』 野村精一、上野英子 共編、汲古書院、一九八九年
149. 『源氏物語聞書 第3巻』 野村精一、上野英子 共編、汲古書院、一九九〇年
150. 『源氏物語聞書 第4巻』 野村精一、上野英子 共編、汲古書院、一九九〇年
151. 『源氏物語聞書 第5巻』 野村精一、上野英子 共編、汲古書院、一九九〇年

()

152. 『源氏物語聞書』 覚勝院抄 第6卷『野村精一、上野英子 共編、汲古書院、一九九〇年』
153. 『源氏物語聞書』 覚勝院抄 第7卷『野村精一、上野英子 共編、汲古書院、一九九〇年』
154. 『源氏物語聞書』 覚勝院抄 第8卷『野村精一、上野英子 共編、汲古書院、一九九〇年』
155. 『源氏物語聞書』 覚勝院抄 第10卷『野村精一、上野英子 共編、汲古書院、一九九一年』
156. 『源氏物語研究史』 重松信宏 著、風間書院、一九六一年
157. 『源氏物語講座・影響と研究』 折口信夫 著、創元社、一九五三年
158. 『源氏物語講座』 第1巻 今井卓爾 等 編、勉誠社、一九九一年
159. 『源氏物語講座』 第2巻 今井卓爾 等 編、勉誠社、一九九一年
160. 『源氏物語講座』 第3巻 今井卓爾 等 編、勉誠社、一九九二年
161. 『源氏物語講座』 第4巻 今井卓爾 等 編、勉誠社、一九九二年
162. 『源氏物語講座』 第5巻 今井卓爾 等 編、勉誠社、一九九一年
163. 『源氏物語講座』 第6巻 今井卓爾 等 編、勉誠社、一九九二年
164. 『源氏物語講座』 第7巻 今井卓爾 等 編、勉誠社、一九九二年
165. 『源氏物語講座』 第8巻 今井卓爾 等 編、勉誠社、一九九二年
166. 『源氏物語講座』 第9巻 今井卓爾 等 編、勉誠社、一九九二年
167. 『源氏物語講座』 第10巻 今井卓爾 等 編、勉誠社、一九九二年
168. 『源氏物語攷その他』 (笠間叢書) 今井卓爾 等 編、勉誠社、一九九三年、一月

169. 『源氏物語講読 上』 佐伯梅友 編著、武蔵野書院、一九九一年
170. 『源氏物語講読 中』 佐伯梅友 編著、武蔵野書院、一九九二年
171. 『源氏物語講読 下』 佐伯梅友 編著、武蔵野書院、一九九二年
172. 『源氏物語考論』（笠間叢書 207） 森一郎 著、笠間書院、一九八七年
173. 『源氏物語古系図の研究』 常磐井和子 著、笠間書院、一九七三年
174. 『源氏物語研究…明石一族をめぐって』 金順姫 著、三弥井書店、一九九五年、十一月
175. 『源氏物語研究序説』 阿部秋生 著、東京大学出版会、一九六三年
176. 『源氏物語語彙用例総索引』 自立語篇 上田英代「第1巻」 編、勉誠社、一九九四年、一月
177. 『源氏物語語彙用例総索引』 自立語篇 上田英代「第2巻」 編、勉誠社、一九九四年、一月
178. 『源氏物語語彙用例総索引』 自立語篇 上田英代「第3巻」 編、勉誠社、一九九四年、一月
179. 『源氏物語語彙用例総索引』 自立語篇 上田英代「第4巻」 編、勉誠社、一九九四年、一月
180. 『源氏物語語彙用例総索引』 自立語篇 上田英代「第5巻」 編、勉誠社、一九九四年、一月
181. 『源氏物語古注釈叢刊 2』 花鳥余情 源氏和秘抄 編、武蔵野書院、一九七八年、一月
182. 『源氏物語古注釈叢刊 4』 中野幸一 編、武蔵野書院、一九八〇年
183. 『源氏物語古注釈叢刊 5』 武蔵野書院、一九八二年
184. 『源氏物語古注釈叢刊 6』 武蔵野書院、一九八四年
185. 『源氏物語古注釈叢刊 7』 武蔵野書院、一九八六年

186. 『源氏物語古註集成 1』 松永本花鳥餘情』 伊井春樹 編、桜風社、一九七八年、四月
187. 『源氏物語古註集成 2』 桜風社、一九七八年
188. 『源氏物語古註集成 3』 桜風社、一九七九年
189. 『源氏物語古註集成 4』 孟津抄 上巻』 野村精一 編、桜風社、一九八〇年、二月
190. 『源氏物語古註集成 5』 孟津抄 中巻』 野村精一 編、桜風社、一九八一年
191. 『源氏物語古註集成 6』 孟津抄 下巻』 野村精一 編、桜風社、一九八二年
192. 『源氏物語古註集成 7』 内閣文庫本細流抄』 伊井春樹 編、桜風社、一九八〇年、一月
193. 『源氏物語古註集成 8』 弄花抄 付 源氏物語聞書』 伊井春樹 編、桜風社、一九八三年、四月
194. 『源氏物語古註集成 9』 一葉抄』 井爪康之 編、桜風社、一九八四年、三月
195. 『源氏物語古註集成 10』 桜風社、一九八四年
196. 『源氏物語古註集成 11』 岷江入楚 第一巻』 中田武司 編、桜風社、一九八〇年
197. 『源氏物語古註集成 12』 岷江入楚 第二巻』 中田武司 編、桜風社、一九八一年、二月
198. 『源氏物語古註集成 13』 岷江入楚 第三巻』 中田武司 編、桜風社、一九八二年、二月
199. 『源氏物語古註集成 14』 桜風社、一九八三年
200. 『源氏物語古註集成 15』 桜風社、一九八四年
201. 『源氏物語古註集成 22』 おうふう、一九九五年、二月
202. 『源氏物語古註集成 24』 萬水一露 第一巻』 桜風社、一九八八年

- ()
203. 『源氏物語古註集成 25』 萬水一露 第二卷』 桜風社、一九八九年
204. 『源氏物語古註集成 26』 萬水一露 第三卷』 桜風社、一九九〇年、二月
205. 『源氏物語古註集成 27』 萬水一露 第四卷』 伊井春樹 編、桜風社、一九九一年、二月
206. 『源氏物語古註集成 28』 伊井春樹 編、桜風社、一九九二年
207. 『源氏物語古註集成 2』 桜風社版』 稲賀敬二 編、桜風社、一九八五年
208. 『源氏物語古註集成 3』 桜風社版』 今井源衛 編、桜風社、一九八八年
209. 『源氏物語古註釈の研究』 (研究叢書 233) 岩坪健 著、和泉書院、一九九一年、二月
210. 『源氏物語古註釈の世界、写本から版本へ』 (実践女子大学文学部資料研究 1) 編、汲古書院、一九九四年、三月
211. 『源氏物語索引』 (新日本古典文学大系 別巻) 柳井滋「ほか」 編、岩波書店、一九九九年、二月
212. 『源氏物語作中人物論集』 森一郎 編著、勉誠社、一九九三年
213. 『源氏物語作中人物論・付 源氏物語作中人物論・論文目録』 森一郎 著、笠間書院、一九七九年
214. 『源氏物語事典』 岡一男 著、春秋社、一九六四年
215. 『源氏物語辞典』 北山谿太 著、平凡社、一九五七年
216. 『源氏物語事典』 秋山虔 編、学燈社、一九八九年
217. 『源氏物語事典 上』 池田亀鑑 編、東京堂、一九六七年
218. 『源氏物語事典 下』 池田亀鑑 編、東京堂、一九六七年
219. 『源氏物語主題論争・鴨の嘴・』 (笠間叢書 23) 藤村潔、大朝雄二 著、笠間書院、一九八九年、六月

220.	『源氏物語資料影印集成』	1
221.	『源氏物語資料影印集成』	2
222.	『源氏物語資料影印集成』	3
223.	『源氏物語資料影印集成』	4
224.	『源氏物語資料影印集成』	5
225.	『源氏物語資料影印集成』	6
226.	『源氏物語資料影印集成』	7
227.	『源氏物語資料影印集成』	8
228.	『源氏物語資料影印集成』	9
229.	『源氏物語資料影印集成』	10
230.	『源氏物語資料影印集成』	11
231.	『源氏物語資料影印集成』	12
232.	『源氏物語図典』	
233.	『源氏物語正篇の研究』	
234.	『源氏物語前後』	
235.	『源氏物語大成 巻一』	
236.	『源氏物語大成 巻二』	

中野幸一	編、早稻田大学出版部、一九八九年
中野幸一	編、早稻田大学出版部、一九九〇年
中野幸一	編、早稻田大学出版部、一九九〇年
中野幸一	編、早稻田大学出版部、一九九〇年
中野幸一	編、早稻田大学出版部、一九九〇年
中野幸一	編、早稻田大学出版部、一九九〇年
中野幸一	編、早稻田大学出版部、一九九〇年
中野幸一	編、早稻田大学出版部、一九九〇年
中野幸一	編、早稻田大学出版部、一九九〇年
中野幸一	編、早稻田大学出版部、一九九〇年
中野幸一	編、早稻田大学出版部、一九九〇年
秋山虔、小町谷照彦	編、小学館、一九九七年、七月
大朝雄二	著、桜風社、一九七五年
稻賀敬二	著、和泉書院、一九八〇年
池田龜鑑	編著、中央公論社、一九五三年
池田龜鑑	編著、中央公論社、一九五三年

237. 『源氏物語大成 卷三』 池田亀鑑 編著、中央公論社、一九五四年
238. 『源氏物語大成 卷四』 池田亀鑑 編著、中央公論社、一九五三年
239. 『源氏物語大成 卷五』 池田亀鑑 編著、中央公論社、一九五六年
240. 『源氏物語大成 卷六』 池田亀鑑 編著、中央公論社、一九五六年
241. 『源氏物語大成 卷七』 池田亀鑑 編著、中央公論社、一九五六年
242. 『源氏物語大成 卷八』 池田亀鑑 編著、中央公論社、一九五六年
243. 『源氏物語探究…都城と儀式』 廣川勝美 著、おうふう、一九九七年、四月
244. 『源氏物語注釈史の研究』（新展社研究叢書⁵⁹） 井上康之⁶⁵ 著、新展社、一九九三年、一月
245. 『源氏物語…伝冷泉為相他筆鎌倉期古写本』^上（愛媛大学古典叢刊²³） 紫式部 著、青葉図書、一九七五年
246. 『源氏物語…伝冷泉為相他筆鎌倉期古写本』^下（愛媛大学古典叢刊²⁴） 紫式部 著、青葉図書、一九七五年
247. 『源氏物語と音楽』（和泉選書⁵⁹） 中川和美 著、和泉書院、一九九一年
248. 『源氏物語と漢文学』（和漢比較文学叢書¹²） 編、汲古書院、一九九三年、一月
249. 『源氏物語と古代文学』（新典社研究叢書¹） 伊井春樹、高橋文二、廣川勝美 編、新典社、一九九七年、一月
250. 『源氏物語と白楽天』 中西進 著、岩波書店、一九九七年、七月
251. 『源氏物語と平安文学 第1集』 早稲田大学大学院中古文学研究会編、早稲田大学出版部、一九八八年
252. 『源氏物語と平安文学 第2集』 早稲田大学大学院中古文学研究会編、早稲田大学出版部、一九九一年
253. 『源氏物語と平安文学 第3集』 早稲田大学大学院中古文学研究会編、早稲田大学出版部、一九九三年、五月

()

254. 『源氏物語と平安文学』第4集』
255. 『源氏物語とその前後…研究と資料』(早稲田大学大学院中古文学研究会編、早稲田大学出版部、一九九五年、五月)
256. 『源氏物語と天台浄土教』(中古文学研究部学会編、武蔵野書院、一九九七年、七月)
257. 『源氏物語の王権と流離』(新典社研究叢書31) 著、若草書房、一九九六年、一〇月
258. 『源氏物語の音楽』日向一雅 著、新典社、一九八九年
259. 『源氏物語の〈語り〉と〈言説〉』(双書〈物語学を拓く〉1) 山田孝雄 著、宝文館、一九六九年
260. 『源氏物語の基礎的研究』三谷邦明 著、有精堂出版、一九九四年、一〇月
261. 『源氏物語の敬語法』岡一男 著、東京堂、一九五四年
262. 『源氏物語の敬語法』根来司 著、明治書院、一九九一年
263. 『源氏物語の形成』大久保一男 著、おうふう、一九九五年、四月
264. 『源氏物語の研究』深沢三千男 著、桜風社、一九七二年
265. 『源氏物語の研究』今井源衛 著、未来社、一九六二年
266. 『源氏物語の研究』阿部明子 編、東京大学出版会、一九七四年
267. 『源氏物語の研究』木船重昭 著、大学堂書店、一九六九年
268. 『源氏物語の研究』藤村潔 著、桜風社、一九八〇年
269. 『源氏物語の研究・成立と伝流・補訂版』(笠間武田宗俊 著、岩波書店、一九五四年)
270. 『源氏物語の研究・成立に関する諸問題』稲賀敬二 著、笠間書院、一九八三年
長谷川和子 著、東宝書房、一九五七年

271. 『源氏物語の研究 物語流通機構論』（笠間叢書 58） 稲賀敬二 著、笠間書院、一九九三年

272. 『源氏物語の研究 続』 木船重昭 著、大学堂書店、一九七三年

273. 『源氏物語の源泉受容の方法』 藤河家利昭 著、勉誠社、一九九五年、二月

274. 『源氏物語の原点』 伊藤博 著、明治書院、一九八〇年

275. 『源氏物語の考究』 盛岡常夫 著、風間書房、一九八三年

276. 『源氏物語の考察』（笠間叢書 157） 佐藤信雅 著、笠間書院、一九八一年

277. 『源氏物語の構造』 藤村潔 著、赤尾照文堂、一九七一年

278. 『源氏物語の構造 2』 藤村潔 著、赤尾照文堂、一九七一年

279. 『源氏物語の構想と鑑賞』 重松信宏 著、風間書房、一九六二年

280. 『源氏物語の国語学的研究』（中川浩文論文集 下） 中川浩文 著、思文閣出版、一九八五年

281. 『源氏物語の古代と文学』 三苫浩輔 著、桜風社、一九八五年

282. 『源氏物語のことばと語法』 北山谿太 著、武蔵野書院、一九五六年

283. 『源氏物語の語法「復刻版」』（源氏物語研究叢書 第16卷） 北山谿太 著、クレス出版、一九九七年、一〇月

284. 『源氏物語の語法と表現』（国研叢書 3） 阿久澤忠 著、国研出版、一九九三年、八月

285. 『源氏物語の自然描写と庭園』 外山英策 著、丁子屋書店、一九四三年

286. 『源氏物語の史的空間』 後藤祥子 著、東京大学出版会、一九八六年

287. 『源氏物語の実相…漢文学の内在化』 黒須重彦 著、笠間書院、一九九六年、十一月

288. 『源氏物語の宗教意識の根底』 斎藤暁子 著、桜風社、一九八七年
289. 『源氏物語の主題』上(源氏物語研究集成 第1巻) 増田繁夫、鈴木日出男、伊井春樹 編、風間書房、一九九八年、六月
290. 『源氏物語の主題』下(源氏物語研究集成 第2巻) 増田繁夫、鈴木日出男、伊井春樹 著、風間書房、一九九九年、九月
291. 『源氏物語の主題と方法』 森一郎 著、桜風社、一九八〇年
292. 『源氏物語の主題と構想』 高橋和夫 著、桜風社、一九七一年
293. 『源氏物語の主題と表現世界・人物造型と表現方法』 森一郎 著、勉誠社、一九九四年、七月
294. 『源氏物語の植物』 広江美之助 著、有明書房、一九七七年
295. 『源氏物語の世界・その方法と達成』 秋山虔 著、東京大学出版会、一九六四年
296. 『源氏物語の草子地・諸注と研究』 榎本正純 編著、笠間書院、一九八二年
297. 『源氏物語の創造』 野村精一 著、桜風社、一九六九年
298. 『源氏物語の想像力・史実と虚構』(笠間叢書 66) 藤本勝義 著、笠間書房、一九九四年、四月
299. 『源氏物語の準拠と話型』(明治大学人文科学研究会叢書) 日向一雅 著、至文堂、一九九九年、三月
300. 『源氏物語の地名映像』 松田豊子 著、風間書房、一九九四年、一月
301. 『源氏物語の伝承と創造』 三苫浩輔 著、おうふう、一九九五年、二月
302. 『源氏物語の表現機構』 小林茂美 著、おうふう、一九九六年、三月
303. 『源氏物語の表現と文体』上(源氏物語研究集成 第3巻) 増田繁夫、鈴木日出男、伊井春樹 編、風間書房、一九九八年、一月
304. 『源氏物語の表現と文体』(源氏物語研究集成 第3巻、第4巻) 増田繁夫、鈴木日出男、伊井春樹 編、風間書房、一九九九年、九月

305. 『源氏物語の風景と和歌』（研究叢書 10）清水婦久子 著、和泉書院、一九九七年、九月
306. 『源氏物語の仏教・その宗教性の考察と源泉となる教説についての探究』丸山キヨコ 著、創文社、一九八五年
307. 『源氏物語の文献学的研究序説』（笠間叢書 222）池田利夫 著、笠間書院、一九八八年
308. 『源氏物語の本文批判』（笠間叢書 274）吉岡曠 著、笠間書院、一九九四年、六月
309. 『源氏物語の探究 第一輯』重松信宏博士頌寿会 編、風間書房、一九七四年
310. 『源氏物語の探究 第二輯』源氏物語探究会 編、風間書房、一九七六年
311. 『源氏物語の探究 第十輯』源氏物語探究会 編、風間書房、一九八五年
312. 『源氏物語の探究 第十一輯』源氏物語探究会 編、風間書房、一九八六年
313. 『源氏物語の探究 第十二輯』源氏物語探究会 編、風間書房、一九八七年
314. 『源氏物語の探究 第十三輯』源氏物語探究会 編、風間書房、一九八八年
315. 『源氏物語の探究 第十四輯』源氏物語探究会 編、風間書房、一九八九年
316. 『源氏物語の探究 第十五輯』源氏物語探究会 編、風間書房、一九九〇年
317. 『源氏物語の探究 第十六輯』源氏物語探究会 編、風間書房、一九九一年
318. 『源氏物語の謎』（三省堂選書 98）伊井春樹 著、三省堂、一九八三年
319. 『源氏物語の文体と方法』清水好子 著、東京大学出版会、一九八〇年
320. 『源氏物語の方法』森一郎 著、桜風社、一九七一年
321. 『源氏物語の喩と王権』河添房江 著、有精堂出版、一九九二年、一月

- ()
322. 『源氏物語の歴史と虚構』 田中隆昭 著、勉誠社、一九九三年、六月
323. 『源氏物語の論理』 篠原昭二 著、東京大学出版会、一九九二年、五月
324. 『源氏物語引歌索引』（笠間索引叢刊 56） 伊井春樹 編、笠間書院、一九七七年

秋山虔、室伏信助 編、角川書店、一九九八年、一月

326. 『源氏物語評釈 1』 玉上琢彌 著、角川書店、一九六七年
327. 『源氏物語評釈 2』 玉上琢彌 著、角川書店、一九六七年
328. 『源氏物語評釈 3』 玉上琢彌 著、角川書店、一九六八年
329. 『源氏物語評釈 4』 玉上琢彌 著、角川書店、一九六八年
330. 『源氏物語評釈 5』 玉上琢彌 著、角川書店、一九六八年
331. 『源氏物語評釈 6』 玉上琢彌 著、角川書店、一九六八年
332. 『源氏物語評釈 7』 玉上琢彌 著、角川書店、一九六六年、六月
333. 『源氏物語評釈 8』 玉上琢彌 著、角川書店、一九六八年
334. 『源氏物語評釈 9』 玉上琢彌 著、角川書店、一九六八年
335. 『源氏物語評釈 10』 玉上琢彌 著、角川書店、一九六九年
336. 『源氏物語評釈 11』 玉上琢彌 著、角川書店、一九七五年
337. 『源氏物語評釈 12』 玉上琢彌 著、角川書店、一九七四年
338. 『源氏物語評釈 別巻 1』 玉上琢彌 著、角川書店、一九六八年

広島女学院大学日本文学科ワープロ用紙

339. 『源氏物語評釈 別巻2』 玉上琢彌 著、角川書店、一九六九年
340. 『源氏物語別本集成』第1巻 源氏物語別本集成刊行会 編、桜風社、一九八八年
341. 『源氏物語別本集成』第2巻 源氏物語別本集成刊行会 編、桜風社、一九八九年
342. 『源氏物語別本集成』第3巻 源氏物語別本集成刊行会 編、桜風社、一九九〇年
343. 『源氏物語別本集成』第4巻 源氏物語別本集成刊行会 編、桜風社、一九九一年
344. 『源氏物語別本集成』第5巻 源氏物語別本集成刊行会 編、桜風社、一九九二年
345. 『源氏物語別本集成』第6巻 源氏物語別本集成刊行会 編、桜風社、一九九三年、九月
346. 『源氏物語別本集成』第7巻 源氏物語別本集成刊行会 編、おうふう（桜風社）、一九九四年、一月
347. 『源氏物語別本集成』第8巻 源氏物語別本集成刊行会 編、桜風社、一九九六年、五月
348. 『源氏物語別本集成』第9巻 源氏物語別本集成刊行会 編、おうふう、一九九八年、五月
349. 『源氏物語への道・物語文学の世界』 川口久雄 著、吉川弘文館、一九九一年
350. 『源氏物語への招待』 今井源衛 著、小学館、一九九二年
351. 『源氏物語遙望』 細木郁代 著、一九八九年
352. 『源氏物語論：源氏物語評論「復刻版」』（源氏物語研究叢書第13巻）著、一九九七年、一月
353. 『源氏物語論考』 加藤順三、村井順 著、クレス出版、一九九七年、一月
354. 『源氏物語論考』 竹野長次 著、三省堂、一九五四年
355. 『源氏物語論考』（笠間叢書 294）伊井春樹 著、風間書房、一九八一年

- ()
356. 『源氏物語論集』 石田穰二 著、桜風社、一九七一年
357. 『源氏物語論』 清水好子 著、塙書房、一九七四年
358. 『源氏物語論』 吉岡曠 著、笠間書院、一九七二年
359. 『源氏物語論』 吉本隆明 著、大和書房、一九八二年
360. 『源氏物語を軸とした王朝文学世界の研究』 小山利彦 著、桜風社、一九八二年
361. 『源氏物語を中心としたうつくし・おもしろし攷』 松尾聡 著、笠間書院、一九七六年
362. 『源氏物語を中心とした語意の紛れ易い中古語攷』 松尾總 著、笠間書院、一九八四年、一〇月
363. 『源氏物語を中心とした語意の紛れ易い中古語攷』 松尾總 著、笠間書院、一九九一年、二月
364. 『原色 色彩語辞典・色の単語・色の熟語』 香川勇、長谷川望 編、黎明書房、一九八八年、九月
365. 『豪華「源氏絵」の世界源氏物語』 新訂「版」 編、学習研究社、一九九九年、七月
366. 『薫から浮舟へ』（研究講座 源氏物語の視界） 王朝物語研究会 編、新典社、一九九七年
367. 『講座 源氏物語の世界』 1 秋山虔 等 編、有斐閣、一九八〇年
368. 『講座 源氏物語の世界』 2 秋山虔 等 編、有斐閣、一九八〇年
369. 『講座 源氏物語の世界』 3 秋山虔 等 編、有斐閣、一九八〇年
370. 『講座 源氏物語の世界』 4 秋山虔 等 編、有斐閣、一九八〇年
371. 『講座 源氏物語の世界』 5 秋山虔 等 編、有斐閣、一九八一年
372. 『講座 源氏物語の世界』 6 秋山虔 等 編、有斐閣、一九八一年

- ()
373. 『講座 源氏物語の世界 7』 秋山虔 等 編、有斐閣、一九八二年
374. 『講座 源氏物語の世界 8』 秋山虔 等 編、有斐閣、一九八三年
375. 『講座 源氏物語の世界 9』 秋山虔 等 編、有斐閣、一九八四年
376. 『高山寺資料叢書 別巻 高山寺典籍文書の研究』 編、東京大學出版會、一九八〇年、一二月
377. 『故事類苑 植物部一』 吉川弘文館、一九七一年、三月
378. 『故事類苑 植物部二 金石部』 吉川弘文館、一九七一年、六月
379. 『故事類苑 宗教部二』 吉川弘文館、一九六八年、一〇月
380. 『故事類苑 神祇部三』 吉川弘文館、一九六八年、六月
381. 『故事類苑 遊戲部』 吉川弘文館、一九六九年、一月
382. 『国史大系』 1 經濟雜誌社、一八九七年
383. 『国史大系』 2 經濟雜誌社、一八九七年
384. 『国史大系』 3 經濟雜誌社、一八九七年
385. 『国史大系』 4 經濟雜誌社、一八九七年
386. 『国史大系』 5 經濟雜誌社、一八九七年
387. 『国史大系』 6 經濟雜誌社、一八九七年
388. 『国史大系』 8 經濟雜誌社、一八九八年
389. 『国史大系』 15 經濟雜誌社、一九〇一年

407.	『湖月抄』	源氏物語古系図』	北村季吟	著、林和泉、一六七三年
408.	『湖月抄』	源氏物語年立 上』	北村季吟	著、林和泉、一六七三年
409.	『湖月抄』	源氏物語年立 下』	北村季吟	著、林和泉、一六七三年
410.	『紫明抄・河海抄』	玉上琢彌編、山本利達、石田穰二	校訂、角川書店、一九六八年、六月	
411.	『浄土三部經』	無量壽經(岩波文庫本)	中村元、早島鏡正、紀野一義	訳註、岩波書店、一九六三年、一月
412.	『浄土三部經』	觀無量壽經(岩波文庫本)	中村元、早島鏡正、紀野一義	訳註、岩波書店、一九六四年、九月
413.	『新校 群書類從』	1	増訂再共編、名著普及会、一九七八年	
414.	『新校 群書類從』	2	増訂再共編、名著普及会、一九七八年	
415.	『新校 群書類從』	3	増訂再共編、名著普及会、一九七八年	
416.	『新校 群書類從』	4	増訂再共編、名著普及会、一九七八年	
417.	『新校 群書類從』	6	増訂再共編、名著普及会、一九七七年	
418.	『新校 群書類從』	10	増訂再共編、名著普及会、一九七七年	
419.	『新校 群書類從』	14	増訂再共編、名著普及会、一九七七年	
420.	『新校 群書類從』	15	増訂再共編、名著普及会、一九七七年	
421.	『新校 群書類從』	23	増訂再共編、名著普及会、一九七七年	
422.	『新校 群書類從解題集』	名著普及会研究開発部 編、名著普及会、一九八四年	増訂再共編、名著普及会、一九八四年	
423.	『新校 群書類從索引』	1	増訂再共編、名著普及会、一九八四年	

()

424. 『新校 群書類従索引』² 塙保己一、川俣馨一 増訂再共編、名著普及会、一九八四年
425. 『新校 群書類従 別冊』 名著普及会 編、名著普及会、一九七八年
426. 『新講 源氏物語 上巻』 池田亀鑑 著、至文堂、一九五一年
427. 『新講 源氏物語 下巻』 池田亀鑑 著、至文堂、一九五一年
428. 『神皇正統記評釋』 大町芳衛 著、明治書院、一九二五年、二月
429. 『新釈漢文学大系 第34巻 楚辭』 星川清孝 著、明治書院、一九七三年、一二月
430. 『新註校定 国譯本草綱目』 第五冊 鈴木真海 訳、春陽堂書店、一九七九年、六月
431. 『新編国歌大観』
432. 『清少納言と紫式部・紫式部・その生活と心理』^{CD-ROM版、角川書店、一九九六年}
梅沢和軒・神田秀夫 著、クレス出版、一九九七年、五月
433. 『増註源氏物語湖月抄 増補版』 上巻 北村季吟 著、名著普及会、一九七九年、一月
434. 『増註源氏物語湖月抄 増補版』 註巻 北村季吟 著、名著普及会、一九七九年、一月
435. 『増註源氏物語湖月抄 増補版』 下巻 北村季吟 著、名著普及会、一九七九年、一月
436. 『増補 雅言集覧』 (全三冊) 臨川書店、一九六五年、一月
437. 『統群書類従』 第拾九輯下 統群書類従完成会、一九二八年、六月
438. 『統群書類従』 第參拾壹輯上 統群書類従完成会、一九二七年、一二月
439. 『続国訳漢文大成 白樂天全詩集』^{第一巻} 佐久節 訳、日本図書センター、一九七八年、七月
440. 『対校 源氏物語新釈 1』 国書刊行会、一九七一年

- | | | | | | | | |
|------|------------|--------|------|-----------|------------------|--|-------------|
| 441. | 『対校』 | 源氏物語新釈 | 2』 | | | | 国書刊行会、一九七一年 |
| 442. | 『対校』 | 源氏物語新釈 | 3』 | | | | 国書刊行会、一九七一年 |
| 443. | 『対校』 | 源氏物語新釈 | 4』 | | | | 国書刊行会、一九七一年 |
| 444. | 『対校』 | 源氏物語新釈 | 5』 | | | | 国書刊行会、一九七二年 |
| 445. | 『対校』 | 源氏物語新釈 | 6』 | | | | 国書刊行会、一九七二年 |
| 446. | 『対校』 | 源氏物語新釈 | 別、1』 | | | | 国書刊行会、一九七四年 |
| 447. | 『対校』 | 源氏物語新釈 | 別、2』 | | | | 国書刊行会、一九七四年 |
| 448. | 『大日本古記録』 | 御堂関白記 | 中』 | 東京大学史料編纂所 | 編、岩波書店、一九八四年、六月 | | |
| 449. | 『対訳』 | 源氏物語講話 | 1』 | | 島津久基著、矢島書房、一九四九年 | | |
| 450. | 『対訳』 | 源氏物語講話 | 2』 | | 島津久基著、矢島書房、一九四九年 | | |
| 451. | 『対訳』 | 源氏物語講話 | 3』 | | 島津久基著、矢島書房、一九四九年 | | |
| 452. | 『対訳』 | 源氏物語講話 | 4』 | | 島津久基著、矢島書房、一九四九年 | | |
| 453. | 『対訳』 | 源氏物語講話 | 5』 | | 島津久基著、矢島書房、一九四九年 | | |
| 454. | 『対訳』 | 源氏物語講話 | 6』 | | 島津久基著、矢島書房、一九五〇年 | | |
| 455. | 『高松宮御蔵河内本』 | 源氏物語 | 1』 | | 臨川書店、一九八八年 | | |
| 456. | 『高松宮御蔵河内本』 | 源氏物語 | 2』 | | 臨川書店、一九八八年 | | |
| 457. | 『高松宮御蔵河内本』 | 源氏物語 | 3』 | | 臨川書店、一九八八年 | | |

458. 『高松宮御藏河内本 源氏物語 4』 臨川書店、一九八八年
459. 『朝鮮語大辞典』(全二冊 付補卷) 大阪外国語大学朝鮮語研究室 編、角川書店、一九八六年、二月
460. 『特別展 源氏物語の世界、王朝文化への憧憬』 宇治市歴史資料館 編、宇治市歴史資料館、一九九一年、一月
461. 『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』(新日本古典文学大系42) 藤田加代 著、風間書房、一九八〇年
462. 『「にほふ」と「かをる」』 源氏物語における人物造型の手法とその表現、一九八〇年
463. 『日本大百科全書』¹² 相賀徹夫 編、小学館、一九八六年、一月
464. 『日本の美術』¹²(第83号 供養具と僧具) 鈴木規夫 著、文化庁、東京国立博物館、京都国立博物館 監修、一九八九年、一二月
465. 『日本の野生植物』(草本 II 離弁花類) 佐竹義輔 他 編、平凡社、一九八二年、三月
466. 『日本美術全集 第5巻 密教寺院と仏像』 水野敬三 他 編、講談社、一九九二年、八月
467. 『日本百科大辞典』二 名著普及会、一九八八年、一月
468. 『日本百科大辞典』三 名著普及会、一九八八年、一月
469. 『日本文学講座』五 大修館、一九八七年
470. 『日本文芸と絵画の相関性の研究』 片岡達郎 著、笠間書院、一九七五年
471. 『光源氏と女君たち』(研究講座 3) 阿部秋生 著、東京大学出版会、一九八九年
472. 『光源氏論』 近藤富枝 著、文化出版局、一九八八年
473. 『服装から見た源氏物語』 仏教文学研究会 編、法蔵館、一九六五年、四月
474. 『仏教文学研究』

475. 『仏教文学研究』 仏教文学研究会 編、法藏館、一九六九年、四月
476. 『仏教文学研究』 編、法藏館、一九七一年、四月
477. 『仏教文学講座 第九卷 研究史と研究文献目録』 伊藤博之、今成元昭、山田昭全 編、勉誠社、一九九四年、八月
478. 『ブリタニカ国際大百科事典』¹³ フランク・B・ギブニー 編、ティビーエス・ブリタニカ、一九七四年、六月
479. 『法隆寺圖説』 樋口正徳 編、朝日新聞社、一九四二年、七月
480. 『法華経』上（岩波文庫本） 坂本幸男・岩本裕 訳註、岩波書店、一九六二年、七月
481. 『法華経』中（岩波文庫本） 坂本幸男・岩本裕 訳註、岩波書店、一九六四年、三月
482. 『法華経』下（岩波文庫本） 坂本幸男・岩本裕 訳註、岩波書店、一九六七年、一月
483. 『北戸録』（景印 文淵閣四庫全書 第五八九冊 段公路 撰、亀圖註、台灣商務印書館）
484. 『枕草子解環』 萩谷朴 著
485. 『枕草子 本文及び総索引』（索引叢書³³） 榊原邦彦 編、和泉書院、一九九四年、一月
486. 『未刊国文古注釈大系』第五卷 吉澤義則 編、清文堂出版、一九六九年、三月
487. 『御堂関白記全註釈』長和元年 山中裕 編、高科書店、一九八八年、五月
488. 『御堂関白記全註釈』長和二年 山中裕 編、高科書店、一九九七年、六月
489. 『御堂関白記全註釈』寛仁元年 山中裕 編、高科書店、一九八五年、一月
490. 『御堂関白記全註釈』寛仁二年上 山中裕 編、高科書店、一九九〇年、六月
491. 『御堂関白記全註釈』寛仁二年下 山中裕 編、高科書店、一九九一年、二月

492. 『御堂関白記全註釈 寛弘元年』
493. 『岷江入楚』 27 (篝火) 42 (雲隱) (源氏物語古注、山中裕編、高橋書店、一九九四年、九月)
494. 『紫式部日記語彙用例総索引』 中院通勝 (著)、武蔵野書院、一九九七年、一〇月
495. 『陽明文庫蔵本 御堂関白記 自筆本総索引』 (一) 今西祐一郎、他編、勉誠社、一九九七年、二月
496. 『陽明文庫蔵本 御堂関白記 自筆本総索引』 (二) 峰岸明、他編、汲古書院、一九九五年、六月
497. 『歴史物語成立序説・源氏物語・栄花物語を中心として』 峰岸明、他編、汲古書院、一九九五年、七月
498. 『六条院の内と外』 (研究講座 源氏物語の視界 4) 山中裕、著、東京大学出版会、一九六二年
499. 『論集源氏物語とその前後 1』 王朝物語研究会 編、新典社、一九九七年、五月
500. 『論集源氏物語とその前後 2』 王朝物語研究会 編、新典社、一九九〇年
501. 『論集源氏物語とその前後 3』 王朝物語研究会 編、新典社、一九九一年
502. 『論集源氏物語とその前後 4』 王朝物語研究会 編、新典社、一九九一年
503. 『論集源氏物語とその前後 5』 王朝物語研究会 編、新典社、一九九四年、五月

二、参考雑誌掲載論文目録

1. 「哀傷と交情の構図・朝顔巻の光源氏と朝顔宮」
姥沢隆司 著、『帯広大谷短期大学紀要』、一九八六年
2. 「明石一族の栄華とは何であつたのか」
今西祐一郎 著、『国文学解釈と鑑賞』、一九八〇年、六月
3. 「朝顔斎院」
高橋和夫 著、『日本文学』、一九六五年、九月
4. 「槿斎院をめぐつて」
福田侃子 著、『人文学報』、一九六四年
5. 「朝顔の周辺と斎院御禊のこと」
小山利彦 著、『専修国文』、専修大学国語国文学会、一九八九年、九月
6. 「朝顔の姫君―慎みの密やかな仕合わせ」
谷口茂 著、『明治學院論叢 吉田泰教授定年記念論文集』、明治学院大学一般教育部学会、一九九七年、三月
7. 「朝顔の姫君について」
青山一也 著、『国文学研究』、早稲田大学国文学会
8. 「『朝顔』巻における「桃園の宮」の再検討・醍醐皇女の「桃園宮」を通して」
袴田光康 著、『國語國文』、京都大学文学部国語学国文学研究室 編、中央図書出版社、一九九九年、四月
9. 「梅枝の巻の薫物合わせと仁明帝」
藤河家利昭 著、『言語文化論集』（広島女学院大学大学院）、広島女学院大学、一九九九年、三月
10. 「梅枝巻の光源氏」
河添房江 著、『文学』、一九八九年、夏
11. 「宇津保物語の琵琶」
島田和枝 著、『広島女学院大学大学院言語文化論叢』、一九九八年、三月
12. 「『栄華物語』にみえる法華八講」
安東大隆 著、『別府大学紀要』、別府大学会、一九九〇年、一月
13. 「海龍王と住吉信仰・海龍王となつた大王をめぐる」
石原昭平 著、『むらさき』、一九八九年、七月
14. 「兼明親王の生涯と文学（下）」
大曾根章介 著、『国語と国文学』、一九六二年、二月
15. 「寛永寺天台会「法華八講」見学会」
神田朋美 著、『実践国文学』、実践国文学会、第五十一号
16. 「貴種流離譚の展開・「源氏物語」須磨・明石の巻の蛭子・住吉・難波をめぐつて」
石原昭平 著、『文学・語学』、一九八五年、五月

- 1 7. 「源氏物語研究」 光源氏の無罪を立証する」 今井優 著、『神戸学院大学 人文学部紀要』、一九九〇年、三月
- 1 8. 「源氏物語未摘花の巻の方法」 中島朋恵 著、『中古文学』、一九七九年、四月
- 1 9. 「『源氏物語』と『法華経』」 近江の君と長者 窮子 諭、編、『仏教文学会』、一九九六年、三月
- 2 0. 「『源氏物語』と法華八講」 甲斐稔 著、『風俗』、日本風俗史学会会誌、一九八二年、九月
- 2 1. 「『源氏物語』と歴史意識」 篠原昭二 著、『東京大学人文科学紀要』、一九九一年、三月
- 2 2. 「源氏物語と歴史叙述」 森一郎 著、『文藝』臨時増刊、一九九〇年、一〇月
- 2 3. 「源氏物語における笑い」 松尾總 著、『国文学解釈と教材の研究』、一九六六年、一月
- 2 4. 「源氏物語にみられる出家について、その一」 阿部俊子 著、『学習院女子短大 国語国文論集』、一九七一年、一月
- 2 5. 「『源氏物語』における「中宮」」 島田とよ子 著、『大谷女子大国文』、一九八三年、二月
- 2 6. 「源氏物語における「ゆかり」について」 鈴木一雄 著、『むらさき』、一九六五年、一月
- 2 7. 「源氏物語の〈琴〉の音―知の歴史語りの遠近法」 高橋亨 著、『季刊 ichiko』、一九九二年、四月
- 2 8. 「源氏物語の薫香・紫の上と未摘花をめぐる」 瀬戸宏太 著、『国語と国文学』、東京大学国語国文学会 編、至文堂、一九九二年、九月
- 2 9. 「『源氏物語』の皇后冊立の状況」 島田とよ子 著、『大谷女子大学紀要』、一九九一年三月
- 3 0. 「源氏物語の醜女・未摘花・花散里の場合」 林田孝和 著、『日本文学論究』、一九八四年、五月
- 3 1. 「源氏物語の〈藤壺〉」 大朝雄二 著、『国文学解釈と教材の研究』、學燈社、一九八二年、九月臨時増刊号
- 3 2. 「醜女の問題・未摘花・蓬生・花散里」 林田孝和 著、『国文学解釈と教材の研究』、一九八七年、一月
- 3 3. 「嫉妬する未摘花」 島内景二 著、『国文学解釈と教材の研究』、一九九三年、一〇月

- 3 4 「十世紀の平安京一条北辺の開発について、桃園殿を中心にして」、一九八三年、六月
- 3 5 「未摘花」 高橋康夫 著、『日本建築学会論文報告集』、一九八三年、六月
- 3 6 「未摘花試論」 森藤侃子 著、『国文学解釈と教材の研究』、學燈社、一九七四年、九月
- 3 7 「未摘花の境涯」 宮川葉子 著、『緑岡詞林』、一九八一年、三月
- 3 8 「未摘花の問題」 安東大隆 著、『文学研究』、一九七六年、一月
- 3 9 「未摘花の問題」 (源氏物語はいかに読まれているか(特集)) 今井源衛 著、『日本文学』33、一九五五年、九月
- 4 0 「未摘花の古風固守とその脱皮」 安藤亨子 著、『国文学解釈と鑑賞』、一九八〇年、五月
- 4 1 「未摘花の姫君が求めたもの、物語に於ける現実世界への一小径」 三苦浩輔 著、『國學院雜誌』、一九八四年、一月
- 4 2 「未摘花の唐衣詠、光源氏の表現をめぐって」 井上泰 著、『成蹊国文』、一九九四年、三月
- 4 3 「未摘花は光源氏にとって何であつたか」 (源氏物語の謎(特集)) 伊藤一男 著、『語学文学』、一九九四年
- 4 4 「未摘花巻の再検討」 室伏信助 著、『国文学解釈と教材の研究』、一九八〇年、五月
- 4 5 「未摘花論、変貌問題をめぐって」 吉海直人 著、『同志社女子大』、一九九二年、一月
- 4 6 「住吉詣における明石君登場の意義」 武原弘 著、『日本文学研究』(梅花女子大)、一九八一年、一月
- 4 7 「住吉大社神宮記について」 武田誠子 著、『中古文学』、一九九二年、六月
- 4 8 「清少納言の身分意識、特に「小白河の八講」の藤原道隆をめぐって」 坂本太郎 著、『国史学』、一九七二年、一月
- 4 9 「多武峰少将物語」の史的背景、桃園大納言帥氏をめぐって」 安東大隆 著、『別府大学紀要』、別府大学会、一九七九年、一月
- 5 0 「中務宮と明石物語」、『松風』巻の表現構造」 新田孝子 著、『図書館学研究報文』、一九八三年、一月
- 浅尾広良 著、『中古文学』、一九八六年、一月

- 5 1. 「日本古代の後宮について」 柳たか 著、『お茶の水史学』、一九七〇年、九月
- 5 2. 「八条の式部卿について」 藤河家利昭 著、『国語国文学誌』（広島女学院大学）、広島女学院大学日本文学会、一九九七年、十二月
- 5 3. 「「初音」巻の方法」 大谷真理子 著、『国語と国文学』、東京大学国語国文学会、一九九八年、四月
- 5 4. 「光源氏の系譜」 坂本和子 著、『國學院雜誌』、一九七五年、十二月
- 5 5. 「光源氏の女性遍歴と藤壺」 室永優子 著、『むらさき』、一九八九年、七月
- 5 6. 「光源氏の復活・松風巻からの視点」 高田祐彦 著、『国語と国文学』、一九八九年、二月
- 5 7. 「『火の宮』尊子内親王・『かかやく日の宮』の周辺」 今西祐一郎 著、『国語国文』、一九八二年、八月
- 5 8. 「屏風歌制作についての考察」 清水好子 著、『関西大学国文学』、一九七六年、十一月
- 5 9. 「屏風歌について」 川村裕子 著、『立教大学日本文学』、一九七九年、一月
- 6 0. 「藤壺入内の深層——人物論の再検討Ⅱ」 吉海直人 著、『國學院雜誌』、一九九二年、四月
- 6 1. 「藤壺宮出家とその意味」 広川勝美 著、『同志社国文学』、一九六七年、三月
- 6 2. 「藤壺の宮と光源氏」(一) 阿部秋生 著、『文学』、岩波書店、一九八九年、八月
- 6 3. 「藤壺の宮と光源氏」(二) 阿部秋生 著、『文学』、岩波書店、一九八九年、九月
- 6 4. 「藤壺宮の崩御——薄雲・朝顔」 藤村潔 著、『国文学解釈と教材の研究』、學燈社、一九八七年、十二月
- 6 5. 「藤壺は令制の（妃）か」 増田繁夫 著、『人文研究』、大阪市立大学文学部、一九九一年、十二月
- 6 6. 「藤壺物語の一視点・冷泉帝の出生をめぐる」 永井和子 著、『学習院女子短大・国語国文論集』、一九八〇年、三月
- 6 7. 「藤原道長法華三十講」 松尾恒一 著、『日本文学論究』、國學院大學国語文学會、一九八六年、三月

- 6 8 「法華八講会・成立のことなど」
- 6 9 「法華八講の（日）と（時）」佐藤道子 著、『文学』、岩波書店、一九八九年、二月
- 7 0 「濤標以後」今成元昭 著、『立正大学人文科学研究所年報』、立正大学人文科学研究所、一九九三年
- 7 1 「紫の上における死の様式」伊藤博 著、『日本文学』、一五六五年
- 7 2 「紫上の変貌」永井和子 著、『学習院女子短期大学紀要』、一九八一年、一二月
- 7 3 「物語作中人物の可能性」秋山虔 著、『国文学解釈と鑑賞』、一九八四年、五月
- 7 4 「六条院の季節的時空の意味は何か」鷺山茂雄 著、『静岡女子大学国文学研究』、静岡女子大学、一九九〇年、三月
- 7 5 「喩としての朝顔」源氏物語の朝顔の姫君を中心にして、越野優子 著、『中古文学』、第五九号、中古文学会

欽定四庫全書

子部
陳氏香譜卷一

詳校官中書臣李彤

負外郎臣牛稔文履勘

總校官知縣臣楊懋珩

校對官編修臣于鼎

膳錄監生臣周丕

欽定四庫全書

子部九

香譜

譜錄類一 器物之屬

提要

欽定四庫全書

陳氏香譜

臣等謹案香譜四卷宋陳敬撰敬字子中河南人其仕履未詳首有至治壬戌熊朋來序亦不載敬之本末是書凡集沈立洪芻以下十一家之香譜彙為一書徵引既繁不免以浩博為長稍踰限制若香名香品歷代疑和製造之方載之宜也至於經傳中字句偶涉而實非龍涎迷迭之比如卷首引左傳黍稷馨香等語寥寥數則以為溯源經傳殊為無謂此蓋仿齊民要術首援經典之例而失之者也至於本出經典之事乃往往挂漏為鬱金香載說文之說而周禮鬱人條下鄭康成之註顧獨遺之則又舉遠而畧近矣然十一家之譜今不盡傳敬能薈粹羣言為之總匯

佚文遺事多賴以傳要於考證不為無益也

乾隆四十五年十二月恭校上

總纂官_臣紀昀_臣陸錫熊_臣孫士毅

總校官_臣陸費墀

欽定四庫全書

陳氏香譜
提要

陳氏香譜原序

香者五臭之一而人服媚之至於為香譜非世官博物
嘗抗舶浮海者不能悉也河南陳氏香譜自子中至浩
卿再世乃脫藁凡洪顏沈葉諸譜具在此編集其大成
矣詩書言香不過黍稷蕭脂故香之為字從黍作甘古
者從黍稷之外可煇者蕭可佩者蘭可鬯者鬱名為香
草者無幾此時譜可無作楚辭所錄名物漸多猶未取
於遐裔也漢唐以來言香者必取南海之產故不可無
欽定四庫全書

陳氏香譜
原序

譜浩卿過彭蠡以其譜視釣者熊朋來俾為序釣者驚
曰豈其乏使而及我子再世成譜亦不易宜遴序者豈
無蓬萊玉署懷香握蘭之僊儒又豈無喬木故家芝蘭
芳馥之世卿豈無島服夷言誇香詫寶之舶官又豈無
神州赤縣進香受爵之少府豈無寶梵琳房聞思道韻
之高人又豈無瑤英玉蕊羅襦薌澤之女士凡知香者
皆使序之若僕也灰釘之望既窮熏習之夢久斷空有
廬山一峯以為壚峯頂片雲以為香子并收入譜矣每

憶劉季和香僻過鑪熏身其主簿張坦以為俗坦可謂

直諒之友季和能笑領其言亦庶幾善補過者有士於

此如荀令君至人家坐席三日香梅學士母晨袖覆鑪

撮袖以出坐定放香是富貴自好者所為未聞聖賢為

此惜其不過張坦也按禮經容臭者童儒所佩茝蘭者

婦輩所采大丈夫則自流芳百世者在故魏武猶能禁

家內不得熏香謝玄佩香囊則安石患之然琴牕書室

不得此譜則無以治鑪熏至於自熏知見抑存乎其人

欽定四庫全書

陳氏香譜

三

遂長揖謝客鼓棹去客追錄為香譜序至治壬戌蘭秋

彭蠡釣徒熊朋來序

欽定四庫全書

陳氏香譜卷一

宋 陳敬 撰

許氏說文香芳也篆以香以甘隸省作香春秋傳曰黍

稷馨香凡香之屬皆從香香之遠聞曰馨香之美者曰

馥馥士香之氣曰馥許魚曰馥為含曰馥於云曰馥扶

反曰馥於蓋曰馥同上曰馥匹民曰馥則前曰馥蒲擬

曰馥匹結曰馥匹必曰馥蒲從曰馥火舍曰馥符分曰

欽定四庫全書

陳氏香譜

韻同上 曰馥方咸曰馥叔混曰馥薄庚曰馥陀胡曰馥

於騎 曰馥女氏曰馥普沒曰馥蒲結曰馥普滅曰馥鳥

反曰馥毗霄曰馥步結曰馥許葛曰馥甫微

香品舉要云香最多品類出交廣崖州及海南諸國然

秦漢以前未聞惟稱蘭蕙椒桂而已至漢武奢廣尚書

郎奏事者始有含雞舌香其他皆未聞迨晉武時外國

貢異香始此及隋除夜火山燒沉香甲煎不計數海南

諸品畢至矣唐明皇君臣多有沉檀腦麝為亭閣何多

也後周顯德間昆明國又獻薔薇水矣昔所未有今皆有焉然香者一也或出於草或出於木或花或實或節或葉或皮或液或又假人力而煎和成有供焚者有可佩者又有充入藥者詳列如左

至治馨香感於神明 書君陳

弗惟德馨香 書酒誥

其香始升上帝居歆 詩生民

有飮其香邦家之光 詩載芣

欽定四庫全書

深氏香譜
卷一

黍稷馨香 左氏傳

蘭有國香 左氏傳

其德足用昭其馨香 國語

如入芝蘭之室久而不聞其香 家語

香品

龍腦香

唐本草云出婆律國樹形似杉木子似荳蔻皮有甲錯

婆律膏是根下清脂龍腦是根中乾脂味辛香入口

段成式云亦出波斯國樹高八九丈大可六七圍葉圓而背白無花實其樹有肥瘦瘦者出龍腦香肥者出婆律膏香在木心中婆律斷其樹翦取之其膏於木端流出 圖經云南海山中亦有此木唐天寶中交趾貢龍

腦皆如蟬蠶之形彼人言有老根節方有之然極難禁中呼瑞龍腦帶之衣衿香聞十餘步今海南龍腦多用火煬成片其中容偽 陶隱居云生西海婆律國婆律

樹中脂也如白膠香狀味苦辛微溫無毒主內外障眼

欽定四庫全書

深氏香譜
卷一

三

去三蟲療五痔明目鎮心秘精又有蒼龍腦主風疹黥面入膏煎良不可點眼其明淨如雪花者善久經風日或如麥麩者不佳宜合黑荳糯米相思子貯之甕器內則不耗今復有生熟之異稱生龍腦即是所載是也其絕妙者曰梅花龍腦有經火飛結成塊者謂之熟龍腦氣味差薄蓋益以他物也 葉庭珪云渤泥三佛齊亦有之乃深山窮谷千年老杉樹枝幹不損者若損動則氣洩無腦矣其土人解為板板傍裂縫腦出縫中劈而

取之大者成片俗謂之梅花腦其次謂之速腦速腦之中又有金腳其碎者謂之米腦鋸下杉屑與碎腦相雜者謂之蒼腦取腦已淨其杉板謂之腦本與鋸屑同擣碎和置甕盆內以笠覆之封其縫熟灰煨燭其氣飛上凝結而成塊謂之熟腦可作面花耳環佩帶等用又有一種如油者謂之腦油其氣勁於腦可浸諸香 陳正敏云龍腦出南天竺木本如松初取猶濕斷為數十塊尚有香日久木乾循理拆之其香如雲母者是也與中

欽定四庫全書

陳氏香譜

四

婆律香

本草拾遺云出婆律國其樹與龍腦同乃樹之清脂也除惡氣殺蟲蛀詳見龍腦香

沉水香

唐本草云出天竺單于二國與青桂雞骨棧香同是一樹葉似橘經冬不凋夏生花白而圓細秋結實如檳榔

其色紫似甚而味辛療風水毒腫去惡氣樹皮青色木

似檳柳重實黑色沉水者是今復有生黃而沉水者謂之蠟沉又有不沉者謂之生結即棧香也 拾遺解紛云其樹如椿常以水試乃知 葉庭珪云沉香所出非一真臘者為上占城次之渤泥最下真臘之真又分三品綠洋最佳三漈次之勃羅間差弱而香之大概生結者為上熟脫者次之堅黑為上黃者次之然諸沉之形多異而名亦不一有狀如犀角者如燕口者如附子者

欽定四庫全書

陳氏香譜

五

如梭者是皆因形為名其堅緻而文橫者謂之橫隔沉大抵以所產氣色為高而形體非所以定優劣也綠洋三漈勃羅間皆真臘屬國 談苑云一樹出香三等曰沉曰棧曰黃熟 倦遊錄云沉香木嶺南瀕海諸州尤多大者合抱山民或以為屋為橋梁為飯甑然有香者百無一二蓋木得水方結多在折枝枯幹中或為棧或為黃熟自枯死者謂之水盤香高竇等州產生結香蓋山民見山木曲折斜枝必以刀斫成坎經年得雨水漬遂結香復鋸

取之刮去白木其香結為斑點亦名鷓鴣斑沉之良久
在瓊崖等州俗謂之角沉乃生木中取者宜用熏裏黃
沉乃枯木中得者宜入藥黃臘沉尤難得按南史云置水
中則沉故名沉香浮者棧香也 陳正敏云水沉出南
海凡數重外為斷白次為棧中為沉今嶺南巖高峻處
亦有之但不及海南者香氣清婉耳諸夷以香樹為槽
而餉雞犬故鄭文寶詩云沉檀香植在天涯賤等荆衡
水而槎未必為槽餉雞犬不如煨燼向高家 今按黃
臘沉削之自卷啣之柔韌者是餘見第四卷丁晉公天
香傳中

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

六

生沉香

一名蓬萊香 葉庭珪云出海南山西其初連木狀如
栗棘房土人謂棘香刀剝去木而出其香則堅倒而光
澤士大夫目為蓬萊香氣清而長耳品雖侔於真臘然
地之所產者少而官於彼者乃得之商舶罕獲焉故直
常倍於真臘所產者云

蕃香

一名蕃沉 葉庭珪云出渤泥三佛齊氣礦而烈價視
真臘綠洋減三分之一視占城減半矣治冷氣醫家多
用之

青桂香

本草拾遺云即沉香同樹細枝際實未爛者 談苑云
沉香依木皮而結謂之青桂

棧香

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

七

本草拾遺云棧與沉同樹以其肌理有黑脉者為別
葉庭珪云棧香乃沉香之次者出占城國氣味與沉香
相類但帶木頗不堅實故其品亞於沉而復於熟遜焉
黃熟香

亦棧香之類也但輕虛枯朽不堪者今和香中皆用之
葉庭珪云黃熟香夾棧黃熟香諸蕃皆出而真臘為
上黃而熟故名焉其皮堅而中腐者形狀如桶故謂之黃
熟桶其夾棧而通黑者其氣尤勝故謂之夾棧黃熟此

香雖衆人之所日用而夾棧居上品

葉子香

一名龍鱗香蓋棧之薄者其香尤勝於棧 談苑云沉香在土歲久不待剝剔而精者

雞骨香

本草拾遺云亦棧香中形似雞骨者

水盤香

類黃熟而殊大多雕刻為香山佛像並出船上

欽定四庫全書



陳氏香譜
卷一

白眼香

亦黃熟之別名也其色差白不入藥品和香或用之

檀香

本草拾遺云檀香其種有三曰白曰紫曰黃白檀樹出海南主心腹痛霍亂中惡鬼氣殺蟲 唐本草云味鹹微寒主惡風毒出崑崙盤盤之國主消風腫又有紫真檀人磨之以塗風腫雖不生於中土而人間偏有之 葉庭珪云檀香出三佛齊國氣清勁而易洩熱之能奪衆

香皮在而色黃者謂之黃檀皮膚而色紫者謂之紫檀

氣味大率相類而紫者差勝其輕而脆者謂之沙檀藥中多用之然香樹頭長商人截而短之以便負販恐其氣洩以紙封之欲其滋潤故也 陳正敏云亦出南天竺末耶山崖谷間然其他雜木與檀相類者甚衆殆不可別但檀木性冷夏月多大蛇蟠遶人遠望見有蛇處即射箭記之至冬月蛇蟄乃伐而取之也

木香

欽定四庫全書



陳氏香譜
卷一

本草云一名密香從外國舶上來葉似薯蕷而根大花紫色功效極多味辛溫無毒主辟瘟疫療氣劣氣不足消毒殺蟲毒今以如雞骨堅實嚼之粘牙者為上又有馬兜鈴根名曰青木香非此之謂也或云有二種亦恐非耳一謂之雲南根

降真香

南州記云生南海諸山大秦國亦有之 海藥本草云味溫平無毒主天行時氣宅舍怪異並燒之有驗 列

僊傳云燒之感引鶴降醮星辰燒此香妙為第一小兒佩之能辟邪氣狀如蘓枋木然之初不甚香得諸香和之則特美 葉庭珪云出三佛齊國及海南其氣勁而遠能辟邪氣衆人每歲除家無貧富皆焚之如燭紫雖在處有之皆不及三佛齊者一名紫藤香今有蕃降廣降之別

生熟速香

葉庭珪云生速香出真臘國熟速香所出非一而真臘欽定四庫全書 陳氏香譜 卷一 尤勝占城次之渤泥最下伐樹去木而取香者謂之生速香樹仆於地木腐而香存者謂之熟速香生速氣味長熟速氣味易焦故生者為上熟者次之

暫香

葉庭珪云暫香乃熟速之類所產高下與熟速同但脫者謂之熟速而木之半存者謂之暫香其香半生熟商人以刀剗其木而出香擇尤美者雜於熟速而貨之故市者亦莫之辨

鷓鴣斑香

葉庭珪云出海南與真臘生速等但氣味短而薄易燼其厚而沉水者差久文如鷓鴣斑故名焉亦謂之細冒頭至薄而沉

烏里香

葉庭珪云出占城國地名烏里土人伐其樹札之以為香以火焙乾令香脂見於外以輸祖役商人以刀剗其木而出其香故品下於他香

生香

葉庭珪云生香所出非一樹小老而伐之故香少而未多其直雖下於烏里然削木而存香則勝之矣

交趾香

葉庭珪云出交趾國微黑而光氣味與占城棧香相類然其地不通商船而土人多販於廣西之欽州欽人謂之光香

乳香

廣志云即南海波斯國松樹脂紫色如櫻桃者名曰

乳香蓋薰陸之類也僊方多用辟邪其性溫療耳聾中

風口噤婦人血風能發酒治風冷止大腸洩瀉療諸瘡

癖令內消今以通明者為勝目曰滴乳其次曰揀香又

次曰瓶香然多夾雜成大塊如瀝青之狀又其細者謂

之香經沈存中云乳香本名薰陸以其下如乳頭者

謂之乳頭香葉庭珪云一名薰陸香出大食國之南

數千里深山窮谷中其樹大抵類松以斤斫樹脂溢於

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

十一

外結而成香聚而為塊以象輦之至於大食大食以舟

載易他貨於三佛齊故香常聚於三佛齊三佛齊每歲

以大舶至廣與泉廣泉二船視香之多少為殿最而香

之品十有三其最上品者為揀香圓大如乳頭俗所謂

滴乳是也次曰瓶乳其色亞於揀香又次曰瓶香言收

時量重置於瓶中在瓶香之中又有上中下三等之別

又次曰袋香言收時只置袋中其品亦有三等又次曰

乳搗蓋香在舟中鎔搗在地雜以沙石者又次黑搗香

之黑色者又次曰水濕黑搗蓋香在舟中為水所浸漬

而氣變色敗者也品雜而碎者曰斫削簸揚為塵者曰

經末此乳香之別也溫子皮云廣州蕃藥多偽者偽

乳香以白膠香攪糟為之但燒之煙散多此偽者是也

真乳香與茯苓共嚼則成水又云峽山石乳香玲瓏

而有蜂窩者為真每焚之次焚沉檀之屬則香氣為乳

香煙置定難散者是否則白膠香也

薰陸香

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

十二

廣志云生南海又僻方即羅香也海藥本草云味平

溫毒清神一名馬尾香是樹皮鱗甲採復生唐本草

云出天竺國及邠邠似楓松脂黃白色天竺者多白邠

邠者夾綠色香不甚烈微溫主伏尸惡氣療風水腫毒

安息香

本草云出西戎樹形似松柏脂黃色為塊新者亦柔韌

味辛苦無毒主心腹惡氣鬼瘧後漢書西域傳安息

國去雒陽二萬五千里比至康居其香乃樹皮膠燒之

通神明辟衆惡 酉陽雜俎云出波斯國其樹呼為辟邪樹長三丈許皮色黃黑葉有四角經冬不凋二月有花黃色心微碧不結實刻皮出膠如飴名安息香 葉庭珪云出三佛齊國乃樹之脂也其形色類胡荽瓢而不宜於燒然能發衆香故多用之以和香焉 溫子皮云辨真安息香每燒之以厚紙覆其上面香透者是否則偽也

篤耨香

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

四

葉庭珪云出真臘國亦樹之脂也樹如松杉之類而香藏於皮樹老而自然流溢者也色白而透明故其香雖盛暑不融土人既取之矣至夏月以火環其樹而炙之令其脂液再溢及冬月沍寒其凝而復取之故其香冬凝而夏融土人盛之以瓠瓢至者月則鑽其瓢而周為孔藏之水中欲其陰涼而氣通以泄其汗故得不融舟人易以磁器不若於瓢也其氣清遠而長或以樹皮相雜則色黑而品下矣香之性易融而暑月之融多滲於

瓢故斷瓢而焚之亦得其典型今所謂葫蘆瓢者是也

瓢香

瑣碎錄云三佛齊國以乾瓢盛薔薇水至中國水盡碎其瓢而焚之與篤耨香畧同又名乾葫蘆片以之蒸香最妙

金顏香

西域傳云金顏香類薰陸其色赤紫其烟如凝漆沸起不甚香而有酸氣合沉檀為香焚之極清婉 葉庭珪

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

五

云出大食及真臘國所謂三佛齊出者蓋自二國販至三佛齊三佛齊乃販入中國焉其香則樹之脂也色黃而氣勁善於聚衆香今之為龍涎軟者佩帶者多用之著之人多以和氣塗身

詹糖香

本草云出晉安岑州及交廣以南樹似橘煎枝葉為之似糖而黑多以其皮及蠹糞雜之難得純正者惟輒乃佳

蕪合香

神農本草云生中臺州谷 陶隱居云俗傳是獅子糞外國說不爾今皆從西域來真者難別紫赤色如紫檀堅實極芬香重如石燒之灰白者佳主辟邪瘧癰鬼疰去三蟲 西域傳云大秦國一名犂犍以在海西亦名雲漢海西國地方數千里有四百餘城人俗有類中國故謂之大秦國人合香謂之香煎其汁為蕪合油其津為蕪合油香 葉庭珪云蕪合香油亦出大食國氣味類於篤耨以濃淨無滓者為上蕃人多以之塗身以閨中病大風者亦做之可合輭香及入藥用

亞濕香

葉庭珪云出占城國其香非自然乃土人以十種香擣和而成味溫而重氣和而長藝之勝於他香

塗肌拂手香

葉庭珪云二香俱出真臘占城國土人以腦麝諸香擣和而成或以塗肌或以拂手其香經宿不散惟五羊至

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

十六

今用之他國不尚焉

雞舌香

唐本草云出崑崙國及交廣以南樹有雌雄皮葉並似栗其花如梅結實似棗核者雌樹也不入香用無子者雄樹也採花釀以成香香微溫主心痛惡瘡療風毒去惡氣

丁香

山海經云生東海及崑崙國二三月開花七月方結實

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

十七

開寶本草註云生廣州樹高丈餘凌冬不凋葉似櫟而花圓細色黃子如丁長四五分紫色中有麝大長寸許者俗呼為母丁香擊之則順理拆味辛主風毒諸腫能發諸香及止心疼痛霍亂嘔吐甚驗 葉庭珪云丁香一名丁子香以其形似丁子也雞舌香丁香之大者今所謂丁香母是也日華子云雞舌香治口氣所以三省故事郎官舍雞舌香欲其奏事對答其氣芬芳至今方書為然出大食國

鬱金香

魏畧云生大秦國二三月花如紅藍四五月採之甚香
十二葉為百草之英 本草拾遺云味苦無毒主蟲毒
鬼疰鴉鵒等臭除心腹間惡氣入諸香用 說文云鬱
金香芳草也十葉為貫百二十貫採以煮之為鬯一曰
鬱鬯百草之華遠方所貢方物合而釀之以降神也
物類相感志云出伽毗國華而不實但取其根而用之

迷迭香

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

六

廣志云出西域魏文侯有賦亦嘗用 本草拾遺云味
辛溫無毒主惡氣今人衣香燒之去臭

木密香

內典云狀若槐樹 異物志云其葉如椿 交州記云
樹似沉香 本草拾遺云味甘溫無毒主辟惡去邪鬼
疰生南海諸山中種之五六年乃有香

藹車香

本草拾遺云味辛溫主鬼氣去臭及蟲魚蛭物生彭城

高數尺黃葉白花 爾雅云藹車芑輿注曰香草也

必粟香

內典云一名化木香似老椿 海葉本草云味辛溫無
毒主鬼疰心氣痛斷一切惡氣葉落水中魚暴死木可
為書軸碎白魚不損書

艾蒿香

廣志云出西域似細艾又有松樹皮上綠衣亦名艾蒿
可以合諸香燒之能聚其煙青白不散 本草拾遺云
欽定四庫全書 陳氏香譜 卷一 九
味溫無毒主惡氣殺蝱蟲主腹內冷洩痢一名石芝
字統云香草也 異物志云葉如栟櫚而小子似檳榔
可食

兜婁香

異物志云生海邊國如都梁香 本草云性微溫療霍
亂心痛主風水腫毒惡氣止吐逆亦合香用莖葉如水
蘓 今按此香與今之兜婁香不同

白茅香

本草拾遺云味甘平無毒主惡氣令人身香煮汁服之
主腹內冷痛生安南如茅根道家以之煮湯沐浴云

茅香花

唐本草云生劔南諸州其莖葉黑褐色花白非白茅也
味苦溫無毒主中惡反胃止嘔吐葉苗可煮湯浴辟邪
氣令人身香

朮納香

廣志云生驃國 魏畧云出大秦國 本草拾遺云味
欽定四庫全書 陳氏香譜 卷一
甘溫無毒去惡氣溫中除冷

耕香

南方草木狀云耕香莖生細葉 本草拾遺云味辛溫
無毒主臭鬼氣調中生烏許國

雀頭香

本草云即香附子也所在有之葉莖都是三稜根若附
子周匝多毛交州者最勝大如棗核近道者如杏仁許
荆襄人謂之莎草根大能下氣除腦腹中熱合和香用

之尤佳

芸香

倉頡解詁曰芸蒿葉似邪蒿可食 魚豢典畧云芸香
辟紙魚蠹故藏書臺稱芸臺 物類相感志云香草也
說文云似苜蓿 雜禮圖云芸即蒿也香美可食今
江東人餌為生菜

零陵香

南越志云一名燕草又名薰草生零陵山谷葉如羅勒
欽定四庫全書 陳氏香譜 卷一
山海經云薰草麻葉而方莖赤花而黑實氣如薜蘿
可以止癘即零陵香 本草云味苦無毒主惡氣注心
腹痛下氣令體和諸香或作湯丸用得酒良

都梁香

荊州記云都梁縣有山山上有水其中生蘭草因名都
梁香形如藿香古詩博山爐中百和香鬱金蘇合及都
梁 廣志云都梁在淮南亦名煎澤草也

白膠香

唐本草云樹高大木理細韌葉三角商洛間多有五月
斫為坎十二月收脂經史類證本草云楓樹所在有之
南方及關陝尤多樹似白楊葉圓而岐二月有花白色
乃連著實大為烏卵八九月熟曝乾可燒 開寶本草
云味辛苦無毒主癰疹風痒浮腫即楓香脂也

芳草

本草云即白芷也一名茝又名菑又名符離一名澤芬
生下濕地河東州谷尤勝近道亦有之道家以此香浴

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

三

去尸蟲

龍涎香

葉庭珪云龍涎出大食國其龍多蟠伏於洋中之大石
卧而吐涎涎浮水面人見烏林上異禽翔集衆魚游泳
爭嗜之則及取焉然龍涎本無香其氣近於臊白者如
百藥煎而膩理黑者亞之如五靈脂而光澤能發衆香
故多用之以和香焉 潛齋云龍涎如膠每兩與金等
舟人得之則巨富矣 溫子皮云真龍涎燒之置杯水

於側則煙入水假者則散嘗試之有驗

甲香

唐本草云蠡類生雲南者大如掌青黃色長四五寸取
殼燒灰用之南人亦煮其肉噉今合香多用謂能發香
復末香煙傾酒密煮製方可用法見後 溫子皮云正
甲香本是海螺壓子也唯廣南來者其色青黃長三寸
河中府者只濶寸餘嘉州亦有如錢樣大於木上磨令
契即投釀酒中自然相近者是也若合香偶無甲香則
以蠶殼代之其勢力與中香均尾尤好

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

三

麝香

唐本草云生中臺川谷及雍州益州皆有之 陶隱居
云形類麝常食柏葉及蝦蛇或於五月得者往往有蛇
骨主辟邪殺鬼精中惡風毒療蛇傷多以當門一子真
香分揉作三四子括取血膜雜以餘物大都亦有精麝破
皮毛共在裏中者為勝或有夏食蛇蟲多至寒者香滿
入春患急痛自以脚剔出人有得之者此香絕勝帶麝

非但取香亦以辟惡其真香一子着腦間枕之辟惡夢
及尸瘞鬼氣或傳有水麝臍其香尤美 洪氏云唐天
寶中廣中獲水麝臍香皆水也每以針取之香氣倍於
肉臍 倦遊錄云商汝山多羣麝所遺糞嘗就一處雖
遠逐食必還走之不敢遺迹他處慮為人獲人反以是
求得必掩羣而取之麝絕愛其臍每為人所逐勢急即
自投高崑舉爪裂出其香就繫而死猶拱四足保其臍
李商隱詩云逐巖麝香退

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

三

麝香木

葉庭珪云出占城國樹老而仆埋於土而腐外黑肉黃
赤者其氣類於麝故名焉其品之下者蓋緣伐生樹而
取香故其氣惡而勁此香實腫膿尤多南人以為器皿
如花梨木類

麝香草

述異記云麝香草一名紅蘭香一名金桂香一名紫述
香出蒼梧鬱林郡今吳中亦有麝香草似紅蘭而甚香

最宜合香

麝香檀

瑣碎錄云一名麝檀香蓋西山樺根也焚之類煎香或
云衡山亦有不及南者

梔子香

葉庭珪云梔子香出大食國狀如紅花而淺紫其香清
越而醞藉佛書所謂薝蔔花是也 段成式云西域薝

蔔花即南花梔子花諸花以六出惟梔子花六出 薝

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

三

頌云梔子白花六出甚芬香刻房七稜至九稜者為佳

野悉密香

潛齋云出佛林國亦出波斯國苗長七八尺葉似梅
四時敷榮其花五出白色不結實花開時徧野皆香與
嶺南詹糖相類西域人常採其花壓以為油甚香滑唐
人以此和香或云薝薇水即此花油也亦見雜俎

薝薇水

葉庭珪云大食國花露也五代時蕃將蒲訶散以十五

瓶効貢厥后罕有至者今則採末利花蒸取其液以代
焉然其水多偽雜試之當用琉璃瓶盛之翻搖數四其
泡自上下者為真 後周顯德五年昆明國獻薔薇水十
五瓶得自西域以之灑衣衣敝而香不滅

甘松香

廣志云生涼州 本草拾遺云味溫無毒主鬼氣卒心
腹痛漲滿發生細葉煮湯沐浴令人身香

蘭香

欽定四庫全書 陳氏香譜 卷一
川本草云味辛平無毒主利水道殺蟲毒辟不祥一名
水香生大吳池澤葉似蘭尖長有岐花紅白色而香俗
呼為鼠尾香煮水浴治風

木犀香

向余異苑圖云巖桂一名七里香生匡廬諸山谷間八
九月開花如棗花香滿巖谷採花陰乾以合香甚奇其
木堅韌可作茶品紋如犀角故號木犀

馬蹄香

本草云即杜蘅也葉似葵形如馬蹄俗呼為馬蹄香藥
中少用惟道家服令人身香

懷香

本草云即茴香葉細莖麤高者五六尺叢生人家庭院
中其子療風

蕙香

廣志云蕙草綠葉紫花魏武帝以為香燒之

蘿蕪香

欽定四庫全書 陳氏香譜 卷一
本草云蘿蕪一名微蕪香草也魏武帝以之藏衣中

荔枝香

通志草木畧云荔枝亦曰離枝始傳於漢世初出嶺南
後出蜀中今閩中所產甚盛 南海藥譜云荔枝熟人
未採則百蟲不敢近纔採之則為烏鵲蝙蝠之類無不殘
傷今以形如丁香如鹽梅者為上取其殼合香甚清馥

木蘭香

類證本草云生零陵山谷及太山一名林蘭一名杜蘭

皮似桂而香味苦寒無毒主明目去臭氣 陶隱居云今諸處皆有樹類如楠皮甚薄而味辛香益州者皮厚狀如厚朴而氣味為勝今東人皆以山桂皮當之亦相類道家家用合香 通志草木畧云世言魯般刻木蘭舟在七里洲中至今尚存凡詩所言木蘭即此耳

玄臺香

一名玄參 本草云味苦寒無毒明目定五臟生河南州谷及冤句三四月採根暴乾 陶隱居云今出近道欽定四庫全書 陳氏香譜 卷一 三
處處有之莖似人參而長大根甚黑亦微香道家時用亦以合香 圖經云二月生苗葉似脂麻又視如柳細莖青紫

顫風香

今按此香乃占城之至精好者蓋香樹交枝曲幹兩相憂磨積有歲月樹之精液菁英結成伐而取之老節油透者亦佳潤澤頗類蜜清者最佳熏衣可經累日香氣不止今江西道臨江路清江鎮以此香為香中之甲品價

常倍於他香

伽闌木

一作伽藍木 今按此香本出迦闌國亦占香之種也或云生南海補陀巖蓋香中之至寶其價與金等

排香

安南志云好事者多種之五六年便有香也 今按此

香亦占香之大片者又謂之壽香蓋獻壽者多用之

紅兜婁香

欽定四庫全書 陳氏香譜 卷一 三
今按此香即麝香檀香之別也

大食水

今按此香即大食國薔薇露也本土人每蚤起以爪甲於花上取露一滴置耳輪中則口眼耳鼻皆有香氣終日不散

孩兒香

一名孩兒土一名孩兒泥一名烏爺土 今按此香乃烏爺國薔薇樹下土也本國人呼曰海今訛傳為孩兒

蓋薔薇四時開花雨露滋沐香滴於土凝如菱角塊者佳今人合茶餅者往往用之

紫茸香

一名狝香 今按此香亦出沉速香之中至薄而膩理色正紫黑焚之雖數十步猶聞其香或云沉之至精者近時有得此香因禱祠焚於山上而下上數里皆聞之

珠子散香

滴乳香之至瑩淨者

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

三

喃吖哩香

喃吖哩國所產降真香也

熏華香

今按此香蓋以海南降真劈作薄片用大食薔薇水浸透於甑內蒸乾慢火炙之最為清絕漳鎮所售尤佳

攬子香

今按此香出占城國蓋占香樹為蟲蛀鏤香之英華結于水心中蟲所不能蝕者形如橄欖核故名焉

南方花

余向云南方花皆可合香如末利闍提佛桑渠那香花本出西域佛書所載其後傳本末闍嶺至今遂盛又有大含笑花素馨花就中小含笑香尤酷烈其花常若菡萏之未敷者故有含笑之名又有麝香花夏開與真麝無異又有麝真無異又有麝香末亦類麝氣此等皆畏寒故此地莫能植也或傳吳家香用此諸花合 温子

皮云素馨末利摘下花蕊香繞過即以酒喫之復香凡

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

三

是生香蒸過為佳每四時遇花之香者皆次次蒸之如梅花瑞香酴醾密友梔子末利木犀及橙橘花之類皆可蒸他日藝之則羣花之香畢備

花熏香訣

用好降真香結實者截斷約一寸許利刀劈作薄片以豆腐漿煮之俟水香去水又以水煮至香味去盡取出再以末茶或葉茶煮百沸漉出陰乾隨意用諸花熏之其法以淨瓦缶一箇先鋪花一層鋪香片一層鋪花一

層及香片如此重重鋪蓋了以油紙封口飯甑上蒸少時取起不得解待過數日取燒則香氣全矣或以舊竹辟蕘依上煮製代降採橘葉搗爛代諸花熏之其香清若春時曉行山徑所謂草木真天香殆此之謂

香草名釋

遊齋閒覽云楚辭所詠香草曰蘭曰蓀曰茝曰葍曰蕝曰芷曰荃曰蕙曰薜蘿曰江離曰杜若曰杜衡曰藹車曰菝葜其類不一不能盡識其名狀釋者但一切謂之

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

三

香草而已其間一物而備數名者亦有與今人所呼不同者如蘭一物傳謂有國香而諸家之說但各以色自相非毀莫辨其真或以為都梁或以為澤蘭或以蘭草今當以澤蘭為正山中又有一種葉大如麥門冬春開花甚香此別名幽蘭也蓀則澗溪中所生今人所謂石菖蒲者然實非菖蒲葉柔脆易折不若蘭蓀之堅勁雖小石清水植之盆中久而鬱茂可愛茝葍薜蘿雖有四名而祇是一物今所謂白芷是也蕙即零陵也一名薰

薜蘿即芎藭苗也一名江離杜若即山薑也杜衡今人呼為馬蹄香惟荃與藹車菝葜終莫能識騷人類以香草比君子耳他日求田問舍當求其本列植欄檻以為楚香亭欲為芬芳滿前終日幽對相見騷人之雅趣以寓意耳通志草木略云蘭即蕙蕙即薰薰即零陵香楚辭云滋蘭九畹種薜百畝互言也古方謂之薰草故名醫別錄出薰草條近方謂之零陵香故開寶本草出零陵香條神農本草經謂之蘭余昔修本草以二條貫於蘭

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

三

後明一物也且蘭舊名煎澤草婦人和油澤頭故以名焉南越志云零陵香一名燕草又名薰草即香草生零陵山谷今潮嶺諸州皆有又別錄云薰草一名蕙草明薰蕙之蘭也以其質香故可以為膏澤可以塗宮室近世一種草如茅葉而嫩其根謂之土續斷其花馥郁故得蘭名誤為人所賦詠澤芬曰白芷曰白薜曰薜曰莞曰荷薜楚人謂之葍其葉謂之蒿與蘭同德俱生下濕澤蘭曰虎蘭曰龍東曰虎蒲曰蘭香曰都梁香

如蘭而莖方葉不潤生於水中名曰水香 茈胡曰地
薰曰山菜曰葭草葉曰芸蒿味辛可食生銀夏者芬馨
之氣射於雲間多白鶴青鶴翱翔其上瑣碎錄云古人
藏書辟蠹用芸芸香草也今七里香是也南人採置席
下能辟虱香草之類大率異名所謂蘭蓀即菖蒲也蕙
今零陵香也蒹今白芷也朱文公離騷註云蘭蕙二物
本草言之甚詳大抵古之所謂香草必其花葉皆香而
燥濕不變故可刈而為佩今之所謂蘭蕙則其花雖香
而葉乃無氣其香雖美而質弱易萎非可刈佩也

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

三四

香異

都夷香

洞冥記云香如棗核食一顆歷月不飢或投水中俄滿
大盃也

茶蕪香

茶一作荼 王子年拾遺記云燕昭王時廣延國進二
舞人王以茶蕪香屑鋪地四五寸使舞人立其上彌日

無迹香出波弋國浸地則土石皆香著朽木腐草莫不
茂蔚以薰枯骨則肌肉皆香 又見獨異志

辟寒香

辟寒香辟邪香瑞麟香金鳳香皆異國所獻 杜陽雜
編云自兩漢至皇唐皇后公主乘七寶輦四面綴五色
玉香囊中貯上四香每一出遊則芬馥滿道

月支香

瑞應圖云天漢二年月支國進神香武帝取視之狀若

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

三五

燕卵凡三枚似棗帝不燒付外庫後長安中大疫宮人
得疾衆使者請燒香一枚以辟疫氣帝然之宮中病者
差長安百里內聞其香積數月不歇

振靈香

十洲記云生西海中聚窟洲大如楓而葉香聞數百里
名曰返魂樹伐其根於玉釜中取汁如飴名曰驚精香
又曰振靈香又曰返生香又曰馬積香又曰卻死香一
種五名靈物也死者未滿三日聞香氣即活延和中月

氏遣使貢香四兩大如雀卵黑如樾

神精香

洞冥記云波岐國獻神精香一名荃蘼草一名春蕪草一根百條其枝間如竹節柔輭其皮如絲可以為布所謂春蕪布亦曰香荃布又曰如冰紈握之一片滿身皆香

麒麟香

酉陽雜俎云出波斯國拂林呼為頂教梨咆長一文餘

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

三六

一尺許皮色青薄而極光淨葉似阿魏每三葉生於條端無花結實西域人常以八月伐之至冬抽新條極滋茂若不翦除反枯死七月斷其枝有黃汁其狀如蜜微有香氣入藥療百病

兜末香

本草拾遺云燒之去惡氣除病疫漢武故事云西王母降上燒是香兜渠國所獻如大豆塗宮門香聞百里關中大疫死者相枕藉燒此香疫即止內傳云死者皆起此則

靈香非中國所致

沈榆香

封禪記云黃帝列瑤王於蘭蒲席上然沈榆香春雜寶為屑以沈榆膠和之若泥以分尊卑華夷之位

千畝香

述異記云南郡有千畝香林名香往往出其中

沈光香

洞冥記云塗魂國貢闇中燒之有光而堅實難碎大醫

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

三七

院以鐵杆舂如粉而燒之

十里香

述異記云千年松香聞於十里

威香

孫氏瑞應圖云瑞草一名威蕤王者禮備則生於殿前又云王者愛人命則生

返魂香

洪氏云司天主簿徐肇遇蘓氏子德哥者自言善合返

魂香手持香爐懷中取如白檀末撮於爐中烟氣裊裊直上甚於龍腦德哥微吟曰東海徐肇欲見先靈願此香煙用為導引盡見其父母曾高德哥云但死八十年已前則不可返矣

茵墀香

拾遺記云靈帝熹平三年西域所獻者為湯辟瀉宮人之以沐浴餘汁入渠名曰流香之渠

千步香

欽定四庫全書
陳氏奇譜
卷一
三八
述異記云出海南佩之香聞千步也今海隅有千步草是其種也葉似杜若而紅碧相雜 貢籍云南郡貢千步香是也

飛氣香

三洞珠囊隱訣云真檀之香夜泉玄脂朱陵飛氣之香返生之香真人所燒之香

五香

三洞珠囊云五香樹一株五根一莖五枝一枝五葉一

葉開五節五五相對故先賢名之五香之末燒之十日上徹九皇之天即青目香也 雜修養方云五月一日取五木煮湯浴令人至老鬢髮黑徐鍇注云道家以青木為五香亦名五木

石葉香

拾遺記云此香疊疊如雲母其氣辟瀉魏文帝時題腹國所獻

祇精香

欽定四庫全書
陳氏奇譜
卷一
三九
洞冥記云出塗魂國燒此香魑魅精祇皆畏避

雄麝香

西京雜記云趙昭儀上姊飛燕三十五物有青木香沉香九真雄麝香

蘅蕪香

拾遺記云漢武帝夢李夫人授以蘅蕪之香帝夢中驚起香氣猶著衣枕歷月不歇

蘅蕪香

賈善翔高道傳云張道陵母夫人自魁星中薜薇香授之遂感而孕

文石香

洪氏云卞山在潮州山下產無價香有老姥拾得一文石光彩可翫偶墜火中異香聞於遠近收而寶之每投火中異香如初

金香

三洞珠囊云司命君王易度遊於東坂廣昌之域長樂之鄉天女灌以平露金香八會之湯珍瓊鳳玄脯

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

四十一

百和香

漢武內傳云帝於七月七日設坐殿上燒百和香張罽錦幃西王母乘紫雲車而至

金磬香

洞冥記云金日磬既入侍飲衣服香潔變羶酪之氣乃合一香以自薰武帝亦悅之

百濯香

拾遺記云孫亮為寵姬四人合四氣香皆殊方異國所獻凡經踐躡安息之處香氣在衣雖濯浣彌年不散因名百濯香復因其室曰思香媚寢

芸輝香

杜陽雜編元載造芸輝堂芸輝者香草也出于闐國其白如玉入土不朽為屑以塗壁

九和香

三洞珠囊云天人王女擣羅天香持擘玉爐燒九和之香

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

四十二

千和香

三洞珠囊云峨嵋山孫真人然千和之香

罽賓香

盧氏雜說楊牧嘗召崔安石食盤前置香一爐烟出如樓臺之狀崔別聞一香似非爐烟崔思之楊顧左右取白角標子盛一漆毬子呈崔曰此罽賓國香所聞即此香也

拘物頭花香

唐實錄云太宗朝罽賓國進拘物頭花香香數十里間

龍文香

杜陽雜編云武帝時所獻忘其國名

鳳腦香

杜陽雜編云穆宗嘗於藏真島前焚之以崇禮敬

一木五香

酉陽雜俎云海南有木根梅檀節沉香花鷄舌葉霍香

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

四十二

花膠熏陸亦名衆木香

昇霄靈香

杜陽雜編云同昌公主薨上哀痛常令賜紫尼及女道士焚昇霄靈香擊歸天紫金之磬以導靈昇

區撥香

通典云頓遊國出霍香香插枝便生葉如都梁以裛衣國有區撥等花冬夏不衰其花蕊更芬馥亦末為粉以傳其身焉

大象藏香

釋氏會要云因龍鬬而生若燒其香一九興大光明細雲覆上味如甘露也晝夜降其甘雨

兜婁婆香

楞嚴經云壇前別安一小爐以此香煎取香汁浴其炭然合猛熾

多伽羅香

釋氏會要云多伽羅香此云根香多摩羅跋香此香霍

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

四十三

香梅檀譯云與樂即白檀也能治熱病赤檀能治風腫

法華諸香

法華經云須曼那華香闍提華香末利華香青赤白蓮華香華樹香果樹香伽檀香沈水香多摩羅跋香多伽羅香象香馬香男香女香拘鞞陀羅樹香曼陀羅華香殊沙華香曼殊妙華香

牛頭旃檀香

華嚴經云從離垢出以之塗身火不能燒

熏肌香

洞冥記云用熏人肌骨至老不病

香石

物類相感志云員嶠爛石色似肺燒之有香煙聞數百里煙氣升天則成香雲偏潤則成香雨亦見拾遺記

懷夢草

洞冥記云鍾火山有香草武帝思李夫人東方朔獻之帝懷之夢見因名曰懷夢草

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

四

一國香

諸蕃記赤土國在海南出異香每一燒一丸聞數百里號一國香

龜中香

述異記云即青桂香之善者

羯布羅香

西域記云其樹松身異華花果亦別初採既濕尚未有香木乾之後循理而折之其中有香狀如雲母色如冰

雪亦名龍腦香

逆風香

波利質國多香樹其香逆風而聞

靈犀香

通天犀角鎊少末與沉香焚之煙氣裊裊直上能挾陰雲而睹青天故名抱撲子云通天犀角有白理如線置米羣雞中雞往啄米見犀輒驚散故南人呼為駭雞犀也

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

四

玉麝香

好事集云柳子厚每得韓退之所寄詩文必盥手熏以玉麝香然後讀之

脩製諸香

飛樟腦

樟腦一兩兩盞合之以濕紙糊縫文武火燂半時取起候冷用之沈譜樟腦不以多少研細用篩過細篩土拌勻揅薄荷汁少許灑在土上以淨盥相合定濕紙條固

四縫甑上蒸之腦子盡飛上盤底皆成冰片是齋舊用

樟腦石灰等分同研極細末用無油銚子貯之甕盥蓋定四面以紙固濟如法勿令透氣底下用木炭火煨少時取開其腦子已飛在盥蓋上用雞翎掃下再與石灰等分如前煨之凡六七次至第七次可用慢火煨一日而止取下掃腦子與杉木盒子鋪在內以乳汁浸兩宿固濟口不令透氣掘地四五尺窖一月不可入藥同上

欽定四庫全書

陳氏香譜

四二六

韶腦一兩滑石二兩一處同研入新銚子內文武火炒

之上用一磁器蓋之自然飛在蓋上奪真

篤耨

篤耨黑白相雜者用盥底盛上飯甑蒸之白浮於面黑沉於下碎錄

乳香

乳香尋常用指甲燈草糯米之類同研及水浸鉢研之皆費力惟紙裹置壁隙中良久取研即粉碎又法於乳鉢下着水輕研自然成末或於火上紙裹略烘瑣錄

麝香

研麝香須著少水自然細不必羅也入香不宜用多及供佛神者去之

龍腦

龍腦須別器研細不可多用多則捺奪眾香沈譜

檀香

須揀真者剉如米粒許慢火燭令煙出紫色斷腥氣即止每紫檀一斤薄作片子好酒二升以慢火煮乾畧

欽定四庫全書

陳氏香譜

四二七

燭檀香劈作小片臘茶清浸一宿焙乾以蜜酒同拌令勻再浸一宿慢火炙乾檀香細剉水一升白蜜半升同於鍋內煎五七十沸焙乾檀香所作薄片子入蜜拌之淨器爐如乾旋旋入蜜不住手攪動勿令炒焦以黑褐色為度以上並沈氏香譜

沉香

沉香細剉以絹袋盛懸於銚子當中勿令著底蜜水浸慢煮一日水盡更添今多生用

藿香

凡藿香甘松零陵之類須揀去枝梗雜草曝令乾燥揀碎揚去塵不可用水洗燙損香味也

茅香

茅香須揀好者剉碎以酒蜜水潤一夜炒令黃燥為度

甲香

甲香如龍耳者好自餘小者次也取一二兩以來用炭汁一盃煮盡後用泥煮方同好酒一盃煮盡入蜜半匙

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

四十二

爐如黃色黃泥水煮令透明逐片淨洗焙乾灰炭煮兩日淨洗以蜜湯煮乾甲香以泔浸二宿後煮煎至赤珠頻沸令盡泔清為度入好酒一盃同煮良久取出用火炮色赤更以好酒一盃取出候乾刷去泥更入漿一碗煮乾為度入好酒一盃煮乾於銀器內炒令黃色甲香以灰煮去膜好酒煮乾甲香磨去齟齬以胡麻膏熬之色正黃則用蜜湯洗淨入香宜少用

鍊蜜

白沙蜜若干綿濾入磁罐油紙重疊密封罐口大釜內

重湯煮一日取出就罐於火上煨煎數沸便出盡水氣則經年不變若每斤加蘓合油二兩更妙或少入朴硝除去蜜氣尤佳凡鍊蜜不可大過過則濃厚和香多不勻

煨炭

凡合香用炭不拘黑白重煨作火罈於密器冷定一則去炭中生薪一則去炭中雜穢之氣燭香宜慢火如

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

四十三

火緊則焦氣沈譜

合香

合香之法貴於使眾香咸為一體麝滋而散撓之使勻沉實而腴碎之使和檀堅而燥揉之使膩比其性等其物而高下如醫者則藥使氣味各不相掩

擣香

香不用羅量其精粗擣之使勻太細則煙不永太粗則氣不和若水麝婆律須別器研之以上香史

收香

水麝忌暑婆律忌濕尤宜護持香雖多須置之一器
貴時得開闔可以診視

窖香

香非一體濕者易和燥者難調輕輒者燃速重實者化
遲以火鍊結之則走洩其氣故必用淨器拭極乾貯窖
窖掘地藏之則香性粗入不復離解 新和香必須窖
貴其燥濕得宜也每約香多少貯以不津甕器蠟紙封
欽定四庫全書
陳氏香譜
卷一
五
於靜室屋中掘地窗深三五寸月餘逐旋取出其尤奇
也 沈譜

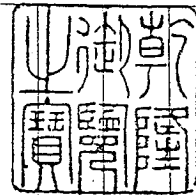
焚香

焚香必於深房曲室矮卓置爐與人膝平火上設銀葉
或雲母製如盤形以之襯香香不及火自然舒慢無煙
燥氣 香史

熏香

凡欲薰衣置熱湯於籠下衣覆其上使之沾潤取去別

以爐焚香熏畢疊衣入篋筥隔宿衣之餘香數日不歇



欽定四庫全書

陳氏香譜
卷一

五

陳氏香譜卷一

欽定四庫全書

子部
陳氏香譜卷二

詳校官中書臣李彤

貢外郎臣牛稔文覆勘

總校官知縣臣楊懋珩

校對官編修臣于鼎

膳錄監生臣周丕

欽定四庫全書

陳氏香譜卷三

宋 陳敬 撰

五香夜刻宣州石刻

穴壺為漏浮木為箭自有熊氏以來尚矣三代兩漢迄今遵用雖制有工拙而無以易此國初得唐朝水秤作用精巧與杜牧宣潤秤漏頗相符合其後燕肅龍圖守梓州作蓮花漏上進近又吳僧瑞新創杭湖等州秤漏

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

例皆踈畧慶厯戊子年初預班朝十二月起居退宣許百官於朝堂觀新秤漏因得詳觀而默識焉始知古今之制都未精究蓋少第二平水壺致漏滴之有遲速也亘古之闕繇我朝講求而大備邪嘗率愚短竊效成法施於婺睦二州鼓角樓熙寧癸丑歲大旱夏秋泉冬愆南井泉枯竭民用艱險時待次梅谿始作百刻香印以準昏曉又增置五夜香刻如左

百刻香印

百刻香印以堅木為之山梨為上樟楠次之其原一寸二分外經一尺一寸中心經一寸無餘用有文處分十二界迴曲其文橫路二十一里路皆濶一分半銳其上深亦如之每刻長一寸四分凡一百刻通長二百四十寸每時率二尺計二百四十寸凡八刻三分刻之一其中近狹處六暈相屬亥子也丑寅也卯辰也已午也未申也酉戌也陰盡以至陽也戌之末則入亥以上六長暈各外相連陽時六皆順行自小以入大也微至著也

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

三

其向外長六暈亦相屬子丑也寅卯也辰巳也午未也申酉也戌亥也陽終以入陰也亥之末則至子以上六狹處各內相連陰時六皆逆行從大以入小陰主減也並無斷際猶環之無端也每起火各以其時大抵起午正第三路近中是或起日出視歷日日出卯初卯正幾刻故不定斷際起火處也

五更印刻

上印最長自小雪後大雪冬至小寒後單用 其次有

甲乙丙丁四印並兩刻用

中印最平自驚蟄後至春分後單用秋分同 其前後有戌巳印各一並單用

未印最短自芒種前及夏至小暑後單用 其前有庚辛壬癸印並兩刻用

百刻篆圖

百刻香若以常香則無準今用野蘇松越二味相和令勻貯於新陶器內旋用 野蘼即荏葉也中秋前採

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

三

曝乾為末每料十兩 松越即枯松花也秋末揀其自隆者曝乾剉去心為末每用八兩 昔嘗撰香譜序百刻香印未詳廣德吳正仲製其篆刻并香法見貺較之頗精審非雅才妙思孰能至是因刻於石傳諸好事者 熙寧甲寅歲仲春二日右諫議大夫知宣城郡沈立題

定州公庫印香

箋香一兩 檀香一兩 零陵香一兩 藿香一兩

甘松一兩 茅香半兩 大黃半兩

右杵羅為末用如常法 凡作印篆須以杏仁末少許拌香則不起塵及易出脫後皆倣此

和州公庫印香

沉香十兩 細剉 檀香八兩 細剉如 零陵香四兩 生

結香八兩 藿香葉四兩 焙 甘松四兩 去土 草茅香

四兩 香附子二兩 去黑皮 麻黃二兩 去根 甘草

二兩 粗者 麝香七錢 焰硝半兩 乳香二兩 頭高

欽定四庫全書

陳氏香譜

四

龍腦七錢 生者尤妙

右除腦麝乳硝四味別研外餘十味皆焙乾搗細末盒子盛之外以紙包裹仍常置煖處旋取燒用切不可洩氣陰濕此香於幃帳中燒之悠揚作篆熏之亦

妙別一方與此味數分兩皆同惟腦麝焰硝各增一倍章草香須白茅香乃佳每香一兩仍入製過甲香

半錢奉太守馮公義子宜所製方也

百刻印香

箋香三兩 檀香二兩 沉香二兩 黃熟香二兩

零陵香二兩 藿香二兩 土草香半兩 去土 茅香二

兩 盆硝半兩 丁香半兩 製甲香七錢半 一本作七分半

龍腦少許

右同末之燒如常法

資善堂印香

棧香三兩 黃熟香一兩 零陵香一兩 藿香葉一

兩 沉香一兩 檀香一兩 白茅花香一兩 丁香

欽定四庫全書

陳氏香譜

五

半兩 甲香三分 過製 龍腦三錢 麝香三錢

右件羅細末用新瓦罐子盛之昔張全真參故傳張德遠丞相甚愛此香每一日一盤篆煙不息

龍腦印香

檀香十兩 沉香十兩 茅香一兩 黃熟香十兩

藿香葉十兩 零陵香十兩 甲香七兩半 盆硝二

兩半 丁香五兩半 棧香三十兩 剉

右為細末和勻燒如常法

又方 沈譜

夾棧香半兩 白檀香半兩 白茅香二兩 藿香一

錢 甘松半兩 乳香半兩 棧香二兩 麝香四錢

甲香一錢 龍腦一錢 沉香半兩

右除龍麝乳香別研餘皆擣羅細末拌和令勻用如

常法

乳檀印香

黃熟香六斤 香附子五兩 丁香皮五兩 藿香四

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

六

兩 零陵香四兩 檀香四兩 白芷四兩 棗半斤

焙

茅香二斤 茴香二兩 甘松半斤 乳香一兩

研細
生結香四兩

右搗羅為細末燒如常法

供佛印香

棧香一斤 甘松三兩 零陵香三兩 檀香一兩

藿香一兩 白芷半兩 茅香三錢 甘草三錢 蒼

龍腦三錢

右為細末如常法點燒

無比印香

零陵香一兩 甘草一兩 藿香葉一兩 香附子一

兩 茅香二兩 蜜湯浸一宿不可
水多晒乾微炒過

右為末每用先於花模揅紫檀少許次布香末

水浮印香 新增

柴灰一升 或紙灰 黃蠟二塊 荔枝大

右同入鍋內燭蠟盡為度每以香末脫印如常法將

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

七

灰於面上攤勻次裁薄紙依香印大小襯灰覆放敲

下置水盆中紙沉去仍輕來以紙炷點香

寶篆香

沉香一兩 丁香皮一兩 藿香一兩 夾棧香二兩

甘松半兩 甘草半兩 零陵香半兩 甲香半兩

製

紫檀三兩 煇硝二分

右為末和勻作印時旋加腦麝各少許

香篆一名壽香

乳香 旱蓮草 降真香 沉香 檀香 青布片燒灰

性存 貼水荷葉 瓦松 男兒胎髮一斤 木櫟 野蘋

龍腦少許 麝香少許 山棗子

右十四味為末以山棗子搗和前藥陰乾用燒香時

以玄參末蜜調筋梢上引煙寫字畫人物皆能不散

欲其散時以車前子末彈於煙上即散

又方

歌曰乳旱降沉香檀青貼髮山斷松椎櫟蘗腦射腹空

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷二

間 每用銅筋引香煙成字或云入針沙等分以筋梢

夾磁石少許引煙作篆

丁公美香篆 沈譜

乳香半兩別本一兩 水蛭三錢 壬癸蟲即蛭也 鬱金一

錢 定風草半兩即天麻苗 龍腦少許

右除龍腦乳香別研外餘皆為末然後一處勻和滴

水為丸如桐子大每用先以清水濕過手焚香烟起

時以濕手按之任從巧意手常要濕歌曰乳蛭任風

龍鬱煎手爐焚處發祥煙竹軒清下寂無事可愛脩

然迎晝眠

凝和諸香

葉太社旁通香圖

蜀 百花 花蕊 清真

大 沉一兩 檀半兩 棧一錢 甘松一兩 玄參二兩 丁皮一錢 麝二錢

常 降真半兩 檀半兩 甘松半兩 楓香半兩 茅香四兩

芬 檀一兩 棧半兩 沉一錢 降真半兩 麝一錢 腦一分 甲香一錢

欽定四庫全書

陳氏香譜

九

清 茅香半兩 生結三分 腦半錢 沉一分 麝一錢 檀半兩

衣 腦一錢 零陵半兩 麝一錢 木香半兩 檀一錢 藿香一錢 丁香半兩

神 藿香半兩 麝一錢 腦一錢 棧一兩 沉半兩

凝 麝一錢 丁枝半兩 檀半兩 甲香一錢 結香一錢 甘草一分 腦一錢

降真 百和 寶篆

右為極細末除寶篆外並以鍊蜜和劑作餅子焚如

常法

漢建寧宮中香

黃熟香四斤 白附子二斤 丁香皮五兩 藿香葉

四兩 零陵香四兩 檀香四兩 白芷四兩 茅香

二斤 茴香二斤 甘松半斤 乳香一兩別器研 生

結香四兩 棗子半斤乾焙 一方入蘇合油一錢

右為細末鍊蜜和勻窖月餘作丸或藝之

唐開元宮中方

沉香二兩細判以綳袋盛懸於鈔子當中勿令着底蜜水浸慢火煮一日 檀香二兩茶清浸候乾令無檀香氣味

麝香二錢 龍腦二錢別器研 甲香一錢法製 馬牙硝一錢

欽定四庫全書

陳氏香譜卷二

十

右為細末煉蜜和勻窖月餘取出旋入腦麝丸之或

作花子藝如常法

宮中香

檀香八兩劈作小片臘茶清浸一宿控出焙乾再以酒蜜浸一宿慢火炙乾入諸品 沉香

三兩 甲香一兩 生結香四兩 龍麝各半兩別器研

右為細末生蜜和勻貯甕器地窖一月旋丸藝之

宮中香

檀香一十二兩細判水一升白蜜半斤同煮五七十沸控出焙乾 零陵香三兩

藿香三兩 甘松三兩 茅香三兩 生結香四兩

甲香三兩法製 黃熟香五兩煉蜜一兩半浸一宿焙乾用 龍麝

各一錢

右為細末煉蜜和勻甕器封窖二十日旋丸藝之

江南李主帳中香

沉香一兩判細如炷大 蘇合香以不津甕器盛

右以香投油封浸百日藝之入薝蔔水更佳

又方

欽定四庫全書

陳氏香譜卷二

十一

沉香一兩判如炷 鵝梨十枚切研取汁

右用銀器盛蒸三次梨汁乾即可藝

又方補遺

沉香末一兩 檀香末一錢 鵝梨十枚

右以鵝梨刻去瓢核如甕子狀入香末仍將梨頂簽

蓋蒸三溜去梨皮研和令勻久窖可藝

又方

沉香四兩 檀香一兩 蒼龍腦半兩 麝香一兩

馬牙硝一錢研

右細剉不用羅鍊蜜拌和燒之

宣和御製香

沉香七錢剉如麻豆

檀香三錢剉如麻豆

金顏香二錢

研另

背陰草不近土者如無用浮萍

朱砂二錢半飛 龍腦一錢

麝香研別

丁香各半錢 甲香一錢製過

右用皂兒白水浸軟以定盃一隻慢火熬令極軟和

香得所次入金顏腦麝研勻用香蠟脫印以朱砂為

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷二

三

衣置於不見風日處窖乾燒如常法

御爐香

沉香二兩

細剉以絹袋盛之懸於鉢中勿着底

檀香

一兩

細片以蠟茶清浸一日

甲香一兩製

生梅花龍

腦二錢研別

馬牙硝 麝香研別

右搗羅取細末以蘇合油拌和勻斂合封窖一月許

旋入腦麝作餅藝之

李次公香

棧香不拘多少剉如米粒 龍腦各少許

右用酒蜜同和入斂瓶密封重湯煮一日窖半月可

燒

趙清獻公香

白檀香四兩剉研

乳香纏末半兩剉研

玄參六兩溫湯洗淨

慢火煮軟薄切作片焙乾

右碾取細末以熟蜜拌勻入新斂罐內封窖十日藝

如常法

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷二

三

蘇州王氏悽中香

檀香一兩

直剉如米豆不可斜剉以蠟清浸令沒過二日取出窖乾慢火炒紫色

沉香

二錢直剉

乳香一分剉研

龍腦研別

麝香各一字

別研清茶

開化

右為末淨蜜六兩同浸檀茶清更入水半盞熬百沸

復秤如蜜數度候冷入麝炭末三兩與腦麝和勻貯

斂器封窖如常法旋丸藝之

唐化度寺衙香

白檀香五兩 蘇合香二兩 沉香一兩半 甲香一

兩製 龍腦香半兩 麝香半兩別研

右細剉搗末馬尾羅過煉蜜搜和焚之

開元幃中衙香

沉香七兩二錢 棧香五兩 鷄舌香四兩 檀香二

兩 麝香八錢 藿香六錢 零陵香四錢 甲香二

錢法製 龍腦少許

右搗羅細末鍊蜜和勻九如大豆焚之

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

西

後蜀孟主衙香

沉香三兩 棧香一兩 檀香一兩 乳香一兩 甲

香一兩法製 龍腦半錢別研香成旋入 麝香一錢別研香成旋入

右除龍麝外用杆末入炭皮末朴硝各一錢生蜜拌

勻入甕盒重湯煮十數沸取出窰七日作餅焚之

雍文徹郎中衙香

沉香 檀香 棧香 甲香 黃熟香各一兩 龍麝

各半兩

右搗羅為末鍊和勻入甕器內密封埋地中一月方

可焚

蘇內翰貧衙香

白檀香四兩

所作薄片以蜜拌之淨器內炒如乾旋入蜜不住手攪以黑褐色止勿令焦

乳香五粒

生絹裏之用好酒一盞同煮候酒乾至五七分取出

麝香一字 玄

參一錢

右先將檀香杆粗末次將麝香細研入檀香又入麝

炭細末一兩借色與玄乳同研合和令勻煉蜜作劑

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

五

入甕器罐蜜封埋地一月

錢塘僧日休衙香

紫檀四兩 沈水香一兩 滴乳香一兩 麝香一錢

右搗羅細末煉蜜拌入和勻圓如豆大入甕器久窰

可焚

金粟衙香

梅蠟香一兩 檀香一兩

臘茶清煮五七沸二香同取末

黃丹一兩

乳香三錢 片腦一錢 麝香一字 杉木炭二兩

半為末 淨蜜二斤半

右將蜜於淨器內密封重湯煮滴入水中成珠方可用與香末拌勻入臼杵千餘作劑窖一月分爇

衙香

沉香半兩 白檀香半兩 乳香半兩 青桂香半兩 降真香半兩 甲香半兩 龍腦半兩 麝香半兩

研另

右搗羅細末煉蜜拌勻次入龍腦麝香攪和得所如

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷二

十六

常爇之

衙香

黃熟香 沉香 棧香各五兩 檀香 藿香 零陵香 甘松 丁皮 甲香製各三兩 丁香一兩半 乳香半兩

硝石三分 龍腦三分 麝香一兩

右除硝石龍腦乳麝同研細外將諸香搗羅為散先

量用蘇合油并煉過好蜜二斤和勻貯甕器埋地中

一月所爇之

衙香

檀香五兩 沉香 結香 藿香 零陵香 茅香燒 性存 甘松各四兩 丁香皮 甲香二錢 腦麝各三分

右細研煉蜜和勻燒如常法

衙香

生結香 棧香 零陵香 甘松各三兩 藿香 丁香皮各一兩 甲香二兩 麝香一錢

右粗末煉蜜放冷和勻依常法窖過爇之

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷二

十七

衙香

檀香 玄參各三兩 甘松二兩 乳香半兩別 龍麝各半兩

右先將檀參剉細盛銀器內水浸慢火煮水盡取出

焙乾與甘松同搗羅為末次入乳香末等一處用生

蜜和勻久窖然後爇之

衙香

茅香二兩去雜草 玄參一兩薤根 黃丹十兩細研

三味和搗羅煉過炭末二斤令用油紙包裹三宿

夾沉棧香四兩上等紫

檀四兩 丁香五分好者去梗已上搗末

滴乳香一錢半細研

真麝香一錢半細研

右用蜜四斤春夏煮十五沸秋冬煮十沸取出候冷方入棧香等五味攪和次以蔭炭末二斤拌入白杵勻久窖分爇

衙香

檀香一十三兩劉臘茶清炒 沉香六兩 棧香六兩 馬

欽定四庫全書

陳氏香譜卷二

六

牙硝六兩 龍腦三錢 麝香一錢 甲香一錢用炭大煮

二日淨洗以密湯煮乾

右為末研入龍麝蜜搜和令勻爇之

衙香

紫檀四兩酒浸一晝夜焙乾 川大黃一兩切片以甘松酒煮焙 玄參

半兩以甘松同酒浸一宿焙乾 零陵香 甘草各半兩 白檀

棧香各二錢半 酸棗仁五枚

右為細末白蜜十兩微煉和勻入不津甕盒內封窖

半月取出旋丸爇之

延安郡公蕊香

玄參半斤淨洗去塵土于銀器中以水煮令熟 甘松

四兩細對揀去雜草塵土 白檀香二錢劉 麝香二錢顆者俟別藥成

末方入研 的乳香二錢麝香入

右並用新好者杵羅為末鍊蜜和勻丸如雞豆大每

藥末一兩入熟蜜一兩末丸前再入白杵百餘下油

紙密封貯甕器施取燒之作花氣

欽定四庫全書

陳氏香譜卷二

九

嬰香

沉水香三兩 丁香四錢 治甲香一錢各末 龍腦

七錢研 麝香三錢去皮毛研 梅檀香半兩無一方

右五物相和令勻入煉白蜜六兩去沫入馬牙硝半

兩綿濾過極冷乃和諸香令稍硬丸如梧子大置之

甕盒密封窖半月後用 香譜拾遺云昔沈桂官者

自嶺南押香藥綱覆舟於江上壞宮香之半因括治

脫落之餘合為此香而鬻於京師豪家貴族爭市之

金粟衙香

香附子四兩 藿香一兩

右二味酒一升同煮候乾至一半為度取出陰乾為細末以查子絞汁和令勻調作膏子或捻薄餅燒之

韻香

沉香末一兩 麝香末一兩

稀糊脫成餅子陰乾燒之

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

三

不下閣新香

棧香一兩一錢 丁香一分 檀香一分 降真香一

分 甲香一字 零陵香一字 蘇合油半字

右為細末白芨末四錢加減水和作餅 此香大作

一炷

宣和貴妃黃氏金香

占臘沉香八兩 檀香二兩 牙硝半兩 甲香半兩

製過 金顏香半兩 丁香半兩 麝香一兩 片白腦

子四兩

右為細末鍊蜜先和前香後入腦麝為丸大小任意以金箔為衣製如常法

壓香

沉香二錢半 龍腦二錢與沉香同研 麝香一錢別研

右細末皂兒煎湯和劑捻餅如常法銀襯燒

古香

柏子仁二兩每個分作四片去仁勝茶二錢沸湯盪浸一宿重湯煮令乾用 甘松

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

三

藥一兩 檀香半兩 金顏香二兩 龍腦二錢

右為末入楓香脂少許蜜和如常法陰乾燒之

神僊合香

玄參一十兩 甘松一十兩 白蜜加減用

右為細末白蜜漬令勻入甕罐內密封重湯煮一宿取出放冷杵數百如乾加蜜和勻窖地中旋取入麝少

許焚之

許焚之

僧惠深溫香

地榆一斤 玄參一斤 米泔浸二宿 甘松半斤 白茅香

一兩 白芷一兩 蜜四兩 河水一碗 同煎水盡為度 切片焙乾

右細末入麝香一分煉蜜和劑地窖一月旋九藝之

供佛溫香

檀香 棧香 藿香 白芷 丁香皮 甜參 零陵

香各一兩 甘松 乳香各半兩 硝石一分

右件依常法治碎剉焙乾搗為細末別用白茅香八

兩碎劈去泥焙乾火燒之煇將絕急以盆蓋手巾圍

欽定四庫全書 陳氏香譜 卷二 三

盆口勿令洩氣放冷取茅香灰擣末與諸香一處逐

旋入經煉好蜜相和重入臼搗輒得所貯不津器中

旋取燒之

久窖濕香

棧香四斤 生 乳香七斤 甘松二斤半 茅香六斤

劉 香附子一斤 檀香十兩 丁香皮十兩 黃熟

香十兩 劉

右細末用大丁香二箇搥碎水一盞煎汁浮萍草一

掬揀洗淨去鬚研細濾汁同丁香汁和勻搜拌諸香

候勻入臼杵數百下為度捻作小餅子陰乾如常法

燒之

清神香

玄參一箇 臘茶四胯

右為末以冰糖搜之地下久窖可藝

清遠香局方

甘松十兩 零陵香六兩 茅香七兩 局方六兩 麝香末

欽定四庫全書 陳氏香譜 卷二 三

半斤 玄參五兩 揀淨 丁香皮五兩 降真香五兩 係紫

蘇香以上味局方六兩 藿香三兩 香附子三兩 揀淨局方十兩 白

芷三兩

右為細末煉蜜搜和令勻捻餅或末藝

清遠香

零陵香 藿香 甘松 茴香 沉香 檀香 丁香

各等分為末

右煉蜜圓如龍眼核大入龍腦麝香各少許尤妙藝

如前法

清遠香

甘松一兩 丁香半兩 玄參半兩 番降真半兩

麝香末半錢 茅香七錢 零陵香六錢 香附子三

錢 藿香三錢 白芷三錢

右為末煉蜜和作餅燒窖如常法

清遠香

甘松四兩 玄參二兩

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

三

右為細末入麝香一錢煉蜜和勻如常藝之

汁梁太乙宮清遠香

柏鈴一斤 茅香四兩 甘松半斤 瀝青二兩

右為細末以肥棗半斤蒸熟研細如泥拌和令勻如

黃豆大藝之或煉蜜和劑亦可

清遠膏子香

甘松一兩

去土

茅香一兩

去土蜜水炒黃

藿香半兩

香附子

半兩

零陵香半兩

玄參半兩

麝香半兩

研別

白

芷七錢半 丁皮三錢 麝檀香四兩

即紅麝妻

大黃二

錢 乳香二錢

研另

棧香三錢

米腦二分

研另

右為細末煉蜜和勻散燒或捻小餅子亦可

邢大尉韻勝清遠香

沉香半兩 檀香二錢 麝香五錢 腦子三字

右先將沉檀為細末次入腦麝鉢內研極細別研入

金顏香一錢次加蘇合油少許仍以皂兒仁三十個

水二盞熬皂兒水候黏入白芨末一錢同上件香料

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

三

和成劑再入茶清研其劑和熟隨意脫造花子先用

蘇合油或面油刷過花脫然後印劑則易出

內府龍涎香

沉香 檀香 乳香 丁香 甘松 零陵香 丁皮

香 白芷

各等分

藿香二斤 玄參二斤

揀淨

共為粗末煉蜜和勻藝如常法

濕香

檀香一兩一錢 乳香一兩一錢 沉香半兩 龍腦

一錢 麝香一錢 桑炭灰一斤

右為末為竹筒盛密於鍋中煮至赤色與香末和勻
石板上槌三五下以熱麻油少許作丸或餅蒸之

清神濕香

苦芎鬚半兩 藁本 羌活 獨活 甘菊各半兩

麝香少許

右同為末煉蜜和丸或作餅蒸之可愈頭痛

清遠濕香

欽定四庫全書

陳氏奇譜
卷二

三六

甘松去枝

茅香

藥肉研膏浸焙

各二兩

玄參

黑細者炒

降真香

三奈子

香附子

去鬚微炒

各半兩

韶腦半兩

丁香

一兩 麝香三百文

右細末煉蜜和勻瓷封窖一月取出捻餅子蒸之

日用供神濕香

乳香一兩研

蜜一斤煉

乾杉木燒麝炭細節

右同和窖半月許取出切作小塊子日用無大費而

清芬勝市貨者

丁晉公清真香

歌曰四兩玄參二兩松麝香半兩蜜和同丸如茨子金
爐蒸還似千花噴曉風又清室香但減玄參三兩

清真香

麝香檀一兩

乳香一兩

乾竹炭一十二兩

燒帶性

右為細末煉蜜搜成厚片切作小塊子瓷盒封貯土

中窖十日慢火蒸之

清真香

欽定四庫全書

陳氏奇譜
卷二

三五

沉香二兩

棧香

零陵香各三兩

藿香

玄參

甘草各一兩

黃熟香四兩

甘松一兩半

腦麝各

一錢 甲香一兩半

甘浸二宿同煮汁盡以清為度復以滴潑地上置蓋一宿

右為末入腦麝拌勻白蜜六兩煉去沫入煑硝少許

攪和諸香丸如雞頭實大燒如常法久窖更佳

黃太史清真香

柏子仁二兩

甘松蕊一兩

白檀香半兩

桑柴麝

炭末三兩

右細末煉蜜和勻甕器窖一月燒如常法

清妙香

沉香二兩別檀香二兩別龍腦一分麝香一分另研

右細末次入腦麝拌勻白蜜五兩重湯煮熟放溫更入煖硝半兩同和甕器窖一月取出熟之

清神香

青木香半兩生切蜜浸降真香一兩白檀香一兩香

白芷一兩龍麝各少許

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷二

右為細末熱湯化雪糕和作小餅晚風燒如常法

王將明太宰龍涎香

金顏香一兩乳細如麝石紙一兩為末須兩出者食之口澀生津者是沉

檀各半為末用水磨細今乾龍腦半錢生麝香半錢絕好者

右用皂子膏和入模子脫花樣陰乾熟之

楊古老龍涎香

沉香一兩紫檀半兩甘松一兩淨揀去土腦麝少許

右先以沉檀為細末甘松別研羅候研腦香極細入

甘松內三味再同研分作三分將一分半入沉香末

中和令勻入甕瓶密封窖一月宿又以一分用白蜜

一兩半重湯煮乾至一半放冷入藥亦窖一宿留半

分至調時摻入搜勻更用蘇合油薔薇水龍涎別研

再搜為餅子或搜勻入甕盒內掘地坑深三尺餘窖

一月取出方作餅子若更少入製甲香尤清絕

亞里木吃蘭脾龍涎香

蠟沉二兩薔薇水浸一宿研如泥龍腦二錢別研龍涎香半錢

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷二

共為末入沉香泥捻餅子窖乾熟

龍涎香

沉香十兩檀香三兩金顏香龍腦各二兩麝

香一兩

右為細末皂子脫作餅子尤宜作帶香

龍涎香

紫檀一兩半建茶浸三日銀器中炒棧香三錢別細

一盞酒半盞以沙令紫色碎者旋取之甲香半兩漿水一盞同浸三日取出再以漿水一盞煮

乾銀器 龍腦二錢別研 玄參半兩切片入焙硝一分

更以酒一盞煮乾為度 麝香二字當門子別器研

右細末先以甘草半兩搥碎沸湯一升浸候冷取出

甘草不用白蜜半斤煎撥去浮蠟與甘草湯同熬放

冷入香末次入腦麝及杉樹油節炭一兩和勻捻作

餅子貯甕器內窖一月

龍涎香

檀香二兩紫色好者對碎用梨汁并好酒半盞同浸三日取出焙乾 甲香八十粒

銀定四庫全書陳氏香譜卷二

用黃泥煮二三十沸洗淨乾油煎亦為末 沉香半兩別研 丁香八十粒

生梅花腦子一錢 麝香一錢各別研

右細末以浸沉梨汁入好蜜少許拌和得所用瓶盛

窖數日於密室無風處厚灰蓋火一炷

龍涎香

沉香一兩 金顏香一兩 篤耨皮一錢 腦一錢

麝半錢

右為細末白芨末糊和劑同模範脫或花陰乾以齒刷

子去不平處焚之

龍涎香

沉香一斤 麝香五錢 龍腦二錢

右以沉香為末用水碾成膏麝用湯研化細汁入膏

內次入龍腦研勻捻作餅子焚之

南蕃龍涎香又名勝芬積

木香懷乾 丁香各半兩 藿香晒乾 零陵香各七錢半

檳榔 香附子鹹水浸一宿焙乾 白芷 官桂懷乾 各二錢半

銀定四庫全書陳氏香譜卷二

肉苣蔻兩個 麝香三錢別本有廿七錢

右為末以蜜或皂子水和劑丸如雞頭實大焚之

又方 與前小有異同今兩存之

木香 丁香各二錢半 藿香 零陵香各半兩 檳

榔 香附子 白芷各一錢半 官桂 麝香 沉香

當歸各一錢 甘松半兩 肉豆蔻一個

右為末煉蜜和勻用模子脫花或捻餅子慢火焙稍

乾帶潤入甕盒久窖絕妙兼可服三兩餅茶酒任下

大治心腹痛理氣寬中

龍涎香

沉香一兩 檀香半兩臘茶 金顏香錢半 篤耨香錢半

白芨末三錢 腦麝各一字

右細末拌勻皂兒膠搗和脫花藝之

龍涎香

丁香 木香各半兩 官桂 白芷 香附子鹹浸一宿焙

檳榔 當歸各二錢半 甘松 藿香 零陵香各

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷二

七錢

右加肉豆蔻一枚同為細末煉蜜丸如菜豆大兼可

服

龍涎香

丁香 木香 肉豆蔻各半兩 官桂 甘松 當歸

各七錢 藿香 零陵香各三錢 麝香一錢 龍腦

少許

右細末煉蜜丸如桐子大甕器收貯捻遍亦可

智月龍涎香

沉香一兩 麝香 蘇合油各一錢 米腦 白芨各

一錢半 丁香 木香各半錢

右為細末皂兒膠搗和入白杵千下花印脫之膏乾

刷出光慢火雲母襯燒

龍涎香

速香 沉香 注漏子香各十兩 腦麝各五錢 薔

薇香不拘多少陰乾

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷二

右為細末以白芨瓊卮煎湯煮糊為丸如常法燒

龍涎香

沉香六錢 白檀 金顏香 蘇合油各二錢 麝香

半錢另研 龍腦三字 浮萍半字陰乾 青苔半字陰乾

右為細末拌勻入蘇合油仍以白芨末二錢冷水調

如稠粥重湯煮成糊放溫和香入白杵千下模範脫

花用刷子出光如常法焚之供神佛去麝香

古龍涎香

好沉香二兩 丁香二兩 甘松二兩 麝香一錢 甲香一錢製過

右為細末煉蜜和劑作脫花樣審一月或百日

古龍涎香

沉香半兩 檀香 丁香 金顏香 素馨花各半兩廣南有最清奇 木

香 黑篤實 麝香各一分 顏腦二錢 蘇合油一字許

右各為細末以皂子白濃煎成膏和勻任意造作花子佩香

及香環之類如要黑者入杉木煇炭少許拌沉檀同研却以

白芨極細作末少許熱湯調得所將篤蘇合油同研香如

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

三五

要作軟者只以敗蠟同白膠香少許熬放冷以手搓成錠煮酒蠟尤妙

古龍涎香

占蠟沉十兩 拂手香三兩 金顏香三兩 蕃梔子二兩 梅

花腦一兩半另研 龍涎香二兩

右為細末入麝香二兩煉蜜和勻捻餅子藝之

白龍涎香

檀香二兩 乳香五錢

右以寒水石四兩煨過同為細末梨汁和為餅子焚藝

小龍涎香

沉香 棧香 檀香各半兩 白芨 白欽各二錢半

龍腦二錢 丁香一錢

右為細末以皂兒膠水和作餅子陰乾刷光審土中

十日以錫盒貯之

小龍涎香

錦紋大黃一兩 檀香 乳香 丁香 玄參 甘松

各五錢

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷二

三五

右以寒水石二錢同為細末梨汁和作餅子藝之

小龍涎香

沉香一兩 龍腦半錢

右為細末以鵝梨汁作餅子藝之

小龍涎香

沉香一兩 乳香一分 龍腦半錢 麝香半錢勝茶清研

右同為細末以生麥門冬去心研泥和丸如桐子大入

冷石模中脫花候乾甕盒收貯如常法然

吳侍郎龍津香

白檀五兩

細對以臘茶清浸半月後蜜炙

沉香四兩

玄參半兩

甘松一兩

淨洗

丁香二兩

木麝二兩

甘草半兩

甲香半兩

製先以黃泥水煮次以蜜水煮復以酒煮各一伏時更以蜜少許炒焙

炆

硝三錢

龍腦一兩

樟腦一兩

麝香一兩

四味各別器研

右為細末拌和勻煉蜜作劑掘地窖一月取燒

龍泉香

甘松四兩

玄參二兩

大黃一兩半

麝香半錢

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷二

龍腦二錢

右搗羅細末煉蜜為餅子如常法藝之

清心降真香

紫潤降真香四十兩

研對

棧香三十兩

黃熟香三十

兩

丁香皮十兩

紫檀三十兩

對碎以建茶細末一兩湯調以兩盞拌香

今濕炒三時辰勿令黑

藿香十兩

麝香木十五兩

揀甘草

五兩

焰硝半斤

湯化開淘去滓熬成霜秤

甘松十兩

白茅香

三十兩

細對以青州粟三十個新水三升同煮過復炒令色變去棗及黑者止用十五兩

龍

腦一兩

香成旋入

右為細末煉蜜搜和令勻作餅藝之

宣和內府降真香

蕃降真香三十兩

右對作小片子以臘茶半兩末之沸湯同浸一日湯

高香一指為約束朝取出風乾更以好酒半盞蜜四

兩青州棗五十個於甕器內與香同煮至乾為度取

出於不津甕盒內收貯密封徐徐取燒其香最清也

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷二

降真香

蕃降真香切作片子以冬青樹子單布內絞汁浸香蒸

過甕半月燒

假降真香

蕃降真香一兩

劈作碎片

藁本一兩

水二碗銀石器內與香同煎

右二味同煮乾去藁本不用慢火襯筠州楓香燒

勝篤耨香

棧香半兩

黃連香三錢

檀香三分

降真香三分

龍腦

一字麝香一錢 右以蜜和粗末蒸之

假篤耨香

老柏根七錢 黃連七錢 別器研置 丁香半兩 降真香

臘茶煮半日 紫檀香一兩 棧香一兩

右為細末入米腦少許煉蜜和勻窖蒸之

假篤耨香

檀香一兩 黃連香三兩

右為末拌勻橄欖汁和濕入甕器收旋取蒸之

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷二

假篤耨香

黃連香或白膠香以極高煮酒與香同煮至乾為度收之可燒

馮仲系假篤耨香

通明楓香三兩 火土 桂末二兩 入香內 白蜜三兩 匙入香內

右以蜜入香攪和令勻瀉於水中冷便可燒或欲作餅

子乘熱捻成置水中

假篤耨香

楓香乳 棧香 檀香 生香各二兩 官桂 丁香 隨意入

右為粗末蜜和冷濕甕盒封窖月餘可燒

江南李王煎沉

沉香 咬咀 蘇合油 不拘多少

右每以沉香一兩用鵝梨十枚細研取汁銀石器入甕蒸數次以稀為度或削沉香作屑長半寸許銳其

李王花浸沉

沉香不拘多少剉碎取有香花蒸茶藤木犀橘花或

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷二

橘葉亦可福建末利花之類帶露水摘花一盃以甕盒盛之紙蓋入甕蒸食頃取出去花留汗汁浸沉香日中暴乾如是者三以沉香透潤為度或云皆不若薔薇水浸之最妙

華蓋香

歌曰沉檀香附并山麝艾蒿酸仁分兩停煉蜜拌勻甕器窖翠烟如蓋可中庭

寶毬香

艾納一兩松上青衣是也 酸棗一升入水少許研 丁香皮

檀香 茅香 香附子 白芷 棧香各半兩 草

豆蔻一枚去皮 梅花龍腦 麝香各少許

右除腦麝別器研外餘皆炒過搗取細末以酸棗膏

更加少許裊裊直上如線結為毬狀經時不散

香毬

石芝 艾納各一兩 酸棗肉半兩 沉香一分 甲

香半錢 製 梅花龍腦半錢另研 麝香少許另研

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷二

右除腦麝同搗細末研棗肉為膏入熟蜜少許和勻

捻作餅子燒如常法

芬積香

丁香皮 硬木炭各二兩末 韶腦半兩另研 檀香一

分末 麝香一錢另研

右拌勻煉蜜和劑實在罐器中如常法燒

芬積香

沉香 棧香 藿香 零陵香各一兩 丁香一分

木香四分半 甲香一分製

右為細末重湯煮蜜放溫入香末及龍腦麝香各二

錢拌和令勻篋盒密封地坑窖一月蒸之

小芬積香

棧香一兩 檀香 樟腦各五錢過飛 降真香一分

麝炭三兩

右以生蜜或熟蜜和勻篋盒盛埋地一月取燒

芬積香

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷二

沉香二兩 紫檀 丁香各一兩 甘松三錢 零陵

香三錢 製甲香一分 腦麝各一錢

右為末拌勻生蜜和作劑餅篋器窖乾蒸之

藏春香

沉香 檀香酒浸一宿 乳香 丁香 真臘香 占城香

各二兩 腦麝各一分

右為細末將蜜入甘黃菊一兩四錢玄參三分剉同入餅

內重湯煮半日濾去菊與參不用以白梅二十箇水煮令

冷浮去核取肉研入熟蜜拌勻衆香於瓶內久窖可藝

藏春香

降真香四兩

臘茶清浸三日次以湯浸煮十餘沸取出為末

丁香十餘粒

腦麝各一錢

右為細末煉蜜和勻燒如常法

出塵香

沉香四兩

金顏香四錢

檀香三錢

龍涎二錢

龍腦一錢 麝香五分

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷二

四二

右先以白芨煎水搗沉香萬杵別研餘品同拌令勻微

入煎成皂子膠水再搗萬杵入石模脫作古龍涎花子

出塵香

沉香二兩

棧香半兩

酒

麝香一錢

共為末蜜拌焚之

四和香

沉檀各一兩

腦麝各一錢

如法燒

香橙皮荔枝殼櫻

桃核梨滓甘蔗滓等分為末名小四和

四和香

檀香二兩

剉碎蜜炒褐黃色勿令焦

滴乳香一兩

絹袋盛酒煮取出研

麝

香一錢

勝茶一兩

與麝同研

松木麩炭末半兩

右為末煉蜜和勻磁盒收盛地窖半月取出焚之

馮仲柔四和香

錦文大黃

玄參

藿香葉

蜜各一兩

右用水和慢火煮數時辰許判為粗末入檀香三錢

麝香一錢更以蜜兩匙拌勻窖過焚之

加減四和香

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷二

四三

沉香一分

丁香皮一分

檀香半份

各別為末

龍腦半份

研另

麝香半份

木香不拘多少

杵末沸湯浸水

右以餘香別為細末木香水和捻作餅子如常焚之

夾棧香

夾棧香

甘松

甘草

沉香各半兩

白茅香二兩

檀香二兩

藿香一分

甲香二錢

製

梅花龍腦

二錢

別研 麝香四錢

右為細末煉蜜拌和令勻貯甕器密封地窖一月旋

取出捻餅子藝如常法

聞思香

玄參 荔枝 松子仁 檀香 香附子各二錢 甘草 丁香各一錢 同為末查子汁和劑窰藝如常法

聞思香

紫檀半兩蜜水浸三日慢火焙 甘松半兩酒浸一日火焙 橙皮一兩

苦楝花一兩 檳查核一兩 紫荔枝一兩 龍

腦少許

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷二

四十五

右為末煉蜜和劑窰月餘藝之別一方無紫檀甘松

用香附子半兩零陵香一兩餘皆同

壽陽公主梅花香

甘松半兩 白芷半兩 牡丹皮半兩 藁本半兩

茴香一兩 丁香一兩不見火 檀香一兩 降真香一

兩 白梅一百枚

右除丁香餘皆焙乾為粗末窰器窰半月藝如常法

李王帳中梅花香

丁香一兩一分新好 沉香一兩 紫檀半兩 甘松

半兩 龍腦四錢 零陵香半兩 麝香四錢 製甲

香三分 杉松麝炭四兩

右細末煉蜜和勻丸窰半月取出藝之

梅花香

苦參四兩 甘松四錢 甲香三分製之用 麝香少許

右細末煉蜜為丸如常法藝之

梅花香

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷二

四十五

丁香一兩 藁香一兩 甘松一兩 檀香一兩 丁

皮半兩 牡丹皮半兩 零陵香二兩 辛夷一分

龍腦一錢

右為末用如常法尤宜佩帶

梅花香

甘松一兩 零陵香一兩 檀香半兩 茴香半兩

丁香一百枚 龍腦少許研別

右為細末煉蜜合和乾濕皆可藝之

梅花香

沉香 檀香 丁香各一分 丁香皮三分 樟腦三分 麝香少許

右除腦麝二味乳鉢細研入杉木炭煤四兩共香和勻煉白蜜拌勻捻餅入無滲斃器窖久以銀葉或雲母襯燒之

梅花香

丁香枝杖一兩 零陵香一兩 白茅香一兩 甘松

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷二

四十五

一兩 白檀香一兩 白梅末二錢 杏仁十五個

丁香三錢 白蜜半斤

右為細末煉蜜作劑窖七日燒之

梅英香

揀丁香三錢 白梅末三錢 零陵香葉二錢 木香

一錢 甘松半錢

梅英香

沉香三兩 劉末 丁香四兩 龍腦七錢 另研 蘇合香

二錢 甲香二兩 製 硝石末一錢

右細末入烏香末一錢煉蜜和勻丸如芡實焚之

梅藥香 又名一枝香

歌曰沉檀一分丁香半將炭篩羅五兩灰煉蜜九燒加腦麝東風吹綻十枝梅



欽定四庫全書

陳氏香譜 卷二

四十五

陳氏香譜卷二

欽定四庫全書

子部
陳氏香譜卷三

詳校官中書臣李彤
貢外郎臣牛稔文覆勘

總校官知縣臣楊懋珩
校對官編修臣于鼎
謄錄監生臣周丕

欽定四庫全書

陳氏香譜卷三

凝和諸香

韓魏公濃梅香

又名近魂梅

黑角沉半兩

丁香一分

鬱金半分

小麥麝炒令赤色

臘茶末一錢

麝香一字

定粉一米粒

即韶粉是

白蜜一盞

欽定四庫全書

陳氏香譜卷三

右各為末麝先細研取臘茶之半湯點澄清調麝次入沉香次入丁香次入鬱金次入餘茶及定粉共研細乃入蜜使稀稠得宜收沙瓶器中窺月餘取燒久則益佳燒時以雲母石或銀葉觀之

黃太史跋云余與洪上座同宿潭之碧湘門外舟中衡嶽花光仲仁寄墨梅二枝扣船而至聚觀於燈下余曰祇欠香耳洪笑發谷董囊取一炷焚之如嫩寒清曉行孤山籬落間怪而問其所得云自東坡得於

韓忠獻家知余有香癖而不相授豈小鞭其後之意乎洪駒父集古今香方自謂無以過此以其名意未顯易之為返魂梅云 香譜補遺所載與前稍異今併錄之

臘沉一兩 龍腦半錢 麝香半錢 定粉二錢

鬱金半兩 胯茶末二錢 鶯梨二枚 白蜜二兩

右先將梨去皮用薑擦子上擦碎細紐汁與蜜同熬過在一淨盞內調定粉臘茶鬱金香末次入沉香腦

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三

麝和為一塊油紙裹入篋盒內地窖半月取出如欲遺人圓如芡實金箔為衣十九作貼

嵩州副官李元老笑梅香

沉香 檀香 白芷蔻仁 香附子 肉桂 龍腦

麝香 金顏香各一錢 白芨二錢 馬牙硝二字

荔枝皮半錢

右先入金顏香於乳鉢內細研次入牙硝及腦麝研細餘藥別入杵臼內搗羅為末同前藥再入乳鉢內

研滴水 and 劑印作餅子陰乾用或小印雕乾元亨利貞字印之佳

笑梅香

楳梲二个 檀香半兩 沉香三錢 金顏香四錢 麝香二錢半

右將楳梲割開頂子以小刀子剔去穰并子將沉檀為極細末入於內將元割下頂子蓋著以麻縷繫定用生麪一塊裹楳梲在內慢火灰燒黃熟為度去麪

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三

不用取楳梲研為膏別將麝香金顏研極細入膏內相和研勻以木雕香花子印脫陰乾燒

笑梅香

沉香 烏梅肉 芎藭 甘松各一兩 檀香半兩

右為末入腦麝少許蜜和篋盒旋取焚之

笑梅香

棧香 丁香 甘松 零陵香各二錢共為粗末 朴硝四兩 龍腦 麝香各半錢

右研勻次入腦麝朴硝生蜜搜和覓盒封窖半月

笑梅香

丁香百粒 茴香一兩 檀香 甘松 零陵香

麝香各二錢

右細末蜜和成劑分裝之

肖梅香

韶腦四兩 丁香皮四兩 白檀二錢 桐炭六兩

麝香一錢

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

四

右先搗丁檀炭為末次入腦麝熟蜜拌勻杵三五百
下封窖半月取出裝之 別一方加沉香一兩

勝梅香

歌曰丁香一分真檀半降真白檀 松炭篩羅一兩灰熟蜜和

勻入龍腦東風吹綻崩頭梅

鄙梅香

沉香一兩 丁香 檀香 麝香各二錢 浮萍草

右為末以浮萍草取汁加少蜜和捻餅燒之

梅林香

沉香 檀香各一兩 丁香枝枝 樟腦各三兩

麝香一錢

右除腦麝別器細研將三味懷乾為末用煨過炭硬
末二十兩與香末和勻白蜜四十兩重湯煮去浮蠟
放冷旋入杵臼搗軟陰乾以銀葉襯燒之

泮梅香

丁香百粒 茴香一捻 檀香 甘松 零陵香各二

兩 腦麝少許

陳氏香譜
卷三

五

右細末煉蜜作劑裝之

笑蘭香

白檀香 丁香 棧香 玄參各一兩 甘松半兩

黃熟香二兩 麝香一分

右除麝香別研外餘六味同搗為末煉蜜搜拌成膏

裝窖如常法

笑蘭香

沉香 檀香 白梅肉各一兩 丁香八錢 木香七

錢 牙硝半兩研 丁香皮去粗皮 麝香少許 白

芡末

右為細末白芡煮糊和勻入範子印花陰乾燒之

李元老笑蘭香

揀丁香味平 木香如雞骨 沉香刮淨去軟白 檀香脂膩

肉桂味平 回紇香附子各一錢如無以白芷代 麝

香 片白腦子各半錢 南硼砂二錢先入乳鉢內研細次入腦麝同

研

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷三

六

右煉蜜和勻更入馬勃二錢許搜拌成劑新油單紙

封裏入磁盒膏一百日取出旋丸如豌豆狀捻之漬

酒名洞庭春每酒一斤入香一九化開葡萄葉密封春三日夏秋一日冬七日可飲味甚清美

靖老笑蘭香

零陵香 藿香 甘松各七錢半 當歸一條 荳蔻

一箇 麝半錢 檳榔一个 木香 丁香各半兩

香附子 白芷各二錢半

右為細末煉蜜和搜入白杵百下貯瓷盒地坑埋窖

一月作餅燒如常法

笑蘭香

歌曰零藿丁香檀沉木一六錢蒙本麝差輕合和時用松

花蜜蕪處無烟分外清

肖蘭香

紫檀五兩白尤妙剉作小片煉白蜜一斤加少湯浸一宿取出銀器內炒微烟出 麝香

乳香各一錢 煇炭一兩

研

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷三

七

右先將麝香入乳鉢研細次用好臘茶一錢沸湯點

澄清將脚與麝同研候勻以諸香相和入杵臼令得

所如乾少加浸檀蜜水拌勻入新器中以紙封十數

重地窖窗月餘可藝

零陵香 藿香 甘松各七錢 母丁香 官桂 白

芷 木香 香附子各二錢 玄參三兩 沉香 麝

香各少許研別

右煉蜜和勻捻作餅子燒之

勝宵蘭香

沉香梅指大 檀香梅指大 丁香一分 丁香皮三兩 茴香三錢 甲香二十片 製過樟腦半兩 麝香半錢 煤末五兩 白蜜半斤

右為末煉蜜和勻入窰器內封寄旋丸焚之

勝蘭香

歌曰甲香一分煮三番二兩烏沉三兩檀水麝一錢龍

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷三

腦半異香清婉勝芳蘭

秀蘭香

歌曰沉藿零陵俱半兩丁香一分麝三錢細搗蜜和為餅藝秀蘭香似禁中傳

蘭蕊香

棧香 檀香各三錢 乳香一錢 丁香三十粒 麝香半錢

右細末以蒸鵝梨汁和為餅子音乾如常法

蘭達香

沉香 速香 黃連 甘松各一兩 丁香皮 熟藤香各半兩

右為細末以蘇合油作餅藝之

吳彥莊木犀香

沉香一兩半 檀香二錢半 丁香五十粒各為

顏香三錢

別研不用亦可 麝香少許

入建茶清研極細 腦子少許

續入同研

木犀花五盞

已開未離枝者吹入腦麝同研如泥

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷三

右以少許薄麵糊入所研三物中同前四物和劑範

為小餅窰乾如常法焚之

智月木犀香

白檀一兩

臘茶浸燭

木香 金顏 黑篤耨 蘇合油

麝香 白芨末各一錢

右為細末用皂兒膠鞭和入白杵千下以花印脫之依法窰燒之

木犀香

降真香一兩

劉屑

檀香二錢

別為末作

臘茶半胯

碎

右以紗囊盛降真置磁器內用去板鳳棲梨或鷺梨汁浸降真及茶候軟透去茶不用拌檀末膏乾

木犀香

採木犀未開者以生蜜拌勻不可蜜多實捺入瓷器中地坑埋窖愈久愈奇取出於乳鉢內研勻成餅子油單裏收逐旋取燒採花時不得犯手剪取為妙

木犀香

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

十

日未出時乘露采巖桂花含蕊開及三四分者不拘多少煉蜜候冷拌和以溫潤為度緊築入有油瓷罐中以蠟紙密封罐口掘地坑深三尺許窖一月或二十日用銀葉襯燒之花大開即無香

木犀香

五更初以竹箸取巖桂花未開蕊者不拘多少先於瓶底入檀香少許方以花蕊入瓶候滿加梅花腦子糝花上阜紗幕瓶口置空所日收夜露四五次少用生熟蜜

相半澆瓶中蠟紙封窖藝如常法

木犀香

沉香 檀香各半兩 茅香一兩

右為末以半開木犀花十二兩擇去蒂研成膏搜作劑入石臼杵千百下脫花樣當風處陰乾藝之

桂花香

冬青樹子

桂花香

即木犀

右以冬青樹子絞汁與桂花同蒸陰乾爐內藝之

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

十一

桂枝香

沉香 降真各等分

右劈碎碎以水浸香上一指蒸乾為末蜜劑焚

杏花香

附子 沉 紫檀香 棧香 降真香各十兩 甲香

製 薰陸香 篤耨香 塌乳香各五兩 丁香 木

香各二兩 麝半兩 腦二錢

右為末入薔薇水勻和作餅子以琉璃瓶貯之地窖

一月藝之有杏花韻度

杏花香

甘松 芎藭各半兩 麝香少許

右為末煉蜜和勻丸如彈子大置爐中旣旋可愛每迎風燒之尤妙

吳顧道侍郎花

白檀五兩 銀細對以蜜二兩熱湯化開浸香三宿取出於盤中 紫色入杉木炭內炒同搗為末

麝香一錢 研另 臘茶一錢 湯點澄清用稠脚

欽定四庫全書

陳氏香譜

十三

右同拌令勻以白蜜八兩搜和入乳鉢槌碎數百貯瓷器仍鎔蠟固縫地窖月餘可藝矣久則佳若合多可於臼中搗之

百花香

甘松去 棧香 劉碎 沉香 臘茶末同 玄參 筋脈少

炒焦各一兩 檀香半兩 劉如宜以鷄梨二个取汁浸銀器內盛蒸三五次以汁盡

度為 丁香 臘茶半錢 麝香 研另 縮砂仁 肉苳蔻各

一錢 龍腦半錢 研

右為細末羅勻以生蜜搜和搗百卅杵捻作餅子入磁盒封窖如常法藝

百花香

歌曰三兩甘松 別本作一兩 一分芎 別本作半兩 麝香少許蜜和

同丸如彈子爐中藝一似百花迎曉風

野花香

沉香 檀香 丁香 丁香皮 紫藤香 懷乾 各半兩

麝香二錢 樟腦少許 杉木炭八兩 研

欽定四庫全書

陳氏香譜

十三

右以蜜一斤重湯煉過先研腦麝和勻入香搜蜜作劑杵數百磁盒地窖旋取捻餅子燒之

野花香

棧香 檀香 降真香各一錢 船上丁皮三分 龍

腦一錢 麝香半字 炭末半兩

右為細末入炭末拌勻以煉蜜和劑捻作餅子地窖燒之如要烟聚入製過甲香一字即不散

野花香

棧香 檀香 降真香各三兩 丁香皮一兩 韶腦

二錢 麝香一字

右除腦麝別研外餘搗羅為末入腦麝拌勻杉木炭
三兩燒存性為末煉蜜和劑入臼杵三五百下瓷器
內收貯旋取分藝之

野花香

大黃一兩 丁香 沉香 玄參 白檀 寒水石各

五錢

右為末以梨汁和作餅子燒

後庭花香

檀香 棧香 楓乳香各一兩 龍腦二錢 白芨末

右為細末以白芨作餅和勻脫花樣膏燒如常法

洪駒父荔枝香

荔枝殼 不拘多少 麝香一个

右以酒同浸二宿封蓋飯上蒸之以為度臼中燥之
搗末每十兩重加入真麝香一字蜜和作丸藝如常

法

荔枝香

沉香 檀香 白芷 薤仁 西香 附子 肉桂 金顏
香各一錢 馬牙硝 龍腦 麝香各半錢 白芨
新荔枝皮各二錢

右先將金顏香於乳鉢內細研次入牙硝入腦麝別
研諸香為末入金顏研勻滴水和劑脫花藝

柏子香

欽定四庫全書 陳氏香譜 卷三
柏子實不計多少 帶青色未破未開者

右以沸湯綽過細切以酒浸密封七日取出陰乾藝
之

餘醺香

歌曰三兩玄參一兩松一枝檀子蜜和同少加真麝并
龍腦一架餘醺落晚風

黃亞夫野梅香

降真香四兩 臘茶一胯

右以茶為末入井花水一碗與香同煮水乾為度節
去臘茶殘降真為細末加龍腦半錢和勻白蜜鍊令
過熟搜作劑丸如雞頭大或散燒

江梅香

零陵香 藿香 丁香各半兩陳乾 茴香半錢 龍腦
少許 麝香少許乳鉢內研以定茶湯和洗之

右為末鍊蜜和勻捻餅子以銀葉襯燒之

江梅香

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

六

歌曰百粒丁香一撒茴麝香少許可堪裁更加五味零
陵葉百斛濃熏江上梅

蠟梅香

沉香 檀香各三錢 丁香六錢 龍腦半錢 麝香
一錢

右為細末生蜜和劑焚之

雪中春信

沉香一兩 白檀 丁香 木香各半兩 甘松 藿

香 零陵香各七錢半 回鶻香附子 白芷 當歸

官桂 麝香各三錢 檳榔 荳蔻各一枝

右為末鍊蜜和餅如棊子大或脫花樣燒如常法

雪中春信

香附子四兩 鬱金二兩 檀香一兩建茶 麝香少
許 樟腦一錢石灰 羊脰炭四兩

右為末鍊蜜和勻焚窰如常法

雪中春信

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

十七

檀香半兩 棧香 丁香皮 樟腦各一兩二錢 麝
香一錢 杉木炭二兩

右為末鍊蜜和勻焚窰如常法

春消息

丁香 零陵香 甘松各半兩 茴香 麝香各一分
右為粗末蜜和得劑以磁盒貯之地坑內窰半月

春消息

丁香百粒 茴香半合 沉香 檀香 零陵香 藿

香各半兩

右為末入腦麝少許和膏同前兼可佩帶

春消息

甘松一兩 零陵香 檀香各半兩 丁香百顆 茴

香一撮 腦麝各少許

和膏並如前法

洪駒父百步香 又名萬斛香

沉香一兩半 棧香 檀香 以蜜酒湯少許別炒極乾 製甲香各

欽定四庫全書

陳氏香譜卷三

十八

半兩別 零陵香 同研細 龍腦 麝香各三分

右和勻熟蜜和劑膏製如常法

百里香

荔枝皮千顆 須閩中來用鹽梅者 甘松 棧香各三兩 檀香

蜜拌炒黃色 製甲香各半兩 麝香一錢 別研

右細末煉蜜和令稀稠得所盛以不津器坎埋之半

月取出製之再投少許蜜捻作餅子亦可此蓋載損

聞思香也

黃太史四香

沉檀為主每沉二兩半檀一兩斫小博殼取檀查液漬之液過指許三日乃煮滌其液溫水沐之紫檀為屑取小龍茗末一錢沃湯和之清晝時色以濡竹紙數重魚之螺甲半兩弱磨去齟齬以胡麻膏熬之色正黃則以蜜湯遽洗之無膏氣乃已青木香末以意和四物稍入婆律膏及麝二物惟少以棗肉合之作模如龍涎香狀日曬之

欽定四庫全書

陳氏香譜卷三

十九

意可

海南沉水香三兩得火不作紫桂烟氣者麝香檀一兩切焙衡山亦有之宛不及海南來者木香四錢極新者不焙玄參半兩劉燭炙甘草末二兩焰硝末一錢甲香一錢浮油煎令黃色以蜜洗去油復以湯洗去蜜如前治法而末之婆律膏及麝各三錢別研香成旋入以上皆末之用白蜜六兩熬去沫取五兩和香末勻置瓷盒如常法

山谷道人得之於東溪老東溪老得自歷陽公多方
初不知其所自始名宜愛或曰此江南宮中香有美
人字曰宜甚愛此香故名宜愛不知其在中主後主
時耶香殊不凡故易名意可使衆業力無度量之意
鼻孔繞二十五有求覓增上必以此香為可何沉酒
款玄參茗熬檀鼻端已需然平直是得無生意者
觀此香莫處處穿透亦必為可耳

深靜

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三

海南沉香二兩羊脰炭四兩沉水剉如小博骰入白蜜
五兩水解其膠重湯慢火煮半日許浴以溫水同炭杵
為末馬尾篩下之以煮蜜為劑窖四十九日出之入婆
律膏三錢麝一錢以安息香一分和作餅子亦得以窰
盒貯之

荊州歐陽元老為余處此香而以一斤許贈別元老
者其從師也能受匠石之斤其為吏也不剉庖丁之
仞天下可人也此香恬澹寂寞非世所尚時時下帷

一炷如見其人

小宗

海南沉水香一分剉棧香半兩剉紫檀三分半生用銀
石器妙令紫色三物皆令如鋸屑蘇合油二錢製甲香
一錢末之麝一錢半研玄參半錢末之鸞梨二枚取汁
青棗二十枚水二盃煮取小半盞同梨汁浸沉棧檀煮
一伏時緩火取令乾和入四物煉蜜令小冷搜和得所
入窰盒窖一日

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三

南陽宗少文嘉遜江湖之間援琴作金石弄遠山皆
與之應聲其文獻足以配古人孫茂深亦有祖風當
時貴人欲與之游不可得乃使陸探微畫其像挂壁
間觀之茂深惟喜閉閤焚香遂作此饋之時謂少文
太宗茂深小宗故名小宗香

大宗小宗
南史有傳

藍成叔知府韻勝香

沉香 檀香 麝香各一錢 白梅肉 丁香皮

焙乾
研

各半錢 揀丁香五粒 木香一字 朴硝半兩

別研

右為細末與別研二味入乳鉢拌勻密器收每用薄

銀葉如龍涎法燒之少歇即是硝融隔火氣以水勻

澆之即復氣通氣氣矣乃鄭康道御帶傳於藍藍嘗

括於歌曰沉檀為末各一錢丁皮梅肉減其半揀丁五

粒木一字半兩朴硝柏麝拌此香韻勝以為名銀葉

燒之火宜緩蘇軾光云每五科用丁皮梅肉各三錢

麝香半錢重餘皆同且云以水滴之一炷可留三日

元御帶清觀香

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷三

沉香四兩 金顏香別研 石芝 檀香各二錢半 末

龍涎二錢 麝香一錢半

右用井花水和勻礶石礶細脫花藝之

脫浴香

香附子蜜浸三日 慢火焙乾 零陵香酒浸一宿 慢火焙乾 各半兩 橙皮

棟花乾 榧查核 荔支殼各一兩

右並精細揀擇為末加龍腦少許煉蜜拌勻入窰盒

封窖十餘日取燒

文英香

甘松 藿香 芽香 白芷 麝 檀香 零陵香

丁香皮 玄參 降真香各二兩 白檀香半兩

右為末煉蜜半斤少入朴硝和香藝之

心清香

沉檀各一指大 母丁香一分 丁香皮三錢 樟腦

一兩 麝香少許 無縫炭四兩

右同為末拌勻重湯煮蜜去浮泡和劑窰器守窖

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷三

瓊心香

棧香半兩 檀香一分 臘茶清煮 丁香三十粒 麝香半

錢 黃丹一分

右為末煉蜜和膏藝之又一方用龍腦少許

大真香

沉香一兩半 白檀一兩 細剉白蜜半 棧香二兩

甲香一兩 製 腦麝各一錢入研

右為細末和勻重湯煮蜜為膏作餅子窖一月燒

大洞真香

乳香 白檀 棧香 丁香 沉香各一兩 甘松半兩 零陵香

右細末煉蜜和膏藝之

天真香

沉香三兩 劉 丁香 新 麝香木 劉 各一兩 玄參 洗切

微炒 生龍腦各半兩 別 麝香三錢 另 甘草末二

錢 焰硝少許 甲香一分 製過

欽定四庫全書

陳氏香譜

三

右為末與腦麝和勻用白蜜六兩煉去泡沫入焰硝及香末丸如雞頭大藝之熏衣最妙

玉蕊香 一名百花香

白檀 丁香 棧香 玄參各一兩 甘松半兩 淨

黃熟香二兩 麝一分

煉蜜為膏和蜜如常法

玉蕊香

玄參半斤 銀器內煮乾再炒令微烟出 甘松四兩 白檀二兩 劉

右為末真麝香乳香各二錢研入煉蜜九芡子大

玉蕊香

白檀四兩 丁香皮八錢 韶腦四錢 安息香一錢

桐木夫炭四錢 腦麝少許

右為末煉蜜劑油紙裏窰器貯之入窖半月

盧陵香

紫檀七十二銖 即三兩屑之 棧香十二銖 半 沉香

六銖 分 麝香三銖 一錢 蘇合香五銖 二錢二分

欽定四庫全書

陳氏香譜

三

甲香二銖半 一錢 玄參末一銖半 半

右用沙梨十枚切片研絞取汁青州棗二十枚水二盃

濃煎汁浸紫檀一夕微火煮滴入煉蜜及焰硝各半

兩與諸香研和窖一月藝之

康漕紫瑞香

白檀一兩 錯 羊脰骨炭半秤 極

右用蜜九兩窰器重湯煮熟先將炭煤與蜜搜勻次

入檀末更用麝香半錢或一錢別器研細以好酒化

開洒入前件藥劑入甕罐封窖一月旋取藝之久窖

尤佳

靈犀香

雞舌香八錢 甘松三錢 靈靈香各一兩半

右為末密煉和劑窖燒如常法

仙萸香

甘菊莖乾 檀香 靈靈香 白芷各一兩 腦麝各

少許乳鉢研

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三

右為末以梨汁和劑作餅子晒乾

降仙香

檀香末四兩蜜少許和為膏 玄參 甘松各二兩 川靈靈一

兩 麝少許

右為末以檀香膏子和之如常法窖藝

可人香

歌曰丁香一分沉檀半腦麝二錢中半良二兩烏香杉

炭是蜜丸藝處可人香

禁中非烟

歌曰腦麝沉檀俱半兩丁香一分桂三錢蜜丸和細為
團餅得自宣和禁闥傳

禁中非烟

沉香半兩 白檀四兩劈作十塊時 丁香 降真

鬱金 甲香各二兩製

右為細末入麝少許以白芨末滴水和捻餅窖藝

復古東闌雲頭香

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三

占臘沉香十兩 金顏香 拂手香各二兩 薔梔子

研別 石芝各一兩 梅花腦一兩半 龍涎 麝香各

一兩 製甲香半兩

右為末薔薇水和勻如無以淡水和之亦可用礎石

礎之脫花如常法藝

崔賢妃瑤英香

沉香四兩 金顏香二兩半 拂手香 麝香 石芝

各半兩

右為細末上石和礎捻餅子排銀盞或盤內盛夏烈日曬乾以新軟刷子出其光貯於錫盒內如常法藝之

元若虛搃管瑤英勝

龍涎一兩 大食梔子二兩 沉香十兩^上 梅花腦

七錢 麝香當門子半兩

右先將沉香細剉礎令極細方用薔薇水浸一宿次日再上礎三五次別用石礎龍腦等四味極細方與

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三八

沉香相合和勻再上石礎一次如水多用紙滲令乾濕得所

韓鈴轄正德香

上等沉香十兩 梅花片腦 薔梔子各一兩 龍涎

石芝 金顏香 麝香肉各半兩

右用薔薇水和令乾濕得所上礎石細礎脫花藝之或作數珠佩帶

滁州公庫天花香

玄參四兩 甘松二兩 檀香一兩 麝香半錢
右除麝香別研外餘三味細剉如米粒許白蜜六兩拌勻貯甕罐內久窖乃佳

王春新料香

沉香五兩 棧香 紫檀各二兩半 米腦一兩 梅花腦二錢半 麝香七錢半 木香 丁香各一錢半 金顏香一兩半 石脂半兩^好 白芨二兩半 胯茶一胯半

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三九

右為細末次入腦麝研勻皂兒仁半斤濃煎膏硬和杵千下脫花陰乾刷光甕器收貯如常法藝之

辛押陀羅亞悉香

沉香 兜婁香各五兩 檀香 甲香各二兩^製 丁香 大石弓 降真各半兩 鑒臨^{別研未詳或異名} 米腦

白 麝香各二錢 安息香三錢

右為細末以薔薇水蘇合油和劑作丸或餅藝之

金龜香燈

香皮每以煇炭研為細末篩過用黃丹少許和使白芫
研細米湯調膠煇炭末勿令太濕香心茅香藿香零陵
香三賴子柏香印香白膠香用水如法煮去松烟性澀
上待乾成惟碾不成餅已上香等分挫為末和令停獨
白膠香中半亦研為末以白芫為末水調和捻作一指
大如橄欖形以煇炭為皮如裏饅頭入龜印却用針穿
自龜口插從龜尾出脫去龜印將香龜尾捻合焙乾燒時
從尾起自然吐烟於頭燈明而且香每以油燈心或油
欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三

紙撚火點之

金龜延壽香

定粉半錢 黃丹一錢 煇炭一兩並為末

右研和薄糊調成劑雕兩片龜兒印脫裏別香在龜
腹內以布針從口穿到腹香烟出從龜口內燒灰冷
龜色如金

瑞龍香

沉香一兩 占城麝檀 占城沉香各三錢 迦蘭木

龍腦各二錢 大食梔子花 龍涎各一錢 檀香
篤耨各半錢 大食水五滴 薔薇水不拘多少
右為極細末拌和令勻於淨石上碓如泥入模脫
華蓋香

腦麝各一錢 香附子去毛 白芷 甘松 零陵香葉
茅香 檀香 沉香各半兩 松蘿 草豈菟各一
兩去殼 酸棗肉以肥紅小者
濕生者尤妙

右為細末鍊蜜用棗水煮成膏汁搜和令勻水臼搗
之以不粘為度九如雞頭實燒之

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三

寶林香

黃熟香 白檀香 棧香 甘松去毛 藿香葉 荷葉
紫背浮萍各一兩 茅香半斤去毛酒浸以蜜
拌炒令黃色
右為末煉蜜和勻九如阜子大無風處燒之

迷筵香

龍腦一分 乳香半錢 荷葉 浮萍 旱蓬 風松
水衣 松蘿各半兩

右為細末煉蜜和勻丸如彈子大慢火燒之從主人位以淨水一盞引烟入水盞內巡筵旋轉香烟接了水盞其香終而方斷以上三方亦名三寶殊薰

寶金香

沉檀各一兩 乳香別研 紫礦 金顏別研 安息香別研

甲香各一錢 麝香半兩別研 石芝 淨 白芷寇各

二錢 川芎 木香各半錢 龍腦別研三錢 排香四錢

右為粗末拌勻煉蜜和劑捻作餅金箔為衣用如常

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三十三

法

雲蓋香

艾葉 艾納 荷葉 扁柏葉各等分

右燒存性為末煉蜜和別香作劑用如常法芬芳襲人

佩熏諸香

篤耨佩香

沉香末一斤 金顏末十兩 大食梔子花 龍涎各

一兩 龍腦五錢

右為細末薔薇水徐徐和之得所白杵極細脫範子用如常法

梅蓋香

丁香 甘松 藿香葉 白芷各半兩 牡丹皮一錢

零陵香一兩半 舶上茴香一錢

同咬咀貯絹袋佩之

荀令十里香

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三十三

丁香半兩強 檀香 甘松 零陵香各一兩 生腦

少許 茴香半錢弱炒

右為末薄紙貼紗囊盛佩之其茴香生則不香過炒則焦氣多則藥氣少則不類花香須逐旋斟酌添使旖旎

洗衣香

牡丹一兩 甘松一錢

右為末每洗衣最後澤水入一錢香著衣上經月不

歌

假薔薇面花

甘松 檀香 零陵香 丁香各一兩 藿香葉 黃

丹 白芷 香墨 茴香各一錢 腦麝為衣

右為細末以熟蜜和拌稀稠得所隨意脫花用如常

法

玉華醒醉香

採牡丹蕊與茶蘼花清酒拌挹潤得所當風陰一宿杵

欽定四庫全書

陳氏香譜

三十四

細捻作餅子窖乾以龍腦為衣置枕間芬芳襲人可以

醒醉

衣香

零陵香一斤 甘松 檀香各十兩 丁香皮 辛夷

各半 茴香六分

右搗粗末入龍腦少許貯囊佩之香氣著衣汗浥愈

馥

薔薇衣香

茅香 零陵香 丁香皮各一兩

剉碎 微炒

白芷 細辛

白檀各半兩 茴香一分

右同為粗末可藝可佩

牡丹衣香

丁香 牡丹皮 甘松各一兩

同為末

龍腦

別研

麝香

各一錢

別研

右同和以花葉紙貼佩之或用新絹袋貼著肉香如

牡丹

欽定四庫全書

陳氏香譜

三十五

芙蓉香

丁香 檀香 甘松各一兩 零陵香 牡丹皮各半

兩 茴香一分

右為末入麝香少許研勻薄紙貼之用新帕子裏出

入着肉其香如新開蓮花臨時更入茶末龍腦各少

許不可火焙汗浥愈香

御愛梅花衣香

零陵葉四兩 藿香葉 檀香各二兩 甘松三兩

洗淨

去土 乾秤 白梅霜搗碎羅 沉香各一兩 丁香搗 米

腦各半兩 麝一錢半別研

以上諸香並須日乾不可見火除腦麝梅霜外一處同為粗末次入腦麝梅霜拌勻入絹袋佩之此乃內侍韓憲所傳

梅花衣香

零陵香 甘松 白檀 茴香各半兩微炒 丁香一分

木香一錢

欽定四庫全書 陳氏香譜 卷三 三十一
右同為粗末入腦麝少許貯囊中

梅萼衣香

丁香二錢 零陵香 檀香各一錢 船上茴香 木香各半錢 甘松 白芷各一錢半 腦麝各少許

右同劉候梅花盛開晴明無風雨於黃昏前擇未開含蕊者以紅線繫定至清晨日未出時連梅蒂摘下將前藥同拌陰乾以紙衣貯紗囊佩之奇醜可愛

蓮蕊衣香

蓮花蕊一錢乾研 零陵香半兩 甘松四錢 藿香

檀香 丁香各三錢 茴香 白梅肉各一分 龍腦少許

右為末入龍腦研勻薄紙貼紗囊貯之

濃梅衣香

藿香葉 早春茶芽各二錢 丁香十枚 茴香半字 甘松 白芷 零陵香各三錢

右同劉貯絹袋佩之

欽定四庫全書 陳氏香譜 卷三 三十二
裏衣香

丁香別研 鬱金各十兩 零陵香六兩 藿香 白芷各四兩 蘇合香 甘松 杜蘅各三兩 麝香少許 右為末盛袋佩之

裏衣香

零陵香一斤 丁香 蘇合香各半斤 甘松三兩 鬱金 龍腦各二兩 麝香半兩

右並須精好者若一味惡即損許香同搗如麻豆以

夾綃袋貯之

貴人絕汗香

丁香一兩為粗末 川椒六十粒

右以二味相和絹袋盛而佩之辟絕汗氣

內苑蕊心衣香

藿香 益智仁 白芷 蜘蛛香各半兩 檀香 丁

香 木香各一錢

右同搗粗末裏置衣笥中

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三

勝蘭衣香

零陵香 茅香 藿香各二錢 獨活 大黃各一錢

甘松錢半 牡丹皮 白芷 丁皮 桂皮各半錢

以上用水淨洗乾再用酒略噴盪盛蒸少時用三賴

子二錢豆腐漿蒸以盞蓋定檀一錢細剉合和令勻

入麝香少許

香燭

零陵香 茅香 藿香 甘松 松子搗碎 茴香 三

賴子豆腐同蒸過 檀香 木香 白芷 土白芷 肉桂

丁香 丁皮 牡丹皮 沉香各等分 麝香少許

右用好酒噴過日晒乾以剪刀切碎碾為生料篩羅

粗末瓦罈收頓

賴香

丁香加木香少許同炒 心子紅若作黑色不用 沉香各一兩 白

檀 金顏 黃蠟 三賴子各二兩 龍腦半兩三錢亦可

蘇合油不拘多少 生油少許 白膠香半斤於沙

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

三

鍋內煮候浮上暴掠入涼水搗爛再用皂角水三四盞以香色白為度秤二兩入香用

右先將蠟於定磁器內溶開次下白膠香次生油次

蘇合油攪勻取盞置地候大溫入衆香每一兩作一

丸更加烏篤耨一兩尤妙如造黑色者不用心子紅

入香墨二兩燒紅為末和劑如前法可懷可佩可置

扇柄把握

賴香

篤耨香 檀香末 麝香各半兩 金顏香五兩牙子為

末

蘇合油三兩 銀硃一兩 龍腦三錢

右為細末用篋器或銀器於沸湯鍋內頻放逐旋傾入蘇合油攪和停勻為度取出瀉入水中隨意作劑

輓香

沉香十兩 金顏香 棧香各二兩 丁香一兩 乳

香半兩 龍腦一兩半 麝香三兩

右為細末以蘇合油和納磁器內重湯煮半日以稀稠得中為度以白杵成劑

欽定四庫全書

陳氏香譜

甲

輓香

沉香為細末

金顏香各半斤

細末

蘇合油四兩

龍腦

一錢研細

右先以沉香末和蘇合油仍以冷水和成團却搗去水入金顏香龍腦又以水和成團再搗去水入白用杵三五千下時時搗去水以水盡杵成團有光色為度如欲輓更加金顏香如欲輓加蘇合油

輓香

上等沉香末五兩 金顏香二兩半 龍腦一兩

右為末入蘇合油六兩半用綿濾過取淨油和香旋旋看稀稠得所入油如欲黑色加百草霜少許

輓香

沉香 檀香 棧香各三兩 亞息香 梅花龍腦

甲香製 松子仁各半兩 金顏香 龍涎 麝各一

錢 篤耨油隨分

杉木炭以黑為度

右除腦麝松仁篤耨外餘皆取極細末以篤耨油與

欽定四庫全書

陳氏香譜

甲

諸香和勻為劑

廣州吳家輓香

金顏香半斤

細研

蘇合油二兩

沉香一兩

末

腦麝

各一錢別研

黃蠟二錢

芝麻油一錢

臘月者經年尤佳

右將油蠟同銷鎔放令微溫和金顏沉香末令勻次入腦麝與蘇合油同搜仍於淨石版上以木槌擊數百下如常法用之

瞿仲仁運使輓香

金顏香半兩 蘇合油三錢 腦麝各一匙 烏梅肉

二錢半

乾焙

右先以金顏腦麝烏梅肉為細末後以蘇合油相合和臨時相度鞭輭得所欲色紅加銀硃二錢半欲色黑加皂兒灰三錢存性

寶梵院主輦香

沉香二兩 金顏香半斤細末 龍腦四錢 麝香二錢

蘇合油二兩半 黃蠟一兩半

欽定四庫全書

陳氏香譜

四十二

右細末蘇合與蠟重湯鎔和搗諸香入腦子更杵千餘下

輦香

金顏香半斤極好者貯銀器用湯煮花細布紐淨研 蘇合油四兩 龍

腦一錢細研 麝香半錢細研 心紅不計多少色紅為度

右先將金顏香搗去水銀石銚內化開次入蘇合油麝香拌勻續入龍腦心紅移銚去火攪勻取出作團

如常法

輦香

黃蠟半斤溶成汁濾淨却以淨銅銚內下紫草煎令紅濾去草滓 檀香就鋪買細屑碾

金顏三兩揀去雜物取淨秤 滴乳香三兩

過二兩揀明塊者用芽香煎水煮過令淨成片如膏須冷水中取出待水乾入乳鉢內細研如粘鉢則入煨過醋拌末 沉香半兩要極細末 蘇合油二兩如結

底指石二錢同研則不粘矣 生麝香三錢淨鉢內以茶清

先以生羅蔔擦乳鉢則不粘無則代之 銀硃隨意加入以紅為度

右以蠟入 器大盃內坐重湯中溶成汁入蘇合油

欽定四庫全書

陳氏香譜

四十三

和成了停勻却入衆香以柳棒極勻即香成矣欲輦用松子仁三兩搽汁於內雖大雪亦輦

輦香

檀香一兩白梅煮剉碎為末 沉香半兩 丁香三錢 蘇合

油半兩 金顏香二兩蒸如無揀好楓滴乳香一兩酒煮過代之 銀硃隨

意

右諸香皆不見火為細末打和於甑上蒸碾成為香加腦麝亦可先將金顏碾為細末去滓

輦香

金顏香 蘇合油各三兩 篤耨油一兩二錢 龍腦

四錢 麝香一錢 銀硃四兩

右先將金顏碾為細末去滓用蘇合油坐熱入黃蠟

一兩坐化逐旋入金顏香坐過了腦麝篤耨油銀硃

打和以輦筍簪包縛收黃則加蒲黃二兩綠則入綠

二兩黑則入墨一二兩紫則入紫草各量多少加入

以勻為度

欽定四庫全書

卷三

四

熏衣香

茅香四兩細剉酒洗微蒸 零陵香 甘松各半兩 白檀二

錢錯末 丁香二錢 白乾三個焙乾取末

右同為粗末入米腦少許薄紙貼佩之

蜀主熏御衣香

丁香 棧香 沉香 檀香 麝香各一兩 甲香三

兩制

右為末煉蜜放冷令勻入窖月餘用如前見第一卷

南陽宮主熏衣香

蜘蛛香一兩 香白芷 零陵香 縮砂仁各半兩

丁香 麝香 當歸 荳蔻各一分

熏衣香

沉香四兩 棧香三兩 檀香一兩半 龍腦 牙硝

甲香各半兩灰水洗過浸一宿次用新水洗過復以蜜水去黃梨用 麝香一

錢

右除麝腦別研外同粗末煉蜜半斤和勻候冷入龍

欽定四庫全書

卷三

五

麝

新料熏衣香

沉香一兩 棧香七錢 檀香半錢 牙硝一錢 甲

香一錢製如前 荳蔻一錢 米腦一錢 麝香半錢

右先將沉香棧香為粗末次入麝拌勻次入甲香並牙

硝銀硃一字再拌煉蜜和勻上糝腦子用如常法

千金月令熏衣香

沉香 丁香皮各二兩 鬱金二兩細切 蘇合香 麝

糖香各一兩

同蘇合和作餅

小甲香四兩半

以新牛糞汁二升水三升和煮

三分去二取出以淨水淘刮去上肉焙乾又以清酒二升蜜半合和煮令酒盡以物攪候乾以水洗去蜜暴乾

另為水

右將諸香末和勻燒熏如常法

熏衣梅花香

甘松 舶上茴香 木香 龍腦各一兩 丁香半兩

麝香一錢

右件搥合粗末如常法燒熏

欽定四庫全書

陳氏香譜卷三

四十六

熏衣芬積香

沉香二十五兩

劉

棧香

劉

檀香

劉臘茶清炒黃

甲香

劉

如前 杉木煇炭各二十兩 零陵葉 藿香葉 丁香

牙硝各十兩 米腦三兩 梅花龍腦二兩

麝香五兩 蜜十斤煉和香

熏衣衙香

生沉香

劉

棧香各六兩

劉

檀香

劉臘茶清炒

生牙硝

各十二兩 生龍腦 麝香各九兩 甲香六兩

炭灰煮二日洗淨再加酒蜜同煮乾

白蜜

比香斤加倍用煉熟

右為末研入腦麝以蜜搜和令勻燒熏如常法

熏衣笑蘭香

藿苓甘芷木茴丁茅藳芎黃和桂心檀麝壯皮加減用酒噴日晒絳囊盛零以蘇合油揉勻松茅酒洗三賴米泔浸大黃蜜蒸麝香逐裏腴入熏衣加蘊蠶常帶加白梅肉

塗傳諸香

欽定四庫全書

陳氏香譜卷三

四十七

傳身香粉

英粉

別

青木香

麻黃根

附子

炮

甘松

藿香

零陵香各等分

右除英粉外同搥羅為細末以生絹夾帶盛之浴罷

傳身上

拂手香

白檀香三兩

滋潤者劉末用蜜三錢化湯一盞許炒令水盡稍覺氤濕焙乾并羅細末

米

腦一兩 阿膠一片

右將阿膠化湯打糊入香末搜拌勻於木臼中搥三五日捻作餅子或脫花窰乾穿穴線懸於骨間

梅真香

零陵紫 甘松 白檀 丁香 白梅末各半兩 腦

麝少許

右為細末糝衣傳身皆可用之

香髮木犀油

凌晨摘木犀花半開者揀去莖蒂令淨高量一斗取清

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

四八

麻油一斤輕手拌勻捺窰器中厚以油紙密封罐口坐於釜內以重湯煮一餉久取出安頓穩燥處十日後傾出以手泚其清液收之最要封閉最密久而愈香如此油勻入黃蠟為面脂馨香也

香餅

凡燒香用餅子須先燒令通赤置香爐內俟有黃衣生方徐徐以灰覆之仍手試火氣緊慢

香餅

輓炭三斤末 蜀葵花或葉一斤半

右同搗令粘勻作劑如乾更入薄麪糊少許彈子大捻作餅晒乾貯磁器內燒旋取用如無葵則炭末中拌入紅花滓同搗以薄糊和之亦可

香餅

堅硬羊胛炭三斤末 黃丹 定粉 針沙 牙硝各

五兩 棗一升煮爛去皮核

右同搗拌勻以棗膏和劑隨意捻作餅子

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

四九

香餅

木炭三斤末 定粉 黃丹各二錢

右拌勻糯米為糊和成入鐵臼內細杵以圈子脫作餅晒乾用之

香餅

用標炭和柏葉葵葉橡實為之純用標炭則焦熟而易碎石餅太酷不用

耐久香餅

鞭炭末五兩 胡粉 黃丹各一兩

右同搗細末煮糯米膠和勻捻餅子晒乾每用燒令赤炷香經久或以針沙代胡粉煮棗代粳米膠

長生香餅

黃丹四兩 乾蜀葵花燒灰 乾茄根各二兩燒灰 棗半

斤去板

右為細末以棗肉研作膏同和勻捻作餅子窖晒乾置爐而火耐久不熄

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

辛

終日香餅

羊脰炭一斤末 黃丹 定粉各一分 針沙少許研勻

右煮棗肉杵膏拌勻捻作餅子窖二日便於日中晒乾如燒香畢水中蘸滅可再用

丁晉公文房七寶香餅

青州棗一斤和板用 木炭二升末 黃丹半兩 鐵屑

二兩造針處有 定粉 細墨各一兩 丁香二十粒

右同搗為膏如乾時再加棗以模子脫作餅如錢許

每一餅可經晝夜

內府香餅

木炭末一斤 黃丹 定粉各三兩 針砂三兩 棗半升

右同末蒸棗肉杵作餅晒乾每一板可度終日

賈清泉香餅

羊脰炭一斤末 定粉 黃丹各四兩

右用糯米粥或棗肉和作餅晒乾用常法茹煎燒夾

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

辛

存性棗肉同杵捻餅晒乾用之

香煤

近來焚香取火非竈下即臨爐中者以之供神佛格祖先其不潔多矣故用煤以扶接火餅

香煤

乾竹筒 乾柳枝燒黑灰各二兩 鉛粉三錢 黃丹三兩

焰硝二錢

右同為末每用已許以燈藝於上焚香

香煤

茄葉不計多少燒灰存性
取麵四兩 定粉三十 黃丹二十

海金沙二十

右同末拌勻置爐灰上紙點可終日

香煤

竹夫炭 柳木炭各四兩 黃丹 粉各二錢 海

金沙一錢研

右同為末拌勻捻作餅入爐以燈點着燒香

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

五十二

香煤

枯茄樹燒成炭於瓶內候冷為末每一兩入鉛粉二錢

黃丹二錢半拌和裝灰中

香煤

煇硝黃丹杉木炭各等分為末糝爐中以紙擦點

日禪師香煤

杉木夫炭四兩 竹夫炭 鞭羊脰炭各二兩 黃丹

海金沙各半兩

右同為末拌勻每用二錢置爐中紙燈點燒候透紅以冷灰薄覆

閩資欽香煤

柏葉多採之摘去枝梗淨洗日中曝乾剉碎不用墳墓間者入淨罐內以鹽泥固濟炭火煨之存性細研每用一二錢置香爐灰上以紙燈點候勻編焚香時時添之可以終日或燒柏子存
性作火尤妙

香灰

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

五十三

細葉杉木枝燒灰用火一二塊養之經宿羅過裝爐

每秋間採松鬚曝乾燒灰用養香餅 未化石灰槌碎

羅過鍋內炒令 候冷又研又羅為之作香爐灰潔白

可愛日夜常以火一塊養之仍須用蓋若塵埃則黑矣

礦灰六分爐灰四錢和勻大火養灰熟性香蒲燒灰

爐裝如雪 紙灰石灰木灰各等分以米湯和同煨過

勿令偏頭 青朱紅黑煤土黃各等分雜於紙中裝爐

名錦灰 紙灰沙通紅羅過或稻糠燒灰皆可用 乾

松花燒灰裝香爐最潔 茹灰亦可藏火久不熄

蜀葵枯時燒灰裝爐大能養火

香品器

香爐

香爐不拘銀銅鐵錫石各取其便用其形或作狻猊獅
牙鳬鴨之類計其人之當作頭貴穿隆可泄火氣置竅
不用大都使香氣回薄則能耐久

香盛

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

五十四

盛即盒也其所用之物與爐等以不生澁枯燥者皆可
仍不用生銅銅易腥漬

香盤

用深中者以沸湯瀉中令其氣鬱鬱然後置爐其上使
香易著物

香匙

平仄置火則必用圓者分香抄末則必用銳者

香筋

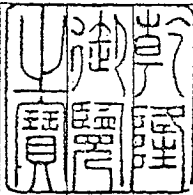
和香取香摠宜用筋

香壺

或范金或埏為之用盛已筋

香甕

甕香用之深中而掩上



欽定四庫全書

陳氏香譜
卷三

五十五

陳氏香譜卷三

欽定四庫全書

子部
陳氏香譜卷四

詳校官中書臣李

貲外郎臣牛稔文覆勘

總校官知縣臣楊懋珩

校對官編修臣于鼎

謄錄監生臣周丕

欽定四庫全書

陳氏香譜卷四

宋 陳敬 撰

香珠

香珠之法見諸道家者流其未尚矣若夫茶藥之屬豈亦漢人含雞舌之遺製乎茲故錄之以備聞見庶幾免一物不知之議云

孫廉訪木犀香珠

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

木犀花蓓蕾未開全者開則無香矣露未晞時先用布幔鋪地如無幔淨掃樹下地面令人登梯上樹打下花蕊收拾歸家擇去梗葉須精揀花蕊用中樣石磨磨成漿次以布複包裹榨壓去水將已乾花料盛貯新磁罐內逐旋取出於乳鉢內研令細軟用小竹筒為則度築齋或以滑石平片刻竅取則手握圓如小錢大竹籤穿孔置盤中以紙四五重襯藉日傍陰乾稍健百顆作一串小竹弓絢掛當風處次至八九分乾取下每十五顆

以淨潔水略略揉洗去皮透青黑色又用盤盛於日影中曝乾如天氣陰晦紙隔之於慢火上焙乾新綿裏以時時取觀則香味可數年不失其磨乳員洗之際忌穢汚婦女銀器油鹽等觸犯瑣碎錄云木犀香念珠須入少西木香

龍涎香珠

大黃一兩半 甘松一兩三錢 川芎一兩半 牡丹皮一兩三錢 藿香一兩三錢 三柰子一兩三錢

以上

欽定四庫全書

陳氏香譜

三

六味並用酒食留一宿次五更以後藥一處拌勻於露天安待日出晒乾用

白芷二兩

零陵香一兩半 丁香皮一兩三錢 檀香三兩 滑

石一兩三錢

別研

白芨六兩

糊

均香二兩

乾

白礬

一兩三錢

二味另研

好棧香二兩

秦皮一兩三錢

樟

腦一兩 麝香半字

右圓晒如前法旋入龍涎腦麝

香珠

天寶香一兩 土光香半兩 速香一兩 蘇合香半

兩 牡丹皮一兩 降真香半兩 茅香一錢半 草

香一錢 白芷二錢

豆腐蒸過

三柰子二分

同上

丁香半

錢 藿香五錢 丁皮一兩

藿本半兩

細辛二分

白檀一兩

麝香檀一兩

零陵香二兩

甘松半

兩 大黃二兩

荔枝殼二錢

麝香

不約多少

黃蠟一

兩 滑石

量用

石膏五錢

白芨一兩

右料蜜梅酒松子三柰白芷糊夏白芨春秋瓊枝冬

阿膠黑色竹葉灰石膏黃色檀香蒲黃白色滑石麝

欽定四庫全書

陳氏香譜

三

菩提色細辛牡丹皮檀香麝檀檀大黃石膏沉香喚

濕用蠟丸打輕者用水喚打

香珠

零陵香

洗酒

甘松

洗酒

茴香各等分

丁香等分

茅

香

洗酒

木香

許少

藿香

酒洗此項奪香味少

川芎

許少

桂心

檀香等分

白芷

麝裏燒熟去麝不用

牡丹皮

酒浸一

三

柰子

加白芷治少用

大黃

蒸過此項收香珠又且染色

右件如前治度晒乾合和為細末用白芨末和麝打

糊為劑隨大小圓趁濕穿孔半乾用麝香稠調水為

衣

收香珠法

凡香環佩帶念珠之屬過夏後須用木賊草擦去汗垢庶不蒸壞若蒸損者以溫湯洗過晒乾其香如初

香藥

丁香煎圓

丁香二兩半 沉香四錢 木香一錢 白芷蔻二兩

欽定四庫全書

陳氏香譜

四

檀香二兩 甘草四兩

右為細末以甘草熬膏和勻為圓如雞頭大每用一

丸噙化常服調順三焦和養營衛治心胸痞滿

木香餅子

木香 檀香 丁香 甘草 肉桂 甘松 縮砂

丁皮 莪朮各等分

莪朮醋煮過用鹽水浸出醋漿米浸三日為末蜜和

同甘草膏為餅每服三五枚

香茶

經進龍麝香茶

白芷蔻一兩去皮 白檀末七錢 百藥煎五錢 寒水

石五分薄荷汁製 麝香四錢 沉香三錢梨汁製 片腦二

錢半 甘草末三錢 上等高茶一斤

右為極細末用淨糯米半升煮粥以密布絞取汁置

淨盃內放冷和劑不可稀軟以鞭為度於石版上杵

一二時辰如粘黏用小油二兩煎沸入白檀香三五

欽定四庫全書

陳氏香譜

五

片脫印時以小竹刀刮背上令平

孩兒香茶

孩兒香一斤 高末茶三兩 片腦二錢半或糯米者

麝香四錢 薄荷霜五錢 川百藥煎一兩細研

右五件一處和勻用熟白糯米一升半淘洗令淨入

鍋內放水高四指煮作糕麝取出十分冷定於磁盆

內揉和成劑却於平石砧上杵千餘轉以多為妙然

後將花脫子洒油少許入劑作餅於潔淨透風篩子

頓放陰乾貯磁器內青紙襯裏密封 附造薄荷霜
法寒水石研極細末篩羅過以薄荷二斤加於鍋內
傾水一碗於下以瓦盆蓋定用紙濕封四圍文武火
蒸熏兩頓飯久氣定方開微有黃色嘗之涼者是

香茶

上等細茶一斤 片腦半兩 檀香三兩 沉香一兩
舊龍涎餅一兩 縮砂三兩

右為細末以甘草半斤對水一碗半煎取淨汁一椀

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

六

入麝香末三錢和勻隨意作餅

香茶

龍腦

麝香

雪梨汁製

百藥煎

棟草

寒水石

飛過末

白芷蕊各三錢

高茶一斤

礪砂一錢

右同張細末以熬過熟糯米粥淨布巾絞取濃汁和

勻石上杵千餘方脫花樣

事類

香尉

漢仲雍子進南海香拜洛陽尉人謂之香尉 述異記

香戶

南海郡有採香戶述異記海南俗以質香為業 東坡文集

香市

南方有香市乃商人交易香處 述異記

香洲

朱崖郡洲中出諸異香往往有不知名者 述異記

香溪

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

七

吳宮有香水溪俗云西施浴處又呼為脂粉塘吳王宮
人濯板於此溪上源至今猶香

香界

回香所生以香為界 楞嚴經

香篆

鏤木為篆紋以之範香塵然於飲食或佛象前有至二

三尺徑者 洪譜 香鵲雕盤 詞坡

香珠

以雜香搗之丸如梧桐子青繩穿之此三皇真元之香

珠也燒之香徹天

三洞珠囊

香纓

詩親結其禱註云禱香纓也女將嫁母結纓而戒之

香囊

晉謝玄常佩紫羅香囊謝安患之而不欲傷其意自戲

賭取香囊焚之玄遂止又古詩云香囊懸肘後後蜀文

滄生五歲謂母曰有五色香囊在否林下往取得之乃

欽定四庫全書

陳氏香譜卷四

滄前生五歲失足落井今再生也

並本傳

香獸

以塗金為狻猊麒麟鳬鴨之狀空中以焚香使烟以口

出以為玩好復有雕木塊土為之者

洪譜

北里志書曰新

團香獸不焚燒

香童

唐元寶好賓客務於華侈器玩服用僭於王公而四方

之士盡仰歸焉常於寢帳牀前列雙童子人捧七寶博

山香爐日暝焚香徹曙其驕貴如此

天寶遺事

香巖童子

香巖童白佛言我諸比丘燒水沉香香氣寂然未入鼻

中非木非空非烟非火去無所著來無所從由是意銷

發明無漏得阿羅漢

楞嚴經

宗起香

宗起嘗露壇行道奩中香盡自然滿溢爐中無火烟自

出

洪譜

欽定四庫全書

陳氏香譜卷四

南蠻香

訶陵國亦曰閩婆在南海中貞觀時遣使獻婆律膏又

驃古朱波也有以名思利毗離為土多異香王宮設金

銀二爐冠至焚香擊之以占吉凶有巨白象高數尺訟

者焚香自跏象前自思是非而退有災疫至亦焚香對

象跏自咎無膏油以蠟雜香代炷又真臘國客至肩檳

榔龍腦以進不飲酒

唐書南蠻傳

棧槎

番禺民忽於海旁得古槎長丈餘濶六七尺木理甚堅
取為溪橋數年後有僧過而識之謂眾曰此非久計願
捨衣鉢資易為石橋即求此槎為薪眾許之得槎香數千

兩譜

披香殿

漢宮闕名長安有合歡殿披香殿郡國志

採香徑

吳王闔閭起響屨廊採香徑郡國志

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

十

柏香臺

漢武帝作柏香臺以柏香聞數十里本紀

三清臺

王審知之孫昶襲為閩王起三清臺三層以黃金鑄像

日焚龍腦薰陸諸香數斤五代史十國世家

沉香牀

沙門支法有八尺沉香牀異苑

沉香亭

開元中禁中初重木芍藥即今牡丹也得四本紅紫淺
紅通白者上因移植於興慶池東沉香亭前李白集敬宗
時波斯國進沉香亭子拾遺李漢諫曰沉香為亭何異

瓊臺瑤室本傳

沉香堂

隋越國公楊素大治第宅有沉香堂

沉香火山

隋煬帝每除夜殿前設火山數十皆沉香木根每一山

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

十一

焚沉香數車以甲煎沃之香聞數十里續世說

沉香山

華清溫泉湯中疊沉香為方丈瀛洲明皇雜錄

沉香泥餅

唐宗楚客造新第用沉香紅粉以泥壁每開戶則香氣

蓬勃洪譜

檀香亭

宣州觀察使楊牧造檀香亭子初成命賓落之杜陽編

檀槽

天寶中中官白秀貞自蜀使回得琵琶以獻其槽以沙檀為之溫潤如玉光耀可鑑 李宣詩云琵琶聲亮然

檀槽

麝辟

南齊廢帝東昏侯塗壁皆以麝香雞石集

麝枕

置真麝香於枕中可絕惡夢續博物志

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

十三

龍香撥

貴妃琵琶以龍香版為撥外傳

龍香劑

玄宗御案墨曰龍香劑一日見墨上有道士如蠅而行上叱之即呼萬歲曰臣松墨使者也上異之陶家餘事

香閣

後主起臨春結綺望春三閣以沉檀香木為之陳書楊國忠嘗用沉香為閣檀香為欄檻以香乳香飾土和為

泥飾閣壁每於春時木芍藥盛開之際聚賓於此閣上

賞花焉禁中沉香亭遠不侔此壯麗也天寶遺事

香牀

隋煬帝於觀文殿前兩廂為堂十二間每間十二寶厨

前設五方香牀綴貼金玉珠翠每駕至則宮人擎香爐

在輦前行隋書

香殿

大明賦云香殿聚於沉檀豈待焚夫椒蘭黃華水殿風

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

十三

來暗香滿坡詞

五香席

石季倫作席以錦裝五香雜以五綵編蒲皮緣

七香車

梁簡文帝詩云丹轂七香車

椒殿

唐官室志有椒殿

椒房

應劭漢官儀曰后宮稱椒房以椒塗壁也

椒漿

桂醕兮椒漿離騷元日上椒酒於家長舉觴稱壽元日進

椒酒椒是玉衡之精服之令人却老崔寔月令

蘭湯

五月五日以蘭湯沐浴大戴禮浴蘭湯兮沐芳楚詞注云芳芷也

蘭佩

紉秋蘭以為佩楚詞注云佩也記曰佩祝莊蘭

欽定四庫全書

陳氏香譜卷四

蘭畹

既滋蘭之九畹又樹蕙之百畹同上

蘭操

孔子自衛反魯隱谷之中見香蘭獨茂喟然歎曰夫蘭當為王者香今乃獨茂與眾草為伍乃止車援琴鼓之自傷不逢時托辭於幽蘭云琴操

蘭亭

暮春之初會於會稽山陰之蘭亭王逸少叙

蘭室

黃帝傳岐伯之術書於玉版藏諸靈蘭之室素問

蘭臺

楚襄王遊於蘭臺之宮風賦龍朔中改秘書省曰蘭臺

椒蘭養鼻

椒蘭芬苾所以養鼻也前有澤芷以養鼻蘭槐之根

是為芷註云蘭槐香草也其根名芷並荀子

焚椒蘭

欽定四庫全書

陳氏香譜卷四

烟斜霧橫焚椒蘭也杜牧之阿房宮賦

懷香

尚書省懷香握蘭趨走丹墀漢官儀

含香

漢桓帝時侍中刁存年老口臭上出雞舌香使含之香頗小辛螫不敢嚙自疑有過賜毒也歸舍與家人辭訣欲就便宜眾求視其藥乃口香眾笑之更為含食意遂

解漢官儀

啗香

唐元載寵姬薛瑤英母趙媚幼以香啗英故肌肉悉香

杜陽編

飯香

維摩詰經時化菩薩以滿鉢香與維摩詰飯香普薰毗耶離城及三千大千世界時維摩詰語舍利佛等諸大聲聞仁者可食如來甘露味飯大悲所熏無以限意食

之使不消柳文注

欽定四庫全書

陳氏香譜卷四

七

貢香

唐貞觀中勅下度支求杜若省郎以謝玄暉詩云芳洲

採杜若乃貢坊州貢之通志

分香

魏王操臨終遺令曰餘香可分與諸夫人諸舍中無所

為學作履組賣也三國志及文選

賜香

玄宗夜宴以琉璃器盛龍腦香數十賜羣臣馮謐起進

曰臣請效陳平為宰自丞相以下悉皆跪受尚餘其半乃捧拜曰欽賜錄事馮謐玄宗笑許之

熏香

莊公束縛管仲以子齊使而以退比至三襲三浴之註云以香塗身曰襲襲為熏齊語魏武帝令云天下初定吾便禁家內不得熏香三國志

竊香

韓壽字德真為賈克司空掾充女窺見壽而悅之目婢

欽定四庫全書

陳氏香譜卷四

十七

通殷勤壽踰垣而至時西域有貢奇香一著人經月不散帝以賜充其女密盜以遺壽後充與壽宴聞其芬馥計武帝所賜惟已及陳騫家餘無疑壽與女通乃取左右婢考問即以狀言充秘之以女妻壽晉書本傳

愛香

劉季和性愛香常如廁還輒過爐上主簿張坦曰人名公俗人不虛也季和曰荀令君至人家坐席三日香為我如何坦曰醜婦效顰見者必走公欲坦遁走耶季和

大笑襄陽記

喜香

梅學士詢性喜焚香其在官所每晨起將視事必焚香兩爐以公服罩之撮其袖以出坐定撤開兩袖郁然滿室焚香時人謂之梅香歸田錄

天女擎香

夫子當生之日有二蒼龍旦而下來附微在房因夢而生夫子夫子當生時有天女擎香自空而下以沐浴微

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷四

在拾遺記

三班喫香

三班院所領使臣八千餘人泣事於外其罷而在院者常數百人每歲乾元節餼錢飯僧進香合以祝聖壽謂之香錢京師語曰三班喫香歸田錄

露香告天

趙清獻公抃衢州人舉進士官至參政平生所為事夜必衣冠露香九拜手告於天應不可告者則不敢為也言行

錄

焚香祝天

後唐明宗每夕於宮中焚香祝天曰某為眾所共推戴願早生聖人為生民主五代史帝記初廢帝入欲擇宰相於左右左右皆言盧文紀及姚顗有人望帝乃悉書清要姓名內琉璃瓶中夜焚香祝天以筋挾之首得文紀之名次得姚顗遂並相焉五代史本傳

焚香讀章奏

唐宣宗每得大臣章奏必盥手焚香然後讀之本紀

焚香讀孝經

岑之敬字由禮淳厚有孝行五歲讀孝經必焚香正坐南史

焚香讀易

公退之暇戴華陽巾披鶴氅衣手執周易一卷焚香默坐消遣世慮王元之竹樓記

焚香致水

襄國城塹水源暴竭石勒問於佛圖澄澄曰今當勅龍取水乃至源上坐繩床燒安息香呪數百言水大至隍塹皆滿載記

焚香禮神

漢武故事昆邪王殺休屠王來降得其金人之神置之甘泉宮金人者皆長丈餘其祭不用牛羊惟燒香禮拜

于吉精舍燒香燒道書三國志

降香嶽瀆

欽定四庫全書

陳氏奇譜
卷四

三

國朝每歲分遣驛使齎御香有事於五嶽四瀆名山大川循舊典也廣州之南海道八十里扶胥之口黃木之灣南海祝融之廟也歲二月朝遣使馳駟有事於海神香用沉檀具牲幣使初獻其亞獻終獻各以官攝行三獻三奏樂主者以祝文告於前禮畢使以餘香分給

焚香靜坐

人在家及外行卒遇飄風暴雨震雷昏暗大霧皆諸龍神經過宜入室閉戶焚香靜坐避之不爾損人溫子皮

燒香勿返顧

南嶽夫人云燒香勿返顧忤真氣致邪應也真誥

燒香辟瘟

樞密王博文每於正旦四更燒丁香以辟瘟氣瑣錄

燒香引鼠

印香五文狼糞少許為細末同和勻於淨室內以爐燒之其鼠自至不得殺戲術

求名如燒香

欽定四庫全書

陳氏奇譜
卷四

三

人隨俗求名譬如燒香衆人皆聞其香不知薰以自焚盡則氣滅名文則身絕真誥

五色香烟

許遠遜燒香皆五色香烟出三洞珠囊

香奩

韓偓香奩集自叙云咀五色之靈芝香生九竅曠三清之瑞露春動七情古詩云開奩集香蘇

防蠹

辟惡生香聊防羽陵之蠹

玉臺新詠序

除邪

地上魔邪之氣直上冲天四十里人燒青木薰陸安息膠於寢室披濁臭之氣却邪穢之霧故夫人王女太一帝皇隨香氣而來下

洪譜

香王辟邪

唐肅宗賜李輔國香王辟邪二王之香可聞數里輔國每置之坐隅一日輔國方中櫛一忽大笑一忽悲啼輔

欽定四庫全書

陳氏香譜卷四

三三

國碎之未幾事敗為刺客所殺

杜陽編

香中忌麝

唐鄭注赴河中姬妾百餘盡熏麝香氣數里逆於人鼻是歲自京兆至河中所過之地瓜盡一蒂不獲

洪譜

被草負笈

宋景公燒異香於臺有野人被草負笈扣門而進是為子常世司天部

洪譜

異香成穗

二十二祖摩訶羅至西印土焚香而月氏國王忽睹異

香成穗

傳燈錄

逆風香

竺法深孫興公共聽北來道人與支道林瓦棺寺講小品北來屢設疑問林辨答俱爽北道每屈孫問深公上人當是逆風家何以都不言深笑而不答曰白梅檀非不馥焉能逆風深夷然不屑波利質色香樹其香逆其風而聞今返之曰白梅檀非不香豈能逆風言深非不能難正不必難也

欽定四庫全書

陳氏香譜卷四

三三

古殿爐香

問如何古殿一爐香寶蓋納師曰廣大勿入艱者如何師曰六根俱不到

買佛香

問動容沈古路身沒乃方知此意如何師曰偷佛錢買佛香曰學人不會師曰不會即燒香供養本耶娘

勸潭師話

戒定香

釋氏有定香戒香韓侍郎贈僧詩云一靈令用戒香薰

結願香

省郎遊花嚴寺巖下見老僧前有香爐烟燄微甚僧謂曰此檀越結願香尚在而檀越已三生矣 陳去非詩再燒結願香

香偈

謹藝道香德香無為香無為清淨自然香妙洞真香靈寶惡香朝三界香香滿瓊樓玉境徧諸天法界以此真

欽定四庫全書

陳氏香譜

三

香騰空上奏藝香有偈返生寶木沉水奇材瑞氣氤氳祥雲繚繞上通金闕下入幽冥 道書

香光

楞嚴經大勢至法王子云如塗香人身有香氣此則名

曰香光

香鑪

鑪之名始見於周禮冢宰之屬宮人凡寢中共鑪炭

博山香爐

武帝內傳有博山爐蓋西王母遺帝者 事物紀原 皇太子初

拜有銅博山香爐 東宮故事 丁緩作九層博山香爐鏤琢奇

禽怪獸皆自然能動 西京雜記 其爐象海中博山下盤貯湯

使潤氣蒸香以象海之四環 呂大臨考古圖

被中香爐

長安巧工丁緩作被中香爐亦名卧褥香爐本出房風

其法後絕緩始更為之機環運轉四周而爐體常平可

置於被褥故以為名今之香毬是也 雜記

欽定四庫全書

陳氏香譜

三

薰爐

尚書郎入直臺中給女侍史二人皆選端正指使從直

女侍史執香爐燒熏以從入臺中給使護衣 漢官儀

金爐

魏武上御物三十種有純金香爐一枚 雜物疏

麒麟

晉儀禮大朝會郎鎮官以金鍍九尺麒麟大爐唐薛逢

詩云獸坐金牀 碧烟是也

帳角香爐

石季倫冬月為煖帳四角安綴金銀鑿鏤香爐散中記

鵲尾香爐

宋王賢山陰人也既稟女質厥志彌高自童年及笄應適外兄許氏密具法服登車既至大門時及交禮更著黃中裙手執鵲尾香爐不覩婦禮賓主駭愕夫家力不能屈乃放還遂出家梁大同初隱弱溪之間法苑珠林云香爐有柄可執者曰鵲尾香爐

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

三十五

百寶爐

唐安樂公主百寶香爐長二丈朝野僉載

香爐為寶子

錢鎮州詩雖未脫五季餘韻然回環讀之故自妮妮可觀題者多云寶子弗知何物以余攷之乃迦葉之香爐上有金華華內有金臺即臺為寶子則知寶子乃香爐耳亦可為此詩但園若重規然豈漢丁緩被中之製乎

黃長
審

貪得銅爐

何尚之奏庾仲文貪賄得嫁女具銅爐四人舉乃勝南史

母夢香爐

陶弘景母夢天人手執香爐來至其所已而有娠南史

失爐筮卦

會稽盧氏失博山香爐吳泰筮之曰此物質雖為金其實衆山有樹非林有孔非泉闔闔晨興見發青烟此香爐也語其處即求得集異記

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

三十五

香爐墮地

侯景呼東西南北皆謂為廂景幕牀東無故墮景曰此東廂香爐那忽下地識者以為湘東軍下之徵云南史

覆鑪示兆

齊建武中明帝召諸王南康侍讀江泌憂念府王子琳訪誌公道人問其禍福誌公覆香爐灰示之曰都盡無餘後子琳被害南史

香爐峯

廬山有香爐峯李太白詩云日照香爐生紫烟來鵬詩

云雲起爐峰一炷烟

熏籠

晉東宮故事云太子納妃有衣熏籠當亦秦漢之制也

事物記原

傳

天香傳

丁謂之

香之為用從古矣所以奉高明所以達蠲潔三代裡享

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

天

首惟馨之薦而沉水薰陸無聞焉百家傳記萃芳之美而蕭茹鬱塗不尊焉禮云至敬不享味貴氣臭也是知其用至重採製初略其名實繁而品類叢脞矣觀乎上古帝王之書釋道經典之說則記錄綿遠贊煩嚴重色目至衆法度殊絕西方聖人曰大小世界上下內外種種諸香又曰千萬種和香若香若丸若末若坐以至華香果香樹香天和合之香又曰天上諸天之香又佛土國名衆香其香比於十方人天之香最為第一仙書

云上聖焚百寶香天真皇人焚千和黃帝以沉榆蕈英

為香又曰真仙所焚之香皆聞百里有積烟成雲積雲

成雨然則與人間所共貴者沉水薰陸也故經云沉水

堅株又曰沉水香聖降之夕神導從有捧爐香者烟高

丈餘其色正紅得非天上諸天之香非三皇寶齋香珠

法其法雜而末之色色至細然後叢聚并之三萬緘以

良器載蒸載和豆分而丸之珠貫而暴之且曰此香焚

之上徹諸天蓋以沉水為宗薰陸副之也是知古聖欽

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

天

崇之至厚所以備物寶妙之無極謂奕世寅奉香火之
薦鮮有廢日然蕭茅之類隨其所備不足觀也祥符初
奉詔充天書扶持使道場科醮無虛日永晝達夕寶香
不絕乘輿肅謁則五上為禮真宗每至玉皇真聖
祖位前皆五上香也馥烈
之異非世所聞大約以沉水乳為末龍香和劑之此法
累稟之聖祖中禁少知者况外司耶八年掌國計兩鎮
旄鉞四領樞軸俸給頒賚隨日而隆故必芬之著特與
昔異艱慶奉祀賜供乳香一百二十斤入內副都知
張洎能為使

在宮觀密賜新香動以百數

沈乳降真等香

由是私門之沉乳

足用有唐雜記言明皇時異人云醮席中每焚乳香靈

祇皆去人至於今惑之真宗時親稟聖訓沉乳二香所

以奉高天上聖百靈不敢當也無他言上聖即政之六

月授詔罷相分務西洛尋遣海南憂患之中一無塵慮

越惟永晝晴天長霄垂象爐香之趣益增其勤素聞海

南出香至多始命市之於閭里間十無一有假版官裴

鸞者唐宰相晉公中令公之裔孫也土地所宜悉究本

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

三

末且曰瓊管之地黎母山酋之四部境域皆枕山麓香

多出此山甲於天下然取之有時售之有主蓋黎人皆

力耕治業不以採香專利閩越海賈惟以餘杭船即市

香每歲冬季黎峒俟此船方入山尋採州人從而賈販盡

歸船商故非時不有也香之類有四曰沉曰棧曰生結

曰黃熟其為狀也十有二沉香得其八焉曰烏文格土

人以木之格其沉香如烏文本之色而澤更取其堅格

是美之至也曰黃蠟其表如蠟少刮削之鬣鬣相半烏

文格之次也曰牛目與用及蹄曰雞頭洎髀若骨此沉

香之狀土人別曰牛眼牛角牛蹄雞頭雞腿雞骨曰崑

崙梅格棧香也此梅樹也黃黑相半而稍堅土人以此

比棧香也曰蟲鏤凡曰蟲鏤其香尤佳蓋香兼黃熟蟲

蛀及攻腐朽盡去菁英獨存者也曰傘竹格黃熟香也

如竹色黃白而帶黑有似棧也曰茅葉如茅葉至輕有

入水而沉者得沉香之餘氣也燃之至佳土人以其非

堅實抑之黃熟也曰鷓鴣斑色駁雜如鷓鴣羽也生結

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

三

香也棧香未成沉者有之黃熟未成棧者有之凡四名

十二狀皆出一本樹體如白楊葉如冬青而小膚表也

標末也質輕而散理疎以粗曰黃熟黃熟之中黑色堅

勁者曰棧香棧香之名相傳甚遠即未知其旨惟沉香

為狀也肉骨頰脫芒角銳利無大小無厚薄掌握之有

金玉之重切磋之有犀角之勁縱分斷瑣碎而氣脉滋

益用之與臭塊者等鶚云香不欲絕大圍尺已上慮有

水病若斤已上者合兩已下者中浮水即不沉矣又曰

或有附於枯枿隱於曲枝蟄藏深根或抱貞木本或挺然結實混然成形嵌若巖石屹若歸雲如矯首龍如戩冠鳳如麟植趾如鴻鵠翮如曲肱如駢指但文理密綴光彩明瑩斤斧之跡一無所及置器以驗如石投水此香寶也千百一而已矣夫如是自非一氣粹和之凝結百神祥異之含育則何以羣木之中獨稟靈氣首出庶物得奉高天也占城所產棧沉香與黃金同價鄉耆云比禺或入大食大食貴重棧沉香與黃金同價鄉耆云比歲有大食番舶為颶風所逆寓此屬邑首領以富有自大肆筵設席極其誇詫州人私相顧曰以貴較勝誠不敵矣然視其爐烟翳鬱不舉乾而輕瘠而焦非妙也遂以海北岸者即席而焚之高烟杳杳若引束絙濃腴渾渾如練凝漆芳馨之氣持久益佳大舶之徒由是披靡生結者取不俟其成非自然者也生結沉香品與棧香等生結棧香品與黃熟等生漆黃熟品之下也色澤浮虛而肌質散緩燃之辛烈少和氣久則潰敗速用之即

佳不同棧沉香則永無朽腐矣雷化高竇亦中國出香之地比海南者優劣不侔甚矣既所稟不同而售者多故取者速也是黃熟不待其成棧棧不待其成沉蓋取利者戕賊之深也非如瓊管皆深洞黎人非時不妄剪伐故樹無夭折之患得必皆異香曰熟香曰脫落香皆是自然成香餘杭市香之家有萬斤黃熟者得真棧百斤則為稀矣百斤真棧得上等沉香十數斤亦為難矣薰陸乳香之長大而明瑩者出大食國彼國香樹連山絡野如桃膠松脂委於石地聚而斂之若京坻香山多石而少雨載詢番舶則云昨過乳香山下彼人云此山不雨已三十年香中帶石末者非濫偽也地無土也然則此樹若生泥塗則香不得為香矣天地植物其有旨乎贊曰百昌之首備物之先於以相裨於以告虔孰歆至德孰享芳烟上聖之聖高天之天

序

和香序

麝本多忌過分必害沉實易和盈斤無傷零藿燥虛唇
糖粘濕甘松蘇合安息鬱金捺多和羅之屬並被於外
固無取於中土又棗膏昏蒙甲戩淺俗非惟無助於馨
烈乃當彌增於尤疾也

此序所言悉以比類朝士麝本多忌比便慢之棗膏
昏蒙比羊玄保甲戩淺俗比徐湛之甘松蘇合比惠
休道人沉實易和蓋自比也

笑蘭香序

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

三五

吳僧聲宜笑蘭香序曰豈非韓魏公所謂濃梅而黃太
史所謂藏春者耶其法以沉為君雞舌為臣北苑之臣
鉅毫十二葉之英銘華之粉柏麝之臍為佐以百花之
液為使一炷如芡子許油然鬱然若艷九畹之蘭而浥
百畝之蕙也

說

香說

程泰之

秦漢以前二廣未通中國中國無今沉腦等香也宗廟

燭蕭灌獻尚鬱食品貴椒至荀卿氏方言椒蘭漢雖已
得南粵其尚臭之極者椒房即官以雞舌奏事而已較
之沉腦其等級之高下不類也惟西京雜記載長安巧
工丁緩作被下香爐頗疑已有今香然劉向銘博山爐
亦止曰中有蘭綺朱火青烟玉臺新詠說博山爐亦曰
朱火然其中青烟颺其間香風難久居空令蕙草殘二
文所賦皆焚蘭蕙而非沉腦是漢雖通南粵亦未見粵
香也漢武內傳載西王母降藝嬰香等品多名異然疑
後人為之漢武奉仙窮極宮室帷帳器用之麗漢史備
記不遺若曾祖古來未有之香安得不記

銘

博山鑪銘

劉向

嘉此正氣嶄嶄若山上貫太華承以銅盤中有蘭綺朱
火青烟

香爐銘

梁元帝

蘇合氤氲飛烟若雲時濃更薄乍聚還分火微難盡風

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

三五

長易聞敦云道力慈悲所熏

頌

鬱金香頌

左九嬪

伊此奇香名曰鬱金越此殊域厥珍來尋芬香酷烈悅目欣心明德惟馨淑人是欽窈窕淑媛服之襦襟永垂名實曠世弗沉

藿香頌

江文通

桂以過烈麝以太芬摧阻夭壽扶抑人文詎如藿香微

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

三十一

馥微飴攝靈百仞養氣青雲

瑞沉寶峰頌 并序

臣建謹案史記龜策傳曰有神龜在江南嘉林中嘉林者獸無虎狼鳥無鴟梟草無毒螫野火不及斧斤不至是謂嘉林龜在其中常巢於芳蓮之上在骨書文曰甲子重光得我者為帝王由是觀之豈不偉哉臣少時在書室中雅好焚香有海上道士向臣言曰子知沉之所出乎請為子言蓋江南有嘉林嘉林者美木也木美則

堅實堅實則善沉或秋水泛溢美木漂流沉於海底蛟

龍蟠伏於上故木之香清烈而戀水濤瀨淙激於下故

木之形嵌空而類山近得小山於海賈巉巖可愛名之

曰瑞沉寶峰不敢藏諸私室謹齋莊潔誠跪進玉陛以

為天壽聖節瑞物之獻臣建謹拜手稽首而為之頌曰

大江之南粵有嘉林嘉林之木入海而沉蛟龍枕之香

冽自清濤瀨激之峰岫乃成海神愕視不敢悶藏因潮

而出瑞我明昌明昌至治如沉馨香明昌睿算如山久

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

三十二

長臣老且耄聖恩曷報歌頌陳詩以配天保

賦

迷迭香賦

魏文帝

播西都之麗草兮應青春之凝暉流翠葉於纖柯兮結微根於丹墀芳莫秋之幽蘭兮麗崑崙之英芝信繁華之速逝兮弗見彫於嚴霜既經時而收采兮遂肅殺以增芳去枝葉而持御兮入綃縠之霧裳附玉體以行止兮順微風而舒光

鬱金香賦

傅玄

葉萋萋以翠青英蘊蘊以金黃樹晦靄以成陰氣芬馥以含芳陵蘇合之殊珍豈艾蒿之足方榮耀帝寓香播紫宮吐芳揚烈萬里望風

芸香賦

傅咸

攜昵友以逍遙兮覽偉草之敷英慕君子之弘覆兮超託軀於朱庭俯引澤於月環兮仰吸潤乎太清繁茲綠葉茂此翠莖葉葉猗猗兮枝妍媚以迴紫象春松之含

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

三八

曜兮鬱蔚蔚以葱青

幽蘭賦

楊炯

維幽蘭之芳草稟天地之純精抱青紫之奇色挺龍虎之佳名不起林而獨秀必固本而叢生爾乃丰茸十步綿連九畹莖受露而將低香從風而自遠當此之時叢蘭正滋美庭闈之孝子循南陔而采之楚襄王蘭臺之宮零落無散漢武帝猗蘭之殿荒涼幾變聞昔日之芳菲恨今人之不見至若桃花水上佩蘭若而續魂竹箭

山陰坐蘭亭而開宴江南則蘭澤為洲東海則蘭陵為

縣隰有蘭兮蘭有枝贈遠別兮交新知氣如蘭兮長不

改心若蘭兮終不移及夫東山月出西軒日晚授燕女

於春閨降陳王於秋坂乃有送客金谷林塘坐曛鶴琴

未罷龍劍將分蘭缸燭耀蘭麝氣舞袖迴雪歌聲遏

雲度清夜之未艾酌蘭英以奉君若夫靈均放逐離羣

散侶亂鄢郢之南都下瀟湘之北渚步遲遲而適怨心

鬱鬱而懷楚徒春戀於君王斂精神於帝女河洲兮極

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

三九

目芳菲兮韻予思公子兮不言結芳蘭兮延佇借如君

章有德通神感靈懸車舊館請老山庭白露下而警鶴

秋風高而亂螢循堦除而下望見秋蘭之青青重曰若

有人兮山之阿紉秋蘭兮歲月多思握之兮猶未得空

佩之兮欲如何遂抽琴轉操為幽蘭之歌歌曰幽蘭生

兮于彼朝陽含雨露之津潤吸日月之休光美人愁思

兮採芙蓉於南浦公子忘憂兮樹萱草於北堂雖處幽

林與窮谷不以無人而不芳趙元淑聞而歎曰昔聞蘭

葉據龍圖複道蘭林引鳳雖鴻歸燕去紫莖歌露往霜
來綠葉枯悲秋風之一敗與萬草而為芻

木蘭賦 并序

李華

華容石門山有木蘭樹鄉人不識伐以為薪餘一本方
操柯未下縣令李韶行春見之息焉其陰喟然歎曰功
刊桐君之書名載騷人之詞生於遐深委於薪燎天地
之產珍物將焉用之爰戒虞衡禁其剪伐按本草木蘭
似桂而香去風熱明耳目在木部上篇乃採所以歸理
欽定四庫全書 陳氏香樹 卷四
疾多驗由是遠近從而採之幹剖支分殆枯槁矣士之
生世出處語默難乎哉韶余從子也常為余言感而為
賦云

溯長江以遐覽愛楚山之寂寥山有嘉樹兮名木蘭鬱
森森以苕苕當聖政之文明降元和於九霄更稔冷之
為虐貫霜雪而不凋白波潤其根抵玄雪暢其枝條沐
春雨之濯濯鳴秋風以蕭蕭素膚紫肌綠葉細蒂疎密
偕附高卑蔭蔽華如雪霜實若星麗節勁松竹香濃蘭桂

宜不植於人間聊獨立於天際徒翳薈兮為隣挺堅芳
兮此身嘉名列於道書墜露飲乎騷人至若靈山霧歇
鵲鵲林樾當楚澤之晨霞映洞庭之夜月發聰明於視
聽洗煩濁於心骨韻衆壑之空峒澹微雲之滅沒草露
白兮山淒淒鶴既唳兮猿復啼宵深林以冥冥覆百仞
之玄谿彼逸人兮有所思戀芳陰兮步遲遲悵幽獨兮
人莫知懷馨香兮將為誰悅樵父之無惠混衆木而皆盡
指書類而揮斤遇仁人之不忍伊甘心而剗絕俄固祗
欽定四庫全書 陳氏香樹 卷四
於傾隕憐春華而朝零兮顧落日而迴軫達者有言巧勞
智憂養命蠲疫人胡不求枝殘體剝澤盡枯留顛悴空
山離披素秋鳥避弋而高翔魚畏網而深游不材則終
其天年能鳴則危於俎羞奚此木之不終獨隱見而罹
憂自昔淪芳於朝市墜實於林丘徒鬱咽而無聲可勝
言而計籌者哉吾聞曰人助者信神聰者直則臧倉譖
言宣尼失職出處語默與時消息則子雲投閣方回受
極故知天地無心死生同域絃絃品物物有其極至人

者要惟循於自然寧任夫智之與力雖賢愚各全其好惡草木不夭其生植已而已而翳疑不可得

沉香山子賦

蘇子瞻

古者以芸為香以蘭為芬以鬱塗為裸以脂肅為焚以椒為堅以蕙為薰杜衡帶屈芎藭薦文麝多忌而本羶蘇合若香而實葷嗟吾知之幾何為六入之所分方根塵之起滅常顛倒其天君每求似於髣髴或鼻勞而妄聞獨沉水為近正可以配蒼筤而並云矧儋崖之異產實超然而不羣既金堅而玉潤亦鶴骨而龍筋惟膏液之內足故把握而兼斤顧占城之枯朽宜鑿釜而燎蛟宛彼小山嶢然可欣如太華之倚天象小孤之插雲往壽子之生朝以寫我之老勤子方面壁以終日豈亦終歸田而自耘幸置此於几席養幽芳於悅怗無一往之發烈有無窮之氤氳豈非獨以飲東坡之壽亦所以食黎人之芹也

雞舌香賦

顏博文

沈括以丁香為雞舌而醫者疑之古人用雞舌取其芬芳便於奏事世俗蔽於所習以丁香狀之於雞舌大不類也乃慨然有感為賦以解之

嘉物之產潛竄山谷其根盤貯龍隱蛇伏期微生之可保處幽翳而自足方吐英而布葉似千世而無欲郁郁嬌黃綽綽疎綠偶咀嚼而有味以奇功而見錄懷肌被逼粉骨遭辱雖功利之及人恨此身之莫贖惟彼雞舌味和而長氣烈而揚可與君子同升廟堂發胸臆之藻

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

四十三

繪繁齒牙之冰霜一語不忌澤及四方朔日月而上征與鴛鴦而同翔惟其施之得宜豈凡物之可當以彼疑似猶有可議雖二名之靡同渺不害其為貴彼鳳頸而龍準謂蜂目而烏喙况稱諸木之長稽形而實質類者哉殊不知天下之物竊名者多矣雞腸鳥喙牛舌馬齒川有羊蹄山有鳶尾龍膽虎掌稀膏鼠耳鴟脚羊眼鹿角豹足羆顱狼跋狗脊馬目燕領之黍虎皮之稻尊貴雉尾藥尚雞爪葡萄取象於身乳婆律謬稱於龍腦箇

雞脰以為珍瓠牛角而貴早亦有鴨脚之葵狸頭之爪
魚甲之松鶴翎之花以雞頭龍眼而充果以雀舌鷹爪
而名茶彼爭功而擅價咸好大而喜誇其間名實相叛
是非迭居得其實者如聖賢之在高位無其實者如名
器之假盜軀嗟所遇之不同亦自賢而自愚彼方遺臭
於海上豈芬芳之是娛嫫母飾貌而薦衾西子掩面而
守閨餌醢醬而委醢酬佩砭硃而捐瓊琚捨文茵兮卧
篋條習薤露兮廢笙竽劍非錐而補履驥垂頭而駕車

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

四十四

寒不遇而被謗將栖栖而馬圖是香也市井所緩廊廟
所急豈比馬蹄之近俗燕尾之就濕聽秋雨之淋淫若
蒼天為茲而雪泣若將有人依龜甲之屏炷鵲尾之爐
研以鳳味筆以鼠鬚作蜂腰鶴膝之語為鵲頭蟲脚之
書為茲香而解嘲明氣類而不殊願獲用於賢相藹芳烈
於天衢

銅博山香爐賦

梁昭明太子

稟至精之純質產靈嶽之幽深探衆倬之妙旨運公輸

之巧心有蕙帶而囁隱亦霓裳而升仙寫松山之龍從
象鄧林之竿眠於時青烟司寒晨光翳景翠帷已低蘭
膏未屏炎蒸內耀必芬外揚似慶雲之呈色若景星之
舒光信名嘉而用美永為玩於華堂

詩

詩句

百和裏衣香 金泥蘇合香 紅羅複斗帳四角垂香

囊古

盧家蘭室桂為梁中有鬱金蘇合香

梁武帝

合

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

四十五

歡襦重百和香

陳後主

綵墀散蘭麝風起自生香

鮑照

燈影照無寐心清聞妙香

朝罷香烟攜滿袖

杜工部

燕寢凝清香

韋蘇州

裊裊沉水烟 披書古芸馥

守

帳燃香暮

沉香火暖茱萸烟

李長吉

豹尾香烟滅

陸厥

重熏異國香

李邕

多燒荀令香

張見正

然香氣散不

飛烟

陸瑜

羅衣亦罷熏

胡曾

沉水熏衣白壁堂

胡宿

丙

舍無人遺爐香

溫庭筠

夜燒沉水香

香烟橫碧縷

蘇子

瞻

珠綠凝篆香

黃魯直

焚香破今夕

燕坐獨焚香

焚香澄神慮蘇州 向來一瓣香敬為曾南豐陳後

博山爐中百和香鬱金蘇合及都梁吳以均 金爐絕

沉燎 熏爐雞東香 博山爐烟吐香霧 龍爐傍日

香 爐烟添柳重韋巨源 金爐蘭麝香沈荃 爐熏暗

徘徊張籍 金爐細炷通李賀 睡鴨香爐換夕熏 荀令

香爐可待熏李商隱 衣冠身惹御爐香賈至 博山爐吐

五雲香韋應物 蓬萊宮繞玉爐香陳陶 噴香睡獸高三

尺羅隱 繡屏銀鴨香翁濠溫庭筠 汜汜爐香初泛夜東坡

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷四

四十六

日烘荀令炷香爐山谷 午夢不知緣底事篆烟燒盡

一盤花劉屏山 微風不動金猊香陸放翁

寶熏

黃魯直

賈天錫惠寶熏以兵衛森畫戟燕寢凝清香

十詩報之

險心游萬仞躁欲生五兵隱几香一炷靈臺湛空明

晝食鳥窺臺宴坐日過砌俗氛無因來烟霏作輿衛

石蜜化螺甲榼榼煮水沉博山孤烟起對此作森森

輪囷香事已郁郁著書畫誰能入吾室脫汝世俗械

賈侯懷六韜家有十二戟天資喜文事如我有香癖

林花飛片片香歸銜泥燕開閣和春風還尋蔚宗傳

公虛采芹宮行樂在小寢香光當發聞色敗不可愁

牀帷夜氣馥衣桁曉烟凝風溝鳴急雪睡鴨照華燈

雉尾映鞭聲金爐拂太清班近聞香早歸來學得成

衣篝麗紋綺有待乃芬芳當念真富貴自熏知見香

帳中香二首

山谷

欽定四庫全書

陳氏香譜 卷四

四十七

百鍊香螺沉水寶熏近出江南一穗黃雲繞几深禪相

對同參

螺甲割崑崙耳香材屑鷓鴣斑欲雨鳴鳩日永不惟睡

鴨春閒

戲用前韻

有聞帳中香以為熱爇香

海上有人逐臭天生鼻孔司南但印香爇本寂不必叢

林編叅

我讀蔚宗香傳文章不減二班誤以甲為淺俗却知麝

要防閒

和魯直韻

東坡

四句燒香偈子隨香徧滿東南不是聞思所及且令鼻
觀先參

萬卷明窓小字眼花只有爛斑一炷烟消火冷半生身
老心閒

次韻答子瞻

山谷

置酒未容虛左論詩時要指南迎笑天香滿袖喜君先

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

山人

赴朝參

迎燕溫風旋旋潤花小雨斑斑一炷香中得意九衢塵

裏偷閒

再和

置酒未逢休沐便同越北燕南且復歌呼相和隔牆知
是曹參

丹青已是前世竹石時窺一斑五字還當靖節數行誰

似高閒

印香

東坡

子由生日以檀香觀音像及新合印香銀篆
盤為壽

梅檀婆律海外芬西山老臍柏所薰香螺脫壓來相羣
能結縹緲風中雲一燈如螢起微焚何時度盡縹緲紋
繚繞無窮合復分縣縣浮空散氤氲東坡持是壽卯君
君少與我師皇墳旁資老聃釋迦文共厄中年點蠅蚊
晚過斯須何足云君方論道承華勛我亦旗鼓嚴中軍
國恩未報敢不勤但願不為世所醺爾來白髮不可耘
問君何時返鄉枌收拾散亡理放紛此心實與香俱熏
聞思大士應已聞

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

山人

沉香石

東坡

壁立孤峯倚硯長共凝沉水得頑蒼欲隨楚客紉蘭佩
誰信吳兒是木腸山下曾逢化私石玉中還有辟邪香
早知百和俱灰燼未信人言弱勝剛

凝齋香

曾子固

每覺西齋景最幽不知官是古諸侯一尊風月身無事
千里耕桑歲共秋雲水醒心鳴好鳥玉泉清耳漱沉流
香烟細細臨黃卷凝在香烟最上頭

肖梅香

張吉甫

江村招得玉妃魂化作金爐一炷雲但覺清芬暗浮動
不知碧篆已氤氲春收東閣簾初下夢想西湖被更熏
真似吾家雪溪上東風一夜隔籬聞

香界

朱晦菴

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

五十一

幽興年來莫與同滋蘭聊欲汎東風真成佛國香雲界
不好淮山桂樹叢花氣無邊醺欲醉靈芬一點靜還通
何須楚客紉秋佩坐卧經行向此中

次韻蘇藉返魂梅六首

陳子高

誰道春歸無覓處眠齋香霧作春昏君詩似說江南信
試與梅花招斷魂

東風欺人底薄相花信無端沖雪來妙手誰知煨燼裏

等閒種得臘前梅

花開莫奏傷心曲花落休矜稱面粧只憶夢為蝴蝶去
香雲密處有春光

老夫粥後惟耽睡春暖香濃百念消不學東門醉公子
鴨爐烟裏逞風標

鼻根無奈重香繞編處春隨夜色勻眼底狂花開底事
依然看作一枝春

漫道君家四壁空衣篝沉水晚朦朧詩情似被花相惱
入我香奩境界中

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

五十二

龍涎香

劉子暈

瘴海驪龍供素沫蠻村花露浥情滋微叅鼻觀猶疑似
全在爐烟未發時

燒香曲

李商隱

鈿雲蟠蟠牙比魚孔雀翅尾蛟龍鬚漳宮舊樣博山爐
楚嬌捧笑開芙蓉八蠶繭絲小分炷獸缺微紅隔雲母
白天月澤寒未冰金虎含秋向東吐玉珮呵光銅照昏
簾波日暮衝斜門西來欲上茂陵樹柏梁已失栽桃魂

露庭月井大紅氣輕衫薄袖當君意蜀殿瓊人伴夜深
金鑾不問殘燈事何當巧吹君懷度襟灰為土填清露

焚香

邵康節

安樂窩中一炷香陵晨焚意豈尋常禍如能免人須諄
福若待求天可量且異緇黃微廟貌又珠兒女裏衣裳
非圖間道至於此金玉誰家不滿堂

焚香

楊廷秀

琢瓷作鼎碧於水削銀為葉輕如紙不文不武火力均

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

三

閑閣下簾風不起詩人自炷古龍涎但令有香不見烟
素馨欲開末利折底迅龍涎和檀棧平生飽食山村味
不料此香殊斌媚呼兒急取蒸木犀却作書生真富貴

燒香

陳去非

明窓延靜晝默坐息諸緣聊將無窮意寓此一炷烟當
時戒定慧妙供均人天我豈不清閑于今醒心然爐香
裊孤碧雲縷飛數千悠然凌空去縹緲隨風還世事有
過現薰性無變遷應如水中月波定還自丸

焚香

郝伯常

花落深庭日正長蜂何掠遠燕何忙匡牀不下凝塵滿
消盡年光一炷香

覓香

磬室從來一物無博山惟有一香爐而今荀令真成癖
祇欠精神裊坐隅

覓香

顏博文

王希深合和新香烟氣清洒不類尋常等可

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

五

以為道人開筆端消息

玉水沉沉影銅爐裊裊烟為思丹鳳髓不愛老龍涎皂
帽真閑客黃衣小病仙定知雲屋下繡被有人眠

修香

陸放翁

空庭一炷上有神明家廟一炷曾英祖靈且祈持此而
已此而不為吁嗟已矣

香爐

四座且莫喧願聽歌一言請說銅香爐崔魏象南山上

枝似松柏下根據銅盤雕文各異類離婁自相連誰能
為此器公輸與魯般朱火然其中青烟颺其間順入君
懷裏四座莫不歡香風難久居空令蕙草殘

博山香爐

劉繪

參差鬱佳麗合沓紛可憐蔽虧千種樹出沒萬重山上
鏤秦王子駕鶴翔紫烟下刻盤龍勢矯首半銜連傍為
洛水麗芝蓋出巖間後有漢遊女拾翠弄全妍榮色何
難採綉繡更相鮮麇鹿或朦倚林薄香芊眠掠華如不
欽定四庫全書
陳氏香譜
卷四
五十四
發含薰未肯然風生玉階樹露浥曲池蓮寒蟲飛夜室
秋雲沒曉天

博山香爐

沈約

凝芳俟朱燎先鑄首山銅環安信岳嶠奇態實玲瓏赤
松遊其上斂足御輕鴻蛟龍蟠其下驤首盼層穹嶺側
多奇樹或孤或連叢巖間有佚女垂袂似含風暈飛若
未已虎視鬱金雄百和清夜吐蘭烟四面融如彼崇朝
氣觸石繞華嵩

樂府

詞句

玉帳鴛鴦噴沉麝

李太白

沉檀烟起盤紅霧

徐昌圖

寂

窠繡屏香一縷

韋

衣惹御爐香

薛昭

博山香炷融

咸熙

爐香烟冷自亭亭

李中

香草續殘爐

謝希深

爐香靜逐游絲轉

晏同叔

四和象金鳧

秦叔度

盡日水

沉香一縷

玉盤香篆看徘徊

趙德

金鴨香凝袖

衣潤貴爐烟

周美成

朱麝堂中香

長日篆烟銷香

欽定四庫全書

陳氏香譜

卷四

五十五

滿雲窓月戶

熏爐熟水留香

繡被薰香透

元裕之

鷓鴣天

木犀

元裕之

桂子紛翻浥露黃桂華高韻靜年芳
薔薇水潤宮衣軟
波律膏清月殿涼
雲袖白海仙方情緣心事兩相忘
哀蓮柱誤秋風客可是無塵袖裏香

天香

龍涎香

王沂孫

孤嶠蟠烟層濤悅月驪宮夜採鉛水訊遠槎風夢深薇
露化作斷魂心字紅瓷候火還玉指一縷紫簾翠影依

稀海風雲氣 幾回嬌半醉剪青燈夜寒花碎更好故
溪飛雪小窓深閉箇令如今頓老想忘却尊前舊風味
漫惜餘薰空篝素被

慶清朝慢

賴香

詹天游

紅雨爭霏芳塵生潤將春都搥成泥分明蕙風微露花
氣遲遲無奈汗酥浥透溫柔鄉裏濕雲癡偏厮稱霓裳
霞珮玉骨冰肌 誰品處誰詠處驀然地不在洎意聞
欸欸生綃扇底嫩涼動箇些兒似醉渾無氣力海棠一

欽定四庫全書

陳氏香譜
卷四

五十六

色睡臉脂真奇絕這般風韻韓壽爭知

